暗闇一心斎

高橋三千綱

文春文庫

著者紹介

高橋三千綱(たかはし・みちつな)

昭和23(1948)年、大阪生れ。サンフランシスコ州立大学英語学科創作コース、早稲田大学英文科をいずれも中退。49年「退屈しのぎ」(群像新人文学賞)でデビュー、53年「九月の空」で芥川賞を受賞。著書に「フェアウェイに見る夢」(文藝春秋)、「恋わずらい」(朝日新聞社)「倶楽部チャンピオン物語」(学習研究社)、「あの人が来る夜」(光文社)などがある。ゴルフ漫画の原作でも活躍、時代小説にも進出して旺盛な執筆が続いている。

文春文庫

暗闇一心斎

高橋三千綱

文春文庫

暗闇一心斎

高橋三千綱

た 34 3

文春文庫

638 +税

9784167562038

1920193006384

久しぶりに江戸へ戻ってきた中村一心斎。今度は暗闇一心斎と名乗り、筑後、久留米藩のお家騒動に首を突っ込んで、ふたたび勝小吉や男谷精一郎たちを振り回す。そして、奉行所に捕った鼠小僧次郎吉を救い出した一心斎は、異国船を建造するために江戸から加賀百万石・金沢へと旅立つ。豪商の銭屋五兵衛の許に寄宿した一行は……。

ISBN4-16-756203-0

C0193 ¥638E

定価(本体638円＋税)

た 34 3

文春文庫

文春文庫

高橋三千綱の本

剣聖一心斎

暗闇一心斎

カバー・灘本唯人

文春文庫

暗闇一心斎

高橋三千綱

文藝春秋

暗闇一心斎

高橋三千綱

文春文庫

文春文庫

暗闇一心斎

高橋三千綱

文藝春秋

暗闇一心斎　目次

闇の息　9
片手突き　43
化け物退治　75
身代り獄門　107
あれが武田の埋蔵金　141
秘剣ふぐりほぐし　173
妖怪七変化　207
秘め事　241
異国の空　273
夕映えを斬る　309
魂を風に泳がせ　339
鳥の如く、フライ　371
あとがき　428

本書は『オール讀物』（文藝春秋刊）の平成六年十二月号より平成七年十二月号までに連載された「剣聖一心斎第二部」を改題し加筆訂正した文庫オリジナル版です

暗闇一心斎

闇の息

一

船宿「かわ茂」の二階小座敷に一人ぽつねんと坐って、小吉は外を眺めていた。晴れ渡った空に真綿をちぎって放り投げたような雲が一つ浮いていて、その腹には黄金の輝きを思わせる眩い光が溜め込まれている。

桜の花が散ってひと月余りになる。岸辺から華の色は消えたが、目に入る樹木は、それにも増して青葉の強い生命力を満載してきている。

板葺の町家の屋根から靄のような白いものが立ち昇っているのは、前夜の雨が陽に吸い込まれて、天に帰っていくからだろう。なんとものどかで眠気を誘う風景だが、竪川の対岸に建ち並んだ蔵のどこかから木槌の音が響き、荷車が騒々しい音をたてて通り過ぎると、小吉の胸に明るい騒めきが生じてきた。

やはり江戸の町は忙しくなくちゃいけねえ。

銚子からぬる燗につけさせた酒を盃に注いで、小吉はそう独りごちた。世の中が太平の色に染まっている間は、小普請組の小吉には活躍の場がなく、退屈で仕方がない。今日も裃をつけて組頭の屋敷に挨拶に出向き、名を記帳してきたが貧乏所帯の勝家ではろくな贈り物が出せない。当然御番入りは望むべくもなく、このままでは生涯無役のまま終ってしまうのだろう、という予測もこの頃ではなんとなくつき始めている。

小吉は吐息を一つついて欄干に肘を置き、半身になって竪川の流れに顔を向けた。すると階下から、威勢のいい声が聞こえてきた。

「身の丈七尺もある大男で、仁王様のように道場の真ん中に突っ立ったままでよ、次から次へ申し合いをする桃井の弟子達を片っぱしから羽目板に突きとばすんだ。いやあ、強えのなんのって、まるで鬼神だ」

若僧は船宿の主人に向って歯切れよく喋っているが、年寄りは剣術にはあまり興味がないらしく、くぐもった声で相槌を打っている。竪川を女三人、男四人を乗せた船が上ってくるのを眺めながら、小吉は身の丈七尺、鬼神と胸の内で呟いてぽんぽんと手を叩いて船宿の者を呼んだ。

「奴に道場破りに遭った道場はこれで十軒目だというぜ。わずかひと月で十件だ。道場の看板を大石に持っていかれた浅草三間町の藤川ってえ一刀流の先生は、妻子を置いたまま頭を丸めて逐電してしまったっていうしよ。このままじゃあ、江戸にある三百の道場は、みんなあの化け物に乗っ取られちまうに違えねえや」

千葉周作様にはかなわんさ、と船宿の主人が渋い声で若僧に言い返したところへ、へえ、といって色黒の下女が階下から上ってきて顔を出した。

「いま下で喋っているのは誰でえ」

「清吉さんです」

まだ十五、六歳と見える下女は臆病そうに首をすくめた。三月五日の代替りに、口入れ屋から斡旋されて「かわ茂」に住み込みで働きだしたばかりで、まだ客馴れしていない。着流し姿とはいえ、二階の客は幕臣だと主人に聞かされてはなおさらのことだろう。

「どこの清吉だい？」

小吉は下女を怯えさせぬように、口許に笑みを浮かべて訊いた。

「造り酒屋『清水谷』の清吉さんです」

下女は下総訛りで答えた。小吉は頷き、財布から二朱銀を一個取って下女の前に放り投げた。障子の敷居に両膝をついた下女は茫然として小吉を眺めている。

「その清吉をここに呼んできてくれ。燗の二、三本とさかなをみつくろってくれと主人に伝えるんだ。道場破りの侍の話が聞きてえと清吉にはいうんだぜ」

「へえ……」

「それからな、その金はおめえにやる。遠慮しねえでとっておきな」

下女は小さな目を丸くした。それから不意に頬を赤らめると、粗末な着物の襟元に手をあてた。

「安心しろ。おめえをどうのこうのしようって訳じゃねえ。頑張って働いているようだから小遣いをやったのさ。おめえのご主人様にはないしょにしておきな」

「……」

下女は畳に投げ出された二朱銀を見つめ、上気したように目を潤ませている。下女が小吉に身体を求められていると勘違いしたのも無理はなかった。二朱銀は下女のひと月分の給金に相当した。

「清吉が帰らねえ内に早く呼んでこい」

石のように固まってしまった下女に少しきつい口調でいうと、下女はあわてて中腰になり、さっと二朱銀に腕を伸ばして手の中に握りしめた。それからぴょんと頭を下げて、幅が狭くて急な階段をあわてて降りていった。

「あっしに御用だそうで……」

下女から話を聞いた船宿の主人が清吉に小吉の用件を伝え、その清吉は首から下げた手拭いを手の内に絞り込んで、日焼けした顔を障子の間から覗かせた。

「おれは勝小吉ってえもんだ。ま、入れ、一杯どうだ」

「恐れ入ります。ですが、仕事が残ってますんで」

「この酒はおめえのとこで造っている『清水谷』だろ。なかなかうまい」

「ありがとうございます」

清吉は額に浮いた汗を丸めた手拭いで拭った。濃い眉毛の下に蛤のような目玉があり、高く頬骨が突き出ている。

「とにかく入れ。その道場破りの話をもう少し詳しく聞かせてくれ」

へえ、と頷いて清吉は両膝で畳を漕ぐようにして小吉の前ににじり出てきた。

「詳しくといわれましても、あっしら町の者にはやっとうのことはあまり分りませんので。とにかく、強えお侍様だ、とそればっかりしか分らねえんで」
「そうはいっても、おまえだって剣術を習ったことがあるんだろう。左手の指に皮の破れた跡が残っているぞ」
「ほんの遊び心で、半年ばかり竹刀を振り回しただけでして、剣術などといえる代物じゃござんません」
「おめえは跡取りか」
「いえ、兄貴がおりますんで」
「よし、今日からおめえをおれの弟子にしてやろう」
「へっ？」
「やっとうを教えてやるっていっているのよ。兄貴殺しを企んでいるんだろ」
「め、滅相もない」
清吉は上体を引いて頭を大きく振った。胸にどっと白い汗が噴き出している。下女が丸盆に銚子を二本とあじの焼いたのを持って上ってきた。その目に親し気な色が滲んでいて、目の縁が桃色に染っている。小吉は清吉に盃を与え、銚子を取って酒を注いだ。
「おめえはさっき『桃井の弟子達』といっていたが、それは南八丁堀にある士学館道場のことか」
「へえ、そうです」

「弟子がみんなやられたあと、師範の桃井はどうしたい。大石と立ち合ったのか？」
「へえ。面と籠手をつけて出て参りました。大石はあまり見たことのない鉄面の入った面をつけ、竹の胴を腹に巻いていやした。奴は背丈もでけえが手にした竹刀が竹竿程もある長いもので、柄も入れると六尺くらいはあったように思います。一緒に武者窓から覗いていたご浪人様は、竹刀の先には鉛玉が仕込んであり、それであのようによくしなり、威力があるのだとおっしゃっておりました」
「それで二人の立ち合いはどんなふうだったのだ」
小吉は傍に坐った下女が慣れぬ手つきで注ぐ酒を盃に受け、空いた方の手で魚を手づかみにして食っていた。
「さすが道場主は強く、お弟子さん達のようには簡単にはやられませんでした。ま、相手の手の内を充分に知った上で試合をしたせいもあるんでしょうが、大石が右、左と片手で突きたててくるのを払い、気合いもろとも突っ込んでくる大石の体当たりをかわしたりとたいした見物だったんですが、かんじんの技が封じられてしまって大石の面に竹刀が当たりません」
「それで？」
「打ち合ったあと、二人は離れて相青眼に構えていましたが、桃井様がちょっと引く構えをみせると、大石はその隙をのがさず、どっと踏み込んで双手突きを桃井様の胸に突きたて、桃井様は羽目板までふっとばされました」

「なる程、おれの聞いた噂通りのすげえやつらしいな。二代目とはいえ桃井春蔵だとて鏡心明智流を江戸で張り、その弟子二千といわれている程の男だ。そろそろ五十に手の届く年齢だが、その桃井を羽目板まで吹っとばしたとなりゃ、ただの草鞋銭ほしさの道場破りではないわな。しかしおまえの眼力もなかなかのものだぞ。よっく観察していたじゃねえか」

小吉がそう誉めると、清吉はいえいえといって酒をつるりと飲み、今度は自分で銚子を手に取って盃に注ぎだした。

「それで、あの大石という侍はいったいどこのご家中のお方なので？　供の方を七、八人も連れ、大そうご立派な身なりをされておりやしたがね」

「筑後柳川藩立花家の家臣で名は大石進。藩の兵法指南役だ。といっても藩主鑑寛はまだ十歳に満たない子供で、指南役としての腕のふるいようはない。九州一の豪剣の持ち主としてその名は西国まで轟いておったようだが、この三月、その剣技を江戸で試さんとやってきたようだ。心形刀流伊庭軍兵衛の道場を荒したのを皮切りに、浅草、下谷あたりの道場を片っぱしから打ち破っていい気になっていやがると聞いていたんだが、やはりこの目で見てみねえことには、どれ程のやつか分らねえ。ちきしょう、残念なことをした。おれも桃井との試合を見てみたかったぜ」

「あっしも偶然試合のことを耳にしまして、あさり河岸まですっ飛んでいったようなわけでして」

「清吉、今度大石進がどこぞの道場に試合を申し入れたという話を聞き込んだらおれに知らせるんだ。中御徒町の岡野ってえ千五百石の直参旗本の屋敷を訪ねてこい。勝小吉といえば分る」

小吉はえらそうにそういったが、岡野の宅地の一部分を借りて小さな家を建て、妻と十歳になる息子の麟太郎とひっそりと住んでいるのである。

「するってえと勝様は大石に試合を挑まれるおつもりで」

清吉の目許が赤らんできて、その目に剣呑なものが混じりだした。ばかいえ、と小吉はいった。

「おれなんぞがそんな化け物とやったところで勝ち目はねえ。おれの従兄の男谷精一郎と立ち合わせるんだよ」

清吉はきょとんとした。

「知らねえのか。直心影流の男谷精一郎を」

「すいません」

「ここから目と鼻の先の亀沢町に道場を構えている男谷だ。師の団野真帆斎は六十六歳の高齢だが、かつては将軍家指南役を務めていた程の名人だ。男谷はその師をはるかに凌ぐ実力者だ。槍をとっては宝蔵院流免許皆伝、兵法では平山行蔵の教えを受けた人物だぞ。どこの道場にでもいって尋ねてみろ。男谷精一郎こそは当代随一の剣客、剣聖精一郎といわれている人だと答えるはずだ」

「恐れいりました」
清吉は頭を下げた。うんと頷いた小吉は、酌をする下女の目がずっと自分に注がれていたことに気付いてそっとあらぬ方に顔を向け、ま、そういうことだ、と小さく呟いた。

二

相生町三丁目の町屋から武家地に入ると、急にあたりはシンと静まり返った。旗本屋敷の土塀が延々と続き、庭から伸びた喬木が風に揺れ、さわさわと心地良い葉音をたてる。
あの化け物侍をやっつけて、見世物小屋にでも出したらさぞかし儲かることだろうと考えながら団野道場の門前に目をやった小吉は、はて、と首を傾げた。
門前に大そうな切棒駕籠が止っていて、駕籠を担ぐ四人の陸尺のほかに供侍、挟箱、長柄持ち、草履取りなど十数人の供回りの者が苔むしたような仏頂面で待機している。
小吉が着流しに脇差を一本差しただけの無頼の格好で門をくぐるのを、皆一様に押し黙ってじっと睨んでいる。
まさか大名が町道場を訪ねてくることはないが、供の者の人数からいえば、大藩の重役がお忍びでやってきたと見当をつけて間違いない。
構えは大きいが古くてところどころの板壁が腐っている道場を見上げながら、ひょっとしたらこいつは銭になるかもしれねえなと小吉は勝手に思い込んでほくそ笑んだ。

男谷精一郎は昨年の天保二年（一八三一）、御小十人組百俵高から御書院番に昇格し、禄高も二百俵二十人扶持となったが妙に清廉潔白な男で、道場とは別に住まいする組屋敷でも、書籍の他には一切の贅沢品を購入しないという質素な暮らしぶりである。かつては新太郎と呼んだ精一郎と共に、祭で無頼の町人相手に喧嘩をしていた小吉にしてみれば、その高潔ぶりは全く人が変ってしまったようで、置いてきぼりを食った小犬のようなさみしさを感じることがままあるのだ。
朝稽古を終えたあとの道場は静かだった。暗く沈んだ道場に、二人の若者が木刀を構えて佇み、じっと呼吸を計っている。一人が気合いを高く発して打ち込むと、乾いた木刀の音が鳴って二人の体は入れ替った。小吉は道場脇の小部屋に入り、書見をしていた三宅六郎という藤堂家の家臣で今は道場に寄宿している若者に、表の駕籠はなんだと訊いた。
「先生にお客様です」
「誰だ？」
「有馬様のご家老とお聞きしました」
「有馬？　久留米二十一万石の有馬家のことか」
「さように伺っております」
「用件は何だ」

「存じません」
「では直接訊きにいくとしよう」
「勝様、お待ち下さい」
三宅は上体を反転させて小吉の背中に向って呼びかけた。その細面の顔立ちには、どこか若鮎を思わせるような趣がある。
「有馬家のご家老は事前に書面にて先生のご都合を伺った上で、本日お越しなされた由にございます。内密のご相談故、何人も部屋に近づけてはならないとのきついお達しでございます。ご自重下さい」
「密談となればなおのこと、ご自重できねえ」
小吉は小部屋を出て道場の東南にある部屋に向った。そこは精一郎が居室として使っている書斎である。
その書斎の前の暗い廊下に、若い侍が一人坐って番をしている。見かけない侍で有馬家の家老に随行してきた家士らしい。小吉がそっと忍び寄ると、それまで閉じていた目をさっと開いて、お、と呻いた。小吉はすかさず侍の口の中に手拭いを突っ込んだ。
部屋の中からぼそぼそと喋る老人の声が洩れてくる。きき耳をたてながら若侍を押さえつけてばたばたやっていると、不意に障子が開かれて精一郎が顔を出した。
「何をしているのだ」
「こいつが部屋に入れようとしないので首を絞めていたところだ」

見ると若侍は鍋底のように煤けた顔色になって、口の端からは泡を吹いている。どなたじゃ、と奥から声がした。精一郎は片膝をつき、奥に向って顔を向けた。
「私の叔父貴で、勝小吉と申す小普請組に務める者でございます」
小吉は精一郎を押しのけて中に入った。赤ら顔の腐りかけの柿のような初老の武士が、キッと目を据えて小吉を睨み上げた。
「勝小吉と申す。精一郎の叔父とはなっておるが、それはご公儀への手前、便宜上そうしているのでありましてな、実際は従弟で精一郎より四つ年下なのでござる」
小吉はそういって家老の前に胡坐をかいて坐り、ちょこんと頭を下げた。
「若君が旅の武芸者にたぶらかされているというようなことを耳にしましたが、それがしも相談の仲間に加えて頂きたい。なにかと便利な男でござるよ」
家老は口の端をへの字に曲げてずっと小吉を睨んでいる。無礼な態度に不快感を抱いたのと同時に、小吉の目ざとさに驚嘆している様子なのだ。
精一郎は小吉の傍に坐り、ちょっとの間口を閉ざしていたが、やがて、さよう、といって家老に向き直った。
「この者は多少風変りなところがあるが、役にも立つ男でござります。この一件は私一人では荷が重い。小吉に助けてもらうことを了解して頂けると有難いのですが」
家老は腕組みをして小吉を平たい大きな目で見つめている。腕を解くと、よかろう、と口を開いてから懐紙を取り出してチンと洟をかんだ。

「有馬玄蕃頭が家老、有馬主水と申す。当家若君、仙太郎君に不埒な武芸指南役がまとわりつき、その件で男谷殿にご助勢を仰ぎたく参上致した。これからそれがしの申すこと、他言無用と心得られたい」

「分っているよご家老さん。要するに、若君を眩惑している武芸者を叩っ斬れというんだろ。それだけの腕を持った剣士がおたくの藩にはいねえから精一郎に頼みに来たというわけだ」

有馬主水は雷光に打たれたように目を見張った。精一郎が腕を伸ばしてきて、これこれ、といって小吉の袖を引いた。

「小吉、有馬様のご重役の前だぞ。言葉を慎め」

「そういうがな精一郎、おれは公方様にお仕えしている身で、有馬の殿様から禄米をもらっているわけじゃねえ。身分は対等だと思うが、どうだね」

最後のどうだねを有馬主水に顔を向けていった小吉は、家老の眼底に青白い光が閃くのを目にとめてフンと鼻を鳴らした。ひとくせもふたくせもありそうな爺だと腹の中で小吉は思った。

「仙太郎君はまだ十四歳。醜いものに触れずに育った方故、何事にも信じやすい。つまり騙す方にとっては容易な人柄といえるのじゃ」

その仙太郎が武芸指南役を新たに求めたのが、ひと月半前の三月初めのこと。筑後では領地が柳川と接しており、その地で剣豪として聞こえた大石進種次が、聞次役の役目

をもって、江戸に出府してきたことが契機となっているという。

「生来若君はお身体があまり丈夫ではない。なれどかつては勇猛かつ剛健で聞こえた久留米藩士に、大石進に太刀打ちできる剣客がおらないことをいたく嘆かれ、ならば自分がと決意されたのでござる。武道の道は深い。ひと月やふた月の訓練で上達できるものではない。ましてや九州一円にその敵なしと名を轟かせ、今また江戸中の道場を震撼させている大石と立ち合うなどは無謀というもの。じゃが十四歳の若君にはそれが分り申さん。その若君に、三月で大石を打ち破る極意を授けようと、大たわけを申し出てきたかたり者がおるのでござる」

有馬家上屋敷は上三田町にある。仙太郎は幼少より下屋敷で育ったという。上屋敷より西に十町上ったところで、日本橋までおよそ一里の距離がある。

「仙太郎君は毎夜、供もつけず、たった一人で下屋敷より江戸市中に向い、永代橋を渡って新しく雇い入れた指南役の待つ道場に向われるのじゃ。それが、指南役のいう修行の一つということであったというのだが、料理人の申すことには、それ以来、膳の物には一切お箸をお付けにならなくなったというのじゃ。絶食はすでにひと月近くに及んでいる。若君のやつれは目に見えてひどくなっておる。下屋敷におられるので、それがしの目が行き届かなかったことが最初の失敗であったが、今となっては、どのようにお諫めしてもお聞き入れ下さらんのじゃ。暗闇無二斎とかいうかたり者にすっかりたぶらかされてしまったのじゃ」

「暗闇無二斎？」

小吉はそういって横を向いた。精一郎の方でも小吉をうろんな目で見つめている。

「これまで何度も仙太郎君のあとをつけたのだが、いずれもまかれてしまい、稽古場を突きとめることができなかった。しかし、一昨日、ようやくそれらしき場所を探し出すことができたのじゃ。そこの庭先で飯を炊く浪人者の面体に見覚えのある家中の者がいてな、その場所をここに絵図で描いておいた」

有馬主水は厚手の細川紙を広げて精一郎の前に置いた。

「男谷殿、お頼み申す。ご貴殿の剣で是非とも、若君をたぶらかす、かたり者を討ち果して頂きたい。さすれば若君は目を覚まされ、これ以上自ら命をけずるような真似はなさるまい。些少ながらこれはほんのお礼でござる。当藩も財政逼迫の折、この程度のお礼しかでき申さんが、どうぞお納め頂きたい」

懐中から出した包みを畳に置いて、有馬主水は上目遣いに精一郎を見つめた。

「いやいや、そのようなお心遣いはご無用に願い……」

「たった百両とは精一郎、おまえも安く見られたものだな」

勝手に絹の布を開いた小吉は、中包みの頭を指先で弾きながらそういった。

「有馬さん、久留米藩士の武道がすたれたといっても腐っても二十一万石。江戸屋敷には六百人からの侍がいるはずだ。いくら相手が手強いといってもたった一人。取り囲んでワッと押さえてしまえば、万が一にも取り逃がす心配はねえはずだ。それを一介の道

場主に頼むってのは、チト、おかしいんじゃねえんですかい」

「さよう、藩士全員でかかれば搦め捕ることはできよう。だがそれでは一対一の対決を望んでおられる若君が納得すまい。若君の憧憬は塚原卜伝、宮本武蔵らと並ぶ剣豪なのじゃ」

「それだけじゃあるまい。有馬家の家中の者が、表だって動くことのできない理由があるからじゃないんですかい。たとえば、この一件が公儀に知れると、お家騒動ととられかねないとか、色々あるんじゃねえのかな」

「小吉、言葉が過ぎるぞ。おまえは外に出ておれ」

精一郎が珍しく語気を荒げて小吉を睨み据えた。分った、といったのは有馬主水の方だった。

「夕刻までにあと百両届けさせる。それでどうじゃ」

「あと二百両」

「むむ。よし、二百両。じゃが、きっと暗闇無二斎を討ち果してもらうぞ。その後は一切の詮索無用じゃ」

有馬主水は獅子のように荒ぶった顔を二人に向けて、ドスンと大きな足音をたてて立ち上った。

「確かに承った」

小吉の手はそれより早く百両の包みを摑んで懐に入れていた。横を向くと、いつもは

白い精一郎の顔が、夕陽に染め上げられたように朱く色づいている。怒っているようだったが小吉も必死だった。船宿の下女には見栄を張って二朱銀を与えたが、実は勝家の米櫃は底が透けて見える程に逼迫している。この機を逃しては、親子三人、飢え死するのは必定だった。

「ま、そういうことだ。よろしく頼むぞ精一郎」

廊下に出た有馬主水に向って、律儀に頭を下げている精一郎の肩を叩いて、小吉はそそくさと立ち上った。

三

小吉は足早に前を歩いていく。小柄な身体を精一杯伸ばして、勇ましく袴を蹴たてる姿に哀愁がある。そう感じるのは精一郎ぐらいのものだということは充分に分っている。無頼の小吉は、親戚の間では鼻つまみに遭っている。早く隠居させろという声もある。だが、精一郎は、この勝小吉という従兄が、なぜかたまらなく好きなのだ。それに暗闇無二斎退治の今日は、小吉のように胆力のある者が一緒でないと、とても一人では踏み込めそうにない。剣に自信がないということでなく、誰かに向けて白刃を抜かなくてはならないという義務感が、精一郎を気遅れさせるのである。

横川にかかる業平(なりひら)橋を渡ると橋詰に大根や豆、蕗(ふき)などを並べた露店が出ている。近在の百姓が売っているもので、本所の方から小舟に乗って買いに来る町の者もいて、日暮れまでまだ半刻あるこの時刻には、結構客がついている。

横川の堤沿いにある長い土塀は、遠州横須賀藩西尾隠岐守の下屋敷である。先を行く小吉のあとについて土埃の舞う広場を過ぎながら、押上村、小梅村に囲まれた百姓地に広大な下屋敷を構えた大名は、相当な風流人なのではないかと精一郎は考えていた。

現藩主の忠国は家督を継いでまだ三年足らずで、その手腕の程は未知数だが、正徳、宝暦年間（一七一一―六四）に藩主となった忠尚(ただなお)が名君と知られ、領民に数々の善政を施し、幕政にも参画して老中にまで昇りつめ、それまでの二万五千石を三万五千石に引き上げている。

――もともとこの下屋敷は、西尾忠尚が作物を研究するために得た百姓地だったのかもしれぬ。

精一郎は西尾家の下屋敷で働く女中が、野菜を買い求めている姿を振り返って眺めてから、さらに北に向って橋を渡った。あたりは一面畑地である。その所々に百姓家に混って町家の隠居所らしい仕舞屋(しもたや)が建っている。

瓦屋根のある武家屋敷はどこかの小大名の抱え屋敷なのだろう。木刀を一本腰に差し、手拭いで頬かむりをした小吉の後を編笠をかむって歩きながら、精一郎は何か不吉なものを感じてさらに気が滅入りだした。公方様に仕える三十五歳のお目見えが、非番だからといって、かような辻斬りの如き真似をしてよいのかと思う。

「ようし、ここでいい。この茂みに潜んでおれば相手からは見えないだろう。どれ、握り飯を食って、暗くなるまでひと眠りするか」

鳥居をくぐって小さな祠の裏手に腰を下ろした小吉は、さっそく持参してきた竹皮を開いた。

「百両をそっくりそのまま女房の奴に手渡したら、まあ、といったきり棒のようになりやがった。そのうち、唇を震わせて泣き出した。なんだと思ったら、おれが強盗でも働いたと思ったらしいんだな。無理もねえや。今年の正月には餅を買う金もなくて、麟太郎に忠次郎のところへもらいにいかせたくらいだからな」

小吉は握り飯を頬張って喋っているが、その目が悲し気に瞬いているのが精一郎には分っている。まだ九歳だった麟太郎は、餅をもらって帰る途中、両国橋の上で落してしまった。暗い中で一生懸命拾いだしたものの、餅は泥でぐちゃぐちゃになり、そのうち貧しさにのたうち回る自分達の暮らしが悔しくなって、拾い集めた餅を全て大川に放り込んでしまったという。

その話を精一郎に聞かせてくれたときの小吉はさすがに元気がなくて、目をショボショボさせていたものだった。小吉は恐らく、息子の命を救うためだったら、ためらうことなく自分の命を投げ出すだろう。

「なあ精一郎よ、ここへ来る前に考えていたんだが、大名の嫡男が下屋敷に住まいするってのは、おかしくないか」

「嫡男ではないのだろ」

「そうか、すると仙太郎は……」

「妾腹だ」

おれと同じだ、と喉元まで出かかったが精一郎は思い留まった。そうだからといって、父も、育ててくれた母も、精一郎を冷たくあしらったわけではなかった。全ては巡り合わせだった。

現久留米藩主有馬頼徳は文教政策を推し進め、久留米絣などを世に出した進取派の大名だが、財政はすでに破綻し、疲弊した農民は今にも一揆を起こしかねない程に苦しんでいる。

――なのに花のお江戸ではお家騒動か。

頼徳の正妻に嫡子が生まれた以上、側腹の子は邪魔になる。家老の主水は仙太郎を救い出すために奔走しているようなことを口ではいっているが、その腹の中では、まったく反対の企てをしているのかもしれない。

――小吉のいう岡目八目が案外的を射ているかもしれん。

精一郎は小吉にならって握り飯の包みを開いた。

「ところで精一郎、筑後柳川から来た化け物に、桃井春蔵がやられたそうだぞ」

「……」

「五尺二寸だか六尺だかの長竹刀を振り回して田舎者が大暴れしていやがる。やつの最

終目的はおまえだぞ」

「……」

「柳川藩立花家の上屋敷は下谷御掃除町にある。あのあたりの道場主は軒並、大石にやられて、まだ痛めつけられていない所もやる前から降参だそうだ。やつはおまえに挑む前に、まず、同じ直心影流の井上伝兵衛あたりを血祭りに上げるのではないかとおれは睨んでいる」

「……」

「そして、大物の中西道場を狙うのだろう。なんといっても小野派一刀流の宗家格だからな。ここを破れば一刀流を討ち取ったことになる。いや、実情はそうではなくとも、田舎者は郷里に戻って勝った勝ったと吹聴する癖があるからな、世間ではそう信じてしまう。ともあれ――」

小吉は竹筒を逆さにして水を飲んだ。精一郎は固い飯粒を念入りに嚙みしごきながら、夕陽に染りつつある一軒の百姓家に目を向けていた。そこに仙太郎が現われるまでには、まだ一刻以上あるだろう。

「一刀流中西道場も危ねえ状態にあるのは確かだな。名門も四代目となっちゃあ力が衰える。寺田五右衛門は先年死んでしまったし、高柳又四郎は行方が分らねえ。となると相手をするのは白井亨ってことになるだろうが、体格もおれとあまり変らねえほどだし、もう五十の声を聞くようじゃ、とても勝ち目はねえだろうな」

「小吉、詳しいな」

「あたりめえよ。あのあたり一帯の道場に刀を売って歩いているのはこのおれだからな」

四十一石の小吉は、妙なことに小才がある。だがもっと不思議なのは、金儲けがうまいくせに勝家はいつも貧乏なことだった。

「次の大石の狙いは斎藤弥九郎の練兵館か千葉周作の玄武館だ。一気に天下取りを狙うのなら千葉の道場に挑戦するだろう。なんてったって人気が違うからな。そしてな、玄武館の看板を狙ったあとは精一郎、おまえだ」

「小吉、瓦版屋にでもなった方がよいのではないか。酔狂が過ぎるぞ」

精一郎は笑ったが、小吉の目は西空にかすかに残っていた青い残り日の中でも、研ぎすまされて見える程鋭くなっている。

「これは酔狂などという話ではない。征伐だ。九州の虎がぬるま湯に浸っていた江戸の猿をみんな食ってしまおうというのだ。おぬしの道場では他の流派との試合を歓迎している。挑まれたら断るすべはないぞ」

「小吉、心配するな。おれは相手にする気はない。どだい刃渡り五尺二寸という長刀が実戦で役立つと思うか。どんな怪力でもそのような刀を振り回すことは叶わぬ」

「では、大石の挑戦を断るというのか」

「断るも何も、その者は曲芸師であって武芸者ではなかろう」

「し、しかしだ！」
「その話はもうよい。それより見ろ、暗闇無二斎とおぼしき浪人者が、小屋から出てきて魚を焼き出したぞ」
精一郎はすっかり暮れてしまった畑地に向って顎を振った。その仕種が伝わったのかどうか分らなかったが、中腰になって枝葉をかき分けて暗がりをすかし見だした小吉が、ややあって、「げっ」と呻き声を洩らした。
「どうした？」
精一郎は低い声でいって小吉の傍に寄った。
「出、出たぞ……」
小吉の声が震えている。それが興奮のためか怯えのせいか、精一郎には判然としない。
「つ、ついに出やがった。い、い、いつかは出ると思っていたんだ」
葉の間から暗い畑地と百姓家の庭先に向けて目を凝らしている精一郎の傍で、小吉はそう呟いた。
「……」
浪人者は小枝に火をつけた。ぼっ、とささやかに燃えたその火の中に、細面の浪人者の横顔が映し出された。精一郎は目を見張った。
「な、中村殿……」
横を向くと、暗い中で小吉がしきりに首を振っているのが感じられる。

「やめた。おれは降りた。あいつにかかわりあうとろくなことはねえ。命がいくつあっても足りねえよ」
「何をいっておる。我らは中村殿に命を救われたではないか」
「だがよ、あいつは若年寄をふん縛って土の中に埋めちまったやつだぞ。あいつこそ本当の化け物だ。ねえ、帰ろうよ」
「たわけたことを申すな。この三、四年、私は中村一心斎どのをずっとお捜し申していたのだ」
精一郎は小吉を置いて神社をとび出した。はやる気持が精一郎の足の運びを乱し、柔らかい土に足をとられ、剣客らしからぬ転び方をした。
「中村殿！　一心斎どの！」
四ツン這いになって起き上るなり、精一郎は暗い庭先に向って呼びかけた。火の前に蹲っていた細い影が立ち上った。おお、という少し嗄れた懐かしい声が、魚の匂いと共に精一郎の方に流れてきた。
精一郎が中村一心斎と初めて会ったのは八年前のことだった。宇田川町の茶屋に、美しい娘が働いているという噂があるので、ひとつ顔を拝みに行こうと小吉に誘われて出掛けていったのだが、美しい娘はおらず、代りに出会ったのが、「みすたまっち」と名乗る浪人者だった。

妙な男で、通りがかりに声をかけられ、よく分らない内にその男の飲み食いした代金を支払わされる破目になったのだ。

その後、相州の足柄上郡で小吉ともども、二宮尊徳の監視の下に、寒風吹きすさぶ中で、荒地を開墾させられた上に、泥棒の助っ人までさせられた。そのいずれも、「みすたまっち」こと中村一心斎の策略に引っかかってしまったからなのだが、精一郎は一心斎を憎むことができなかった。彼といる時は霧の海を漂わされているような不安と恐怖を抱かされるのであるが、全てが終ったあとには、不思議なことに、心地よい夢でも見ていたような爽快感が胸に残っているのだ。

確かに無法者の小吉でさえびくつくように、一心斎には常人に計り知れない途方もないところがあり、五年前には老中水野忠成の家老土方縫殿介と若年寄であった林忠莞を、奸賊成敗と称して生き埋めにしてしまったことさえある。

もっともその現場に一心斎の姿はなく、仏法僧の鳴き声が深い霧の中に響き渡っていたのだが、小吉も、居合わせた千葉周作も、あの仏法僧こそが、中村一心斎殿に違いないと、あとになって語っていたものだった。

その剣さばきは精妙のひと言で、風聞ではかつては肥前島原で五千石を食んでいた重鎮であるとも、富士山にこもって一夜霊夢を見て神技を得た仙人であるとも噂されているが、誰も問いただした者はいない。あれから杳として姿を消してしまった中村一心斎だったが、精一郎はいつかきっとまた見える時が来ると信じていた。その時は、その時こそは幕臣としてではなく、一介の剣客として立ち合いたいと願っていたのだった。

四

有馬家二十一万石の当主の倅、仙太郎は凹凸のある板の間に正坐をして、師の一心斎と共に静かに夕食を摂っていた。十四歳と聞いたが痩せたその姿は、十歳程にしか見えず、武道で鍛えた精一郎からすればまことに頼りなげで、少し強く引けばぽっきり折れてしまうのではないかと思われる程だった。事実、仙太郎は病弱で、胸を長く患っていたという。

「この子を身の丈七尺と噂のある大石進と打ち合わせるというのは、いくらなんでも無茶というものではないですか」

精一郎は、茶を飲んでいる一心斎に向ってそういった。仙太郎も湯呑みから顔を上げてキョトンとした目を向けてきた。小屋の隅には仙太郎に遅れて付き添ってきたという四十歳位の小柄な男が蹲っていたが、顔を上げようとはしなかった。本当に逃げてしまった小吉は、今頃どこその船宿で、小女相手に酒を飲んでいることだろう。

「仙太郎は立ち合いなどせん」

一心斎は静かな瞳を精一郎に向けていった。もう五十歳になったはずなのだが、五年前に別れた時より若く見えるのが不思議だった。

「さようですか。それを聞いて安心しました。有馬家の有馬主水という家老が、仙太郎殿はそのために剣術を習っているのだといっておりましたので」
「私は仙太郎に『闇の深呼吸』というものを教えているのだ」
「『闇の深呼吸』ですか。ははあ」
精一郎はそういって頷いてみせたが、軽んずる思いがその顔に表われてしまったらしい。おぬし、馬鹿にしておるな、といって一心斎はにやりと笑った。その笑みを目にとめて、臓腑を冷たい手で掻き回されたような思いがした。
「これを会得すれば刀など無用の長物となるのだ。どれ、男谷殿、仙太郎を持ち上げてみろ」
「はあ、分りました」
精一郎は仙太郎の後に佇んだ。仙太郎はまだ湯呑みから茶を飲んでいる。馬鹿馬鹿しいと思いながら精一郎は背後から仙太郎を抱き上げた。見た目通りの華奢な身体で、子猫のように軽かった。
「ほほう、なかなか力があるではないか」
一心斎は白い歯を見せて笑った。精一郎はその顔を睨みつけた。
「ではもう一度抱き上げてみろ。もし再び仙太郎を持ち上げることができたら五両やろう。ただし駄目だったら――」
「よろしい。十両差し上げます」

精一郎は憤然としていって仙太郎の脇腹に両手を置いた。
「！」
仙太郎は湯呑みを置いて薄く目を閉じている。その仙太郎の身体はまるで石地蔵のように固く、足許には根が生えてしまったかのように動かない。
「うっ、うっ」
精一郎は歯を食いしばった。こんなはずはないと腰に力を溜め、思いっきり持ち上げようとしたが、子猫のようだった仙太郎は、持ち上げようと焦れば焦る程重くなり、しまいに寺の吊り鐘のように感じられだした。
「だめだ……」
床板に腰を下した精一郎はハアハアと荒い息を吐いた。額にはあっという間に汗が噴き出している。
「い、一体どういうことなのですか」
「たいしたことはない。仙太郎が地下に眠る、大いなる闇と呼吸を通じ合わせただけのことだ。さて」
一心斎はひょいと立ち上った。土間に降り草鞋をつっかけて伸びをした。
「十両はしばらく貸しておくことにして、軽く腹ごなしでもするか。男谷殿、仙太郎のそばについていてやって下され。仙太郎、よい機会だ、大気に潜む闇の流れと呼吸を合わせるとはどういうことか、よっく感じとるのだぞ」

「はい、暗闇様」
仙太郎はすっくと立ち上って土間に降り立った。
「中村殿、何をなされるのですか」
戸口の前に佇んだ一心斎に向って精一郎は尋ねた。異様な光が一心斎の周囲に立ち籠めている思いがした。
「江戸家老の手の者が、仙太郎を亡きものにしようとこのあばら屋を取り囲んだのだよ。おぬしが何もせぬので業を煮やしたらしいな」
「亡きものに！　そ、それではやはり」
「仙太郎は藩主になろうなどとは望んでおらん。それより野山を駆け巡るだけの体力をつけたいと願っているだけなのだ。それを、毒など盛りおって」
「毒を……それで屋敷では飯を口にしないと……」
「弥助、おまえは仙太郎の盾になれ」
一心斎がそういうと、小屋の隅からすっと近づいてきた供の者が、仙太郎と並ぶように佇んだ。その右目が赤黒く腫れ上っている。
「弥助が毒味をしなかったら、仙太郎は死んでおった。まったく、毒蛇のような奴等だ」
一心斎は無造作に戸を横に引いた。暗い中から白刃が閃き、一心斎の胸を貫いたかに見えた。だが、切先は二寸届かず暗い中に弾かれたように留っていた。

精一郎は刀を抜いて下段に構え、仙太郎を護ろうとした。その仙太郎は一心斎のあとについて、土間から外に出ていこうとした。
「待て。ここにいるんだ」
「大丈夫です。それよりあれを見て下さい」
仙太郎は若者らしからぬ口のきき方をして、庭先に向けて指を差し示した。精一郎は目を見張った。
無刀の一心斎に向って、刀を振りかざして打ち込んでいく者どもは、奇妙なことに一心斎の一間内側にすら入ることができないまま、ある者は横転し、ある者はくすぐったそうに身をよじって刀を放り投げている。
「これは一体……」
掛け声を放って討って出ようとした黒覆面の侍に向って、一心斎が軽く右手を突き出す仕種をするのを、精一郎ははっきりと両目でとらえた。その刹那、黒覆面は階段を踏みはずしたかのように前のめりになり、手から離れた刃の切先が自らの足の甲に突き刺さった。下弦の月に照らされたその光景は、まるで酒かアヘンに酔いしれた山に棲む獣が、祭りばやしに乗って踊り狂っているようだった。
「これは、どういうことだ……」
精一郎は誰にともなく呟いた。
「相手のもつ生気を投げ返してやるのだと先生はいわれました。相手が強い殺意を抱い

ていればいる程、はね返る力も強いのだということです。私も初めて見ました。すごいものですね」

そういった仙太郎の目が闇を見定める猫のように黄金色に輝いた。ぶるん、と精一郎は一度大きく身震いした。それから自らの魂を一心斎の真後にそっと漂わせた。

五日後、大石進と千葉周作の試合が玄武館で行なわれた。精一郎は小吉と、造り酒屋の倅の清吉という者に引きたてられるようにして玄武館に向ったのだが、試合はまったく退屈なものだった。

千葉周作は自分より一回り大きな大石進の突きを、鍔の代りに竹刀にはめた一斗樽の蓋で防いだ。それはそれで効果的に見えたが、どうかするとすさまじい大石の突きが樽の蓋ごと千葉の胸を打ち、その都度千葉はその巨体を泳がせた。

道場内に陣どった双方の弟子達は、どちらかが轟音をたてて踏み込むたびにどよめいた。その歓声のさなかに、精一郎はそっと道場の建物から離れて空を見上げた。

初夏を感じさせる空に透明な風が吹いていた。精一郎は口を大きく開き、喘ぐようにして風を吸い、舌の上で転がした。そうしながら、あの夜見た、一心斎の闇の舞いを思い浮かべて、胸が高鳴るのを感じていた。無刀の一心斎が腕を小さく振るたびに、大地が震え、黒装束の者たちは木の葉のように転げ回った。

武道、武術を越えた神の息に等しい崇高なものをそこに見たように思った。あの方の神気そのもののような佇まいに較べれば、道場破りなど餓鬼の遊びだ。そう思った精一郎は、見つめる先にある雲が、水滴の中に溺れていくのに気付いて、あわてて目をしばたたいた。それから、涙を拭った手拭いを、誰にも見られないように、そっと懐中に畳んでしまった。

片手突き

一

チッ、と鳴く小鳥の囀りが、一声短く部屋に響いて、それきり消えた。

時刻は七ツ（午前四時）になる頃だった。大石進種次は、六尺五寸の巨体を畳に横たえ、暗い天井を睨みつけていた。前日からの憤りが胸に渦巻いている。田舎者の武芸者と蔑まれたからではない。

――その者は曲芸師だ。

と、自分を揶揄する者がいて、しかもそれを口にしたのは直心影流の男谷精一郎であると聞いたからである。

「両国橋東詰にある小料理屋でそう声高に喋っていた者がおったそうじゃ。なんでもそいつは男谷の身内の者だというふれ込みだったというぞ」

その話を聞き込んできた江戸定府の藩士が真顔でいうのを聞いても、はじめ、大石進は信じなかった。男谷家につながる武士が市中でさような軽はずみなことを口にするはずがないと思ったからである。

「六尺の竹刀ば振り回すとかは、形剣術ばいっていうとった」

「おれも聞いたったい。それが真剣なら実戦では使えんやろ、第一そげん長かなら鞘から抜けんめえもんとな」

「いっそんこつ両国の見世物小屋にくさ、出すとよかていうとった奴もおったばい。こやつはいつでん木刀ば下げとって、男谷道場にも出入りしとるげなばい」

昼餉を使いながら、四月に江戸勤番になったばかりの若い藩士が口々にそう喋るのを、由布市之丞がたしなめた。

「おぬしら、大石殿に手直しを受ける身でありながら、くだらんことをぬかすな」

由布は江戸生まれの江戸育ちだが、国家老の由布美作に縁続きの上士である。それで若侍たちは恐縮して黙ったが、進の胸の内では新たに疑念が生じた。実は二日前に、男谷精一郎に宛てて試合所望の書面をしたため、黒塗りの文箱に容れて、上屋敷に勤める中間に持たせたのである。

その返書がまだ届いていなかった。どうして即日返事をくれなかったのかという微かないらだちはあったものの、進との試合を拒否するとは毫も疑っていなかった。

狸穴にある男谷道場では他流派の剣士との試合を奨励しており、立ち合いを求める修行の武芸者には、男谷自らが竹刀をとって応じていると聞いていた。しかもその精妙なる剣さばきに対して、ただの一人も勝利を得た者はないという。その剣名は、江戸より二百九十里離れた筑後柳川にまで鳴り響いていた。

進が、聞次役の役目を受けて江戸に出府してきた真の目的は、剣豪日本一を名乗るた

めであった。それだけの自信が進にはあった。九州一円では最早進の相手になる者はいなかった。江戸へのぼる旅の途中でも、道場があると知ると訪いを入れ、試合を申し込んだ。いずれの道場主も六尺五寸の長身を前にして身を縮め、進の剛腕から繰り出される五尺二寸の竹刀の切っ先を喉に受けて、卒倒した。

江戸に着いた進は、男谷精一郎と対戦したいと逸る気持を自ら抑え込んで、江戸で道場を構える師範達の腕前がどの程度のものか、じっくり観察することにした。

なるべく小さな、目立たぬ道場を選んで試合を申し入れたのだが、やはり公方様のお膝元、旗本八万騎が居を構える江戸での立ち合いという思いが進を気負い立たせたのだろう。出てくる師範代、師範を片っぱしからその五尺二寸の固い竹刀で打ちすえ、容赦なく喉を突き破った。その突き技は十四歳の折、藩公の前で行なわれた御前試合に出場し、それ程でもないと甘く見ていた相手に不覚を取り、天才剣士といわれて天狗になっていた己れを恥じて以来、独自で研磨、修練した技であった。

江戸の藩邸に荷を解いて、半月も経ずして進の剣名は江戸市中に轟いた。そうなると試合を申し込んだ道場主のなかには、裏の小部屋に進を引っぱっていって、これは些少ですが草鞋銭ということで、と笑みを浮かべて数枚の小判を懐紙に包んで差し出してくる者も出てくるようになった。

あきれながらも進はあえてそれらの軟弱な剣術遣いを追いつめようとはしなかった。進の志はもっと高いところにあったからである。

二月経つと、破った道場は十八を数えた。なかには町人を相手にえらそうにしていた道場主もいたが、打ちすえた剣士の内には、桃井春蔵や心形刀流七代目伊庭軍兵衛、さらに藤川派直心影流の井上伝兵衛、一刀流鵜殿甚右衛門など他国に聞こえた高名な剣士もいたのである。

その全ては、江戸随一の剣客、男谷精一郎を打ち取るための修練のつもりであった。男谷は進より一つ年下の三十五歳であるという。剣士として、最も円熟した時季にあるといっていい。その男谷を破れば、当代一の剣豪として故郷に錦を飾ることができる。三十石と、藩の兵法師範役としては異常に低い禄高の、加増もあり得る。男谷精一郎に挑戦状を送りつけたあとの二日間というもの、進の精神は一刻刻みに昂ぶっていった。

その待ちに待った男谷からの返事は、昨日の夕刻になって届けられた。

――一斗樽の蓋を鍔とする細工も心得えず、いたずらに長き竹刀との立ち合いは無用と存ずる。

試合は受けないというのである。一斗樽の蓋とは、進との試合に際して千葉周作が考案したもので、それを鍔の代りに竹刀の柄にはめ、それでもって進の強烈な突きを防ごうとしたのである。

そのような子供騙しの防御が通用するはずのないことは一目で分った。よしんば突きを防ぐことはできても、技を繰り出せる訳がない。進はその大きな樽の蓋ごと、千葉の胸板を竹刀の切っ先で突きとばしてみせたのだが、自慢できる試合ではなかった。どこ

か舐められている気がした。

男谷が試合を断ってきたのもまさにそのことで、千葉がやったような茶番は、自分には演じられない、といっているのだ。つまり、軽くいなされたのだった。

――それだけではない。男谷はわしの長竹刀を得物としては認められないと嗤っておるのだ。だがそのような長刀は実戦では使えないというのなら、おのれが帯びている兼光はどうなのじゃ。いかな名刀でも、真剣で戦うことがなければ竹光と同じではないか。

進は灰色に曇ってきた天井を睨んで低く呻いた。身体の芯からじわじわと汗が湧き上ってくる。

チッ、チッ、とふた声鳴く小鳥の囀りが六畳の長屋に躍り込んできた。襖を隔てた隣室からは、進と共に出府してきた十時弥三郎の鼾が聞こえてくる。進は薄い掛け蒲団を剝いでのっそりと起き上がった。

手拭いを下げて長屋を出て、井戸端に行って下帯一つになって冷水を浴びた。空の高い所はまだ暗いが、東の方には清水が湧き出たような白みが滲み出している。非常に気持がいい。

静かな空気の下で、進の肩にかかる水音だけが響き渡る。下谷御徒町にある立花家上屋敷の周囲は、大名屋敷ばかりでなく、旗本屋敷、それに、御先手組や大御番与力同心の組屋敷が連なっている。住まいする者の数は多いはずだが、人声は聞こえてこない。立花家の堀の内側は、江戸勤番侍の長屋が連なっているのだが、そのどの門からも物音は立ってこない。江戸に住む侍は、夏でも朝寝をいとわないものらしい。

冷水を浴び終ると、ようやく東方の空に光の色が滲み出した。進はいったん部屋に戻り、麻の稽古着に着替え、六尺の長木刀と刃渡り四尺の真剣を携えて屋敷の東南の角地に行った。矢倉と土蔵の間にあたるその地は高い木が鬱蒼と茂っていて、中に入ると昼でも暗い。

進は息を鎮めると、巨木の節目に向って長木刀を突き出した。双手突きで百本。さらに左片手突きを百本打った。汗を拭い、次に左右の胴打ちを二百本打ち込んだ。

息を整え、樹木の冷気を胸に吸い込んだ。そうしていると騒々しい江戸にいることを忘れて、遥かな気持になった。目を閉じると十四歳の自分が目蓋に浮かんできた。

――進、明日より、朝夕、二百本ずつこの石を突け。

蔵の梁から吊された糸の先に、布で包まれた石が下っていた。祖父の八左衛門種政は皺だらけの首に小さな喉仏を突き出して、さらに言葉を添えた。

――石が見事突けるようになったら一文銭を吊して突け。昨日の御前でのおまえの不覚は儂の不覚じゃ。我が愛洲陰流に、突きの技がなかったことから起ったことじゃ。

祖父は進の脇腹の上をそっとさすった。進は微かに顔をしかめた。したたかに竹刀で打ちすえられた肋骨は、三本が折れていた。しかし、進は痛いとは一度も口にしなかった。

――一文銭が突けるようになったら、三尺六寸の木刀を一寸長くせよ。それがこなせ

るようになったらさらに一寸長くせよ。突き技は、長い得物ほど有利じゃ。
それでは槍と変りませぬ、と進はくやしさをこらえていった。祖父は鷹のように目を金色に輝かせて語気を荒げた。
——槍では胴は打てぬ。
突き技と共に、胴打ちも習練せよと祖父はいっているのだと進は理解して頭を垂れた。その日の言葉が祖父の遺言となった。翌日、祖父は自ら命を絶った。
進は祖父の言葉を守り、毎日四百本の突きの打ち込みをやった。双手で石が突けるようになると、左手一本で突く練習をした。生まれつき左利きの進にとって、左片手突きは、その伸びの迅速さにおいて、双手突きよりも威力があった。
さらに進は、祖父の教えてくれた愛洲陰流に左右の胴打ちを組み入れて、自己流の流派をたてた。それを大石神影流と称した。
「トオッ！」
裂帛の気合いと共に四尺の刀身を抜いた。射し込みはじめた朝の光が斜めに斬れた。刀を鞘に納め光を凝視する。右足を踏み込むと同時に背骨の軸を回す。通常の倍近い長さの刀は、進の腕につながってその刀身を真っ青に閃かす。
——これでも実戦では使えぬと申すのか。
残心を保ちながら、進は胸の内で呻いた。未だ見えぬ男谷精一郎の姿が、朝の陽光を背に黒く聳え立っている。進はその影に向って鋭い一太刀をくれた。影が真っ二つに割

れ、木洩れ陽が顔を出した。
進は大刀を鞘に納め、息を鎮めた。長屋から馬の鼻息が樹木を縫って響いてきた。五間程離れた背後で、人の気配があった。
「由布か」
進は振り返らず、息が整うのを待っていた。
「見事な居合いでござりました。この技を目の当たりにすれば、男谷精一郎といえども、形剣術などと嘯いてはおられますまい」
由布の足音が近づいてきた。進は左手に長竹刀を持って振り返った。色黒だがすずし気な目を持った由布の整った顔が低いところにあった。
「いっそんこつ真剣ばとってから立ち合いば所望したかね」
「男谷殿に試合を承諾させる算段がつきました」
由布はその薄い唇に笑みに似た歪みを漂わせた。
「その刃渡り四尺の長剣が、戦さに役立つことを天下に知らしめるのです」
「戦さ？」
進は眉をひそめた。由布の意図する所が見えなかった。
「人を斬ればよいのです」
「人ば……斬る。まさか、ぬしゃ……」
「辻斬りをせよというのではございません」

由布は口許にはっきりと笑いを浮かべた。

「昨夜、家で使っている小者が面白いことを聞き込んで参りました。押上村にある百姓家に住む者の命を狙って、黒覆面、黒装束の賊どもが夜な夜な跋扈しているというのです。近くにある西尾隠岐守の下屋敷に仕える者が見たそうです」

「なんと？　どげんこつか？　誰が誰ば狙うとるていうとか」

「狙われているのは有馬上総介頼徳の長子仙太郎君。嫡男藤一郎君が誕生の後、上屋敷の表、裏、合わせての策謀との噂です」

「ほんなこつか。妾腹が生きとったら、お家騒動の元になるやろうけんね。そってこまかうちに命の芽ばとってしまおうっちゅうこつやろ。おなごの浅智恵と、藩政ば牛耳ろうと思とる権力者の欲とが結びついたとやろうが、むごかこつやね」

進は口の端を下げて幹を見上げた。すでに六ツ半（午前七時）になり、朝の涼気は大気に溶け、樹木の間から差し込む朝陽にも力が漲りはじめている。先程拭ったばかりの汗が、もう進の胸に噴き出してきている。

「仙太郎君を護る者にどれ程の遣い手がいるのか存じませんが、百姓家に潜んでいてはいずれ破られるのは必定。そこで大石殿がひと夜助太刀に参上し、長刀の威力を存分に発揮される。さすれば噂は江戸市中に広がり、男谷は最早逃げることはできぬことと相成ります」

由布の目に得意の色が浮いた。進は笑った。

「芝居じゃなかろうし、そげんうまくいかんやろう。ばってん、面白かごたるね。してみてもよかかもしれん」

二

藩邸での御用を済まし、大石進が由布市之丞と柳川での弟子、十時弥三郎を伴って小梅村に出掛けたのは、その日の八ツ（午後二時）過ぎだった。

強い日差しが真上から降り注ぎ、三人は四半刻もいかぬ内に胸から滝のような汗を流すことになった。樹木の茂った寺の塀の向こうからは、蟬の鳴き声が騒々しく襲ってくる。

「どうにもたまらんごと暑かね。柳川よかひどかばい」

茹で蛸のようになった弥三郎は、胸毛に付着した汗を、すでに濡れている手拭いでごしごしと拭いながらあえぐようにいった。

「寺の井戸を借りて身体を拭いますか」

弥三郎より五つ年若い由布が気を遣ってそういった。精悍なその顔からも汗がしたたり落ちている。

「それよか腹ん減った」

弥三郎は顔も身体つきも、将棋の駒を逆さにしたような形をしている。それがそろっ

てしおれたようになった。

「この先になかなかうまい蕎麦を食わせる店があります」

由布は進の顔を見上げた。食おう、と進はいった。実はさっきから腹が減っていた。筑後柳川藩十一万石と石高は高いが、その格式を保つために無駄にする費用は膨大で、そのため藩士にはきつく倹約が申し渡されている。一年限りの江戸勤番の昼飯が自弁となったのは昨年の四月からで、要領のいい者は朝飯の残りをちょろまかして食っているが、大方の者はすきっ腹をかかえてゴロ寝をしている。通いの中間に頼んで草鞋作りを習い、内職にいそしむ者もいる。そうでもしないと日がな空腹に耐えに耐えて小机の前か、長屋の隅に蹲っていることになる。

「一杯じゃ足らんやろ」

浅草寺に通じる宇森下の金龍寺門前の蕎麦屋の床几に腰を下ろした進は、由布が注文を出す前にそう促した。由布は恐縮し、弥三郎は大喜びで手を打ち、下女を呼んだ。

両人とも、道場破りで得た大石進の懐を頼りにしているのである。

十時家も柳川では名門で、弥三郎の本家にあたる大伯父の十時甚右衛門は、番頭を務めていて八百石を禄している。父の半兵衛は目付兼務の物頭で百六十石だが、藩主筋の立花庄左の婿養子に入った叔父は、この春、郡奉行を拝した程である。その名家につながる者でも、江戸では、腹を充分に満たすことができないのである。

弥三郎は運ばれてきた蕎麦を、角ばった頭を上下に激しく振りつつ、あっという間に平らげた。それでもまだ物足りなさそうにしていたが、進はさすがに三杯目は勧めなかった。

四半刻、蕎麦屋で休んで、三人は席を立った。浅草寺の前を通って大川橋を渡ると、ぬるいが風が出てきて進の首筋を舐めていった。橋の上は暑さにもめげず人の往来が激しく、荷駄馬を引いた馬子や駕籠担ぎ、行商人、八百屋、坊主、供連れの商家の主人、金魚売り、といった輩が次から次へとやってくる。傘をさした小唄の師匠らしいきれいな女が、下女を伴って歩いてくるのとすれ違ったときは、三人の目は自然にそちらに向けられた。江戸の女はきれいだが、めったにその姿を見かけない。芝居小屋や女の好む商店のある通りを歩くことのない進にとっては、とくにそう感じられる。

隅田川の上流に目を転じると、遠く筑波山が青く煙っている。川には大小さまざまな船が往きかっている。昼から酒を呑んでいる客を乗せた屋形船もあれば、荷を満載した船もある。速い流れをすいすいと横切っていく猪牙船の船頭の巧みな艪の使い方には舌を巻く。江戸の剣客には驚かなかった進も、江戸の忙しさには当惑した。喧騒の中に入っていくのがおっくうなのだ。尻込みしたい気持は今でも変らない。

橋を渡ると大名の下屋敷が二つ並んであった。その内の一つから出てきた三人供連れの老人が、六尺の木刀を携え、刃渡り四尺の長刀を腰に下げた進を、目を剝いて睨み上げた。進は昂然と肩を張って行き過ぎた。

瓦を焼く瓦師たちがかいがいしく働く通りを抜け、業平天神宮と南蔵院が並ぶあたり

まで来ると、ようやく人の姿がまばらになった。

だが横川にかかる業平橋を渡ると、どこかの店の前に人だかりがしていて、その人垣の向こうから声高に怒鳴る男の声がする。

橋の畔にはすでに朝の内に由布が伝えていたものとみえて、先夜の乱闘を目撃したという西尾家の下働きの老爺が待っていて、腰を折って慇懃に三人を迎えた。

「何の騒ぎだ」

ふた言み言、老爺と話したあとで、由布が人垣の方に首を伸ばして訊いた。

「その店で働きおる若僧んとこへ、借金の取り立てがきているんでさ」

老爺は目をしょぼしょぼとさせていった。深く刻み込まれた額の皺が、土埃で黒ずんでいる。

「怒鳴っているのは高利貸しの手先か」

「なんの、博打の借金じゃて」

「そういうことか」

行きかけたとき、女の悲鳴が上った。由布が先に人垣をかき分けて中に入り、弥三郎が続いた。進は人垣の後に立って輪の中を眺めた。「梅飯茶屋」と看板の出た店の前に、人相のよくない地廻り風の男が三人肩を怒らせて立っている。地ベタに這いつくばって土まみれになっているのは店の料理人なのだろう。主人らしき老人がその傍でオロオロしているが、博打の借金を肩代りする気はないらしい。

「十六両をどうやって返すんでえ。一年間飲まず食わずで働いたって、おめえが稼げるのはせいぜい三両だろうが」

真ん中の男は、見物人を意識してかもろ肌を見せて大見得を切った。料理人の肩に手をかけている若い女は、意外にも眉を吊り上げて地廻りに向き直った。

「それを知ってて、十六両も貸すあんたらが悪いんじゃないか」

女は店の仲居らしい。老主人があわてて女の背中を叩いた。その老主人を突きとばして、地廻りは女の腕を強く引いた。

「やめてよ！　何するのよ！」

「おめえがこいつの代りに働くのよ」

やめて下さい、と料理人が起き上るのを、別の地廻りが蹴とばした。女は男の腕の中で暴れている。見物人の間から、役人を呼べの、誰か助けてやれの声が飛んでいる。

なるほど、これが江戸か。昼日中から、こんな揉め事が堂々と展開されているのだな、と思いながら、進の目は一人の浪人者に注がれている。

髪を総髪にして腰には刀の替りに扇子を差しているが、すっと佇んだ姿はまことにすっきりしたもので、そこだけ別の風が当たっているように感じられる。

背丈は五尺七寸程だが、周りにいる町人や百姓より頭一つ飛び抜けているので、当然地廻りの目には入っているはずだ。他にも侍はいるが、由布と弥三郎の他は人の陰に隠れてしまって騒動とはかかわりをもたないようにしている。

「きゃあ！」

女の悲鳴が高く上って、その身体が人垣まで飛ばされた。地廻りの男の頬に爪跡が朱色に残っている。女は男を引っ掻いたものらしい。

人垣に弾んで地べたに腰をついた女は、叫びながら起き上ろうとしている。その背後に丁度浪人者が佇んでいる。人々の目が浪人者に集まった。どれどれ、と浪人者はいって背中を丸めた。

「大丈夫かの。ん、どうじゃ」

浪人者は女の着物の両腋に手を差し入れて、何やら頼りなげな様子で抱き起こした。そのときだけ、地廻りの三人も、料理人も、見物人も、妙なことにいっせいに静まり返って二人を見ていた。地廻りの内の一人が懐に手を入れたのは、浪人者が次に反撃をしかけてくると察知したからだろう。

ところが、起き上った女がいきなり身体を回して浪人者の頬を殴った。

「何するのよ、このすけべ爺い。助け起こすふりしてひとの胸触ってさ。どさくさでへンなことするんじゃないよ」

「いやいや、わしは……」

そう弁解した浪人者の顔は朱に染っている。それは暑さのせいだけではないのは瞭然だった。

「いやいやじゃないよ。助けてくれるんならあいつらをやっつけておくれよ」

気丈な女はそう言い様、浪人者の手を引いて自分の前に押し出した。自然、浪人者は地廻り三人と立ち向う形になった。

「ああ、おぬしら。手荒なことをするのはよくない」

弱々しく片手を上げて老僧のような声色でいった。腰をかがめて身構えた地廻りの内、左右の二人が、今にも匕首を抜く体勢をとった。

「お侍さん、おせっかいはやめたほうがいいぜ。こんなことで両腕を失ったら、いってえどうやっておまんまを食うんでえ」

「それもそうじゃな」

兄貴分らしい男にすごまれた浪人者は、そういってあっさり引き下った。何が起こったのか気がついた見物人が笑いを洩らしたときには、浪人者の姿は人垣の中からも消えていた。

「なんでえ、屁みてえなやろうだな」

乱ぐい歯を剝き出しにした若い地廻りが、懐から抜いた匕首の刃で、これみよがしに掌を叩いて大声でいった。アハハ、と地廻りが声をあげて笑い、兄貴分の男が茫然と佇んでいる女の手首を取り、ひねり上げたとき、「よさんか」と由布が怒鳴った。

「なんだと」

振り返った男は、女の腕を取ったまま、由布の方に近寄ってきた。

「人前で女をいたぶるのもたいがいにしろ」

「では店の裏でやらしてもらいますよ」
「ふざけるな」
由布が男の腕に手をかけたとき、横に回った乱ぐい歯の若僧が素早く匕首を突き出してきた。
「痛ッ」
由布はあわてて手を引っ込めた。その二ノ腕から血が滲み出している。人前で平気で乱暴を働くだけあって、侍を恐れぬ、狂暴な者たちだった。
「なんばしよっとか！」
弥三郎も飛び出していったが、三人はひるんだ様子もなく、いっせいに匕首を抜いて攻撃の体勢をとった。
「いい加減にせんか」
人垣を分けていったわけではなかったが、進がそう声を放つと、自然に前が開いて、地廻り三人と正面から向い合う形となった。三人は巨体の進を見上げて、一瞬臆した様子を見せたが、すぐに元のふてぶてしい表情に戻って前に出てきた。
「痛い、放して」
兄貴分に腕を逆手にとられた女は必死に逃げようともがいている。男は女の腕をとったまま進を睨み上げた。
「助けてえんなら十六両出しな。それともその火の見櫓みてえなでけえ図体をズタズタ

に斬り裂いて、段梯子みてえにしてやろうか」
男は片方の頬を引きつらせて憎まれ口を叩いた。よせ、と由布が声を出して男と進の間に立った。
「おまえらの敵う相手ではない。さあその女の手を離してやれ」
「はよせんか。命がのうなるかもしれんぞ」
弥三郎が汗をびっしょりとかいた胸毛を突き出していった。兄貴分の目が油断なく動き、近づいてくる進をはじめて怯えた表情で見上げた。異常に長い刀と褐色に輝いた長木刀を目に入れたせいだろう。
「な、なんでえ。えらそうな口叩きやがって。まさか、おめえが、い、今江戸中で評判の、大石ってえ、田舎者の道場破りだとでもいうのかえ」
「その田舎者や」
進は男を上から圧しつぶす気迫で呟いた。三人の表情が突然変った。吊り上っていた目も口も、いっせいに弛緩して間の抜けた顔になった。
「ほ、本物かよ」
右端にいた者が初めて口を開いて兄貴分の様子を窺った。近頃は大石進と名乗って、ただ図体の大きいだけの男が力のない道場を訪い、小遣い銭をせびることもあるという噂を進は耳にしていた。今の地廻りの反応で、それがどうやら事実らしいと進は悟った。
「どうせ偽者じゃ。死にさらせェ！」

左手にいた乱ぐい歯の若僧が、そう叫び様匕首を突き立てて突進してきた。進は左手に持っていた長木刀を、無造作に突き出した。その刹那、若僧はぎゃっと叫んで地面にもんどり打って倒れた。仰天した兄貴分はようやく女の腕から手を離した。若僧は喉を破られ、血を流してのたうち回っている。

「何をしておる。早く手当てをせんと死ぬぞ」

由布が血の滲んだ自分の腕を手拭いで押さえていった。二人の地廻りは青ざめながらも、素早く若僧を抱きかかえ、無言のまま連れ去っていった。見物人はそれでも立ち去ろうとしなかった。弥三郎が追い立てると、口々に何事か呟きながら、鬼でも見るように恐し気な目で進を見上げ、肩をすくめてどこへともなく散っていった。

女に支えられた料理人が、埃まみれの顔を上げて三人の侍を茫然と眺めていた。怪我はないか、と由布が声をかけると、はっきりしない表情で頷いた。

「あの――」

女が何か言いかけたが思い直したように頭を下げ、それきり黙って頷いた。さっきまでの気丈さが嘘のようだった。

「いちおう町役人に届けておくがよい」

店の主人らしい老人に由布がそういうと、ヘエ、といって身を屈めた老人は、生気の乏しい目で、ここいらは町奉行様の手の及ばないところで、と呟いた。

「管轄外ということか」

由布が尋ねると老人はそっと頷いた。では八州に届けを、といおうとして由布は口を閉ざした。佇んでいる店の三人が、そろって、怨めし気な目でこちらを眺めていたからである。

三

老爺が案内した百姓家は、畑の真ん中にぽつんと一軒建っていた。そこに有馬家の若様をかくまっていたとすれば、鶏をイタチの群れの中に放ったようなものだ。

これでは最早、仙太郎君の命は、闇から闇へと葬られてしまったであろう、と割り切れない思いで戸口に近づくと、開け放たれた戸の内側から、朗らかに笑う男と女の声がする。

ごめん、と由布市之丞が声をかけると、即座に返事があって若い女が顔を出した。百姓の娘なのだろうが、色がヘンに白くて顔がぽっちゃりとしている。

「卒爾ながらお尋ね致す。こちらに有馬家の若君が匿われいると伺って罷り越した者でござる。某どもは筑後柳川藩立花家の家臣。主にお取次ぎ願いたい」

口上を述べながら市之丞は釈然としないものを感じていた。野中の一軒家同然の荒屋に、命を狙われている若君を匿う愚か者がいるはずはなく、そうであればここはやはりただの百姓が住む家で、その主とおぼしき男は暗い土間の向うに坐っていて、たぶん阿

呆面こいてキョトンとしているのであろう。市之丞に仕える下男の出入りする赤提灯にろくな客が来るはずがない。これは担がれたのだ、と冷汗をかいたとき、

「入りなさい」

と奥から武家者らしい、しっかりした声が放たれてきた。市之丞は大石進を振り仰いだ。大石も疑念を抱いているものとみえて、その表情には早くも落胆の色が浮いている。だが市之丞が促すと、仕方なく頷いて、市之丞に続いて背を丸めて土間に入った。

「それで、立花家の御家臣が何用かな」

男の声がリンと響く。屋内の暗さに目が慣れると、男は侍で、莚敷の板の間に胡坐をかいて坐っているのが分った。手を動かしているのは飯を食っているからしい。

「いや、こちらに有馬家の若君、仙太郎君がおられると聞き及んで参ってみたのだが、某どもの間違いであったようだ」

市之丞はそういって男の顔をじっと見つめた。顔の輪郭が薄明りに滲み出てくると、年配の浪人者であることが分ってきた。

「間違いではない。仙太郎は確かにおった」

浪人者はどこか威厳を含んだ声でいった。

「すると、仙太郎君の命を狙って、刺客の賊どもが連夜跋扈していたのは真のことか」

「連夜跋扈などはしておらん。一夜だけのことじゃ」

浪人者の口からポリポリと小気味よい音が出てくる。とれたての夏大根らしい。後で

弥三郎が喉を鳴らした。

「それで、仙太郎君はいかがいたした」

「死んだ」

「なんと！」

市之丞は声をあげた。傍に佇んだ大石が荒い息をついて前に出た。

「おぬしはそれを承知で仙太郎君ばここに匿ったとか」

大石の口調には鋭い怒気が含まれていた。

浪人者はにっと笑ったようだった。

「ほほう。怒ったところをみると、おぬしらは賊の一味ではなさそうだな」

「あたり前やろうが。わしは助太刀にきたとぞ」

「ほう、助太刀。立花家の家中の者が、有馬の若様の命を救おうというのか」

「ご不審なのはもっともなれど、某どもには他藩の騒動に介入する気は毛頭なく、ただひたすら剣の道を極める為、この機会に……」

「あの、冷や水が届きましたども」

戸口から入ってきた小女が、市之丞の力説には無頓着に割って入ってきて、右手に持った壺を差し出した。

「よし、皆様に差し上げるのだ。さあ、お楽にして下され。おぬしらのために特別に冷たい水を用意しておいたのじゃ」

浪人者は急に愛想がよくなって三人に向って手招きをした。小女が湯呑みに水を入れて板の間に置いた。

「某どものために？　何故某どもがここに……」

そういって間近で浪人者の顔を見た市之丞は、あっ、と呻いて棒立ちになった。気付いた大石と弥三郎も啞然としている。三人の目の前で、悠々と飯を食っているのは、先程、「梅飯茶屋」の店の前で、女から頬を叩かれてコソコソと逃げてしまった浪人者だったからだ。

「大層な働きをしたのに、あの店の者は茶の一杯も出さなかったことじゃろう。さぞかし喉が乾いたであろう。さ、飲みなされ」

浪人者はそういって、先に自分の目の前に置かれた湯呑みを取り、ごくごくと音をたてて飲んだ。それを見て、三人はひったくるようにして湯呑みを摑み、中の冷水を一気に飲み干した。

「ふう」

三人は異口同音に溜息をついて互いの顔を見合わせた。

「生き返りました」

市之丞は礼をいって湯呑みを戻した。小女が三人の表情をみてくすくすと笑っている。台所に引っ込まずに、女が男のいる席に一緒に坐っているなど、武家社会では考えられないことであった。

「某どもがここを訪ねると、どうしてお分りになったのですか」

冷や水を馳走になったせいか、市之丞の口調も識らずに丁寧なものになった。

「その御仁じゃよ」

浪人者は大石を見上げて顎を振った。その口許から白い歯がこぼれた。

「六尺の木刀、四尺の長刀、さらに七尺に及ばんとする長身。業平橋を渡ってくるおぬしを見たとき、これはわしに立ち合いを挑みに来たな、と思ったのじゃ。いや、とんだ錯覚であったな」

「ご貴殿は、いったい……」

けげんな顔をした大石に向って、浪人者はひどく明るい声でいった。

「おぬしは大石進であるな」

「いや、これはしたり」

大石は鬢を掻いた。大石がそのような照れた表情を見せるのは上府以来初めてのことだった。

「ご存知でしたか」

「有名じゃからな。大石進の出現は緩んでおった江戸の侍どもを震撼させた。奴等は、大川に、おろしやの軍艦が侵入してきたほどにびっくりしておった」

ハハハ、と浪人者は気持良さ気に笑った。小女も一緒になって笑っているので、市之丞までおかしくなった。

「失礼致した。某は江戸藩邸で近習を勤める由布市之丞と申す者でございます。以後お見知りおきを」

「これはご丁寧なご挨拶、痛み入ります」

「わしは大石と共に柳川から……」

弥三郎がのっそり前に出てきて、そう言い出したとき、浪人者は片手を上げて、おぬしはよい、といきなりいった。

「名乗らんでよい。どうせ覚えきれんからな。他一名でよい」

そういわれて、さすがに弥三郎はむすっとした。

「怒るな。おぬしはさっきから、ここにおるネネの方ばかり見ておったではないか。『よか女やね。抱き心地はどげんなもんやろか』と胸の内で思っておったのじゃろう」

きゃっ、と小女は叫んで奥の方に逃げていった。あんぐりと口を開いて浪人者を眺めていた弥三郎は、ふと我に返ると、ぐったりした表情になった。赤面して俯いたその顔から、どういうわけか鼻水が垂れている。

「失礼ながら、あなた様はどのような素姓の方で？」

思いきって市之丞は尋ねてみた。

「わしか、わしは中村というもので、埋蔵金捜しを本業としておる。ただし、仙太郎には暗闇無二斎と呼ばせてある」

「……」

「仙太郎は生きておる。ただし、死んだことになっているのだ。公儀への届出もそうなっているはずだ。奴は有馬家とは無縁の者になった」

「ですが、内密に聞いたところでは、有馬家では嫡子が生まれたため、邪魔になった側室腹の長子、仙太郎君を亡きものにしようと企んだとか」

「それは内密でも何でもない。わしが噂を流布させたのだ。勝小吉という下戸の癖に喋り好きの男がいてな、そこいらの小料理屋へくり出しては喋っておる。さすれば有馬家も手が出せまいとな。とうとう困り果てた江戸家老が手を打ってきたのじゃよ」

市之丞はちょっと考えてから、慎重に口を開いた。

「しかし、それではかえって向うの思う壺では。死んだと届けてしまえば、そのあとで、生きた者を殺そうが罪にはならぬのでは？」

「はは、それはこちらにとっても同様。仙太郎が生きていればこそわしも向うの者を殺さなかったのだ。それに殺し合いが公けになってしまっては、有馬家は潰されてしまうからな。だが、亡霊同士の戦さであれば、容赦なく藩士を斬る」

その一瞬、市之丞の目には、中村という浪人者の姿が、一筋の雷光のように映った。だが、次に口を開いたときには、蒸し暑い家の中でも、何故かすずし気にしている浪人者の姿に戻っていた。

「なに、案ずることはない。仙太郎はさる処に預けてある。なまなかな者では手が出せまい」

浪人者はそういうと、ひょいと土間に降りて草鞋をつけた。それから編笠を持つと奥に向って、行くぞ、とひと言いって庭に出た。

「さる処といわれますと？」

あとについて出た市之丞は、いきなりのしかかってきた暑さに潰されそうな気がした。

「男谷精一郎の道場だ。狸穴ではなく亀井町の方のな。師匠の団野はもう剣は持てぬので、男谷が門弟に稽古をつけているのだ」

浪人者はあっさりと背を向けた。待ってくれ、と大石は巨体を揺すって浪人者の前に回り込んだ。

「わしは男谷精一郎殿と試合ばしとうて江戸に参ったですのや。じゃが断られてどげんもならん。どげんしても試合がしたかとです。間に入ってもらえんやろか」

丁寧に喋ろうとした大石は、焦ったためよく分らない言葉遣いになってしまったようだった。浪人者は気にする風もなく、じっと大石を見上げた。浪人者も低い方ではないが、大石の前に立つと子供のようだった。

「無駄だ。おぬしは男谷には勝てん」

「勝てん？　そげんことがあるはずなか」

大石は怒鳴り様一間跳びすさって刃渡り五尺二寸の長木刀を構えた。市之丞が声を出す間もなかった。浪人者は左手に編笠を持ち、右手に扇子を持って静かに佇んでいた。その目が、空の奥深さを感じさせていることに、市之丞は不思議な戸惑いを持った。それは、武芸者の目ではなかったからだ。

陽の光が二人の肩に降り注いでいた。大石の顔からは絶えることなく汗が流れ落ちていた。浪人者のすずし気な表情は変らなかった。市之丞には、浪人者の頭上に当たる光が、冬の夜空に浮かぶ月光のようにすら思えた。

ふと、浪人者の足が動いた。と見る間に、すたすたと歩いて大石の間合いの中に入り、扇子をひょいと大石の顎の下に当てると、またすたすたと戻って扇子を元の腰の中に納めた。

市之丞は全身がまっ青になった思いで立ち竦んでいた。

「しばらく留守にする」

戸口に顔を出した百姓の娘に向って、浪人者は何事もなかったかのような平静さでいって背を向けた。

お待ち下さい、といおうとしたが声にならず、市之丞は泥沼から足を抜き出そうとする程の重さとねばりを感じながら、必死で駆け出した。

「あれだけの腕がありながら、どうして先程の町人を助けてやらなかったのですか。何故ですか」

やっと追いついた市之丞は、何丁も泳いだあとのようなだるさを感じていた。浪人者に向って放った言葉も、喘ぎ声に挟まれていた。

「分らんのか」

「分りません」
「もしあのとき、わしが町人を救えば、あののち三倍の痛みを連中から受けたであろう。もし十六両与えておれば、ひと月後には三十二両の借金を博打でこさえておる」
「では、あの町人にはどうすればいいのですか？」
「借金を返すまで、殴られて過ごすしかないであろうな」
「……」
「女も愚かだ。苦労しがいのない男に惚れてしまったのだからな」
「給金の安い板前にですか」
「違う。ぎゃんぶらーにだ」
「……？」
浪人者はひどく感傷的な顔をして立ち去っていった。その姿が麦畑の中に埋もれるようにして消えていくのを見送ってから、市之丞は大石のところに戻った。大石は片膝をつき、流れ出る汗を拭いもせず、はあはあと子犬のような荒い息を吐いていた。
「いったいどぎゃんしたとね」
弥三郎が同じように片膝をついて大石の横顔を見つめた。大石は喉に手をあて、苦しそうに頭を振った。
「分らん。急に息のできんごとなった」
大石はやっとそれだけ口にすると、あとは激しく咳込んだ。弥三郎は麦畑を目を細めて眺めてから、市之丞を途方にくれた顔で見上げて呟いた。
「だいたいあやつは何者や」

男谷道場には、百人以上の剣士が詰めかけているのに、まるで森の中にいるように静まり返っている。
蹲踞（そんきょ）の姿勢から立ち上り、進は五尺二寸の長竹刀の柄を、柔らかく握り締めた。立ち合ってみると、男谷精一郎の印象は、初めて会って挨拶を交したときとは一変していた。会う前まで、進は男谷を熊襲（くまそ）のような筋骨隆々の、六尺を越す上背の大男だと想像していた。ところが会ってみると男谷はおよそ剣客らしからぬ温厚な男で、顔も丸く色白で、背丈も五尺六寸しかなかった。こんな男が江戸随一の剣士なのかと拍子抜けする思いだった。
だが、三尺八寸の竹刀を青眼に構えた男谷は、上から見下ろす進の気迫をふわりと受け留め、ゆるりとくつろぐ程の奥ゆきがあった。そのような剣士と対峙したのは初めてのことだった。こちらの発する力を全て吸い取り、自分の懐に抱え込んでいってしまう恐怖すら覚えたのだ。
――いつであったか、これと似た恐れを抱いたことがある。
それがいつのことであったか、と思いを巡らせたとき、男谷の竹刀が静かに上段に上げられた。進の胸の内側で何か崩れるものがあった。それは浜辺に盛り上げられた砂が、

引いていく波に持ち去られてしまうような、たわいない感触の崩れ方でもあった。だが、それを防ごうとすれば、ゆがんだ気持の一部を高揚させる必要があった。そうすることの危険を感じたとき、進の脳裡で火花が散った。

見ると、男谷の周囲に大きな渦ができ、ゆっくりと回転している。速めてはならない、と進は思った。あれ以上、渦の回転を速めてはならない、と。

「キエーッ！」

渾身の力を込めて左片手突きに打って出た。竹刀の切っ先が男谷の喉を突き貫く刹那、男谷の姿が視界から消えた。代りに、軽い当たりが竹刀を離した右小手にきた。

「小手あり、一本！」

検分役の団野源之進の手が上った。軽い、と進は思った。あれはまるで子供が肩を叩いたようなものではないか。実戦で、あのような軽い当たりで人が斬れるものか。

憤然と振り仰いだ天井に、闇が広がっていた。

ここはどこだ！

熱した闇が落ちてくる感覚に襲われながら、進は夢中で竹刀を突き上げていた。

化け物退治

一

書状から顔を上げた白井亨は、すぐには口を開かず、庭木に目を向けて泡立つ気持を抑えた。

掌程の葉に、まだ夏の強さを感じさせる陽光が射し、その光をなだめるように、吹きはじめた秋の風が葉を揺らしている。

三十七年前にこの部屋から、恐る恐る庭を横目で見たのは、冬枯れの季節だった。その年の正月は、とうとう餅一つ食うことができなかった。

当時、江戸随一といわれた一刀流中西道場の門を、悲愴な覚悟で叩いた亨に対して、三代目中西忠太子啓は、思いがけないことに貧しい身形の亨を居間に通してくれた上に、内弟子として入門することを許してくれたのだった。

ふと、十四歳の頃の自分の面影が彷彿とした。満足に食事を食することのできなかったその身体は、痩せて貧相で目ばかりが剝き出しになり、まるで野鼠のようであった。

つらいときであった、と亨の胸に少年であった頃を懐かしむ思いが生じかけた。だがその思いも、胸に浮いた不安めいた泡が弾けるのと同時に、たわいなく消えた。

「それで……」

亨は視線を庭木から室内に戻して、目の前にいる四代目中西忠兵衛子正に向けた。その頬に、庭先から移ってきた明るい色が躍っている。

「いかようにご返事をなされるおつもりですか」

「もう返事は致した。試合の件は承知したと立花家の使いの者に口上で伝えた」

「日時は？」

「それは追って書面で通達すると申し添えておいた。大石進との立ち合いとなると、しかるべき御人に検分役をお願いせねばならんからな」

子正は扇子を開いて顎の下であおいだ。その指先の動きが普段より忙し気なのに亨は気付いた。

「それでは子正殿ご自身が大石と立ち合われるおつもりなのですか」

「無論だ。大石は私との試合を所望してきたのだ」

「おやめなさい。六尺竹刀など無用の長物。そのようなものを得意気に振り回す田舎侍に勝ったところで、子正殿の自慢にはなりませぬ」

「ではどうせよというのだ？」

「私が立ち合いましょう」

白井殿が？　と呟いた子正の目の底に変化があった。江戸の名だたる道場を総なめにした観のある柳川藩士、大石進からの挑戦状を受け取った瞬間から、子正の心にはある

種の覚悟が生じたはずだった。

門弟数三千人を越す中西派一刀流の総帥であるという誇りが、子正の気持を熱くしていた。と同時に、そこに飛ぶ鳥の影程の恐れが掠めたのではなかったのか。

勝てば江戸随一の剣客としての面目を保つことができる。そればかりかさらに剣名は上るであろう。しかし、もし、一敗地にまみれたら、そのときは……。

「だが白井殿にも白銀に道場がある。よもや不覚はとるまいが、仮りにそうなったときは道場に疵がつくのは同じことだ」

「道場と申しても通ってくるのは郷士、町人の類。幕臣などは一人もおりません。たとえ敗れたとて失うものは何もありません」

そういった亨を子正は眉一つ動かすことなく見つめている。亨が十四歳で入門したとき、当時兵馬と名乗っていた子正は、まだ十歳の子供だった。亨はすでに機迅流の依田新八郎の元で七年間修行を積んでいたが、子啓の甥子という兵馬は習いたてで、樫の木刀で素振りをするたびに腰がふらつき、それが百回を越えると苦痛に顔が歪み、目に涙を浮かべることすらあった。

「もし私が大石進におくれをとったときは、子正殿にあとをお頼み致します。その前に、大石の剣筋をしかと見定めて頂きたい」

「白井殿に勝てぬものが、私に勝てるわけがない」

子正は扇子を閉じて口許から白い歯を覗かせた。四十七歳の子正の、今は頬に肉のつ

いた顔の中に、少年時代の面影が微かに滲み出てきたようだった。

「ともあれ尋常ならざる遣い手のようだな。身の丈六尺の千葉周作よりさらに一回り大きく容貌魁偉、立ち合った者は皆、その迫力のすさまじいことに身を竦ませてしまうというではないか」

「大をよく制するのが剣術というものでござる」

「だが、千葉も負けた。名人の男谷精一郎でさえ喉を突かれたそうだ」

「男谷が負けたとは信じ難い。恐らく、男谷の初手の一本を軽いと見た付き添いの柳川藩士が、そのようにいいふらしたものでしょう。男谷は誰に対しても三本の内一本は譲る男ですから」

「若いのに大した男らしいな」

「はい。しかも男谷が取る二本はいずれも頼りない程軽い。小手などは羽毛で触れた程だと聞いております。男谷の強さを悟りきれない者は、自分の未熟さに気付かず、勝負には勝ったと思い上ることでしょうな」

「それ程になるまではなまなかの修行ではなかろう。精神の修練も格別のものがあるな」

「平山行蔵に師事したそうです」

そういったあとで不意に亨の胸に閃く浪人の顔があった。すでに十五年以上の昔にたった一日、付き合わされる破目に陥ったむさくるしい男の顔である。その顔が太鼓の調

べに乗って胸の中にだしぬけに現われてきたので、思わず亨はあっと唸った。

「今度の試合には他道場の主だった者たちも見物に来ることだろう。実戦の役に立たない長竹刀とはいえ、敗れては物笑いの種になる。白井殿、勝算はあるのか」

子正の目に弱気の色が漂った。かつては猛々しかった若さも影をひそめ、代りに風格が備わってきている。それだけに、物悲しいものが亨の胸中を流れていった。

「お任せ下され」

亨はきっぱりと言いきった。無論、勝算などは何もなかった。

二

「高柳又四郎殿はどこでどうしておられるのでしょう」

亨が中西子正に代って大石進と立ち合いをすることになったと知った羽山幸三郎は、浮かない表情でそう呟いた。その額からは汗がしたたり落ちているが、目は虚ろに暗く見開かれている。

「さあて、先年江戸に立ち戻られたと耳にしたが……またぞろ旅に出られたのであろう」

旗本の屋敷が連なる下谷練塀小路を西に戻りながら亨は答えた。今年二十八歳の羽山が高柳又四郎の剣技がどのようなものか知るはずもないのだが、音無しの剣の異名は、十数年経た今でも、若い侍たちの心をとらえて離さぬものがあるらしい。

「寺田先生が生きておりましたら、こたびの試合について、どのような助言を下されましたことでしょう」

高崎藩江戸定府の羽山は、同じ高崎藩士でありながら、寺田五郎右衛門の手ほどきは受けていない。しかし、七年前の文政八年に八十一歳で死んだ寺田を慕って白井亨の道場に入門してきたのだ。亨は寺田の興した天真伝一刀流の印可を、十七年前に受けていた。

「寺田殿のいわれることはいつでも一つ。剣先に心を込めよ。神気が宿ればそこより火が噴く。すなわちこれ――」

「見性悟道、でござりましたな。しかし、私には、その意味するところがいまひとつ分りかねます」

「あたり前だ。それは流派を興したその人にだけ分ることだ」

「先生にも分りませんか」

「分らぬ」

亨はそういって足を進めた。中西道場から使いの者が来て、先生が至急にお目にかかりたいそうですと伝えてきたのが丁度昼食の時刻だった。明日は道場に出向いて目録以上の者の手直しをするつもりでいたのだが、それを待てずに会いたいというからには余程のことだろうと思って、食事をせずに白銀の道場を出てきたのだ。道々、大石進から

試合の挑戦状を受けたのではないかと羽山と話し合ったものだが、その思いは当たった。

子正は試合の先鋒を亨に譲って気持に少しは余裕が生じたことだろう。その分、亨の肩に重荷がかかり、心はきつくなった。

門弟の羽山が行方知れずの高柳又四郎や故人となった寺田五郎右衛門の名を思わず口にしてしまったのも、風貌の冴えない師が、今や日の本一の剣豪ともてはやされるようになった大石進と対戦することの不安から出ていることなのだ。

——試合は五日程の後に……。

子正が亨の帰り際にいった言葉が耳の奥で反響している。

剣の道は上背がある剛の者ほど、断然有利にできている。十貫目もある鉄の棒を片手で軽々と振り回す筋力は、ある程度の骨格を備えた者でなければ保持することができない。

五尺四寸、十八貫目の身体しかない亨には、どのように鍛えても、どうしても到達することのできない領域があるのだ。

心技一体とは、それに耐えうる体格をもって生まれた者こそが、厳しい鍛錬を経た末にようやく目ざすことのできる神技の域なのではないか。自分のような貧弱な身体の者には、初めから剣士として生きる素質、さらにいえば資格などはないのではないか。

若き日に何度となく嘆いた思いが五十歳を越した亨の胸に、再び津波のように巨大な

恐れとなって押し寄せてきた。その黒く長大な壁の向うにいるのは身の丈六尺四寸の大石進種次であった。

——だが、子正殿であれば充分に相手になれる。五尺八寸の体格、鍛え上げられた腕からくり出される剛剣、敏捷なる足さばき、横溢する気息。どれをとっても一流で大石に圧倒されるものではない。子正殿に代って、大石と立ち合うなどと見得をきった自分は、思い上りもはなはだしい。

それ程の剣客であれば、いずれかの藩から剣術指南役の要請があるはずなのだ。この歳になるまでどこの藩からも口がかからなかったのは、それだけの品格を備えていないということではないのか。

そこまで思い詰めた亨の脳裡に、寺田五郎右衛門の憤りに満ちた容貌が浮かび上ってきた。

中西道場においては先輩格、天真伝一刀流においては師であった寺田もまた、高崎藩では剣術師範としては認められなかった。剣一筋にかける魂があまりに激烈で斟酌のないものであったために、藩主松平右京大夫輝延から疎んじられることになったのである。

その寺田も、骨格は頑丈で広い肩幅は野牛のようであり、厚い胸板は稽古着を盛り上げる程に発達していた。藩主からの処遇はどうであれ、生まれつき剣士としての資質が備わっていたのである。

——何故こうも弱気になってしまったのか。幼き日、そして、若き日にはどのような

苦難に見舞われても、歯を喰いしばって耐えうるだけの闘志に満ち溢れていたではないか。

そう胸の内で呟いた亨の上に、町屋の賑やかな人声や物音が落ちてきた。いつの間にか神田松永町に入っていたのである。

「先生、あの者たちが担いでいるのは、幾田道場の看板ではありませんか」

二歩後を歩いていた羽山がすべるように傍に来てそう囁いた。十間程先にかたまって歩いていく五、六人の武家の中の一人は、羽山がいうように町道場の看板らしきものを肩に担ぎ、これみよがしに往きかう町人に見せつけている。

「あの者たちは武芸者なのでしょうか。それにしても看板を持ち去るとは、ひどいことをする」

「……」

羽山の口にしたことは耳に入っていたが、物思いにふけっていた亨には、まだはっきりと事態が呑み込めていなかった。それ程切実な問題だとは感じとれずにいたのである。

「あ、やっぱりそうだ」

幾田道場の前で立ち止った羽山は、そういって暗い道場の中を覗き込んだ。桶屋と質屋の土蔵に挟まれた間口二間半、奥行四間というささやかな道場である。その道場の看板があるべきところが黄ばんだ木目を見せている。

「どうした？　何があったのだ？」

稽古着を着たまま裸足で出てきた門弟の一人を呼びとめて、羽山はそう尋ねた。

「道場破りに遭って……まったくひでえ奴等だ」

髷の形から町人だとすぐに分ったが、その身体つきには多少の鍛錬のあとが窺えた。

「幾田殿はどうされた？」

「奴に喉を突かれて、血だらけになってしまいましたよ。医者を呼びにいったが、助かるかどうか……」

町人の目は充血し、紫色になった唇はぶるぶると震えている。

「奴？　奴とは誰じゃ？」

「大石だよ。大石進。あの化け物野郎め、ただじゃおかねえ」

町人の言葉を耳にして、亨は目を見張った。歩き去っていく藩士たちの中に、ひときわ大きな侍がいるのが初めて亨の目に入った。先程はあまりに大きすぎて目にとまらなかったものらしい。

羽山は町人の顔を食い入るように見つめて声を荒げた。

「大石だと!?　幾田殿はあの大石と立ち合ったというのか！」

「へえ。大石神影流の技を弟子達に見せられるとは願ってもないことだと嬉しそうにおっしゃって……」

「馬鹿な！」

「試合のあと取り巻きの連中がこれはもらっていくといって看板を持っていっちまいや

がって。あいつらあ、まるで破落戸(ごろつき)でえ」

町人はたまらず目を手拭いで拭った。

「先生」

羽山は白井を見下ろして下唇を噛んだ。亨は頷き、そして、自らに言いきかせるようにゆっくりと呟いた。

「道場の看板はいかんな」

亨は幾田道場の前を離れて足速に大石たちの後を追いだした。小走りについてきた羽山は、ぶつかりそうになった定斎(じょうさい)売りを怒鳴りつけると、亨を追い抜くような勢いで前に進み出した。

「あんないい御仁を打ちすえるなんて許せん。あんな老人を……」

羽山の悔し気な呟きが亨の耳にも入ってくる。亨は幾田という道場主と口をきいたことはないが、羽山は何度か茶菓のもてなしを受けたらしい。それによると、幾田は元鳥取藩の江戸定府の藩士で、養子を迎えると隠居して、町道場を開いたという。道場といっても町人や子供相手のもので、流派も円明青蛙流(せいあ)というあまり聞いたことのない流派だった。子供たちからは青蛙(あおがえる)の先生と親しまれていたようで、幾田はどうやらそんなうけも狙って青蛙流などとしたらしい。

道場が開かれてまだ二、三年にしかならないようだが、向うでは亨の顔を知っているらしく、通りがかりに顔を合わせると、これはこれは、といって親し気に笑いかけてくることがままあった。

朝の早い内に道場を覗くと、浴衣の尻をはしょって雑巾がけをしている者があって、よく見るとそれが当の道場主であったりしたこともある。

その肩肘張らない、ひょうひょうとした生き方を見て、亨は心楽しくなる思いを抱いたものだった。剣の道を極めるのも一生なら、ああしてそよ風のように生きるのも一生なのだな、と感慨深く思ったこともある。寺田五郎右衛門とは正反対の幾田の生き方に、それまで思いもよらなかった新鮮な驚きを持ったのも事実なのだ。

――あの老人を殺してはならない。あの道場を潰してはならない。

痩せた頬骨の上にある老人特有の白っぽくなった目を思い出しながら、亨はそう思い詰めていた。

三

数えると武士の数は七人になった。全て柳川藩士のようで、筑後訛りと江戸弁とが混然としている。羽山が声をかけたとき、彼等は店の中が奥まで見渡せる料理屋の店先でとぐろを巻き、中に入るかどうか思案している最中だった。そこは箱鮨も食わせるし、安い焼魚も出すところのようだった。客の中には明るい内だというのに、もう酒を飲んでいる者もいる。

「余計な口出しはするな」
羽山の申し出を聞いた若い侍は、肩に担いだ幾田道場の看板を、店先のゆるい土の上に突き立てるように置いた。
「試合に勝った者が看板を取る。これはあたり前のことじゃ」
「だが幾田殿は重体です。その上道場の看板まで持っていかれては、あの方の浮かぶ瀬がないではないか」
「浮かばなければ沈んでおればよかろう」
そのとき、まあ待て、と押し留める者があって、目のすずし気な侍が一団の中から現われ出てきた。
「それがしは立花家の家臣、由布市之丞と申す者です。ご貴殿は幾田道場の方ですかな」
その言葉に訛りはない。江戸の藩邸で生まれた者か、と思いながら羽山は名を名乗った。
「高崎松平家に仕える羽山幸三郎です。幾田殿とは多少の面識もあり、あまりに大人げのないお振る舞いに出すぎたことと知りながら、お願いに参った次第でござる」
「おい、そんな奴は打っちゃって、早く座敷に上ろうぜ。祝い酒じゃ」
料理を運ぶ女達をキョロキョロと眺めていた一人が、上り口に身体を向けながらいった。羽山はその男に睨みを与えてから、こちらは、といって半身を開いた。

「私の師で白井亨と申される」
亨は黙然と若い侍達を見上げた。どの者も顔つきは獰猛(どうもう)だが、安酒を飲みすぎているせいで、筋肉が緩みきっている。それでいて連中は小柄でなで肩の五十男を舐め切った目で眺めている。亨は看板を取り戻して、一刻も早くこの無礼な連中の前から立ち去ろうと思っていた。
「白井殿といえば一刀流中西道場の師範役ではありませんか」
由布が改まった顔で亨を見つめ直し、頭の上からつま先まで舐めるように眺めた。それを聞いた他の者たちの顔つきが変った。だがその表情に恐れはない。どこか小馬鹿にした様子で亨を高い所から見下ろしている。
「今朝中西忠兵衛子正殿に、書面で大石進との立ち合いを願い出たのです。中西殿は試合を受けて下さるということでした」
由布は色黒の顔を心持ち上気させて亨にいった。他の者と異なり、由布は剣筋にもよいものをもっているようだった。
「私が大石というお人と立ち合うことになり申した」
「ご、ご貴殿が？」
由布がたじろいだように上体を起こすと、取り囲んでいた他の藩士の間から失笑が起こった。誰かが大石の名を呼んだ。土埃が立ち、道の反対側にいた巨体の武士が輪の中に入ってきた。手に玩具のようなものを持っている。

「なんばしよったとや」
「こればい買いよったったい」
そういうと手にした手車を下に落し、ひょいと紐を指先で引いて再び手元に戻してきた。男の子供へのみやげらしい。亭から見ると、確かに見上げるような大男だったが、容貌はそれ程悪いものではない。ただ全体にごつい造りで、顔形も鼻も頭も角ばっている。
「この御仁は白井亭殿といわれる。中西道場の師範で大石殿と試合をされる方だそうです」
「お？」
由布にいわれて手車から顔をあげた大石進は、一瞬目標を失ったようで、あらぬ方に視線を向けた。亭の上にその大きな目が落ちてきたときには、顔全体が穴になったような拍子抜けした驚きを現わした。
「ぬしが？」
大石は首を伸ばし、背を屈めて亭を見下ろした。そのとき、大石の広い胸に圧し潰されてしまう程の圧迫感を亭は抱いていた。
「まるで鍾馗様と獺のごたるね」
誰かがいうと、柳川藩の者たちは一どきに笑い出した。無礼な、と羽山が前に一歩踏み出していったが、笑いは容易に収まらない。大石などは肩を揺らし、亭を頭からひと

呑みせんばかりの大口を開いて笑っている。道往く商人や通行人は、何事と侍たちを横目で眺めている。料理屋にいる客は、箸を持つ手を止めていかつい男たちが笑い転げる様を茫然と眺めている。
「中西道場は試合せん内から負けたごたるね。さあ、一刀流打ち破ったとの前祝いばい」
先に立って土間に入っていった者がそういうと、あとの者も最早亭には何の関心も示さずにどやどやと料理屋に入っていった。
「大石殿、待たれよ」
亭は最後に暖簾をくぐって入っていく大石の背中に向って呼びとめた。頬骨の張った大石の顔が振り向いた。
「幾田道場の看板は返して頂く」
ん？　と顎を振った大石は、荒い鼻息を吹いてニッと笑った。
「おれとの試合ば勝つんなら、これば返してやるげなばい」
こやつ、と羽山が呻いたときには、大石は背中を向けていた。続いて羽山と亭が料理屋の土間に入り込むと、座敷の方から若い男の怒鳴り声が響いてきた。上り框に腰かけて足の汚れを落していた柳川藩の者どもも、何事かと上体を捻って奥に目を向けている。
「やい待てこのサンピン。逃げようったってそうはいかねえぞ。ひとの女のケツを触っておいて何の挨拶もなく立ち去るたあどういう了見なんでえ。侍だからって勝手な真似はさせねえぜ」

奥から表口の方に威勢のよい声が近づいて来て、浪人者と遊び人らしい町人の姿が現われてきた。その後からついてきた女も小声でしきりに何事か浪人者に向って毒づいている。

「そうだわさ。まったく、いけずうずうしいったりゃありゃしない」

女は店の仲居でもなく、といって素人という風でもなかった。何か芸事を教えている師匠という様子でもあったが、どうかするとその柳のような腰つきに、南本所の三ツ目橋あたりの堤でシナを作って男を誘う夜鷹に似た妖しさが感じられる。

「おい、待ちやがれっていうんだよ」

遊び人風の男は、着流しの浪人者の袖に手をかけ、ぐいと引いた。その拍子に倒れたのは、遊び人の方だった。畳の目に踵をとられてすべってしまったようにも見えたが、それにしても妙な具合だった。

「ああこれ、わしの履き物を頼む」

浪人者はまったく意に介さない様子で、下足番にそう声をかけている。追いかけてきた二人へは一顧だにしない。

「おいやろう、とぼけるつもりか。こいつは芸者じゃねえんだぞ。おれの女だ。横から勝手に女のシリを触っておいて知らん顔するとはどういうことでえ。それが侍のすることなのか」

右の肩を剝き出しにして声を張り上げた。上り框に腰を下ろした柳川藩の藩士たちに、

ことの次第を伝えるために大声を出しているのは明らかだった。だが、どういうわけか先程まで大笑いをしていた藩士たちは、奇妙な程に静まり返って浪人者と町人のいさかいを眺めている。浪人者が上り框に坐って下足番が差し出した雪駄を履こうとすると、その脇にいた者は、さらに間隔を開けようとすらした。

「ねえお武家様方。こんな無体なことがあるもんですけえ？　このお侍は、あっしが女房と酒を飲んでいる横から割り込んできて、しきりに女房のシリを撫で回したんですぜ」

遊び人はたまりかねたように居並ぶ藩士たちにそういって救いを求めた。脅したり、なだめすかしたりすることには、なかなかに長けた男のようだった。

「それはいかんな。たとえ浪人とはいえ侍にあるまじき行為じゃ」

そういったのは幾田道場の看板を持った侍だった。助勢を得た遊び人は、そうでしょ？　と如才のない顔で周囲を見回した。

「あっしはカネを出せと因縁をつけているんじゃねえ。せめてひと言女房に詫びをいってくれといってるんでえ」

「そうさ。失礼しちゃうよまったく」

女は剣呑な目でジロリと浪人者を睨んだ。

「気にすることはない」

雪駄を履いた浪人者はそういって立ち上ると、男と女の方に向き直った。

「わしは醜女の女陰に触っても、感じない性質なのじゃ」

なにげない口調でそういうと、くるりと身体を回して表口に向って歩き出した。土間に案山子のように佇む大石進ら数名の武家者がいるのに、まったく目に入らない様子であった。

「ま、待ちやがれこのやろう」

浪人者の口から吐かれた言葉を聞いて、一瞬間の抜けた顔をしていた遊び人だったが、浪人者が動き出すと、蛙が跳び出すように畳からはね上った。だが勢いあまって上り框から土間に頭から落ちた。あんた、と叫んで女が着物の裾を乱して遊び人に駆け寄った。だがこの女もどういう訳か足許が定まらず、上体ごと土間にとび出してしまった。その踵が遊び人の首筋を打ち、女の下で男は悲鳴を上げた。その状況を、いびつ顔の柳川藩士が茫然と眺めている。

「中村殿ではござりませんか。過日おめにかかりました立花家に仕える由布市之丞です」

浪人者は土間で起こっていることには少しの関心も寄せずに、すずし気な顔をして表に出た。そのあとを追った由布がそう声をかけたとき、やはり、と亨は胸の内で呻いた。十五年以上のときを隔ててはいるが、浪人者のどこか人を喰った飄逸な雰囲気は変らない。亨の脳裡に丹波の鶏冠山で会ったときのことが、まるで光の乱舞に見舞われたように鮮明に蘇ってきた。

「男谷精一郎へは中村殿から試合の斡旋がございました由にお聞き致しました。おかげで大石は男谷殿と立ち合うことができ、首尾よく勝ちを収めることができました。お礼を申し上げます」

由布がそういって丁寧に頭を下げると、浪人者はその傍で枯れた大木のようになって突っ立っている大石を見上げ、にたりと笑った。

「何？　勝った？　はは、勝ったか。おぬしらの目は節穴じゃ。敗れ去ったことはそこにいる大石殿が一番よく存じておる」

「……」

浪人者は白い歯を大石に向けた。大石は無言のまま肩を怒らせ、目を仁王のように剝き出して浪人者を睨みつけている。その全身から怒りの炎が燃え立っているようでもあった。

「何を戯れ言いっていやがる。無礼を申すとたとえ爺さんといえども容赦せんぞ」

そう叫んでとび出してきたのは幾田道場の看板を脇にかかえた男であった。そのあとから、おいおい、といって将棋の駒を逆さにしたような顔の男がついてきて、同僚を制止しようとした。

「虎の威を借る若狐とはおぬしのことのようだな。いや、ボケ狐か」

「な、なんだと！」

「そうそう、この看板はこちらに返すんじゃったな」

浪人者はいきり立っている若侍の腋からひょいと道場の看板を抜きとって、亨の背後に佇んでいた羽山幸三郎の鼻先に突き出した。羽山は反射的に受け取ったが、事の成り行きがつかめず気が動転している。

「何をしよるか！」

若侍は顔をくしゃくしゃにして刀の柄に手をかけた。その手首に、浪人者の手にした扇子が軽く触れた。

「おい、松田、なんばしよるとや。どげんしたとや！」

刀の柄に手をかけた若侍を、別の藩士が後から支えてしきりに声をかけている。どうしたことか若侍は目を剝き出しにして膝から崩れ落ちていく。まるで背骨が溶かされてしまったようなたわいなさに、他の藩士は驚きの声を上げながら駆け寄っていく。

「どうじゃ大石殿。おぬしが敗れたのが分り申したかの？」

浪人者は奇妙に明るい目をして大石の顔を見上げた。

「むむ」

大石は歯を嚙みしめて身構えた。その顔は土気色になっている。大石、ここは町中だぞ、と由布が声を放った。その顔も蒼白になっている。

「どうにも分らん奴じゃな」

そう呟いた浪人者は不意に亨の前に顔を持ってきて、にこりと笑った。その身体から、いい知れぬ心地よい香りが放たれてきた思いがした。

「白井亨殿、今度の試合では、ひとつこの盆暗侍どもにも分るように、派手な音をたてて一本とってやって下され」

その言葉に、藩士達の間に殺気が走った。だが、刀の柄に手をかけようとする者はいない。顔ばかりがいきりたっている。

「一心斎殿……」

お懐かしゅう、という後の言葉が続かなかった。奥の座敷にいたはずの一心斎が、どうして店先でのいきさつを知っているのか、という疑問も湧くことはなかった。

この人の前では、何が起こっても不思議ではない。風のような人というより、風を起こす人なのだ。

「そこいらまで一緒に参ろう」

一心斎のその言葉に、亨は胸の内で深く頷いた。

四

二人は半間程離れて並んでいる平たい石に、それぞれ腰を下ろして話をした。そこは神田川にかかる和泉橋に近い小さな寺の境内で、石畳に反射する陽の光はまだ夏の名残りを含んで強いが、木の陰にいると思いがけない涼風が首筋を撫でていき、亨を懐かしい昔へと引き込んだ。

十五年以上も前、山奥で初めて出くわした一心斎と名乗る奇妙な浪人者に、何故か少年時代からその当時に及ぶまでの苦難の歴史を語ってしまったように、今また亨は、自分が直面している苦悩を正直に語っていた。

かつては思いもよらなかった老いの影が、明らかに忍び寄ってきていること。俊敏な動きは緩慢な動きとなり、かつては横溢していた気力がときとして気の抜けたようになり、剣先に集めた神気は、湯気のように頼りないものとなって消えていくのを目の当たりにすることがあること。そのような自分を弟子には見せまいとする努力の虚しさ。衰えの勢いにあらがいきれず、このまま枯木となって流されてしまうことへの不安。

そして、若さ、気息、野心、剛剣、全てにおいて自分より秀でている巨体の天才剣士と竹刀を交えることの恐しさ。亨はそれらのことを全て一心斎に包み隠さず喋った。語る話の内容は苦渋に満ち満ちたものであったが、話している亨自身の胸の内には、不思議な程すずしい風が吹いていた。

五十一歳になった自分が、年齢を忘れ、まるで若者に戻ったような気持で苦しさを、恥を、悩みを語れることの快さが宿っていた。この十数年間、もしかしたら自分は、たった一度だけ見えたことのあるこの浪人に、もう一度会える日があることを祈って過ごしてきたのではないか、という思いにすらかられた。

うむ、と唸って一心斎は小指の先程の小石を拾い、親指に乗せて後に弾きとばした。それを数回くり返してから、夢よ、と呟いた。

「全てはうたかたの夢になるのじゃ。剣に己れを託して厳しく生きてきた者程、老いさらばえた果てに見る夢は虚しく悲しい。死ねば全てが幻となってしまうものを、生きている内はそれと気付かず、よしんば気付いても道をはずれることの恐しさに打ち震えて、さらに剣の道を求めて高みに上ろうとするのじゃ。剣客は剣客でしかなく、誰も救うことはできぬ。そして、最後には己れにすら見捨てられて死んでいくのじゃ。哀れじゃのう」

一心斎は小石を弾く指を止めずに、顔を青い空に向けてうたうように呟いた。

「しかし、今となっては、剣を捨てることは叶いませぬ」

亨は呻いた。一心斎のように生きられればどんなにか楽しいことだろうと思っていた。なにせ、埋蔵金を捜すかたわら、野生の熊に食料を調達させる風流人なのだ。

「一心斎どののいわれることは身にしみて分り申す。ですが、剣客として生計を得ている私は、数日後には大石と対戦せねばならぬのです。負けると分っている試合をやらねばならぬのです」

「難儀なことよのう。だが、白井殿程の腕なら大石を打ち破るのは簡単だ」

「なんと仰せられます？」

「貴殿には命を救われたことがあったな。そのお礼に、ひとつ、策を授けよう」

「お願い申す」

亨はなりふり構わず頭を下げて一心斎を見つめた。日焼けした一心斎の頬に縦皺が走

り、白い歯が覗いた。

「そうキラキラとした目を向けられても困る。わしの策とは剣術のことではなく、いわゆる化け物退治の秘策なのじゃからな」

「化け物退治？」

「さよう。白井殿が申された通り、大石の自慢は長竹刀を振り回せるだけの腕力であり、六尺四寸の背丈だけだ。立ち合うものは、まずその巨漢ぶりに圧倒される。自然に身を竦め肩にばかり力が入る。大石の方でも充分それを承知しておるからますます図に乗って大きく構える。この世で自分程偉大なものはいないという気になる。それを剣技の故だと勘違いをするようにもなる。ところで――」

一心斎は小石を拾って、親指で器用に後方に弾きとばしながら再び空に顔を向けて目を細めた。

「わしは若い頃南洋の海を小舟で漂っていたことがある。昼寝をしている内にとも綱がはずれて大海に流されてしまったのだ」

「ま、まさか、そのようなことが」

「あったのじゃ。そこで魚を獲るため小柄をくわえてたびたび海に潜った。ところが南洋には鮫が多い。奴等は人を見つけると、餌だと思って追っかけてくるから始末が悪い。鋸のような歯の生えた大口を開かれると、とってもこわい」

「ほう。一心斎殿でもこわいのですか」

「こわい。奴等は海の化け物じゃからな。人の心が通ぜん。あるとき、わしは十尺もある大鮫に追いかけられた。必死で逃げたが向うは速い。あっという間に追いつめられて今まさに食われそうになったその時、下帯が解けた」

「ははあ」

「褌だ」

「分っております」

「ところでわしの褌の長さは十四尺ある」

「？」

「ここが大事なところだ。その十四尺ある下帯が海中でするすると解けて波に流され、長く大きな黒い影となった。いわば海面を泳ぐ吹き流しと思えばよい」

「はい……」

「すると大鮫は急に背骨を丸め、向きを変えるとコソコソと逃げていきおった」

「はあ」

「実体のない影に怯えて逃げたのじゃよ。鮫は自分より身体の長いものには、恐れて尾っぽを巻いて逃げるものだということを、そのときわしは発見したのだ。はは。ま、そういうことだ。おお、おぬしの弟子が戻ってきたな。では、さらばだ」

そういって立ち上ると、尻を二度パンパンとはたいて一心斎はあっさりと歩き去った。亨が挨拶をする間もない程であった。

「先生、何やら随分楽しそうでしたね」
幾田道場に看板を届けてきた羽山は、それまで見せたことのないような上機嫌な顔をしていた。
「楽しそうに見えたか」
「ええ。まるで童心にかえられたようなご様子でした。いったい、あのご浪人とはどのようなお知り合いなのですか」
「そうだな。ま、奇妙な縁という他ないが」
亨は羽山を一心斎の坐っていた石に坐らせ、すでに消えてしまった方角に目を向けながら語りだした。そうしたい思いがあった。
それは長年にわたる剣術修行を終えて江戸に戻っていた亨が、六十有余歳の寺田五郎右衛門に試合で敗れてから、五年の歳月が経った頃であった。三十五歳を間近に控えながら、さらに先の壁を突き破ることのできない亨は、鬱々とした気持を抱えて、青梅街道を西に下った。水行に励み身を清らかにする必要があった。
だが大菩薩峠にさしかかる手前を北に向ったために道に迷い、丸二日間山中をさ迷った。やっとせせらぎを見つけ、やあ嬉しと顔をつけたところ、水の中に別の顔があって目を剝いて亨を睨み上げていた。
ぎょっとして顔を上げると、水の中から男が現われて、びっくりしたぞという。それは亨にしても同じことで、一体何をしていたのだと訊くと、身体に入った毒を清水を体

中に通すことによって洗い流そうとしていたのだという。なんでも鶏の冠に似た草を薬草に使えぬかと試してみたところ急激に心の臓が痛み出し、死ぬ思いをしたのだという。
鶏冠山に生えていた似た形の草花だからこれは確かだと思ったがだめだった、と男はとぼけたことをいっていたがその顔は蒼白だった。近くに小屋があり、そこには毒消しの薬もあるので背負っていってくれぬか、といわれて亨は男を背負ったところ、半日も歩かされた。
小屋は河原から離れたところに建てられていて、男はよれよれになって薬を飲みながら、ここで武田家の埋めた軍用金を捜しているのだと冗談とも真面目ともつかない顔で語った。だが、自家製の毒消し薬は不思議によく効いて、男は半刻もすると元気になった。亨の方は空腹で気が遠くなりかけていた。
男は申し訳ないといって小屋の外に出ていって草笛を吹いた。なんだろうと思っていると、四半刻程して小屋の外に物の気配が立った。男は鍋の用意をしていたので代って戸を開くと、熊が魚を咥えて待っていた。亨は仰天した。
「本物の熊ですか？」
「そうじゃ。川で鯉を取ってその浪人のところへ届けてきたのだ。なんでも子熊の頃に、猟師の仕掛けた猪用の罠に掛っていたのを助けてから仲良くなったといっておった」
熊が帰ったあとで男は鯉雑炊を作ってくれた。それはこの世の物とは思えない程うまかった。

飯を食ったあと、小屋の土間に寝転がって問われるままに身の上話をしていた。

備前岡山藩池田家の江戸藩邸の長屋で生まれたが、江戸定府の父は間もなく死に、亨は母と共に、母の姉が嫁いでいる御家人の所に身を寄せることになった。剣の道で生きるしかないと思い詰め、八歳で機迅流依田新八郎の門を叩き七年間修行したが、貧しさ故に師から黙殺され、失望して次に中西道場に向い、入門を許された。一日千回の素振りに励み、寺田五郎右衛門に目をかけられ、組太刀を教えてもらえるようになった。十九のとき師の子啓が亡くなり、三年間諸国を回った。江戸に戻り一年いて今度は岡山に行き道場を開いた。しかし、三十半ばになった今、新たな疑問が生じ、悟りを得るため鳥獣の肉を絶ち、身心清浄にして山に籠る決心をした。

「するとその浪人は急に笑いだした。滝に打たれたりする前に、飯と魚と鳥肉をふんだんに食えといったのだ。邪道こそが私を救う唯一の方法だというのだ。おかげで……」

「先生、あれは？」

話の途中で羽山はいきなり立ち上った。そして後の土の面を指さした。気分を害された亨は不機嫌な面持ちでそちらに目を向けた。そこに小石が並んでいた。先程、一心斎殿が小石を弾いておったな、と思い起こしながら小石に目を凝らした亨は、覚えず「お」と声を出した。

「カオノ上ニカオアリ」

並んだ小石が作った文字を読み上げた羽山は、無邪気なまでに笑い転げた。幸せな男だと胸を震わせながら亨は思っていた。

面をつけて道場に入ってきた白井亨を見た大石進は、顔面を紅潮させて、愚弄する気かと怒鳴った。付き添ってきた八名の柳川藩士も声高に亨を非難した。亨は面の上に白紙の提灯を吊していた。

「なに、呪いでござるよ」

騒ぎが鎮まるのを待って、亨は平然といった。胸を張って提灯を見上げていた大石は、どうした拍子か不意にぶるんと大きく身震いをして五尺二寸の長竹刀を床に落した。被っている面のさらに上側に提灯をかかげた亨は、優に八尺を越えていた。

検分役の団野源之進から用意の声がかかると、亨はいったん面をはずして提灯を取り、再び面を被り直して蹲踞の姿勢をとった。

はじめの合図で亨は下段青眼に三尺八寸の竹刀を構えた。大石は切っ先を亨の喉元に合わせて中段に構えた。その面の奥の目は、先程まで亨の面の上にあった幻の提灯を見据えている。

亨はゆっくり右に回り込み、体が入れ代ったところで上段に構えた。大石の肩が小山のように盛り上った。何かに驚いた様子でもあった。

「キエーッ！」

大石の口からすさまじい気合いが発せられた。その気合いが響いている中を、亨はす

るすると間合いの中に入っていき、強烈な面打ちを放った。すさまじい音が鳴り響き、その瞬間大石の巨体は凝結したように固まった。佇んだまま気絶したのは明らかだった。

促されて二本目に立ち合った大石は、次に小手打ちから喉に突きを決められ、その巨体を道場の羽目板にまで飛ばされ、床に尻もちをついた。道場の中は氷に閉ざされた一室のように静まり返った。

「見事だ。感服致した。すごいよ白井さん」

礼をして戻ってくると、子正が憂いをたたえた目でそういった。かろうじて起き上った大石が、取り巻きに抱えられるようにして道場から立ち去ると、急に華やいだざわめきが天井から落ちてきた。

「先生、愉快ですね。実に愉快です」

羽山幸三郎が目に涙をたたえてそういった。貫禄をみせてゆっくりと頷いた亨は、しかし、心中穏やかではなかった。

鶏冠山をあとにしたあの日、亨の懐中には、礼だといって一心斎と名乗る浪人者から与えられた砂金が一袋、しっかり納められていたのだった。それが後年、白銀に道場を開く資金になったのだが、もし江戸市中で羽山が一心斎に再び見(まみ)えるようなことがあれば、困ったことになりはしないかと危惧していたからである。

身代り獄門

一

神田鍛冶町の西の裏通り、通称下駄新道にある下駄の有田屋は、その界隈では比較的繁盛している店の一つであった。主人の甚兵衛は先年妻を亡くし、ふた月前の暑い盛りに妾であったヨシを後妻に迎えた、五十六歳の赤ら顔の男である。

どの商家でも、店の主は銭には細かいものだが、甚兵衛は格別で、無給で働く丁稚に与える盆暮の着物でさえ、手代が着古した古着をあてがう程の吝嗇家である。ヨシを後添えに迎えたのも、これで月々の手当の三両を払わずに済むと考えたからである。

固定客のついていた腕のいい職人が、この五年の内に四人も他の店に移ったり、独立していってしまったのは、甚兵衛が給金を抑えすぎたためで、あの者たちが皆店に留まっていれば、有田屋の身代は今より余程脹れ上がっていただろうともっぱらの噂である。

だが当の甚兵衛にはそんなことは分らない。職人の手間賃を値切ることが商人の才覚なのだと信じている。苦労して店を構えた割には下駄の良し悪しを判定できず、それどころか職人の腕など皆同じだと大雑把に思い込んでいる。

それでも店が流行っているのは、桐などの高級下駄を加工して売るだけでなく、鼻緒の挿げ換えや修理、歯入れ等を小まめに営んでいるからであった。

その日、店仕舞いを手代の弥助に命じてから、甚兵衛は番頭の重吉に銭箱を持たせて奥の茶ノ間に入った。そこで一日の売り上げを数え、帳簿づけをした上で仏壇下の金箱にしまうのを習慣としていた。土蔵の中の金蔵に小判を移すのは、五十両、百両と銭がまとまってからである。土蔵の鍵は甚兵衛だけが持っていた。外に奉公に出している一人息子の長太郎にさえ鍵のありかは教えていない。

秋の陽は落ちるのが早い。すっかり暗くなった茶ノ間に行灯を灯して重吉と額を接して十文、二十文、と呟いていると、旦那様、と障子の外から弥助が声をかけてきた。

「なんだい」

甚兵衛は固太りした頬を上げて障子に向けた。重吉もしなびた茄子のような顔を上げてけげんな様子を示した。銭勘定をしている最中に他の者が邪魔をすると、主人の機嫌が悪くなるのを番頭はよく承知していた。

「お武家様がお二人、旦那様にお目にかかりたいと参っておられますが」

「なに、お武家様？　どのようなお武家様だ」

「お一人は羽織を召したご立派な身なりのお武家様ですが、もうひと方は御浪人様のようで……」

「御浪人？　やだねえ、難癖をつけて無心しようというんじゃないだろうね。いこま屋さんじゃ下駄の鼻緒が切れて足をくじいたと食い詰め浪人に店先で怒鳴られて、泣く泣

く一両のお金を出して引き取ってもらったというからね。それで何の用だというんだい」

「それが、旦那様に直接会って申し上げると……」

閉め切った障子の向うで蹲っている弥助の声の調子が固くなった。甚兵衛は手にしていた二朱銀を銭箱に戻して溜息をついた。

「まったくしょうがないねえ、こっちは今忙しいんだ。適当なこと言い繕って追い返してしまいなさい」

「……」

「どうしたんだい？」

「それが、その筋のお方とかで……」

固い口調に怯えが含まれている。

「その筋？」

「それはいったいどの筋のことだ？」

頬に細かい縦皺を刻んだ重吉が、貧相な身体つきに似つかわしくない野太い声を出して訊いた。だが、弥助は黙っている。

「うちには定廻りの前田様が見廻りに来て下さっているんだよ。そんな怪しげな浪人なんぞ店先から追い出して、さっさと大戸を閉めてしまいなさい。まったくお前は愚図なんだから」

「それが、旦那様……」

「なんだね。まだ店先にいるんだろ。だったら早くしなさい。弱味を見せたらおしまいだよ」

「……ここにいらっしゃるので」

「えっ？　どこだって？」

甚兵衛は上体を伸ばして障子の桟に指を置き、うんと唸って障子を開いた。漆黒の庭から涼風が廊下を横切って茶ノ間に吹き込んできた。月が替って二日目の暗い空には、可憐に星がまたたいている。

「いったいなにを……」

伸びきった身体を片手で支えて甚兵衛は痩せた弥助の顔を見た。かろうじて届く行灯の灯りが弥助の頬に浮いた影を躍らせている。その上に目を転じた甚兵衛は思わず、ぎゃっと叫んだ。弥助の髷に顎を接するようにして、異様にすさんだ浪人者の顔が出てきたからである。

「な、な、な」

両腕を畳について、四ツン這いになった身体を必死に起こそうとした甚兵衛は、断りもなく茶ノ間に入ってきた浪人者に顎を蹴られ、たわいなく畳に突っ伏した。

「銀四郎、遠慮するな、入れ。お、銭勘定をしておったな。どれどれ、どれくらいの売り上げがあったのかな」

浪人者は銭箱の前に坐ると、無造作に手をその中に突っ込んだ。

「何をなさいます！」

そういって浪人者の手を押さえようとした重吉の身体は、瞬間的にくの字になって後に跳ね、水屋に頭を打って大きな音を響かせた。よく見ると、重吉は口から泡を吹いて気絶している。浪人者が重吉に何かをしたようには見えなかった。甚兵衛はただ、おろおろと上体を起こした。

「十二両二分か。まずは連中の申しておった通りだな。すると、仏壇の下にしまってある金箱の分と合わせると、五十両程になるかな」

「あ、あ、あなた様はいったい……」

長火鉢を前にどっかと胡坐（あぐら）をかいて坐った浪人者に向って、甚兵衛はやっとの思いで口を開いた。廊下に坐っている弥助は何の頼りにもならず、今はただ打ち捨てられた石仏のようになってじっとしている。

「わしは二心斎、そこに突っ立っておるのは銀四郎という直参でな、ここに参る途中で偶然出会ったので連れてきたのだ。銀四郎は今は小納戸役だが、いずれ町奉行になれる者だとわしは睨んでおる。すると銀が金になって金四郎というわけじゃ」

「おたわむれを」

そういって銀四郎と呼ばれた武士が重吉の傍に寄っていき、その背中にカツを入れる様を甚兵衛は茫然と眺めていた。

「そ、それで御用の趣は、いかようなことで」

畳に上体を這いつくばらせるようにして甚兵衛は訊いたが、その目は銭箱をしっかりととらえている。

「押し込みだ」

「げえっ」

いったん肝を潰しかけた甚兵衛は、これではいかんと自らに言いきかせて、わっと銭箱に跳びついた。

「あわてるな。わしらではない。その筋の者だと申したはずだぞ。わしらが押し込みを働くように見えるか」

見える、と甚兵衛は思ったが、銭箱をしっかりと抱えて浪人者を睨みつけるだけにした。

「かようにむさい姿でいるのは偵察のためだ。町奉行所の同心のように小銀杏（いちょう）の髷に黒紋付、朱房紐付きの十手を腰の後に差しておっては、盗賊どもに逃げろ隠れろと知らしているようなものであるからな」

「はい……」

「よいか有田屋甚兵衛、さように泥亀のように銭箱の上に這いつくばっておるときではない。耳の穴をかっぽじってよっく聞くのだ」

「は……」

「今宵丑三つ時、有田屋に盗賊が押し込む。その数六人」
「ひえっ」
「驚くのはまだ早い。他に二本差しが一人。それと引き込み役が一人おる。こやつはもうこの家に侵入して潜んでおるわい」
「え、ま、まさか!?　そのようなことが」
「連中は金蔵に眠っている千三百両のお宝をごっそり奪うつもりなのだ。おぬしが抱え込んでいる十二両の端金（はしたがね）など目もくれておらん」
いわれて甚兵衛は銭箱の上から上体を起こし、襟元を合わせて浪人者に向き直った。
「そ、それが真（まこと）でありますなら、すぐに御番所へお届けを」
「奉行所はもう閉じっておる」
「しかし、大門は閉じても小門が……」
「それにたとえ知らせたところで、町方の者どもがあたりに潜んでおっては盗賊に勘付かれてしまう。そうでなくとも、十中八九は取り逃がすことになろう。町方の者では無宿者を捕えることはできぬからな。だが、わしなら相手が侍であろうと、盗っ人の仲間であれば問答無用に叩っ斬ることができる」
「そ、それではあなた様は盗賊改めの……」
甚兵衛は屈めた姿勢から浪人者を盗み見た。総髪に流した髪を元結で結び、汚れた小袖の襟首は垢にまみれ、妙な臭いさえ漂ってくる。かつては盗賊どもに恐れられた火付

盗賊改めの与力、同心たちだったが、時代が文政、天保と移るにつれて、次第に精彩を欠いてきて、近頃ではすっかり鳴りを潜めている。
町奉行所は町人の監視、火盗改めの加役は無宿人を取締るのが役目であるのに、火盗改めの同心の中には町人を捕えて金銭を強要する者や、料理屋で無銭飲食をする者が現われ、町の者の反感を買うことが多くなったせいである。
有田屋に顔を出す定廻りの前田欽三郎は、もし火盗改めの手先が何かいってきたら、すぐそやつを連れて奉行所に訴え出るようにと注意を促してくるほどだった。
（弥助……弥助や、こっちを見るのだ）
甚兵衛は胸の内でそう念じて弥助に向って目くばせをした。だが弥助は廊下に固まって坐ったまま瞬きさえできずにいる。
「有田屋、このことはここにいる者以外には内密にしておくのだ。下手に騒がれては台無しになるからな」
「はい……」
「通いの職人はすぐに帰し、住み込みの者には何も気取（けど）られぬよう、いつも通り過ごさせるのだ。ただし、寝るときは皆、二階に上げておけ。おぬしら夫婦の寝所にはわしが休む」
「はい……しかしどうしてうちが盗賊どもに狙われているとお分りになったので」
「盗っ人一味の隠れ家に潜んで、全てを聞いておったからじゃ。おい、有田屋、おぬし

はさっきから何をしておるのじゃ。しきりにういういくなどしおって、手代に気でもあるのか」

「め、滅相もない……？……」

手代といわれて弥助は夢から醒めたように顔を上げたが、その目には恐怖の色が浮き出ていて、とても甚兵衛の心持ちを察する余裕などはない。

背後から薄ら笑いが聞こえたので、なんだと思って後を振り返ると、息を吹き返した重吉が、欠けた前歯を見せて笑っている。その狸のお化けのような凄味のある笑顔を目のあたりにして、甚兵衛は背筋が寒くなった。

「一心、いや、二心斎殿、酔狂はここいらでよろしいでござろう。有田屋も怯えておる。こやつが二心斎殿にどのような迷惑をかけたのか存ぜぬが、もう許してやってもよいのではないのかな」

重吉を介抱していた銀四郎という直参は、そういって前に出てきて浪人者と甚兵衛を見較べた。

「酔狂？　す、すると、お武家様が今申されたことは作り咄なので？」

「あたり前だ。押し込みなど、そうそうあるものではない」

銀四郎は甚兵衛の顔に目を据えてきっぱりといった。ほーっ、と安堵の息を洩らしたのは弥助である。その弥助が緩んだ顔でふらふらと立ち上ると、待て、待て、と浪人者は弥助に向って手を振り煽いだ。すると弥助は操り糸にでも引かれたように、軽い浮く

ような足取りで茶ノ間に入ってきた。

「銀四郎とは今しがた会ったばかりで何も知らぬのじゃ。だが、わしの申したことは本当のことだ」

浪人者はあわてた様子もなく、妙にくつろいだ感じになってそういった。その目の中に明るい灯がともっているのが見える。その瞳の中の灯を見ている内に身体が奇妙に揺れてくるのを甚兵衛は感じた。

「だがご貴殿は先程、盗賊の引き込み役の者がすでにこの家に潜んでおるなどとホラを吹いて、この店の主を脅かしていたではないか」

銀四郎は少しばかり頬を強張らせて浪人者に詰め寄った。その時になって、この二人は仲間ではなかったのだ、と甚兵衛は悟った。

「ホラではない。夕方鼻緒を買いにきた若造が厠を借りたいといって裏に回り、そのまま物置に入り、隠れているはずじゃ。どうじゃ手代、そのような若造に覚えはないか」

「そ、そういえば厠を拝借したいと職人さんがひとり……」

弥助はいったんおろした腰を再び浮かせて呟いた。銀四郎が弥助の肩を叩くと、彼はたわいなく前のめりになった。

「よし、その物置に案内せい。盗賊が潜んでおるなどとは只事ではない。真実かどうか調べてやる」

銀四郎は弥助の腕を引き上げた。

「まて、そうあわてることはない。打ち合わせの刻限になればノソノソと這い出してくるのじゃ」

浪人者は取り出した扇子の柄を銀四郎に向けていった。銀四郎は羽織を脱ぐと、憤然とした目で浪人者を見下ろした。

「そのような悠長なことはいってはおれません。さあ手代、先に灯りを持ってくるのだ」

銀四郎は手代を追い立てて廊下に出ていった。甚兵衛も続こうとすると、浪人者が、おい、主、と声を放った。その威厳のある声の含みに、思わず甚兵衛はへえと答えて腰を屈めた。

「何故おぬしが盗っ人の恨みを買ったのか存じておるか？」

「いえ、一向に……」

「おぬしが吝いせいだ。押し込んでくる盗賊の中にはかつてこの店で働いていた下駄職人がいる。おぬしが前借を断ったがために、こやつは重い病いにかかっていた女房を医者に診せることができず、とうとう見殺しにしてしまった」

ひえっ、と甚兵衛は悲鳴をあげた。

「与之助……与之助のことでございますか」

「その与之助は店をやめ、女房亡きあとは身を持ち崩し、無宿人どもの仲間になっていたのじゃ。やつの怨みは深いぞ」

「し、しかし、それは逆怨みというもの。わたしどもでは月々ちゃんと給金を……」

「それに、この話にはおぬしの女房も一枚噛んでいる。いかに年増とはいえ、月三両の手当はちと安すぎたのではないかな」

「ま、まさか、おヨシが！」

甚兵衛は喘ぐようにして両手を空中に上げた。ヨシは下女を連れて芝居見物に出掛けているのだ。この家に入って初めての遊興だというので甚兵衛は仕方なく許してやったのだった。だが、暗くなっても戻らないのは何故だろう。

「与之助とそちの女房は、とうの昔にわりない仲になっておったのじゃ」

「そんなあ！」

ひえっ、ひえっ、ひえっ、と重吉がまた奇妙な笑い声をたてた。余程頭の打ちどころが悪かったらしい。しかし、甚兵衛はそんなことにかまっているひまはなかった。といって何をしてよいか分らず、結果的に空中を掻きむしることになった。

「おったぞおったぞ、中村殿のいう通りだ、でっかい鼠が物置に隠れておりましたぞ」

庭先で銀四郎が大声をあげた。見ると、銀四郎に後手をとられた若い男は、すっかり観念して涎を垂らしている。すでに四、五発は殴られたものらしく、弥助の手にした行灯に照らし出された顔のところどころが痣になっている。

そやつは、と浪人者が口を開いた。舌が水っぽくはねたように聞こえたのでもう一度浪人を見返すと、その手に盃が握られていて銚子から酒を静かに注いでいる。いつの間

に捜し出したのか、それは甚兵衛の寝酒用の秘蔵酒なのだ。

「そやつは皆が寝静まるのを待って物置から這い出し、裏口に潜んで仲間の盗賊が合図するのを待ち、やがて引き込んで主人夫婦の寝間を襲い、主人を縛り上げて金蔵に案内させ、その後でバッサリやるつもりだったのだろう。翌日には、女房が白州でヨヨと泣き崩れるという寸法じゃ。勿論、舌を出してな」

「な、なにをいわれますか、なにを」

甚兵衛は急に恐怖にかられて身震いをした。女房の不貞より、白刃の前にさらされた己れの姿を想像したからである。

「だが、そのような鼠を一匹捕えたところでどうなるものでもないぞ。あと五、六匹叩っ殺さなくては有田屋の身代は守れるものではない。どうじゃ有田屋、わしを神様だと思って、冥加金三百両、供えてみんか」

「なにをたわけたことをおっしゃいます。あなた様はその筋のお方。頭の黒い鼠を捕えるのがお仕事ではありませぬか」

甚兵衛は浪人者が茶ノ間に居坐って以来、初めて自分を取り戻して強気になれた。三百両をこの浪人にくれてやる位なら、殺された方がましだと思ったからである。

浪人者はそうかといって笑っている。そのときそれまで隅の方で両足を投げ出していた重吉がしゃっくりと共に起き上り「おお、鼠だ、鼠小僧が現われたあ、ひえっ、ひえっ」と喚きながらよたよたと茶ノ間を横切りだし、そのまま廊下から暗い庭に転げ落ちた。あわてて駆け寄った弥助が、番頭さん、といって抱え起こしてから、ふと真顔になって銀四郎を振り仰いだ。

「まさか、本当に鼠小僧が襲ってくるのでは？」

「何を寝惚けたことをいっておるのだ。鼠は三月も前に捕まっておる。松平宮内少輔殿の屋敷に忍び込んだところを近習衆に取り押さえられたのだ。そうか、あの盗賊が鼠小僧だと判明したのは余程後のことであったな。なににせよ、榊原主計頭（かずえのかみ）殿の詮議も大方は済み、半月後には獄門になる身だ」

銀四郎はそういって捕えた引き込みを片手で持ち上げ、ぶるぶると振った。それから庭石に叩きつけると、若い男は半日干しのイカのようにぺったんこになって伸びてしまった。

甚兵衛が目を丸くしていると、銀四郎は、さて、これからどうしますか、と浪人者に訊いた。その答えを聞いて、甚兵衛は思わず、口をあんぐりと開けた。

「やつらが来るまでにはまだふた刻ある。仕出し屋からうまい料理を取り寄せ、ゆっくり食そうではないか。そうじゃ、若い酌婦を呼ぶのもおつなものだな」

浪人者は銭箱に手を突っ込み、じゃらじゃらと音をたてていた。

二

六人の盗賊が火付盗賊改めの同心に縄を打たれ、小者に引き立てられていくと、裏庭には浪人の死体が一つ残された。海野祐助と名乗った与力は、残っていた小者に死体の片付けを命じると、さて、と呟いて金四郎の顔を覗き込んだ。月は無く、先程まできらめいていた星も風に押されてきた厚い雲に隠されてしまい、裏庭をかろうじて明るくしているのは、小者の手に握られた火盗の提灯一つきりであった。

「われら加役のところに知らせが参って何よりでしたな。町奉行の手の者が出張ってきては、いくら浪人とはいえ、斬り殺したのではいささか面倒なことになったことでしょう」

与力の応対が丁寧なのは、労せずして六人もの盗賊を捕え、町奉行の鼻をあかすことができたからである。当然金四郎ともう一人の浪人者に対する感謝の念は深い。

「盗賊の用心棒などに成り下っては、いかに浪人とはいえ、おしまいですな」

海野は死体を戸板に乗せている小者たちの動きを見定めてから、もう一度金四郎に目を向けた。

「いずれことの仔細は伺うとして、押し入ってきた賊の数は六人、浪人が一名、それに先に捕えておった引き込みが一人、そうでしたな」

「うん、まあ、そうであろうと思うのだ。なにせ酔い潰れておったし、突然のことであったのでな」

金四郎は顎をぽりぽりと掻いて首を傾げた。浪人を斬ったのは金四郎だが、どのようにして斬ったのか覚えがないのだ。

「すると、賊の一人は逃げたことになる。貴殿のお連れのご浪人、一心斎と申されるか、その御仁が追っていったということですかな」

「さあ、なにせ暗く、一瞬のことであったのでな」

今思えば時刻は四ツ半（午後十一時）頃であったろう。奥の座敷で一心斎にすすめられるままにしこたま酒を飲んだ金四郎は、いつの間にか畳に寝転んでいた。

その金四郎の顔に水を浴びせる者があって跳び起きた。一心斎であったのかもしれない。だがその一心斎は非常にのんびりした様子で欠伸をしながら両腕を伸ばしていたのだ。

どうかしたか、と尋ねると、一心斎は目脂をほじくり出しながら、丁度よい頃合いだ、といって立ち上り、一尺程開かれていた障子の間をすっと抜けて廊下に立ったのだった。

――そうだ。あのとき障子はすでに開いていた。一体誰が開けたのだ……。

続いて金四郎が廊下に出ると、雨戸が一枚開いていた。そこから庭先をすかして見ると、何やら人の呻き声がして、それと共に小判の弾ける音が響いた。

――まてよ。すると賊どもはあの時点ですでに金蔵から千両箱を盗み出していたとい

うことか？

金四郎は鯉口を切って庭にとび降りた。そのとき、金四郎の頭上より高いところから黒い塊が降ってきて足元にどたりと落ちたのだ。そこから白光が閃いたと見えたとき、金四郎は刀を抜いていた。手ごたえはなかったが、あとになって調べると、確かに自分の刀身に血脂が付着していたのだった。

――しかし、引き込みの男は私が縛りつけて物置に放り込んでおいたはずだ。盗賊が邸内に忍び込んだということは、裏口の戸を内側から開けた者がいるはずなのだ。それは一体誰だ？

二階から店の者が降りてきて騒ぎになったのは、それから間もなくのことだった。行灯を集めて庭先を照らしてみると、黒装束の盗っ人どもが、それぞれ身体をエビのように曲げてうんうんと唸っていた。蔵の戸の前では、店の主の甚兵衛が腰を抜かして起き上れずに、足をばたばたとさせていた。余程こわい目に遭ったのか口をきくことができず、何かいおうとすると口笛のような音が出てきた。不貞を働いていたという女房のヨシが、おまえさん、といって駆け寄ると、甚兵衛は感極まったように涙を流しはじめた。

――確かに小判の音を聞いたはずなのに、千両箱は金蔵の中にちゃんと置かれていた。もう一つ奇妙なことは、一心斎殿の姿は座敷から出たのを最後に消えてしまったことと、今度の盗みを計画した張本人の元下駄造りの職人の与之助の姿が見えないことだった。もしかしたら、初めから与之助などという男は、盗賊の一味にはいなかったのではないか、と金四郎は思ってみた。だが、そう思ってみたところで、今夜の騒ぎの辻褄が合うわけではない。

――まったくあの人は得体が知れない。

金四郎は一心斎と初めて会った七年前の文政八年四月のときのことを思い出していた。一心斎は鉄砲の弾をかいくぐって野盗の潜む百姓家に突進していったのだ。その戦さの最中、金四郎は初めて人を斬ったのだった。

「あー、あ、あー」

廊下をよろけるように走ってくる者があった。金四郎と海野祐助は何事かとそちらに向き直った。手代の手にした百匁蠟燭に照らし出されたのは、髪を振り乱して幽鬼のような表情になった有田屋甚兵衛の顔だった。

「さ、三百二十六両、三百二十六両が、あー、あー」

甚兵衛は闇を掻きむしるように両手を荒々しく突き上げると、やがてしおれたようにがっくりと膝を落した。海野祐助は蛤のように開いた目を剝いて金四郎を見つめた。

「三百二十六両？　いったいどういうことでござるか？」

「さあ」

金四郎はとぼけた。暗いのが幸いだった。

三

「気がついたか」
目を開くとすぐ前に痩せた浪人者の顔が出てきた。与之助は茫然とその日焼けしたどこか人の好さそうな男の顔を眺めていた。
「あの、ここは？」
随分妙な夢を見ていたと思いながら尋ねた。
「さる旗本の屋敷だ。ここは元隠居部屋になっていた離れでな、隠居が逝って以来わしが借りておる。町方の者では踏み込むことが出来ぬ故、安心して養生するがよい」
男はにこっと笑うと、与之助の顔の上に湯呑みを差し出してきた。
「酒だ。ぬる燗にしてある。胸の病いにはよくはない、が酒を辛抱するのもよいものではない」
男にすすめられるまま、与之助は首を起こして酒を一口飲んだ。身体中の血が温かくなったようだった。それに、障子に当たる光が明るいのでひどくくつろいだ気分になった。思い起こせばこのところ、暗い闇の底を血反吐を吐きながら這いずり回ってばかりいたのだった。
「あの、あなた様は？」

背中を向けて何やら薬を調合してくれている様子の男に向って、与之助は訊いてみた。まだ夢の中にいるような気がしたので、男の返答次第によってはやはり夢なのだと思い込むつもりでいた。
「中村という素浪人だ」
男の答えは平凡だった。
「昨夜のことは覚えておらぬのか」
そういわれて与之助は頭を枕の上で軽く転がした。脳裡に黒い煙のように漂っているものがあり、その先にうごめく人影を凝視しようと努めた。夢の中に現われた場面が、黒煙が薄まるにつれて徐々に思い出されてきた。
般若の辰吉を頭領とする盗賊一味と有田屋に侵入したのが四ツ半。打ち合わせ通り引き込みの亀太が裏口の戸を開き、一味の者は主人夫婦の眠る寝室に押し入った。主人の甚兵衛が起きていたのは意外だったが、辰吉が刀を突きつけるとおとなしく縛られるままになった。
一味は甚兵衛を引っ立てて金蔵に行き、お目当ての千両箱にたどりついた。辰吉が手下に命じて千両箱を持ち出そうとしていたところまでは覚えている。だが、それから後があいまいなのだ。金蔵から出て裏口に向ったはずの者たちが皆、まるで手鞠のように宙を舞い、ある者は土蔵の壁に頭を打ちつけ、別の者は屋根から転げ落ちてしたたかに背骨を庭石に打ちつけていたように見えたのだ。記憶が定かではないのは、金蔵から出

たとたん、与之助は不意に身体が軽くなり、熱い温泉にでも浸っているような、そんな心地になったまま眠り込んでしまったようなのだ。夢の中では、用心棒の先生が刀を抜いて役人に斬りかかっていったが、夢にしては先生の「おのれ！」と叫んだ声が強烈で、いまだに耳の底にこびりついているのが薄気味悪い。

「あの、すると、頭たちは……」

「全員火盗改めに捕縛された。いずれ打ち首になるだろう」

「えっ……」

与之助は蒲団をはねとばして跳び起きた。背中を向けていた男は、顔だけこちらに回してにっこりと笑った。なぜかほっとするような笑みだった。

「驚くことはない。般若の辰吉などと自ら名乗っていい気になりおって、あいつは生まれついての悪者だ。神も間違ってそんな人間を製造することもある。上州一帯を荒し回っていたころは、商家に押し入って一家皆殺しにし、別の百姓家を襲ったときはそこの女房と娘を犯した上に火を放ったというではないか」

「へえ」

「おぬしがあやつらの仲間に入ったのは、これが最初で最後のつもりであったからであろう。死んだ女房との間にできた娘は今年十四歳、駿府の商家に奉公しているそうじゃな」

「ど、どうしてそれを」

「おぬしらの話を聞いたからじゃ。馬喰町の薄汚い宿屋に泊って夜な夜な密談を重ねておったであろう」

男はそういったが与之助には解せなかった。宿屋を占領していたのは辰吉の他用心棒の先生を入れて八人のみで、両国の見世物小屋に出ていた連中が一晩だけ泊っていったが、それも行灯部屋で脛毛を抱いて窮屈そうに眠っていたはずなのだ。

「おぬしは労咳にかかっておる。それで死ぬ前にせめて五十両なりのまとまった金を手に入れて、人買いに売った娘に残してやりたいと思ったのであろう。そうでなければ、盗っ人どもの話に乗るわけがないからな」

「へえ」

与之助は思わず洟を啜り上げた。仕事が失敗してその望みが絶えてしまったことを思い出したからだった。

「何を泣いておる」

「へえ。結局あっしは娘に何も残してやれねえんだと……昨夜のしくじりさえなけりゃ、なにも思い残すことなく死ねやしたのに……旦那に助けていただいたのはありがてえんですが、この身体じゃあ……」

与之助は首を傾げて男を見返した。

「ですが旦那はどうやってあっしを助けて下すったんで？　昨晩は有田屋に偶然居合わせたんですかい？」

「助けたわけではない。いずれおぬしには死んでもらうのだからな」
男は与之助に向き直って白い歯を見せて笑った。その朗らかな表情を眺めて与之助は茫然とした。
「昨夜手引きをしたのはおぬしらの仲間の亀なんとやらではない。わしの手の者だ。そいつはその足で火盗改めの組屋敷にご注進にと走ったのだ」
「え……」
「おぬしらの計画を知って、わしが仕組んだのだ。分ったか」
「分っ……し、しかし、なんでまたそんなことを」
「辰吉一味が押し込みに成功し、おぬしも五十両を懐に入れ、有田屋への意趣返しもできたと満足して冥土に旅立たれては、わしとしては少しも面白くないからの」
「面白くない……だが、だからといって何の縁もゆかりもねえあっしまで……」
ガシャ、と美しい音色が響いた。男が懐から取り出した布袋から音が出たのだ。与之助は思わず唾を飲み込んだ。男は無造作に布袋をひっくり返した。果して、黄金色に輝いた小判が畳に溢れ返った。
「百両ある。これを娘の許へ早飛脚で送ってやるとよい」
「ほ、ほんとうでございますか！」
「無論だ。これでわしが何故昨夜のような計略を練ったか分ったであろう」
「は、はい……い、いえ、一向に」

与之助は震える手で小判を摑み、いまだに正体のよく分らない男の顔を上気した思いで見つめた。
「そうじゃ、大事なことをいうのを忘れておった。これをいわぬのではおぬしが理解できぬのも無理もない」
男は湯呑みに残っていた酒を飲み干すと、障子に当たる陽光に目を細めた。与之助は小判の重みを掌に感じ、これは夢ではないのかと自らに問うていた。
「これは全て、おぬしが鼠小僧次郎吉に瓜二つであったことから始まったことなのだ」
「あっしが、鼠小僧に？」
小判を頬に押しあてていた与之助は、何やら胸騒ぎめいたものを感じて目を上げた。男は、うん、と頷いた。
「二十日程前であったか、両国広小路の雑踏の中でわしはおぬしを見つけた。そのときわしは顔も身体もふくよかな雪だるまのような女を連れておったのだが、覚えておらんか」
「いえ、一向に」
「まあよい。そこでわしは一計を案じておぬしをつけた。宿屋を突きとめるとそこの女中を手なずけておぬしの身元を探らせた。それで辰吉なる盗賊のことも知ったのだ」
「女中？　女中は辰吉の女ですぜ」
「だからどうじゃというのだ」

「……恐れ入りました」
「この計画を成功させるためにはおぬしの同意が絶対に必要であった。すなわち、いま伝馬町の牢につながれている、鼠小僧の身代りとして獄門台に上るという同意だ」
「へっ？」
「難渋しておったら、幸いおぬしは労咳で余命いくばくもないことが分った。これで全てが解決した」
「……」
「どうじゃ、鼠小僧として生命を全うする気分は。誰にでも味わえることではないぞ」
与之助は男の目の奥を見つめ返した。そこは黒く輝いていて、一点の曇りもないように見えた。それが不気味だった。
「で、ですが旦那、そんなにうまくいくもんでしょうか」
「いく、と思う。ここ十日程、牢屋同心とか張番とか申す下男どもと心やすうしておる。それで色々なことが分ってきた。まず鼠小僧が入れられているのはお座敷と呼ばれている揚り座敷で、特別に一人で入っているらしい。同心の話だと処刑は中秋の名月を観賞した後、ということであるから、まだ半月余りはある。その間に、さらに細かく策を練ることにする」
「旦那は次郎吉さんの親戚で？」
「赤の他人じゃ。だが、やつに死なれてはいささか不都合なことが生じてきた。聞きたいか」
「へえ」
「聞けば身代りの覚悟を決めなくてはならんぞ。よし、聞かせてやろう。実はな――」
「ちょ、ちょっと待った。待っておくんなさい」
与之助は口の中がカラカラに乾いていた。それどころか、胸には大粒の汗が滝のように流れている。ひとつ深く呼吸をして、与之助は喘ぐようにいった。
「あっしはその、元々しがない下駄職人でして、鼠小僧さんのような大泥棒の身代りになんか、とてもじゃないが、なれません。技が違い過ぎます」
「盗みの祭典をやるわけではないのだ。おぬしはただ身代りで死ねばよいだけだ」
「ですが……」
そういって首を竦めると、畳に積まれていた小判の山が、あっという間に布袋の中に戻された。男は厳しい目付で与之助を睨んでいる。
「されば仕方がない。おぬしを火盗改めの許に突き出し、辰吉らと共に即刻首を刎ねさせるとしよう。この百両もなかったことになる」
「そんなあ」
与之助は布袋に向って手を伸ばした。引っ込めるかと思った布袋を、男は与之助の手の届くところに留めて待っていた。固い小判が掌にぶつかり、ぞくぞくする悪寒が背中を這い上ってきた。

「本当に娘のところにこの金を届けてくれやすね」
「今日にでも送ってやる」
「分りやした。お指図に従わせて頂きやす」
観念して与之助は頭を下げた。なぜだか胸の中が空洞になり、きれいな風が入り込んできたような感じがした。
「よし、では教えてやろう。わしは鼠小僧を手先に使って、家斉が尻の下に眠る大判小判を奪い取ってやろうと思っておるのだ」
「ご、ご金蔵を破るので！」
とほうもないことを考える人だと与之助はあきれて男を眺めた。男は唇をすぼめ、ばかに嬉しそうに目を細めている。ときに、と男は表情を変えずに口を開いた。
「おぬしは次郎吉よりいささか老けておるようだな。トシはいくつだ」
「四十と二歳になります」
「次郎吉は三十七であったな。まあよい、労咳がすすめばさらに痩せて色も白くなることだろう。駄目なら化粧をほどこした上で、市中引回しの馬に乗ればよい」
与之助はあっけにとられて男を眺めた。男はそそくさと腕を回して与之助の前に茶っ葉のようなものを置いた。
「これを飲め。晴れの舞台の日まで生きていてもらわなくてはいかんからな。胸の患いに効く薬じゃ、さ、早く飲め」

先程の言葉とはうって変った調子で男は薬をすすめてきた。与之助は悲しいのか嬉しいのか、それとも腹を立てているのか、自分の気持がさっぱり分らなくなった。だが、薬を飲むと、不思議に心が落ちついた。
蒲団に寝ると、そうじゃ、と男は若やいだ声をあげて見下ろしてきた。
「有田屋にはな、おぬしが女房のヨシと深い仲になっておるとホラをかましておいたぞ。甚兵衛め、おぬしが死んだ後も地獄巡りをすることになるぞ。あっはは」
男は上機嫌に笑っている。それは実は本当のことだとは、与之助はどうしてもいえなかった。

辻売りの鰻屋から買ってきた蒲焼を食っていると、一心斎が風呂敷に包んだ荷物を下げて部屋に入ってきた。
「娘御から便りがあったそうだのう」
目尻を下げ、口許をほころばせて与之助の前に腰を下ろした。与之助は箸を置き、一心斎に向って深々と頭を下げた。
「ありがとうございます。あっしのことなどてんから忘れていたんでしょうが、いきなり百両なんて大金を届けられて、すっかり肝を潰しちまったようで。このご恩は仏になっても忘れません」
「悪い奴に騙されてあの金を使われないように、わしもときどき心得ておいてやろう」

「お願げえ致しやす。いえね、どうせ店の番頭さんにでも頼んで書いてもらったんでしょうが、あっしの病いのことをいたく心配していやしてね。十月に店の奥様が芝居見物に江戸へ来るときにお供の一人に加えられたとかで、そのときまできっと生きていてほしいなんて書いてきやしてね……」

与之助は胸が熱くなった。便りを目にしたときもそうだったが、改めて娘の思いを口にすると、悔しさが胸の底から溢れてきた。

「旦那、あっしは本当にもういけねえんでしょうか」

「いかんな。これまで生きてこれたのが不思議な位だと玄庵殿もいっておられたではないか」

一心斎は風呂敷包みを解いた。中から鬢盥が現われてきた。与之助の無念さには頓着なく、一心斎はにこやかな表情で櫛の歯を指先でなぞっている。

「次郎吉の処刑は明後日の十九日と決った。処刑場は小塚っ原でも鈴ヶ森でもなく、浅草になるそうじゃ。これは鼠小僧の人気の高さを物語っておる。与之助、一世一代の晴れ姿だぞ。わしはおぬしに更紗の襦袢を着せ、黒麻の帷子を重ねて引き回しに臨ませたいと思うておる。菊五郎もびっくりの衣装だぞ」

「明後日……」

「そうじゃ。そこで明日、おぬしは回り職の髪結いとなって牢屋に行くことになる。これはすでに次郎吉の方から願いが出て、石出帯刀の方からも赦しがおりている。処刑の前日となると、大抵のことが許されるのじゃ。そして、牢の中に入ったら、髪を結うふりをしつつたくみに次郎吉と入れ替るのじゃ。このことは次郎吉も承知しておる。深川飯を届物として入れた折、当番の張番に女からの付け文だというて預けておいたのだ。なんの心配もいらん。張番やテンマの者など字は読めん」

与之助は浮かない気分で顔を上げた。

「見回りのお役人にバレたりしたらどうするんで」

「町与力は四ツ（午前十時）に一度、同心は五ツ（午前八時）と七ツ（午後四時）に見回る。おぬしが訪ねるのはその間の八ツ半だ。次郎吉は入浴を済ませ、さっぱりしているはずだ。もし徒目付が見回りにやってきたらそしらぬふりで月代でも剃っておれ」

「へえ」

「なにをしょんぼりとしておる。威勢よく胸を張るのだ。天下に名高い鼠小僧次郎吉として馬上から最後の江戸見物をせえ。それからにこやかに笑い、大いに気取って三尺高い台の上に立つのじゃ」

一心斎の掌が与之助の胸を打った。すると腰の後、尾骶骨の上のあたりにまで重い痺れが響いてきた。

「旦那、なんだか血が沸騰してきたようですぜ」

腰のあたりに生じた熱は湯煙のようにもやっと立ち上ってきて、与之助の身体を熱くした。五つのときに手放した娘の横顔が脳裡をよぎった。だがその少し悲しい思い出も、

鼠小僧としての一世一代の晴れ姿の前に、たわいなくかすんでいった。

先頭に幟と捨札を掲げた小者が二人立ち、馬に乗った与力が傲然と道端を埋めた見物人を見下ろして通り過ぎると、同心の後に続いた捕手達が、槍、棒を手にし、ある者は剣を腰にさして十人程がやってきた。顎の張った馬に乗った鼠小僧は、得物を手にした雇（テンマ）たちに引かれるようにして姿を現わした。

黒麻の帷子を着て、三尺帯をいきに前結びにした姿は歌舞伎役者のようでもあった。青白く澄んだ頬に薄く紅を差し、鼠小僧は若い娘たちのうっとりするような視線を浴びてすずし気に進んでいき、やがて海賊橋を渡っていった。

その引き回しの行列を荒物屋の二階から目だけ覗かせて見送った男は、深い溜息をついて傍の浪人者に目を向けた。

——やろう、すっかりその気になっておりやしたですね。

——うむ。

——旦那、一つだけ質問があるんですがね。

——なんだ。

——あの元下駄職人は、本当に明日をも知れない命だったんですかい？　どうもあっしにはそうは思えねえんだが、ねえ旦那、本当に労咳とかいう不治の病いだったんで？

——本人はそう信じておった。

——本人が……。

——そんなことより、おまえは今夜、長崎に発つのだ。向うに行って、そのエラの張った顎と頬骨をけずってもらうのだ。

——えっ、エラを……けずる？　しかし……。

——痛いなどと泣き言をいうでないぞ。首が胴から離れることを思えば何事にも耐えられるはずだ。さて、ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。

——旦那、さて、はねえでしょう。それにこういうときは、打ち首を免れた日蓮さんにあやかって、ナンムミョウホウレンゲキョウと唱えるのが仁義っていうもんですぜ。

——さよか。しかし、あの男の場合は成仏してほしいのでな。ま、ナムアミダブツといこう。

——ねえ旦那、ほんとにあいつは成仏寸前だったんで？　ほんとに……。

あれが武田の埋蔵金

一

長崎を九月末に発った次郎吉は、百三十里あまりの海上を廻米船に便乗して大坂まで行き、その後は陸路を通って江戸に向った。肩に荷を背負ってはいたが、中村一心斎から、ついでに仕入れてこい、と命じられて手に入れた薬が主だったので重いものではなく、途中、京見物をしたり、桑名では蛤（はまぐり）をたらふく食べたりの、のんびりとした旅であった。

四月（よつき）余りの伝馬町での牢生活で溜った垢も、往きに立ち寄った箱根塔ノ沢の湯ですっかり洗い流し、長崎では江戸の遊女にはない、ねばっこくてくねる肢体を持った女のもてなしを受け、勇気百倍となって顔面の外科手術を受けた。

医師は赤毛の雲を突くような大男で、言葉はよく分らなかったが、表情が温和であったので安心して全てを任せることができた。顔面に細工を施すことを勧めたのは中村一心斎で、一心斎の手蔓によって牢抜けをして娑婆に出てきたときは用意万端、全ての段取りが出来上っていて、あとは次郎吉自身が長崎に向って旅立つばかりになっていた。

命を救われたのは、一心斎にとっては次郎吉が何かと便利な存在であるからで、今後

は薬売りの治三郎と名を変え、顔まで変えて生きることになるのであるが、その手助けが、たとえ再び武家屋敷に忍び込むことであっても次郎吉としては文句をいえない。命あっての物種だからである。

長崎に着いた次郎吉はまず、長崎の水に慣れた後で唐人医者を訪ね、一心斎からの書状を手渡した。頷いた唐人医者は、タイチョープ、シンパイナイ、といってにっと笑い、出島に連れていって赤毛の医者に引き合わせたのだ。

それから手術となり気絶する程の痛みを顔面に受けることになったのだが、悲鳴をあげるのをかろうじて抑えることができたのは、これしきのことで泣き叫んでは、身代りとなって獄門台に上った与之助という、元下駄職人に申し訳が立たないという思いが突き上げてきたからであった。

駄馬に乗せられ、市中を引き廻された鼠小僧次郎吉は、天保三年（一八三二）八月十九日に浅草で処刑されたことになっている。実際に槍で脇腹を突かれた上に首をチョン斬られてさらし首になり、今は回向院に埋葬されてすっかり成仏しているのであるから、あれが偽者の次郎吉であったと疑う者などいやしないだろうが、どっこい本物は生きている。

与之助も百両という大金を、昔人買いに売った娘に与えることができて、満足して身代りになったと一心斎は語っていたが、次郎吉がいまだに気にかかることが一つある。与之助が身代りを決意した本当の理由は、与之助は労咳という不治の病いにかかってい

て、明日をも知れない命であったからのはずなのだが、次郎吉が商家の二階から覗いて眺めた与之助の顔は、頬に薄く差した紅が地肌にほどよく乗っていて、とてもすぐに死ぬような病人には見えなかった。

もしかしたらあの元下駄職人は、一心斎の旦那に担がれたのではないか。おれは何も知らねえ善良なやつを、おれの身代りに死なせてしまったのではないか。

手術が無事終り、ぐるぐると包帯を巻かれたまま、およそ十日間を過ごした次郎吉は、その間もひょいと脳裡に浮かぶ与之助の人の好さそうな顔に苛まれた。

もっともそんな罪の意識も、東海道を旅する内にだんだんと薄れ、名護屋で次郎吉が朝鮮人参の種を持っていると知った薬種問屋の主人からせがまれていくばくかの種を分け、百二十両の小判を懐にしたときは、こんなボロい商売があるのなら、なにも命をけずって盗っ人稼業などに精を出すのではなかったと反省もし、愉快になったほどだった。荷の中には半斤の朝鮮人参が入っていて、一心斎の話では江戸駿河町で立つ人参座と呼ばれる人参相場に出せば、今年であれば一斤につき銀二十四貫の値がつけられるという。それならば半斤でも銀十二貫になり、次郎吉がまだ真面目に建具職人をしているときの日当が銀三匁であったから、たったそれっぽっちの朝鮮人参を得るために、飲まず食わずで十年間も働かなくてはならないことになる。

浜松では痰が出て困るという旅籠屋の主人に、和蘭陀から舶来の「ずぼうとう」という痰薬をあげたらたったの二回で治ったと喜ばれ、二百五十文の旅籠代がただになった。

まったく不思議な商売で、これでは真面目に働いているやつが馬鹿を見ると思ったものだが、考えてみれば誰にでも手に入れられるという代物ではない。

全ては一心斎の書状と長崎奉行所の役人に渡った中包み二個分の小判の効能であって、やはりこいつも密貿易の一種なのだろう。なんでも一心斎の碁仲間に遠山金四郎という西ノ丸小納戸頭取格の者がおり、その実父が文化年間に長崎奉行を務めていたそうで、その伝手で今回の一連の取引きが可能になったのだという。だが次郎吉は遠山という旗本など会ったこともないし、一心斎が碁を打つ姿など目にしたこともない。

いささかやっかいな薬を背負いながら、それでも掛川宿を過ぎる次郎吉の足が軽くなったのは、手術後の顔の腫れが引いてきたことと、大井川を渡れば江戸はもうすぐだという思いがあったからである。

ところが日坂宿を過ぎ、一里半の峠越えをする内ににわかに大風が吹き出し、金谷宿に入る頃には雨も伴って嵐のようになった。すでに十月も半ばを過ぎていたから雨は冷たく、暗くなって旅籠にたどりついたときには文字通り濡れ鼠のようになっていた。

足をすすぎ急いで風呂に入り、部屋に戻って乾いた浴衣にどてらを着込み、三尺帯を締めて渋茶を啜るとやっと人心地がついた。すると次郎吉を旅籠に引き入れた留女が、膳に熱燗を一本つけて障子を開けて入ってきた。色白で貧相な程に痩せていたが目に愛嬌があった。この娘が次郎吉の今夜の相方だった。

かつて次郎吉が女房にしたことのある根津の水茶屋の女は、二朱（一両の八分の一）

で遊べた。身請けするのには十両かかったが博打代に較べれば安いものだった。飯盛女なら一朱でも遊べる。

「朝まで飯を我慢することはねえ。遠慮しねえで二人分の飯をさっさと用意しな。おれと一緒に食えばいい」

飯盛女が朝、客の残した夕飯をがつがつと食って腹を満たしている姿を見ること程情けないことはなかった。十年の年季奉公が明け、晴れて村に帰ったところで耕す畑もなく、嫁にもらってくれる男もいない。とどのつまり小作人の嬶になって粥をすするか、宿場女郎となって流れていくしかないのだ。

かわいそうなもんじゃねえか、と胸の内で呟きながら次郎吉は娘の前に二分金（一両の半分）をほうり投げた。

「それからな、熱いところをもう二、三本持ってきてくれ。そいつで勘定をすませな。残りはおめえがとっとくがいいさ」

娘は大きな目をさらに丸くして次郎吉を茫然と見つめた。商人姿の客が、急に博打打ちのような口をきいたのでびっくりしたのかと思っていたらそうではなかった。

「こんなに……いいんですか？」

娘は口許を歪めて今にも泣き出しそうな顔になった。考えてみれば旅籠代と酒代、それに追加分の飯代を入れても三百文（一両の十三分の一）程度だ。それに娘の遊び代を払っても一分の金が残る。ただ乗りをしたり、朝飯を女に残してやることもしないケチな商人が横行するせちがらい世の中で、次郎吉の態度は奇特な人と娘の目には映ったのかもしれない。

「いいさ。それにな、もし明日川留めになるようなことがあれば、またおれの相手をしてくんな」

「あ、ありがとうございます」

娘は両手を畳につき、バッタのようにぴょこんと頭を下げた。そのとき、次郎吉の胸に久しく感じたことのなかった淡い感傷が浮いた。

夜半を過ぎる頃になると、風雨はますます激しくなって嵐になった。サト、と名乗った娘は雷が鳴ると小さな悲鳴をあげて、次郎吉の胸の中に顔を埋めた。その細い肩を抱き、背中を撫でながら、次郎吉は自分が娘の父親になった思いがして、なんともやりきれない気分に陥った。

旅籠に呼び込まれたとき、暗くてはっきりとは分らないまま今夜の相手にと声をかけたのだが、それでも二十歳を大分過ぎていると思っていた。

それが飯を運んできたときには二十歳位かと見当をつけ直したものが、娘の薄くてみすぼらしい胸を開いたあとでは、十五、六歳なのではないかと思うようになったのだ。

娘は次郎吉を奮い立たせようと、まだ慣れない仕種であれこれと身体に触れてきたが、何故か気が滅入るものを感じた次郎吉は、一向にその気になれなかった。

その内雷の光が雨戸の節目を通して部屋に射し込んでくるようになると、娘はこわさに堪まりかねて次郎吉の腕にしがみついてきたのだった。

これも一心斎に命を救われて、旅に出たから感じられることであって、昔のままの自分でいたら女が誰であれ、酒を浴びる程飲んだ上に、表にしたり裏をとったり好き勝手にいたぶっていたことだろうと思っていた。

次郎吉は、今から七年前の文政八年（一八二五）の八月に、一度捕まったことがあった。このときは土屋相模守の屋敷の長局の板塀を乗り越したところを不寝番の侍に見つかって捕えられ、御番所に突き出されたのだが、盗みをする前に取り押さえられたので懐中には怪し気なものは何も入っていなかった。

調べにあたったのは南町の筒井和泉守政憲という名奉行と謳われた人で、今もなお町奉行の職にあるのだがこの時は次郎吉の神妙な芝居にひっかかり、中間部屋で賭博をしようと思い屋敷内に入ったのだが迷ってしまったと嘘の白状をしたら、入墨、中追放の処分を受けるに留った。

本当は三十ヶ所に及ぶ屋敷に忍び込み、盗んだ金も千五百両を越えていたのだからバレれば当然獄門にかけられる。

しめしめと思って出牢し、湿瘡が治った頃を見計って金毘羅参りに出掛けた。旅らしい旅はその時が初めてであったが、中追放の身であるから東海道を通行するにも肩身が狭い。入墨を見つけた女はそれだけで尻込みするからますます気がいらだち、ついには

旅籠代も支払わずに夜逃げすることもあった。

金毘羅参りだというのに気の安まることのない旅で、中追放の身でありながら江戸に舞い戻って水茶屋を転々として隠れ住み、金がなくなると旗本や大名屋敷に忍び込むといった荒んだ生活を送っていた。

入墨を目立たなくさせるために腕に雲竜の彫り物をしたのもこの頃だが、水茶屋の酌取女をとっかえひっかえ女房にしては、そのたびに盗っ人稼業が露見するのを恐れて離縁したりと、随分罪つくりなことをやったものだった。

――そのおれが、獄門になるはずのところを生き返って、今じゃこうして顔の造作も変え、雷に震える娘をなぐさめているわけだ。

縁もゆかりもない、ただの飯盛女だというのに、これまでに抱いたことのないやすらぎを感じるのはどういうわけだろう。

そんなことを考えている内に、次郎吉もやっと寝ついた娘の寝息に誘われて、深い眠りに入った。

二

翌朝も雨だった。風は少し治まっていたが大井川の増水が二尺五寸となり、川留めとなった。

冷たい雨に打たれて江戸を目差して峠越えをしてきた旅人は、怒り狂ったようにのたうちまわる奔流を目の当たりにして、肩を落して金谷宿まで戻ってきた。

昼過ぎになると、肥前松浦郡五島を治める五島盛政が参府のため五十余名の家臣を伴って宿場の本陣に宿をとった。一万二千石余の小藩の行列だが、この時季の参府は少ないので、五十一軒の旅籠は陰鬱な空の下で思わぬ賑わいを見せた。

そのため、次郎吉の泊っている「丸子屋」にも旅の商人だけでなく、御用の途中の武家やその供侍までも流れてきた。だが、たっぷりと心付けを渡していた次郎吉のところへは、宿の主人も気を遣って相部屋を頼みにくることはなかった。

その夜、次郎吉は遅くなって部屋にやってきたサトに、晩飯を食わせたあとで、どてらを着込んだまま蒲団に入ってぬるくなった酒を手酌で飲んだ。

「おめえは自分の部屋に戻って寝ていいぜ」

掛け蒲団を背中に掛け、うつぶせになって盃を口に運びながらそういうと、遠慮がちに茶を啜っていたサトは顔を上げると口の端に小さな皺を寄せた。

「あたしじゃだめなんですか？」

「そういうわけじゃねえが、おめえだって一人で眠った方がゆっくりできるだろう」

「一生懸命尽しますから、今晩もここに置いて下さい」

サトは湯呑みを膳に置いて、畳に頭をこすりつけた。

「なにもそんなに気張ることはねえ。おめえの酌取りの分の給金は宿の親爺に払ってあるんだ。客と一緒じゃ休まることはねえだろうから、一人でゆっくり眠りなと、おれはそういっているんだ」

畳から頭を上げたサトは、ベソをかいていた。

「女中部屋は狭くて寒いんです。それに今戻されたらまた別のお客さんのところへ行かされます。お願いです、ここに置いて下さい」

「なるほど、そういうことか。だったらおめえのいいようにしな。おれはこいつを飲んだら勝手に眠るぜ。寒くなったらいつでもおれの蒲団の中に潜り込んでこい」

次郎吉はサトから目を離してそういった。ありがとうございます、とサトはいってから目を拭い、膝を畳にすって蒲団の裾まで近づいてきた。二階の別の部屋からは酒に酔った男とそれに合わせて笑い転げる女の声が響いてくる。時折雨だれの音が聞こえるが、それも強く降り出す雨音に掻き消されてしまう。

「もう冬だってのに、火鉢も入れねえとはしみったれた親爺だぜ。行灯さえケチりやがる」

次郎吉は枕元の瓦灯からチロチロと洩れる灯りを目に映していった。こういう旅籠だったらちまちまと溜め込んだ小銭の四、五十両も金箱に隠してあるのだろうと思っていた。

次郎吉は、かつて一心斎に商家は狙うなと釘を刺されたことがある。それについては次郎吉も同感だった。ただ、一心斎は昼夜を問わず仕事に励んでいる商人から金を盗む

のは気の毒だ、という意味でいったのだが、次郎吉が商家を狙わないのは、戸締りが厳重な上にいつなんどき使用人が起き出してくるか分らず、盗っ人にとっては面倒なことが多いというのがその理由だった。

——この旅籠の金箱はおろか、客の財布を盗むのもたやすいことだ。そいつはつまり、世の中には間の抜けているやつが多いってことなんだろうな。

「おっ、そいつは気持がいい。ありがとうよ」

サトの小さな手が蒲団の裾の方からそっと入ってきて、次郎吉の足首を揉み出した。客に冷たく感じさせてはまずいと思ったらしく、足に触れる前に充分に両手を揉みしごいたようで、その掌の感触はなめらかだった。

「おめえはいい子だな。いくつだい？」

「十四です」

「なに、十四だあ？　そんな年端もいかねえ子に親爺は客をとらせようというのけえ」

「すみません。あたし、まだ、慣れてなくて」

「おめえ、いつからここに住み込んでいるんでえ」

「ひと月前です」

「ひと月……おい、おサトとかいったな、ちょっと訊いてもいいけえ？」

「はい」

「親に売られてここに来たのか」

「はい。あ、でも、お父っつぁんと別れたのはずっと小さい頃で、ここに奉公に上ることになったのは、お店のご主人に追い出されてしまったからなんです」

「おめえはなにかしくじりをしでかしたのか？」

「……しくじりなんか、しでかしていません」

次郎吉の足を揉むサトの手が止った。次郎吉は煙草に火をつけて一服吸いながら、おそらく店の金をくすねたか、夜食の盗み食いでもしたのだろうと見当をつけていた。

「店の主人がおまえを手籠めにでもしようとしたのけえ？」

「そうじゃありません。あたしを泥棒呼ばわりしたんです。嘘つきの泥棒だって。でも、泥棒は旦那様と奥様なんです。あたしの預けたお金をくすねたんです」

泥棒、と聞いて次郎吉の胸はさすがにぐさりときた。

「おだやかじゃねえな。どういうことでえ。おれにちゃんと話してみな」

煙草盆に煙管の頭を打ちつけて、次郎吉は首を回した。娘の顔に暗い影が落ち、目の白い部分ばかりが銀色の輝きを見せている。

「お父っつぁんから、江戸にいるお父っつぁんから、百両のお金が送られてきたんです。小さな頃に、あたしを見捨ててすまなかったといって……」

「なに……」

「どうしてあたしが『駿河屋』さんで奉公をしているのを知っているのか分らなかったけど、本当にお父っつぁんから百両もの大金が送られてきたんです。番頭さんも知って

います」

「その金を主人に預けたら、後になって、そんな金など知らねえ、といわれたとでもいうのかい？」

サトはこっくりと頷いた。悔しさに溢れた顔に絶望感が漂っている。

「そうです。奥様まであたしを嘘つきだとののしって。おまえを売るような父親が、百両もの金を送ってくるはずがないって。番頭さんなんか夢でも見たんだろうと笑うんです」

「おい、サト。足はもう揉まなくていいからこっちへこい」

次郎吉は起き上って敷蒲団に胡坐をかいて坐った。板葺の屋根を叩く大雨の音が大きく耳に被さってくる。

「おめえのお父っつぁんが百両を送ってきてくれたのは、いってえいつのことだ？」

「今年の八月の五日のことです。お月見まであと十日だからと番頭さんにいわれた日のことで、よく覚えています」

斜め向いに坐ったサトは、細い肩をさらに縮めた。次郎吉の身体は火がついたように熱くなっていたが、平静さを装ってゆっくりと頷いていた。

「それで、おめえはどうして役人に届けなかったんだ」

「届けました。店を抜け出してそっとお奉行様に訴え出ました。でもお城にお出入りする商人がおまえのような小女の金をくすねるはずがないと叱られました。それでもあきらめずに江戸にいるお父っつぁんを捜し出して尋ねてくれとお願いすると、別のお役人様が調べてやると約束してくれました」

「それで？　調べてくれたのか？」

サトは頷いたものの、なかなか言葉が出てこない。次郎吉がその暗い頬に手を当てると娘の涙が掌に伝ってきた。ジンと痺れるものがあった。

「お父っつぁんは盗賊の一味に入って盗みを働いたというのです。捕まらなかったのは、恐らく仲間に殺されているからだろうって……」

サトの肩が上下に震えた。次郎吉は腕を組んだ。しかし、頭の中は火事と鉄砲水が同時に起こったようになっていて一向に収拾がつかない。

「それで、どういうわけでおまえはこの旅籠で働くことになったのだ？」

「お店を追い出されてしまったので、一人で江戸へ行こうと道を歩いていたらおじさんに声をかけられて……」

「江戸へ連れていってくれるといわれてついていったわけか」

サトは頷くかわりにささくれ立った指先で瞼を拭った。次郎吉には娘の答えが分っていた。飯を食わして安心させ、手籠めにした上に女衒か質の悪い口入れ屋に売りとばしたのだ。いってえそんなひでえやろうはどこから湧いてくるのだろうと不思議になった。

「その駿河屋というのは、どこにあるんでえ？」

「本町です」

「本町？　沼津宿のかい？」
「はい」
「何の商売だ？」
「海産物問屋です。他に大きな料理屋さんもやっています」
「それだけの店の主人でありながら、おめえのような小娘の金を盗むとは許せねえな。よし、おれが――」
仇を取ってやると言いそうになって次郎吉はあわてて口をつぐんだ。いつの間にか他の部屋は静かになっている。雨音は続いているが声が廊下に洩れないとも限らない。
おサト、と次郎吉は声をひそめていった。
「実はおれはおめえの親父を知っている」
「えっ……」
「皆寝静まっている、声をたてるな。おめえの親父は与之助というのだろう」
「ど、どうしてそれを」
サトは目を丸くした。恐れと驚きと一縷（いちる）の望みを求める思いが目の奥に息づいた。
「昔、おれの仲間だった。といっても盗っ人なんかじゃねえ。親父は腕のいい下駄職人だった。ところが、おめえのお袋が病いで死んじまってから何もかも狂いはじめやがったんだ」
「おっかさん……」

「安心しな。おれがおめえをここから出してやる。明日、ここの親爺と掛け合ってやる。そして、おめえのお父っつぁんが残してくれた百両を駿河屋から奪い返してきてやるからな」
「お客さん……お客さんはいったい……」
「貧しき者の味方、鼠小僧次郎吉様よ」
「えっ？　で、でも、その人は、たしか……」
「大声を出すな。冗談に決っているだろ。鼠小僧はもう土の中に眠っているよ」
それがおまえの親父なのだと胸の内で呟いてから、次郎吉は心の中で手を合わせた。
「ところでな、おサト、おめえの奉公していた駿河屋の間取りをここに細かく書いてみちゃくんねえか。主人夫婦の寝間、奉公人たちの部屋、蔵、金蔵、台所、厠（かわや）の場所までみんな書き込んでおいてくれよ」
次郎吉はどさくさで金蔵という言葉をさし挟んで、半紙と矢立てを取り出してサトに差し出した。サトは頷いて筆をとったが、次に何か言いたそうに次郎吉の目の奥を覗き込んだ。自分の意図がバレたのではないかと一瞬胸に冷汗を浮かべた次郎吉だったが、サトが口にした言葉を聞いて、ほっと胸を撫で下ろした。
ありがとう。サトは父親の生死のことも尋ねることなく、そういったのだった。

三

翌日の暁近くになって大風が吹き、雨雲を南西の海上に吹きとばした。朝には宿場に日が射し、商人達はこれで旅立ちが出来ると喜んだが増水は容易には引かず、前日に続いて川留めとなった。

次郎吉は鬢の薄くなった旅籠の親爺を行灯部屋に押し込んで、口入れ屋と交わしたサトの証文の有無を問い詰めた。さすがに親爺はしぶとく、なかなか白状しなかったが、次郎吉が十五両出して、これですっぱりきれいに片をつけようじゃねえかと唆呵をきると、口の端にたまった唾液の泡を手の甲で拭い、ようございます、とガマ蛙のようなふてぶてしい顔つきで答えた。

やれやれ旅籠の主とはいえ、商売人ともなると金には厳しいものだと次郎吉は感心した。ともあれ、サトはその日から雇い人転じて客となり、風呂に入る次郎吉の背中を洗ったり身の回りの世話を焼いたりと、かいがいしく働きだした。

その夜は安心したのか、サトは次郎吉の腕の中で鼾をかいて眠った。満足に食事をとっていなかったせいか、何度肩を抱いてもサトの身体はか細く、それを思い知るたびにすまねえと呟き、死んだ与之助の顔を次郎吉は思い出した。

サトは次郎吉について江戸に行きたいといっていたが、サトを自由の身にしたものの、これからどうすべきか、次郎吉はまだ決めかねていた。元はといえば一心斎が仕組んだ結果なのであるから、一心斎にサトの身柄を預けて、自分は勝手気儘に薬売りの治三郎として生きていく方便だって許されるのだ。

しかし、それではサトをまた見知らぬ者の中にほうり出すことになり、少し可哀そう過ぎるのではないか、という思いも次郎吉の胸の内に湧き上ってくる。

そんなことをあれこれと考えている内に夜が明けた。朝飯をゆっくりと食っていると川越えの知らせが入ってきた。大井川の常水は二尺五寸。今朝はそれより一尺ばかり増水しているため、馬は渡れないが人足が旅人を渡してやることは可能である。ただし、なにがしかの酒手をはずんでやらないとどんな悪戯をするか分らない。

川留めが終ると、まず脇本陣に泊っていた公儀の役人が、御状箱をうやうやしく抱いて蓮台に乗って川を渡っていった。それから大名の行列や急ぎ旅の商人などが続き、次郎吉とサトの番が廻ってきたときには四ツ半（午前十一時）になっていた。次郎吉はサトを蓮台に乗せ、四人の担ぎ人足にそれぞれ百文ずつ渡し、自分は七十文払って人足の肩車で川を渡った。

渡るとそこは島田宿である。川留めのあとの喧騒の残った宿場を通り過ぎ、次郎吉はサトの足に合わせてゆっくりと歩き、その日は藤枝に宿をとった。

翌日は五ツ（午前八時）に宿を発ち、岡部、府中へと歩いた。そうして急ぐでもなし、物見遊山をするでもなしという旅を続け、沼津の手前の原宿に着いたのは金谷を出てか

ら四日目の昼過ぎだった。

「おめえはここで待っていろ。四、五日もしたら旅籠に飛脚をやる。まあ、千本松原でもゆっくり見物しているんだな」

そういってサトを旅籠に一人残して次郎吉は荷を担いで再び東海道を下った。途中、五両の金子を渡したときのサトのびっくり仰天した顔を思い出して、次郎吉は何度となく笑った。それ程の豊かな思いができたのも、長崎で仕入れた朝鮮人参の種のおかげだった。一心斎に見咎められる前に、是非とも「駿河屋」に忍び込んで二、三百両なりを盗み出し、帳尻を合わせておかなくてはと考えた。

原宿から沼津宿まではおよそ一里半。次郎吉の足で半刻程で宿場に入った。

次郎吉はまず本町にあるそれほど大きくはないが木賃宿でもないという手頃な平旅籠を見つけて草鞋を脱いだ。ここにはわずらわしい飯盛女の類はいない。

「ねえさん、すまねえが二階の角部屋を用意してくんねえか。二、三日やっかいにならしてもらいてえんでね」

おとそ商人らしい喋り方ではないと自覚していたが、宿の女中は不審そうなそぶりもみせず、次郎吉を二階に案内した。

荷を部屋に置き、誰も手を触れぬように言いつけておいて、次郎吉はさっそく町に探索に出た。目差す「駿河屋」へはいきなり向うようなことはせず、渦の流れに乗って中心点に迫るような歩き方をした。

沼津宿は本町と上土町、それに三枚橋町の三つの町から成っている。住民も五千人を越し、大小合わせた宿の数は五百軒程にもなる。商人だけでなく、西国からの湯治客も箱根に向う途中に寄っていくし、江戸からは富士詣での町人や農民達もやってくる。頭に鉢巻きをして菅笠を被り、白の行衣に身を包んで鈴を鳴らしていく姿は、このあたりでは珍しいものではなくなっている。

次郎吉は笠を被って足早に商家の前を歩いた。いかにも用があり気な商人姿なので怪しむ者はいない。海産物問屋「駿河屋」のあたりにさしかかったときだけ歩みを緩め、二度、店の周りを巡って旅籠にとって返した。広大な庭に建つ二つの蔵と、家と接している金蔵は、サトの描いた見取図通りで、屋内の間取りはすっかり次郎吉の頭の中に入っている。

宿に戻るといい按配に薄暗くなっていて、沼津湊からの冷たい海風が家々の屋根を跨いで吹き込んできていた。

「ようねえさん、先に風呂に入るぜ。上ったら熱いのを二、三本用意して部屋に持ってきてくんな」

次郎吉は奥に向ってそう呼びかけた。次郎吉からたっぷり心付けをもらっていた女中は、ハイハイと愛想のよい返事をした。

すっかり温まって風呂から上り、着物の上にどてらを着込んだ次郎吉は、さて一杯やりながら忍びの算段でもするかと、ぞくぞくするような嬉しさを嚙みしめて階段を上り、

突き当たりの部屋の障子を開いた。

「だ、だれでえ！」

そのとたん思わず次郎吉は身構えていた。暗い中に潜む人の気配がしたのである。

「奇遇じゃな、次郎吉」

軽いが伸びのある声が部屋の中から放たれた。次郎吉は思わずよろめいた。障子の桟が大きな音をたてた。

「だ、旦那！　ど、どうしてここに!?」

忘れようにも忘れられない中村一心斎の声だった。次郎吉は四ツン這いになって畳を這った。

「先刻、おぬしがチョロチョロと様子を探っておった『駿河屋』に、わしも数日前よりあたりをつけておったのだ」

「えっ？　だ、旦那も！　そ、それじゃあ旦那もいよいよ盗っ人に転向なさるんで」

「たわけ。ふた月ぶりに会った早々時節はずれのボケをかますでない。『駿河屋』の庭には武田信玄が持っておった軍用金が埋められておるのだ」

「えっ！　ま、まさか、あの『駿河屋』に!?」

「だから『奇遇じゃ』と申したのだ。わしと同じ家に目をつけるなぞ、おぬしの勘も満ざら捨てたものではないな」

「い、いえ、旦那、そうじゃねえんで」

続けて与之助の娘との奇妙な邂逅のことを喋ろうとした次郎吉は、待て、と一心斎に制されて言葉を呑んだ。

「女中が上ってくる。まだ時はたっぷりある。酒でも飲んでゆっくり話そう」

次郎吉の耳には誰の足音も聞こえなかったが、ややすると階段のきしむ音が鳴って丸盆に銚子を二本載せて女中が現われた。

女中は暗い中で男二人が坐り込んでいるのに気付いてちょっとたじろいだようだったが、行灯を灯した明りの中に浮かび上った一心斎の姿を見て、まあお武家様だったのですか、と年増女には珍しく、はしゃいだ声をたてた。

「さっきはつまらんしくじりをして申し訳なかったな」

そう一心斎がいうと女中はいいんですよとしなを作って笑った。それから何かお肴でも、というのを一心斎は後程でよいと断り、先に手酌で一杯グビッと飲んだ。

「旦那、しくじりとは一体、どんなことで？」

「そんなことはどうでもよい。それよりおぬし、少し太ったな。長崎では顔の骨を削ってくるものだと思っていたが」

一心斎はまじまじと次郎吉を見つめた。次郎吉は酒を喉に通してから、それが、といった。

「顎と頬のところに海綿みてえなものを入れられやした。それに目の上にだぶついていた肉を切り取られちまいまして」

「なるほど。それで妙に目が広けているのだな。だが、その面体ならおぬしを鼠と気づく者はおらんだろ。ところで、さっきの話の続きだ。おぬしが『駿河屋』に目をつけたのはどういう訳じゃ」

じつは、といって次郎吉は川留めにあった金谷宿で、与之助の娘に出くわしたこと、その娘の上に起こった出来事などをこと細かに話した。

「そういうことか。わしも店の者に尋ねてみたのだが、その娘はやめたと答えるばかりで変だと思っておったのだ」

「すると旦那は、与之助の娘が『駿河屋』で奉公していることを知っておったので？」

「無論だ。その娘に早飛脚を仕立てて百両の金子を送ったのはこのわしだからな」

「そうだったんで……」

「よし、これでわしの腹も決った。商家をいたぶるのはわしの柄ではないが今度ばかりは格別じゃ。次郎吉、頼んだぞ」

へっ？　と次郎吉は思わず頭の上から声を洩らした。一心斎は時折真面目な顔をしてとんでもないことをしでかす癖がある。

「頼むっていわれましても、あっしが狙えるのは金箱に入っている二、三百両がせいぜいですぜ。まさか、武田の埋蔵金とやらを、あっし一人で掘り出せというんじゃないでしょうね」

「無論、おぬし一人には任せん」

「でえいち、本当にあの家の庭に埋蔵金なんてえ大そうなものが眠っているんで？」

「眠っている。ま、多少形は変ってはおるが、あることはある」

一心斎は珍しく歯切れが悪くなった。盃を手にしてたて続けに三杯飲んだところも何か妙だった。次郎吉はさらに探りを入れてみることにした。

「じゃ、ちょっとだけでも、そのいきさつをお聞かせ願いやすか」

「うむ。ま、いずれ詳しいことは話すが今は大雑把に説明しておこう」

そういって一心斎が腕を組み、天井を仰いで語り出したところによると――。

武田家の重鎮に穴山梅雪という武将がいて、あるとき信玄は馬五十駄に及ぶ黄金を隠すように梅雪に命じた。その梅雪は信玄の死後武田を裏切り、信長にくっついた。その折、黄金も別の場所に移した。やがて本能寺の変が起こり、梅雪はあわてて甲州へ逃げ帰った。その途中の山中で土寇（どこう）に襲われ、宝を埋蔵した地点を書き記した書き付けも奪われた。その土寇の子孫が「駿河屋」である。

「と、まあこういうわけじゃ」

「なるほど、大変大雑把なお話で、感心致しやした。ですが旦那、その土寇の子孫がどうして『駿河屋』だと分ったんで」

「ぐじゃぐじゃぬかすな。なんにせよ飯を食ったら『駿河屋』を襲いに行くのだからな」

次郎吉はさすがにびっくりした。ホラを吹いているようで本当に実行してしまうとこ

ろが一心斎のこわいところなのだ。

「だ、旦那、ま、待って下さいよ。いくら何でも今夜というのは無茶ですよ」

「今夜だ。しかし、案ずるな。押し込みを働くのはわしらではない。別の盗賊どもだ」

一心斎のニッと笑った顔が、ろくろっ首のようにひゅっと伸びて次郎吉の鼻先に現われてきた。

「そ、それはまた一体どういうわけで」

「これまた奇遇なことに、半年も前から下女を引き込み役として『駿河屋』に住まわせ、今日のよき日をコツコツと仕込んでおった盗賊どもがおったのだ」

一心斎は心から嬉しそうにニンマリとした。

「六日前のことだが、店の裏口を妙にうさん臭い鋳掛屋がうろついているのに気がついた。すると鼻の大きな下女が出てきて鍋を鋳掛屋に渡しおった。わしは鼻の大きい女はあまり好かん。ことに鼻の穴のでかい女はもっと嫌いじゃ。案の定、鍋には穴など空いてない。男は女に何事かを耳打ちして天秤棒を担いで帰っていきおった。ま、そういうことだ」

好々爺のように笑っている一心斎を見つめながら、つまり、と次郎吉は慎重に口を開いた。

「旦那はその鋳掛屋のあとを尾け、一味の盗っ人宿をつきとめた上に、今夜、おつとめがあることを探り出した、と、こういうわけですかい？」

「そういうわけだ。さ、まずは腹ごしらえじゃ」

一心斎はのどかな顔でそういうと、手を叩いて女中を呼んだ。

「待って下さいよ旦那。そいつらの押し込みに、あっしに加担しろとおっしゃるんですか」

「加担？　何故じゃ」

「何故って、そうでもしねえことにはあっしらの手元には一銭だって入りゃあしねえじゃねえですか。でえいち、やつらの狙っているのは武田の大将の埋蔵金なんかじゃなくて、金蔵のお宝ですぜ」

「そうであったな」

焦っている次郎吉には少しも構うことなく、一心斎はそう応えてポンと手を打った。

はーい、という女中の年に似合わない嬌(あだ)っぽい返事が廊下を転がってきた。

船蔵に集まった手下の顔を、一人ずつ蠟燭で照らした蛇目の権三は、傍でじっと蹲っている一本松の留吉の肩に片足を置き、おい、と怒鳴って揺すった。

「みんなそろっているじゃねえか。なのに、千両箱が見当たらねえのはどういうわけでえ」

「へえ」

「へえじゃねえこの唐変木め！　おれはこの手で金蔵から千両箱を盗み出し、てめえに

手渡したんだぞ」
「へえ」
「それがどっかに消えちまったってのはどういうことでえ。鳥みてえに空を飛んだか、もぐらみてえに地に潜っちまったとでもいうのけえ！」
「す、すいやせん！」
「馬鹿やろう！　あやまって済むことじゃねえ！」
権三は長身の留吉を足蹴にした上、そばにあった竹竿で背中を力まかせに叩きつけた。留吉は悲鳴をあげて積んであった網の中に頭を突っ込んだ。
「おい、てめえら。まさか、てめえら九人がグルになっておれを騙そうとしているんじゃねえだろうな」
権三は黒装束に身を包んだ手下どもを睨みつけた。蠟燭一本の灯りの中で、普段はふてぶてしい面構えの手下どもが、ひき蛙のようにぺしゃんこな面になって怯えているのが分った。
「どうなんだてめえら！　おれをハメやがったのか！」
「頭、め、滅相もねえ」
「お、おれ達あ、命がけで不寝番の浪人を殺したんですぜ。おまけに、小僧までやっちまったんだ。それもこれも頭に命じられたからですぜ」
「そうだ。おれたちは頭に命を預けているんでえ。騙したりなんかできるもんじゃねえ」

権三は口を開いた三人を上目遣いに目を細めて見据えた。
「じゃあいってえ、あの千両箱はどこに消えちまったんでえ。たしかにてめえらの内の誰かが担いでいったんだよ！」
頭、とそれまでじっと水の滲み出した土を見つめていた松二郎が、権三に向けてそっと顔を上げた。
「あっしはみんながそろって裏口から引いていくのを確かめてから戸を閉めたんで」
「おお、そうだ。そいつがおめえの役目だからな。だからどうした！」
「そんとき、頭数が十あったんで」
「てめえを入れりゃ十になるじゃねえか、この大馬鹿やろう。数も満足に数えられねえのか」
「それが――」
松二郎はいったん言い澱んでから、情なさそうに口の端を歪めていった。
「あっしの数を入れずに十の頭数があったんで。こいつは確かなんで」
「な、なんだと！」
権三は目を剝き出した。
「す、するとなにか、押し込みに入ったときは十人だったものが、千両箱を奪って逃げ出したときには十一人になり、集まってみりゃまた十人に戻っていたというわけかい」

「へえ……」

「そ、そんな。そんな、ば、馬鹿なことが……」

怒鳴り散らそうとした権三の目の前が不意に白濁した。頭が割れんばかりに痛くなり、鈴の音がいっせいに高鳴った。周囲を何十人という巡礼どもに取り巻かれているようだった。やめろ、と叫ぼうとしたが声が出ず、ついで身体が半転した。

おサトさん、といってもうすっかり馴染みになった下働きのアキが部屋に入ってきた。アキはサトと同い齢だった。小さな旅籠なので、アキの主人も、客の部屋に下働きが入ってはいけないなどと口やかましいことはいわなかった。

「お待ちかねのものが届いたわよ」

アキは手に重そうな布袋を抱えていた。

「沼津宿の旅籠の人がたった今これを届けてくれたのよ」

サトは買ったばかりの着物をたたむ手をとめて、アキから手渡された荷物を手にとった。思わず、腕が抜け落ちてしまう程重かった。

「その人は何かいっていなかった？」

「何も。これをサトさんに渡すようにいいつかったって、それだけよ」

「なんだろう」

それが、じさぶろう、という今は薬売りで、昔はお父っつぁんの仲間だった人からの贈り物だということは想像がついた。

きっと迎えにきてくれるといったのに、どうしたのだろう。

サトは生まれて初めて買った着物を、じさぶろうおじさんの前で着て見せるのを楽しみにしていた。それまでは決して袖を通すまいと決意していた。

袋の中はさらしで何重にも巻かれていた。やっとほどいたと思ったとき、包みが割れて黄金色の小判がこぼれ出てきた。

きゃっ、と叫んだのはアキだった。手で口を覆い、腰を抜かしたように障子の桟に尻を落した。

見たこともない大金だった。それがざっと見ただけで、小判の数は二百枚を越えているのが分った。

サトは添えられていた文を開いた。

——達者で暮らせ　治三郎

「おじさん！」

サトは跳び上るようにして立ち上り、土間に向って駆け出していた。そこに何と書いてあるのかサトには読めなかった。だが、じさぶろうおじさんからの、別れの言葉であることは分っていた。

「おじさん！」

サトはもう一度叫んだ。目の前が、まるで滝の中に顔を突っ込んだかのように、透明

な水で溢れ返っていた。それからサトは床板に両手をつき、小さな声で泣きはじめた。

秘剣ふぐりほぐし

一

虎之助は茶店の隅を借りて握り飯を食っていた。竹皮には味噌と沢庵が添えられていて、それが薄塩の飯に程よく合っている。前夜泊った小島宿の旅籠の女中が握ってくれたものだが、宿の親爺には内緒で余分に一つ加えられている。

年齢を訊かれたので虎之助は十九歳と正直に答えたのだが、女中の方では、まあ、と目を丸くしていってあわてて俯いた。

あれはどういう理由だろうと沼津宿に来る道中で思いを巡らせてみたが、虎之助には一向に要領を得た答えが浮かばない。女中は童女のように赤い頬をした小さな女で、たぶん同い齢位だったのだろう。

その女中から見れば背丈は五尺八寸、色黒で頬骨が張り、鷹のように尖った顔をした虎之助はもっと年上に思えたのかもしれない。

三十過ぎ、あるいは、あの女の親父殿とおっつかっつの年齢だと見ていたのかもしれん。それにしても恥しがることはあるまいに。

虎之助は三つ目の握り飯を手にして動きを止めた。それを残して、辻堂で夜を明かすことになった場合の夜食にしようかと考えたからである。女中はそこまで先を見越して、おまけの握り飯をくれたのかもしれない。

「九百三十両も盗まれたそうでございますよ」

「ほう、そんなに。いくら身代が大きいといってもそんなに盗られたのでは『駿河屋』さんも難儀しなさるねえ」

「道中奉行様の配下のお役人まで出張ってお宿改めをしなすったそうだが、盗賊どもはもう雲よ霞よと逃げちまっていますよ。なんつっても見張りをしていたやっとうの達人まで殺していったというのだから、ただの泥棒とわけが違いますよ」

「そうかねえ。昔はお侍さまといったら、何年間も剣の修行をして免許皆伝になる人ばかりだと思っていたもんだが、たかが盗っ人に殺されてしまうものなのかねえ」

「大きな声じゃいえませんがね、近頃では盗賊の中にもかつてはお城勤めをしていた、れっきとしたお武家様が混っているということでございますよ」

薬売りと年老いた古着屋が、荷物を傍に置いて話している声が虎之助の耳にも入ってくる。

――九百三十両とは、途方もない大金を盗んだものだ。

虎之助は飯粒の乾いた握り飯を睨みつけながら、それだけの小判を思い浮かべようとしてみたが、出てくるのは錆びついた銭ばかりで小判の形などまるで現われてこない。

虎之助の父、島田市郎右衛門は生前、豊前中津、奥平藩で刀番を務めていたのだが、

その給禄は十一両三分のみで、その他には一銭の余禄もなかった。それで五人の子供を食わせるのであるから母の苦労は並大抵ではなかった。虎之助は四男であったが、そんな軽輩の倅では養子にいく先もおいそれとは見つからない。それで父は虎之助を坊主にしようと考えたようだった。足軽の子は所詮足軽にしかなれないが、坊主であればたとえ貧しい漁師の子でも大僧正になることができると息子の将来を慮ったからだった。

しかし、父は息子を寺に入れる前に亡くなり、虎之助は坊主になるのを拒んで剣に打ち込み、その道で名をあげるべく厳しい稽古に耐えた。

武者修行の旅に出たのは十七歳のときが最初だったが、たとえ訪った先の道場主を打ちすえることがあっても、およそ金銭とは無縁の旅を続けることを強いられた。ごくたまに道場の裏手の黴臭い小部屋に招じられ、師範代から、これを、といってもったいぶって草鞋銭を差し出されることがあったが、それも鼻紙の中に二分銀が入っていればよい方だった。大抵は五匁銀とか二朱銀であった。

「お代りをどうぞ」

握り飯を手に置いたまま様々な思案に心を揺るがせていると、老婆が空になった湯呑みを取って、代りに湯気の立った新しい茶を置いた。見ると、湯の中に桜の花弁が浮いている。

「これはかたじけない」

落ちついて礼をいったつもりだったが、やはりあわてていたのだろう。これで一杯五文のはずの茶代が十文になってしまった、と無念に思う気持が湧き上り、その思いが顔に表われるのを気取られまいとして、ガブリと握り飯に食らいついた。

――や、しまった。

これで夜食がなくなった、と青ざめたとき、なんじゃろう、という老婆の呟きが聞こえた。薬売りは床几から立ち上って茶店を囲った葦簀の外に出ていった。老いた行商人も腰を伸ばして大声のする方に顔を向けようとしている。怒声は次第に近づいてくる。

「喧嘩かね。いや、誰か追いかけられているようだよ」

そういったあとで何事か呟いた薬売りの声が、たちまち荒々しい怒声の中に呑み込まれた。

茶店は、三枚橋町の南端を流れる三間程の幅の川の橋の畔に建っていて、葦簀の間から褌姿の男たちが数人で、堤の道に転がった者を打ちすえている様子が垣間見えた。

「このやろう、ふてえやつだ」

「簀巻きにして川にほうり込んじまえ」

怒鳴っているのは港で働く人足たちのようで、中には手に棍棒を持っている者もいる。相手はたった一人で、乞食のような身形をしている。その額からは血が滲み出し、すでに気絶しているのか許しを乞う声もたてられないようだった。

ひどいことをする奴等がいたものだ、と思いながら飯粒を噛んでいると、茶店に戻ってきた薬売りが、あのままでは殺されてしまいますよ、と青白い顔でいって声を震わせ

た。

「たかが餅を盗んだくらいでよってたかってなぶりものにして、早く助けてあげないと本当に簀巻きにされた上、川にほうり込まれてしまいますよ」

薬売りは古着屋の老人と茶店の老婆に顔を向けていってから、ジロリと虎之助を睨みつけた。侍のくせに見て見ぬふりをするつもりか、とその目はいっている。

「よかろう、それがしが助けてやろう」

虎之助は片手に握り飯を持って立ち上った。老人と老婆がそろって灰色に染った目を向けてきた。どうやら成仏が近づくと、人はそんな目の色になるものらしい。

「だが、それがしは田舎者なのでうまくは喋れん。代りにおぬしが口上をのたまってくれ。向ってくる奴がいたら痛めつけてやる」

そういって薬売りを前に押し出した。薬売りはウァウウァウと喚いていたが、まだみすぼらしい身形をした男を殴っている人足どもの前に突き出されると、観念したのか、おやめなさい、と女のようにカン高い声を出した。

「殺してしまったら大変なことになりますよ。それ以上やると、こちらにいるお侍様がお怒りになりますよ」

「余計な手出しはしないことだぜ、お侍さん」

棍棒を握りしめていた三白眼の人足が、輪の中から出てきて盛り上った裸の肩を怒らせた。川風は冷たいのに、七、八名いる人足のほとんどが腕や胸を露出している。

「こいつはおれたちの餅を盗んだんだ。かばいだてするとおめえも同罪になるぜ」

そう言い様、人足は棍棒を振り回した。ぎゃっ、と叫んで転倒したのは薬売りだった。顔は虎之助の方に向けていたが、棍棒の先端は薬売りに狙いをつけていたのだ。喧嘩慣れした連中のようだった。

「痛い。膝が割れたあ！　痛あーい」

薬売りは膝頭を押さえて泣き叫んだ。人足達はそれを見て大笑いをしている。

「おめえもすっこんでいなよ」

「この間も喧嘩の仲裁に入った立派なお侍が、おれっちの仲間にやられて酒代を置いて逃げていったっけ。おめえさんも今なら一両だけで痛い思いをしないですむぜ」

下卑た笑いを浮かべてそういって前に出てきた鯰顔の人足は、虎之助の足の甲を力一杯踏んづけた。意識不明になった男を、さらに足蹴にしていたのはこいつらしい。

虎之助は右手に握った握り飯をその人足の前に突き出した。

「持っておれ」

「なんだあ？」

鯰顔を横に振った人足は、それでも反射的に食いかけの握り飯を泥のついた手で受け取った。

「盗んだな、この無礼者め！」

虎之助は脇差しを鞘ごと抜いて人足の手首に打ちつけた。

「い！」

人足は横転して身体を蝦のように丸めた。虎之助は空中に浮いた握り飯を摑んでから、倒れている男を抱え起こして茶店の裏手にある井戸まで運んだ。すさまじい臭気がその身体から漂ってきて、さすがに虎之助は眉をしかめた。

「水を呑ませてやれ。顔の血は洗ってから、布切れでしばらく押さえてやれば止まる」

老婆にそういって川堤に戻ると、手首を押さえて呻いている一人を除いて、人足どもが皆殺気立って身構えている。虎之助はまだ蹲っている薬売りを抱え起こした。

「この人たちが……この人たちが、お侍さまを……」

「分っておる」

薬売りは虎之助の耳許で声を震わせた。

「このサンピンめえ！」

背後で喚き声が起こった。土を踏む足音が立った。虎之助は最初の一人のみぞ落ちを太刀の鞘尻で打ちすえると、薬売りを床几に寝かしてから初めて振り返った。

背中を向けたままの若侍に、仲間の一人が倒された驚きが、人足どもの表情に表われている。

「たとえ物乞いといえども命のある人間だ。それをおまえらの気晴しのために半殺しの目に遭わせるとは、許せん」

虎之助は今度は太刀を鞘ごと抜いた。抜き身を見せるのかと身構えた人足どもの顔に

安堵と嘲りの色が浮いた。

「たたんじまえ」

自ら鼓舞するように三白眼の人足が大声を張り上げて棍棒を振り回してきた。虎之助は素早く踏み込むと、相手の右手首と膝に重い一撃を叩き込んだ。

「わあー　折れたー　折れたよおー」

人足は叫びながら川堤に横転した。それを見て残った人足たちは浮足立った。互いの顔を見合わせ、おまえがいけ、というように顎をしゃくる者もあった。虎之助は躊躇することなく人足たちの中に入っていき、腰の引けた連中にも容赦なく太刀を振り下ろした。川堤はあっという間に人足たちの呻き声で満ち満ちた。

橋の欄干に佇んでことの成り行きを見ていた二人の女は、恐しさのあまりしゃがみ込んで抱き合い、泣き出した。年老いた行商人は荷を背負ったまま、まるで鬼でも見たように恐れと憎しみの入り混った白い顔を向けて佇んでいる。

虎之助は茶店に戻り、老婆に茶代の十文を渡して荷を手にした。沼津宿で名のある道場を訪ね、一手指南を申し入れようと思っていたのだが、どうやら今の騒ぎでそれも叶わなくなったと考えながら、北東に向った。街道に出てまずは箱根を目指すしかあるまいと胸の内で一人ごちだ。

「もし、お武家様」

後から追いかけてくる者がいることは気付いていた。面倒なことを持ちかけられては

かなわぬ、という気持が働いて、虎之助は足早に歩いていたのだが、ついにたまりかねて声をかけてきたようだった。

「お武家様、もし、お武家様」

それで安心したのか、薬売りは背中に担いだ荷を草の上に下ろして、ヘナヘナと膝をついた。人足に打たれた膝は大丈夫のようだったが、疲れたものとみえて、顔には大粒の汗が浮いている。

そ知らぬふりでいたのだが、その声がなにやら切迫しているので仕方なく振り向いた。

「お武家様は、剣術修行の、旅だと、お見うけ致しましたが」

息も絶え絶えになってそういった。虎之助は、いかにも、と応えて薬売りを見下ろした。年齢のよく分らぬ顔立ちだが、叔父貴の年齢くらいにはいっているのだろうと見当をつけた。

薬売りは竹筒から水を飲むと、改めて居住まいを正した。

「わたしのお得意先で剣術のうまいご浪人様を捜している方がおられるのですが、いかがでしょう。お急ぎでなかったら、しばらく当地で逗留されましては？」

「得意先とは、剣術の道場か？」

「いえ、海産物問屋でございます」

「すると……」

「はい。最前茶店でお話ししていた『駿河屋』です。盗賊に入られたあともひどく警戒

されておりまして、番頭さんからもよいお方がいたら是非にと頼まれております。お武家様さえよろしければ、すぐにでも店主にお引き合わせ致しますが」

「とどのつまりは、商店の用心棒か……」

自嘲気味に虎之助は呟いた。路銀は乏しかったが、そのようなことをしてまで糊口をしのがなければならないのかと思うと情なかった。艱難辛苦をしてまで修行の旅を続けているのは、商店の番犬を務めるためではなかった。虎之助の望みはもっと高いところにあった。

「あちらでは一日五百文を出すようなことをいっておりましたが……」

五百文か、と虎之助は胸の内で唸った。それだけあればまともな旅籠に三日は泊れる。

「あれだけの腕前でしたら五百文では安すぎます。一日につき一分出すように番頭さんにわたしから申し伝えましょう」

「一日一分……」

「はい。四日で一両。十日も勤めれば二両二分にもなります。それだけの給金を稼ぎ出すには、わたしなどでは独楽鼠（こまねずみ）のように走り回って働いても半年はかかります。ほんとにお武家様が羨ましい」

四日で一両。しかも、その間は当然三食付きであるはずだ。

虎之助の脳裡に焼き魚と温かい飯が浮いてきた。顎を引き、うん、と唸った虎之助は、よしなに、と小むつかしい顔をして呟いたものだった。

二

駿河屋吉右衛門は大柄な男である。文化年間の初めに、沼津宿の上土町の百姓で相撲取りになった力自慢がいて、江戸に出て雷電為右衛門と相撲を取って負けはしたが、四ツに組んで頑張ったのは立派だと評判になり、その後前頭を張るまでに出世をした。その者のしこ名は「鯨富士」という大層なもので、吉右衛門の先代の弥左衛門が贔屓にして名付けたものだ。

吉右衛門はその「鯨富士」より一回り大きく、その歩く様はまさに陸に上った鯨のようで、町の者たちはこっそり「大鯨さま」と吉右衛門を呼んでいる。無論、大鯨、と「さま」を抜いて呼ぶ出入りの職人たちの方が圧倒的に多い。丸くて大きな色黒の顔の中に小さな目があり、首が体内に陥没した吉右衛門の様は、鯨の人間版と見えないこともない。

その吉右衛門が奉行所から戻って店の見えるところまで来ると、だんだんに歩みがのろくなり、その姿形までもが小さくしぼんだようになってきたので、供の手代は不思議になった。

「旦那様、どうかなさいましたか？」

手代がそう尋ねると、吉右衛門はいじけた姑を思わせるような表情になって、「朝、訪ねてきたのはあの浪人ではないのか」と呟いた。

いわれて店先に目を向けると、用水桶によりかかって目を閉じ、気持よさそうに日なたぼっこをしている五十がらみの浪人者がいる。

「たしか、そのようでございます」

忙しい最中に用心棒を志願してきた浪人がいて、手代はちらとその姿を見ただけなので確信はなかったが、とりあえずそう答えた。

「おまえは一人で先に帰りなさい。わたしは一回りして裏口から入るから、茂七に戸を開けるようにいっておくれ。腹をすかした浪人なんかの相手をしている暇はないんだよ」

そういうと、吉右衛門は造り醤油屋の脇の路地に、身体を半分に縮めて入っていった。いわれた通り手代は一人で店に戻った。浪人者のことは無視するつもりでいたのだが、暖簾をくぐるときになってふと気になり、横を向いた。すると間の悪いことに浪人者と目が合ってしまった。

仕方なく軽く頭を下げると向うでも下げた。妙なお侍だと思っていると不意にその顔が眼前に出てきた。およそ三、四間の距離があったはずなのだが、瞬きする間に縮まってしまい、手代はハッと息を飲んだ。

「駿河屋は裏口から入ると申したのか」

浪人者はそういって手代を見つめた。その目はきついものではなく、黒眼の底には妙

な和みがある。

「はい」

手代は思わずそう答えていた。浪人者はこっくりと頷いた。

「どうやらわしのことを思い違いしておるようだの。わしはこの通りの面体で、なんというか初めて会う人はみないやな感じを持つものらしい。おぬしもそうであろうが」

「いえ、さようなことは」

「じゃが、この剣呑な目付程には人は悪くないつもりじゃ。それに、わしはこの腕を売り込みに来たわけではない。駿河屋の身代を守れるのはわしをおいてほかにはないという義侠心から出ていることなのだ。密命を帯びての旅先でのことゆえあまり表立ったことはできんが、いずれ再びやってくる盗賊どもの二、三人は片づけることはできる」

「み、密命……」

「ま、そう堅苦しく考えることはない。駿河屋にはわしが奥の客間で待っていると伝えてくれ。それに、用心棒代など、少しも気にかけることはないとな」

浪人者はそういうと、手代の肩を指先で軽く叩いて店の中に入っていった。手代はなんとなく狐につままれたような思いで裏口にいき、主人を待った。その内身体の芯の方からほんわりと暖かいものが広がりはじめて、主人の顔を見たときには、まるで酩酊しているような気分になっていた。

「おまえここで何をやっているんだ」

吉右衛門は大柄な身体をぶつけるようにして手代を叱った。しかし、いつもは身を縮めてしまう手代は、今日は臆することなく、むしろ上機嫌で口を開いた。

「あのご浪人様はただの浪人ではありません。江戸より御用の旅でこられたお方でございます」

「御用の旅？　どういうことだ」

吉右衛門の顔に不安な翳りが浮いたのを見て、手代はしたりと頷いた。

「多分大目付様より密命を帯びての旅かと思われます」

「大目付様？　密命？　おまえいったい何をいっているんだ。気は確かかい？　そんなことあるわけないだろうが」

「それにあのお侍様は用心棒代を求めているのではありません。旦那様をお守りするのがお役目だと申されております」

それから手代は浪人からいわれたことを一言一句違えずに吉右衛門に伝えた。その間も身体がぽかぽかしてきて、どういうわけか自分が主人より偉くなったようにも感じられていたものだった。

庭先から客間に向うと、浪人者が障子を開け放ってくつろいでいる姿が目に入った。見かけは悪いが心根はやさしいんです、と手代が吉右衛門にいった言葉が胸に残っていたが、浪人者が銚子を手に酒を呑んでいるのを知るといっぺんに頭に血が上った。

「いくらお武家様とはいえ、無断で部屋に上り込むとは無体でございます」
吉右衛門は胸をそらせて言い放った。痩せ浪人に威張られてたまるか、という思いが渦巻いている。
「おぬし、今朝は居留守をつかったな」
浪人者は鋭い眼光を向けてそういった。うっ、と詰ったがここで引いては負けだと自らを鼓舞して吉右衛門は廊下に上った。
「一日一両の用心棒代などは聞いたことがございません。それにうちはもう金蔵の見張り番を、お武家様お二人にお願いしてございます。お二人ともやっとうの達人で、うちで働く者達にも竹刀の振り方を教えて下さるということでございます。これ以上ご浪人様をお雇いするつもりはありません」
「その見張り番が盗賊の一味であったらどうする？」
「ま、まさかそのようなことが。お一人は島田虎之助様といわれて、まだお若いが中津藩随一の剣豪として聞こえた方です」
「もう一人は？」
浪人者は銚子を逆さにして酒を呑んだ。
「も、もうお一人は元西大平藩で槍の指南役をなされていた戸田清八郎というお方です」
「西大平藩？　聞いたことがないな」

「名奉行の誉高い大岡忠相（ただすけ）様がご加増をうけて、三河碧海郡に陣屋を設けられたのがはじまりだと戸田様よりうかがってございます」
「ではなぜそやつは浪人をしているのだ」
「それは……色々と訳がおありになったのだと存じます。わたくしどもではそれ以上の詮索は失礼に当たると思い、何もお訊きしておりません」
「礼儀正しいやつだと誉めてやりたいが駿河屋、おぬしはなかなかの喰わせ者だな」
浪人者は逆さにした銚子の口を掌に当てて、ポンポンと叩いている。空になった銚子のお代りを催促しているのだと見当がついたが、吉右衛門はそ知らぬ顔で「何をいわれます」と応じていた。
「駿河屋、おまえは盗っ人だ」
「なんと！」
「おまえだけではない。先祖代々ずっと盗っ人だ。そのおまえが金蔵の見張り番を雇うなどとはちゃんちゃらおかしい」
「な、何を証拠にそのようなひどいことを申されます」
「証拠の第一はおぬしのそのあわてぶりだ」
吉右衛門はぎゅっと手を固く握った。この浪人者は小銭ほしさに口から出まかせをいっているのだといいきかせた。額に汗が滲んできたような気がしたが、拭ったりすると余計に勢いを与えることになると思い、我慢をして相手を睨みつけた。

「ほほう、すごんだ顔はなかなかの悪党面だな。さすが大盗賊千石孫兵衛の子孫だけのことはある」

「！」

「どうだ、驚いたか。わしをただの浪人者だと思うなよ」

「あ、あなた様はいったいどなた様で」

吉右衛門ははっきりと額に汗が噴き出すのを感じた。

「千石孫兵衛は朝倉家の家臣であったが浪人したのちは食うに困って、ついに諸澄九右衛門の配下になった。諸澄は元浅井家家臣とはいっても、織田に敗れた後は甲州あたりの山中で斬りとり強盗を働いていたやつだ。おまえの先祖は土寇の配下となって人殺しや盗みを重ねて小銭を貯えておった、そういうことだ」

「そのような出鱈目をどこから仕入れてきなさったので」

吉右衛門は汗を拭い、客間に入った。後手で障子を閉め、浪人者と暗くなりはじめた部屋の中で向いあった。どういうわけか、上体は熱いのに背中だけが冷気を当てられているように寒い。

「出鱈目かどうか、おぬしが一番よく知っているはずだ。千石孫兵衛は土寇から身を洗うと、金銀を持って蒲原三枚橋に腰を落ちつけた。だが年代を経るごとに段々に身代は目減りして、おぬしの曾祖父の代にはすっかり金はなくなった。細々と干魚などを売っていた曾祖父は、ある日、先祖ゆずりの血が騒ぎ、ついに大きな商家に火をつけた。火事騒ぎのどさくさに紛れて盗みを働こうという魂胆だったのだ」

「お、お待ち下さい。何をいわれます。わたしの曾祖父はそのような……」

「大悪人だったのだ。その思惑は成功しておぬしの曾祖父は火事場泥棒で数千両の金を手に入れた。だが火の手は早く、次から次へと類焼して何百軒という家屋が燃えた。焼け跡からは女、老人、子供の屍が次々と出てきた。その焼けただれた土の上に、『駿河屋』は建てられたのだ。この家は、死人の怨嗟に満ちている」

浪人者は銚子の口の中に指を入れ、それを上下に振って吉右衛門を睨みつけた。

「どのような方がお武家様にそのような話を吹き込んだのかは存じませんが、それはまったくの作り話でございます」

吉右衛門は懐から折り畳んであった手拭いを取り出し、目の周囲を拭った。胸の内では悲鳴をあげていたが、いたずらに取り乱してはこちらの弱味を見せることになる。息をゆっくりと吐いて、落ちつけ、と自らにいいきかせた。

「わたくしの曾祖父の三左衛門がこの『駿河屋』を興したのはお武家様の申される通りでございます。ですが商家に火をつけ盗みを働いたなどとは、とんでもない濡れ衣でございます。確かに大火事があったと聞いてはおりますが、それは近所の家の火の不始末が原因でございます。水野様のお役所で調べていただけば分ることでございます」

「ならばどのようにして大金を摑んだのだ？」

浪人者はそういって首を傾げた。妙な動作をするものだとそれとなく思った吉右衛門

だったが、気が付くと自分も浪人を真似て、同じように首を傾げていた。

「実はこのことはどなたにも明かしたことがございません。千石家の者にしても、総領にだけ言い伝える家の秘密なのでございます」

ではどうして自分は見知らぬ浪人者に秘密を喋ろうとしているのだろうと胸の内から疑問の声が上ったが、舌の方ではなめらかに動き出していた。

「火事の後、三左衛門は焼け跡を掘り返していたそうでございます。家材道具の内から、何か使えるものでも焼けずに残ってはいないかと灰を掻き回しておりました。すると不意に地面が抜け、ずぼりと足が一尺四方ほどの穴の中に埋まり込んでしまったのです。地面には厚い板が渡してあったようなのですが、火事で脆くなっていたのでしょう。一体この穴は何だと三左衛門が覗き込むと……」

「そこに甕があり、蓋を取ると中から黄金がごっそりと出てきた。そうだな」

「さ、さようでございます」

「それが千石孫兵衛の隠し金というわけだ。逃亡兵を殺し、その懐をさぐり、刀や鎧を盗んで貯めた血塗られた黄金なのだ」

「はい。あ、いえ、恥しながら申し上げますが、わたくしの先祖が元朝倉家家臣ながら土寇に身をやつしたのは事実でございますが、その甕の中の黄金は、そのような汚れたものではございません」

「では、何だ？」

「天正十年の夏、武田家にその人ありといわれた武将、穴山入道梅雪が十数騎を従えて落ちてくるところを襲い、その首級をあげた褒美に徳川様より頂いた恩賞であると聞いております」

「なるほど、そういうことか」

浪人者は口許を歪めた。笑ったようにもとれたが、どうやらそうではないようだと気付いたのは、浪人者の手にした銚子を顔に投げつけられたときだった。

「おぬしは根っからの悪党じゃ。わしの告白の術を腐りきった性根で解いてしまいおった。よいか、千石孫兵衛は頭領の諸澄九右衛門と計って、穴山梅雪の懐中から盗んだ書き付けが、武田軍の埋蔵金を隠した場所を書き記したものであると分ると、仲間を裏切って二人だけで埋蔵金を捜すことにしたのだ。しかも首尾よく見つけ出し、何食わぬ顔でこの地で住み出したのだ」

「そ、そのようなことは……」

「まっ赤な嘘だと申すのか。では、盗賊どもに全ての小判を盗まれたはずの金蔵に、以前にも増して厳重な鍵を取り付けたのは何故だ。腕の立つ浪人を二人も雇い入れたのは何のためだ。わしは知っておるぞ。千両箱の一つや二つ盗まれたところで、おぬしにとっては痛くも痒くもないはずだ。金蔵の床の下には、およそ三万両の金塊が眠っているのであるからな」

「そ、そのような話は出鱈目です。そのような話は……」

上体を揺らして立ち上りかけた吉右衛門に、浪人者は神妙な顔を向けながら、肩を軽く叩いた。

「出鱈目だと喚いても、もう遅い。わしはこの話を街道中にばら撒いてきた。食い詰め浪人の一党や盗賊どもが『駿河屋』を狙ってどんどんやってくるぞ。金のためなら皆殺しさえ厭わない連中だぞ」

「な、なぜそのようなことを……なぜ……」

「おぬしが許せんからだ。おぬしはこの店で働いていたサトという少女を騙して百両巻き上げた。あの百両は、サトの父親が自らの命と引き換えに手に入れたものなのだ。その金を盗んだ罪は重い」

浪人者の目が金色に輝いた。吉右衛門の身体が、知らず識らずの内に震えてきた。

「ど、どうしてそんなことまで……あなた様はいったい……」

「しかも、おぬしはサトから金を盗んだ上にサトを売りとばした。それは断じて許すわけにはいかん」

「あ、あなた様はいったい……いったい……」

「名を聞きたいか。ならば教えてやろう。わしは一心斎という。紅葉一心斎」

「もみじ、さま……」

一心斎と名乗った浪人の顔が、吉右衛門に接する程に近づいてきた。とたんに息が苦しくなった。

「わしが盗っ人どもを追い払ってやろう。ただし、日当は十両」

「じゅ、じゅうりょう！　そんな無茶な」

「さらに、盗っ人を一人斬り倒すごとに百両」

「げっ！」

「今夜中に二十人の盗賊が押し寄せてきたら、おぬしは二千十両だけですむというわけじゃ。ハッハハ」

浪人者は吉右衛門の前から顔をはずすと、心地よい笑い声を残して部屋を出ていった。開け放たれた障子の向うに、晩秋の庭に咲く草花が目に入った。

吉右衛門はぼんやりしたまま庭を眺めていた。それから、思いがけないものを目にしたように感じて、あわてて頭を振った。夕暮の空に、赤々と色づいた紅葉の葉が、可憐なまでに風に揺らいで震えていた。

三

「おれの睨んだところ、やつは引き込み役だ」

昼飯のあとで、あてがわれた部屋でゴロリと横になっていると、刀を左手に下げて入ってきた戸田清八郎がそういって頭を振った。

「誰のことです？」

虎之助は上体を起こして戸田を見直した。年齢は三十程だが浪人暮しが永いせいか、挙動に落ちつきがなく、いつでも物欲しそうな顔をしている。それに目が赤く濁っているのも気に入らなかった。

「あの紅葉一心斎とかいう爺ィだ。昼間から酒など飲みよって、あのふてぶてしい態度は尋常ではない」

「だから盗賊の一味だと戸田殿はいわれるのですか」

「間違いない。この『駿河屋』には途方もない大金が隠されていると聞いている。やつは用心棒になりすましてはいるが、その実、黄金の隠し場所を探っておるのだ」

戸田は手の甲で顔をこすりながら荒んだ目で虎之助を眺めている。だが目の焦点は常にどこかへ移っていて、戸田の語ったことが口から出まかせであることを証明していた。

「盗賊が押し入ってきて仮りに斬り合いになった場合、やつには背中を向けぬようにすることだ。後からバッサリやられるぞ」

戸田は口許を歪めて黄ばんだ歯を覗かせた。虎之助は刀を手にして立ち上った。

「ご注進は感謝しますが、しかし、我々は金で雇われたとはいえ同志です。仲間を疑うような言動は慎んで頂きたい」

虎之助はそう言い捨てて湿った小部屋を出た。一昨日、駿河屋の主人から、元西大平藩大岡家の槍術指南役であったという戸田清八郎を紹介されたのだが、そのときから、何かうさん臭いものを感じていた虎之助だったが、時を経るごとにその思いが強くなった。第一、槍を握る腰つきがまったく定まっていない。かつては鍛錬をしたのであろうが、その身体も酒毒にやられてすっかり参ってしまっているのが明らかだった。

ああはなりたくないものだ。

虎之助の望みは剣名を上げて、どこぞの藩に剣術指南役として雇い入れられることであるのだが、戸田の汚れた姿を見ていると、さかりを過ぎた剣士のみじめな生き様が如実に感じられて、嫌悪感さえ催してくる。

――戸田の目は節穴だ。紅葉一心斎というあの男は、尋常な遣い手ではない。

虎之助は昼でも薄暗い廊下を金蔵の方に向って進みながら、前夜のことを思い出していた。

交代で行なう見張り番は、一人が休んでいる間に、一人が金蔵の前に立ち、もう一人は広い庭を見回ることになっているのだが、虎之助が一刻（二時間）の休息をとったあとで金蔵のところに行くと、不寝番をしているはずの紅葉一心斎が横になって眠っていた。しかも床に蒲団を敷いて掛け蒲団にくるまって鼾をかいていたのだった。

これには虎之助はあきれたが、あまり気持よく眠っているのでどうしたものかと迷っていると、庭先を見回って戻ってきた戸田清八郎が、なんという不埒な爺ィだ、と言い様、やにわに一心斎の頭に蹴りつけた。

そのとき、人形の頭が糸に引っぱられて持ち上げられるように、一心斎の頭がひょいと上った。戸田は勢い余って横転してしまったが、一心斎はそのことには気を留める様

子もなく、大欠伸をして起き上がると、ここは冷える、とのたまって蒲団をかついで部屋に戻ってしまった。

その人を喰った態度に虎之助はあっけにとられてしまったものだが、そんな風変りな人物は中津でも下田でも会ったことがない。風聞で、九州随一の剣客、大石進が江戸の道場を荒し回った際、大刀も抜かない〝ヘンなジイサン〟に敗れ去り、降参したという話が伝わってきたものだが、それは紅葉一心斎のような浪人であるのかもしれない、と代って金蔵の前に坐り込みながら考えていたものだった。

「紅葉殿はどうされた？」

金蔵にいくと小僧が一人所在なげに立っている。昼の間は別段しっかりと番をすることはないのだが、それでも交代の刻が来るまでは、金蔵の前にいることが用心棒の務めのはずだった。

「どなたかが訪ねて見えて出かけられました」

小僧は眠そうな顔をしてそう答えた。それを聞いて、戸田のいった「引き込み」という言葉を思い浮かべたものだが、まさかさようなことはあるまい、とすぐに打ち消した。それでも、一心斎を捜す気で外に出たのは、もしや、と思う疑惑があったからだろう。

海産物問屋を出ると隣に袋物を扱う店があり、その隣は傘屋になっている。その傘屋の前に「駿河屋」の手代が何か腑に落ちない様子で立っている。

「何をしている」

声をかけると手代はぎょっとしたように虎之助を振り仰いだ。

「紅葉一心斎様から申しつかりました傘を買いに参りました」

「傘？」

虎之助は空を見上げた。青く澄んだ空は気が遠くなる程の秋晴れであった。

「何故傘が入り用なのだ？」

「存じません。ただ注文してあるから取りに行けといわれまして……わたくしを名指しで……」

そういったとき手代の頬にほんのりと紅を射したような赤みが滲んだ。おや、と思っていると店の奥から親爺が出てきて、お待たせしました、といって一本の竹の筒を差し出してきた。それは傘の柄には違いないが、竹張りを全てとっぱらってしまったもので、その先端に三尺程の細い竹が二本、生えたようにひょろひょろと揺れていた。

「なんだ？　それは」

「さあ、わたしも初めて見るものです」

手代は親爺から手渡された傘の柄を、首を傾げて眺めている。手渡した傘屋の親爺もけげんな顔で突っ立っている。

「おお、出来たか」

不意に背後から声がして、紅葉一心斎の笑った顔が出てきた。目尻に皺があるが、老人という程の顔ではない。人の気配を全く感じなかったのは、一心斎の持つのどかな雰

囲気のせいかもしれないと虎之助は思ってみたが、不気味な感じは残った。
「これをどうするつもりですか」
虎之助は気を取り直して一心斎に尋ねた。うん、と頷いた一心斎は、柄の先についた細い竹が鞭のようにしなるのを、まるで子供のように嬉しそうに眺めてから、
「これでふぐりを盗むのだ」
と答えた。虎之助はさすがに狼狽してあたりを見回した。幸い他の者の耳には入らなかったようだ。
「だ、だれのふぐりを盗むのですか」
「盗賊だ。わしの手の者が探り出してきた。今夜、『駿河屋』に浪人数名を含んだ盗賊どもが押し入ってくるそうだ」
「と、盗賊が！」
手代はまっ青になった。
「安心せえ。おぬしらはいつも通り過ごしておればよい。わしが全部これで片づけてやる。店に戻っても、他の者にいうではないぞ」
「はい」
一心斎が手代の肩に手を置いてそう話すと、手代は急に顔に生気を取り戻して頷いた。妙なことに、その目はうるんでさえいる。
「紅葉殿、それはまことのことですか？」

虎之助は半信半疑で訊いた。一心斎の態度があまり落ちついているので担がれているような気がしていたのだ。
「無論だ。およそ十二、三人はいる」
「では、沼津藩の町奉行に知らせませんと」
「それは駄目だ」
一心斎は苦々しい顔をした。
「駄目？　何故でござるか？」
「わしの報酬が少なくなる」
そういうと、一心斎は傘の柄をくるくると回して虎之助の前からすうっと立ち去っていった。
「島田様、紅葉様はふぐりを盗むとか申されておりましたが、ふぐりとは一体何のことでございますか？」
「金玉だ」
虎之助は憮然として答えた。そんな、といった手代は、うるんだ目を一心斎の後姿に向け、今にも泣き出しそうな表情をした。その顔は首まで血で染めたように赤くなっていた。
戸田清八郎が見回りのため暗い庭に出ていくのを、虎之助は居心地の悪い思いで見送

った。盗賊の押し込みがあるだろうことを、戸田には伝えていないのである。一心斎から口止めされたものなのだが、やはり一応は伝えておいた方がよいのではないか、と思い直して雪駄をつっかけて庭先に足を踏み出した。

「待て、まだ動くな」

その声と共に、庭木の後から黒い影が現われた。月はなく、部屋から洩れる明りだけが庭先に淡い光を注いでいる。影は風のように虎之助の傍に忍んできた。

「戸田は盗賊の仲間だ。奴は裏口へ仲間の手引きに行ったのだ」

「一心斎殿、いつからそなた……」

闇の中に同化していた一心斎の方が、戸田が盗賊の仲間だということよりそら恐しいものに感じられて、虎之助の頭の中が一瞬空白になった。

「おぬしが戸田から毒入りの甘酒をふるまわれているときから潜んでおった」

一心斎は銀色に輝いた眼を虎之助に向けた。うっと呻いて虎之助は胸を押さえた。

「安心せえ。わしが取り代えておいた。よいか、戸田が盗っ人を庭先に引き込んだら、おぬしは逃げられぬように戸口を塞ぐのだ。戸田は斬り捨ててもよい」

「一心斎殿は？」

「わしはこいつで連中のふぐりを抜き取る」

昼間傘屋に作らせた傘の柄の先についた竹を揺すってみせた。

「お、お戯れを」

「このようなときに戯れていてどうする。玉を抜いてしまえば連中はおとなしくなる。その後でふん縛るなり殺すなり、好み次第に料理すればよい」

「し、しかし、そのようなものでどうやって……」

「試してみるか？」

一心斎はそういうと、白い歯を見せて腰を沈めた。すると虎之助の股間に冷たい竹の先端が当たり、踊るような動き方をした。

「お、おやめ下さい」

「はは、ま、そういうことだ。ふぐりの裏側を結んでいるこよりのような糸をひょいとほぐしてやればよいのじゃ。おぬしのふぐりもあとひと刺しで二つに割れてとび出してくるところであったぞ」

「お、愚かな……」

そう呟いたが、本当にそうなってしまっていたかもしれない不安が虎之助の胸に衝き上げてきた。

「さて、どうやら来たようだな」

一心斎は闇に目を凝らして呟いた。虎之助が裏口の方に顔を向けると、一心斎の姿は闇の中に溶けるように消えていった。あわてて虎之助は庭の底に沈み、戸口に向った。

——ここで待て。

戸口の見える庭木の陰に蹲ると、どこからともなく影が近づいてきてそう囁(ささや)くなり、

再び気配を消していった。

忍びの者かもしれん。

そう思ったとき、戸口を外からそっと叩く音がした。戸を開いたのはまぎれもなく戸田清八郎で、外から黒装束の者たちが夜の海を渡る魚群のように、次から次へと潜入してきた。

最後の者が入り終ったとき、虎之助は立ち上って戸田に近づき、脇差しの柄で当て身を食らわした。戸田が崩れ落ちると、庭の奥の方から物の倒れる音が風に乗って響いてきた。虎之助はそちらの方に向って闇の中を駆け出した。

石燈籠のあるところまで来て、不意にけつまずいた。そこへ一心斎に案内されて主の吉右衛門と手代が手燭を持ってやってきた。

「全部で十二匹。裏口にいる戸田の分も混ぜてしめて千三百両。なあーに、竹に溶かし込んだ金を売れば造作もないことだ」

一心斎はそういって首筋を叩いた。その右手には傘の柄が握られていて、足元には黒装束の盗賊どもが鮪のようになって並んで倒れている。股間を押さえている者の中には、口から泡を吹いて白眼をむき出している者もいる。

「し、死んでいるのですか」

吉右衛門が震える声で呟いた。それには答えず、一心斎は茫然と佇んでいる虎之助のところまで来て、人なつこそうな笑みを見せた。

「顔のよい奴は女形にして、おらんだかえげれすに売りとばそうと思うのだが、どうであろう」

一心斎はそういったが虎之助は何も答えられずにいた。ただ、胸の内で、愚かな、と呟いただけだった。

妖怪七変化

一

一心斎の姿を見失ったのは、沼津を発って三日後の夕刻だった。だが、虎之助は焦ってはいなかった。一心斎の行先が甲斐の忍草村であると分っていたからである。

紅葉一心斎と名乗る浪人の素姓は、数日間を海産物問屋の用心棒として共に過ごした後でも皆目見当がつかなかったが、そのどこかとぼけた風貌とは裏腹に、尋常ならざる遣い手であることは、十名の盗賊どもを一瞬の内に気絶させてしまったことでも明らかだった。

その剣さばきを、実際に目にすることができずに終ってしまった虎之助は、翌朝さっそく一手指南を一心斎に申し入れた。

「駄目だ」

一心斎の返答はにべもなかった。

「何故でござるか」

「おぬしと剣を交えたところで一銭の得にもならん」

「では、賭け試合ならよいと申されるのか。それがし、ここに四両程持ち合わせており

ます。これでいかがでござろう」

「わしは剣術修行などというくだらないことに、うつつを抜かしている阿呆の相手はしないことにしておるのだ」

そう言い捨てて一心斎は旅仕度にかかった。

「では、せめてもう数日なりとも紅葉殿のお供をさせて頂きたいのですが」

虎之助は必死で喰い下った。一心斎の言動を目の当たりにして、一度はくだらない人だと思った虎之助だったが、一晩寝ると考えが変った。一心斎のようなとらえどころのない剣客とは、もう生涯見えることがないのではないかという恐れに似た気持が胸を占領していたのだった。

「わしには供など無用じゃ」

「ご無用とあれば島田虎之助、勝手に紅葉殿のあとをついて参ります」

目をカッと見開いて、自分より一寸低いところにある一心斎の双眸を睨みつけると、日焼けした細面の顔から白い歯が覗いた。

「おぬしも余程閑とみえるな。あとをついてくるのは勝手だが、いきなり斬りつけてくるような真似はせぬことだ。あとで痛い目に遭うからな」

笑いながら一心斎はそういった。不敵な笑みというより、その笑顔はどこか一心斎の少年時代を彷彿とさせる無邪気なものだった。

沼津宿から東海道を東へ向った一心斎は、一刻の後には箱根ではなく奈良橋から北へ

続く田舎道に入った。そして三島大社に寄り、参拝をすますと掛茶屋に寄って酒を呑みながら饅頭を食いだした。

そこで隣合わせに床几に坐っていた薬売りと話し出し、お武家様はこれからどちらへ、という薬売りの問いかけに、

「忍草村だ」

と一心斎は答えたのだった。薬売りは我意を得たりと頷いた。

「忍草村には忍野八海と呼ばれる湧水池が八ヶ所ございますな。八湖巡拝と申して、それぞれの湖に祀られた竜王を順に参拝して回るそうで。修験者も多く見られるようでございますが、やはりお武家様も……」

薬売りはそこで一心斎の横顔に目を向けて当惑した面持ちになった。あっという間に熱燗を三本空けた一心斎の頬は、紅を塗ったように赤くなっていた。

一心斎の行先が忍草村という所で、その地に湧水池があることは薬売りの話で分ったが、その目的が修行のためだとは虎之助には思えなかった。

その日、一心斎はのんびりと、愛鷹山の裾野に広がる茶畑を眺めながら歩き、千福という村で宿をとった。虎之助も同じ宿に部屋をとったが、すぐ下が馬房になっていて、その臭いに朝まで悩まされた。

翌朝明け五ツ（午前八時）に宿を発った一心斎は、さらに北へ向ってゆっくりと旅を続けた。神山、大坂と過ぎ、橋を渡って駒門に入るとその地で発見されたという風穴な

んぞを覗いてそこでも酒を呑みながら饅頭を食っていた。

その日は須走という村の浅間神社の宿坊に泊り、一心斎は一歩も宿を出なかった。部屋に居合わせた者に訊くと、虎之助の歩いてきた間道は鎌倉から吉田口まで続いており、その先は甲府にまで達するようにつながっているのだという。

三日目の朝は凍りつくような寒さだった。一心斎はどうするのかと見ていると、宿坊であるにもかかわらず、陽が高く昇るまで眠っていて、行者たちをあきれさせた。

起きるとやおら旅仕度を整え、腰に草鞋を下げて出発した。虎之助もすぐにあとに続いたが、一心斎の姿が宿坊脇の水茶屋にあるので拍子抜けした感じになった。そこで一心斎は熱燗で一杯やりながら草餅を食っていた。虎之助は向いの煮物屋に入り、芋汁を啜り、ついでに握り飯を用意させた。

一心斎の姿を見失ったのは、それから二刻後で、籠坂峠にさしかかったあたりであった。急に濃い霧が吹き出し、一心斎の後姿が針葉樹と重なり合うようにして霧の中に染っていくのを、虎之助は幻を見る思いで眺めていた。たぶん、峠の茶屋で酒でも呑むのであろう。そう思って後を追った虎之助だったが、茶屋は店を閉ざしており、一心斎の姿はそこにはなかった。すぐに山道を下りだしたのだが知らない内に獣道に踏み込んでしまったようで、元の峠から続く径に出たときには、あたりはとっぷり暮れていた。虎之助は仕方なく、閉ざしている茶屋の戸をこじ開け、土間に入って集めた枯れ枝を燃やし、かろうじて暖をとって一夜を明かしたのだった。

不意を打たれたのは、樹木がきれて、眼下に大きな湖を望む高台に出たときである。

風を切る矢音を聞きつけ、虎之助はとっさに身を伏せ、かろうじて一ノ矢をかわした。二ノ矢は小太刀で払い落したが、鬱蒼と茂った草木の陰に身を潜めている襲撃者の姿は見えず、虎之助は油断なくあたりを窺って刀の鯉口を切った。

――山賊か。

ならば叩き斬って手柄にしてくれよう。

二ノ矢を払ったことで落ちつきを取り戻した虎之助は、そう思って内心にやりとした。山賊になる者は元々逃散した百姓か無宿者である。威勢はよいかもしれないが剣の鍛錬をろくにしていないので、受けに回ったら脆い。虎之助はそう踏んだのだ。

賊を討ちとって役人に突き出す。すると八州廻りから勘定奉行の許に知らせが届けられ、やがてはどこぞの大藩から武術の指南役としてのお召しかかえの声がかかる。

十九歳の虎之助の野心はたちどころに一千石取りの武術師範にまで広がっていく。だがその浮わついた思いも、木陰から現われた三人の男を前にすると、一瞬の内に緊迫したものになった。三人は百姓出の山賊などではなく、武道を心得た侍たちだった。

「よくぞ矢をかわされたな」

三人の背後から出てきた武士が笠を少し上げて暗い目を虎之助に向けた。

「旅の武芸者とお見受けする。ならば、この者たちの太刀を受けてみられい」

武士は奇妙にカン高い声でいった。その間にも、三人の侍は、抜き身を向けて、一寸刻みに間合いを詰めてくる。

「何者だ。何故の狼藉かお尋ねしたい」

「問答無用」

笠を被った武士はそう言い捨てて、自分は安全な、虎之助の間合いの届かないところまで下った。その傍で笹の葉のすれる音が騒ぎ、弓を持った小者が現われて、武士の背後にかしこまって片膝をつく様子が三人の侍の間から垣間見られた。

――もう矢を射るつもりはなさそうだな。だがそれはこちらを油断させる算段かもしれん。

虎之助はじわじわと詰めてくる三つの切っ先を見定めながら、背後に佇む二人にも気を送り続けた。

不意討ちや待ち伏せに遭うことには、虎之助は慣れている。むしろ、用心を怠らないことが廻国修行の間に習慣となって身についていた。

一人で多勢を相手にすることは、子供の頃から多くあった。豊前中津で生まれた虎之助は九歳のとき、肥後の人吉の郷士の家に移り住むことになった。前の年に父が死に、長兄が家を継いだが薄給のため五人もいる弟妹が養えず、一番末の弟の虎之助がまず養子に出されたのだった。

そこは球磨川を見下ろす山のさらに奥の小さな村だったが、山谷をはね回り手製の木

刀を持って狐狸を追いかけることが好きな虎之助にとっては格好の地だった。ときには、山に棲む山犬と出会い、その脳天を叩き割ったこともあった。

その野性的なふるまいが、狭隘の地に住む郷士の倅どもの反感を買った。虎之助は自分より一尺以上も背の高い連中に何度となく取り囲まれ、棒で打たれた。はじめのうちはやられたが、その内めったにやられなくなった。くやしさのあまり眠れない夜などは、掌の皮が破れるまで木刀を振るい翌日の襲撃に備える程の執念が、徐々に形になって表われたからだ。

二年後、虎之助は長兄に連れられて中津に戻った。それは虎之助の乱暴ぶりに辟易した養父が追い出しにかかったからだった。だが不意の襲撃にも動じることのない虎之助の膂力は、その二年の間に培ったものであった。ときどき虎之助は人吉でのひもじく荒んだ生き様を思い出し、識らずに涙を浮かべることがある。だがその思い出に残る情景は、虎之助にとっては唯一、感傷に浸ることのできる憩いの場所でもあった。

中津に戻った虎之助は堀十郎左衛門の道場に通い、連日連夜猛稽古に励んだ。五年後に戸田一刀流の免許皆伝を得て武者修行の旅に出た。各地の道場を訪ね、片っぱしから荒し回ったものだが、柳川藩立花家の剣術師範の大石進にだけは敵わなかった。五尺二寸の長竹刀の切っ先を喉にうけ、虎之助は道場の羽目板まで吹っとばされてしまったものだった。

だが、その大石進にも、二度目の武者修行となった今回の旅では、勝ちを収めることができた。試合の後で、闇討ちの不審を抱かなかったのはその大石進の道場くらいなもので、大石は虎之助の精進ぶりを大いに褒めてくれたが、他の道場の師範の中には、負けた腹いせに、真剣ではそうはいかん、と声高に叫んで門弟たちに襲撃を示唆する恥知らずの道場主もあった。

待ち伏せに遭う度に虎之助は傷を負ったが、同時に胆力もつき、竹刀と真剣の違いを肌身にしみて感じることもできた。それは剣客としてはすこぶる幸運なことではないか、と虎之助はこの頃になって思うようにもなった。

各地での試合の結果は、中津に戻った折に友人の中村栗園に語っていたのだが、この度の修行では、中村から乞われるままに、文にしたためて送るようにもなった。闇討ちに遭ったことを伝えると、文章家の中村は、藩の上役にも読ませるからもっと詳しく書いてこい、と催促してくる。そこで虎之助は、真剣を振りかざした者たちに囲まれながらも、臆することなく、敢然と戦った様を熱病にかかったようにも感じながら書くことになる。

封書を中村に送った後は、ふと気が抜け、どうかすると夢見心地に陥る。

島田虎之助という、かつては九両三分の俸禄しか食んでいなかった下士の四男坊が、全国津々浦々で剣の達人と相対し、そのことごとくを撃破、剣名を高めている、という噂が藩公の耳にも入り、中津藩指南役との御前試合も組まれ、その武道の伎倆と卑しからざる人格に感銘した藩公が、虎之助に是非に、と武術指南番の役目を与えて下さる

……。

虎之助の思いは、最後には、どの藩であれ、武術師範という役目に落ちついてくる。それ以外の思いは虎之助にはなかった。

――サクッ。

右端で刀を構える侍の足元から枯れ枝を踏まえた乾いた音が鳴った。

中央の侍は下段に構えて腰を落し、虎之助がひるんだ隙をとらえて、腹でも膝でもどこでもいいから突き崩そうと狙っている。

左端の侍は二人より少し若いようだが気力は一番充実していて、まず自分が一番先に突っ込むのだという決死の覚悟がその尋常ならざる目付きに如実に表われている。

「ふふ……」

虎之助の口から忍び笑いが洩れた。ごく自然に出たものだったが、冷たい山中の空気の中では意外に響き、それが笠を被った武士の耳にも届いたらしく、うろたえるような反応となって表われた。

だが、刃(やいば)を構えている三人の目には焦りと怒りが浮いた。三人とも色黒で背丈は五尺三寸、肩幅が広く、下肢にいくほど細くなっていて、足は極端に短い。

武道の鍛錬は怠ってはいないようだが、限られた流派、限定された者たち同士の中での稽古しかしていないのが、そのぎこちない目配りを見ても察せられる。しかも、三人の呼吸が少しずつずれ始めていた。いくら格下の者たちであっても、三人に呼吸を合わ

せて、一気に突き立ててこられては、虎之助であっても受けるのに難儀をする。

だが、虎之助の口から洩れた笑いを耳にして、三人の呼吸はさらに乱れた。虎之助は三人の未熟さを笑ったわけではない。藩公からお誉めの言葉を頂戴する己れの晴れ姿を一瞬脳裡に思い浮かべて、得意になっただけなのである。

左端の侍の上体が脹(ふく)れ上った。己れの体形を蔑まれたと憤ったのかもしれなかった。相手の隙を見出す間もなく、噴出した気力にまかせて打ち込もうとした。

その刹那、虎之助の真剣は横殴りに一閃した。左から中央にかけて刃を振り、一刀で二人を斃(ほふ)る。それは構えたときから決めていたことであった。

戸田一刀流は相対峙して威力を発揮する剣で、多勢を相手の乱戦には適しない。気力、胆力を籠め、相手の気を押し込んで一刀のもとに肉を斬り骨を断つのを本分としている。

数名の者を相手に一刀流を遣えるようにしたのは、虎之助の工夫である。それには九歳のときからのいじめによる経験が利いている。

鈍い音がして左端の侍の右肩がぱっくり開き血しぶきが立った。剣の切っ先で右の脇腹をえぐられた中央の侍は、枯れ草の上に倒れてすでに断末魔の悲鳴をあげている。

二人を斬った返す刀で右端の侍の左肘から先を斬り上げた虎之助は、笠を被った武士に向って脱兎のごとく走った。

「痛えーッ、痛えよう！」

背後で左腕を斬られた侍が、初めて人間らしい声をあげて叫ぶのを聞きながら、虎之助は武士に狙いを定めた。

「待て！　拙者は御用の旅だ。早まるな！　役目によって致したことじゃ。待て！」

武士は草の上に尻餅をつき、片手を前に突き出してあわてている。その口から泡が噴き出すのを目にとめて、虎之助は刀を下げた。

「御用の旅といわれたか」

「いかにも。拙者は鳥海三左衛門、韮山代官の手の者でござる。この下の忍草村に不穏な動きありとの報せを受けて探索に参ったのじゃ。それに特別に密命を受けておる」

武士はあわてて笠を取った。

背後から枯れ草をあわただしく踏む足音が立ち、虎之助は身体を右に沈めながら、反転して刀を振り払った。骨のぶつかる音がして、今しがた肩口を斬られた侍は、今度はこめかみから血を吹いて絶命した。

「この者たちは？」

「九一色郷に住まいする九一色衆の者たちだ」

「ご貴殿の手下でござるな」

「手下というわけではない。じゃが、手が足りぬので助勢を頼んだのだ。九一色衆の先祖は古くは大御所様の警固に当たっておったのじゃ」

鳥海は荒い息を吐いて立ち上り、背後にいる弓矢を抱えた小者を振り返った。

「あやつらを看てやれ」

そういったが、その顔にはあきらめの表情が滲んでいる。小者は弓矢を置いて泣き叫んでいる侍の方に走った。

「つまり、それがしを、忍草村に潜む不穏な輩どもに通じる者だと思われたわけですな」

「そうではない」

鳥海は思いがけなくきっぱりとした口調でいった。

「おぬしの腕前を試したかったのだ。どうだ、御用の役目を受けてはもらえんだろうか」

二

鳥海三左衛門が口にした言葉を聞いて、虎之助は目を剝いた。

「妖怪の村？　はて面妖なことを申される。ご公儀のお方の言葉とは思えませんな」

最後は憮然となって腕を組んだ。

「四月前、千石船もあるような大牛が、夜間、江戸の空を真っ赤に燃えて北東から南西の方向に飛び抜け、妖怪だと大騒ぎになったものであった」

鳥海は湖畔の小料理屋の二階座敷に席をとったのが落ちつかないらしく、しきりにも

ぞもぞしている。汚れた袴をつけている虎之助の方では、平野村という村に一軒だけあった鍛冶屋に、血糊の付着した刀を磨ぎに出したことが気がかりで、そちらの方に気をとられていた。

そこへもってきて忍草村にはたくさんの妖怪が出没すると、鳥海がマジな顔をしているので馬鹿馬鹿しくなった。

「風に乗って、火のついた大凧が吹きとばされたのでござろう」

「あの時期、風は北東からは吹かぬ。それに、その後も二度程不審なことがあった。月から飛んできたという大岩も目黒村に降ってきたし、裸の女が、昼日中、浅草寺の甍の上を跳び越えていくのを多くの者が見ておる」

鳥海は色黒の頬にあばたを刻んだ、海岸の岩肌のような顔を虎之助に向けて喉を鳴らした。そこへ女中が膳を運んできて二人の前に置くと、お酒はいらねえずらだな、と無愛想にいって階下に降りていった。

「いやあ、これはうまそうでござるな」

鳥海は膳に置かれた小魚のつくだ煮とワカサギの酢漬け、山菜を前にして目を光らせた。虎之助はさっそく箸を取った。

「頂戴致す」

煮物屋で作らせた握り飯は昨日の内に全て食べてしまっていた。今朝から何も腹に入れておらず、身体が一枚の紙になったように感じはじめたときだったので、飯は冷えていたが虎之助はうまいうまいと胸の内で堪能して食べだした。

二杯目をおかわりしようとしたとき、鋭く射してくるものを感じて顔を上げると、鳥海が歯を喰いしばり、顔面を真っ赤に腫れ上らせて虎之助を睨んでいる。

「いかがされた」

鳥海は膳の物にはまだ手をつけていない。両手を膝に置き、鷲の爪のように強く袴を絞っている。

「食わんのか？」

「確かめておきたいことがござる」

鳥海は食いつきそうな目をしていった。

「なんでござるか」

「この料理屋で中食をとろうと申されたのは島田殿でござったな」

「いかにも」

「ではそれがしは島田殿から饗応にあずからせて頂くと理解してよろしいのでござるな」

「なんと！」

飯を盛った丼を途中で止めて虎之助は鳥海を見返した。山中で待ち伏せをし、勝手に虎之助の腕前を計っておきながら、その無礼なふるまいを詫びようともせず、さらに虎之助に頼みごとをもちかけてきた男である。

この上飯までたかろうというのか。

虎之助は役人のさもしい根性にあきれて口がきけなくなった。

「隠密の旅故、村の庄屋を訪ねて無心するわけにもゆかぬ。八州廻りのように賭場に踏み込んでテラ銭を私腹することもできぬ窮屈な身なのじゃ。なにせ手許には銀一分もない始末。許せよ」

そういうなり、鳥海は丼に冷や飯を盛り上げると、ガブリと食らいついた。それから餓鬼のように食いだした。飯を喉に詰まらせても委細かまわず詰め込んでいく。虎之助は仕方なく首を振って煮つけに箸を伸ばした。

「いや、ご馳走になった。かたじけない」

膳の物をきれいに平らげた鳥海は、軽く頭を下げてぬるくなった茶を飲んだ。それから障子を開き、靄のかかった湖を見下ろして顎をしゃくった。

「この湖は山中湖と地元の者は呼んでおる。この湖畔を半里程巡って峠を越えると内野村に出る。その内野村に接しているのが忍草村だ。ところでおぬし、何用があってこんなところに参ったのじゃ」

腹のふくれた鳥海は、急に居丈高になって胸をそらし、虎之助を見下ろすようにしていった。実際は虎之助の方がずっと背丈があったから、鳥海は相当無理をして背筋を伸ばしたことになる。

「人を追っておった」

「追う？　すると敵討ちか」

「いや、そうではござらん。ある剣客に一手指南を仰ごうと存じて追ってきたのだ」

「ほう。おぬし程の名人が指南を仰ごうというのであれば余程の手練の者であろうな。じゃが、拙者の師にはかなうまい」

「鳥海殿も剣術をなされたのか」

虎之助は素朴に質問を返した。鳥海は先程の不様に尻餅をついた己れを思い出したらしく、いったんは狼狽したがすぐに立ち直って口の端に泡を浮かべた。

「いかにも、江戸におったときには練兵館で日夜研鑽を積んだものじゃ」

「練兵館……。すると神道無念流の――」

「斎藤弥九郎先生じゃ。九段坂下俎橋に道場を構えられてからは斎藤派無念流の看板を掲げられた。拙者が上司の伊豆韮山代官の江川太郎左衛門殿も斎藤先生に剣の手直しを受けておられる。実はな……」

鳥海は不意に生臭い息を吐いて顔を寄せてきた。

「斎藤先生も近々甲斐に足を踏み入れることになっておる。無論お代官の命を受けて民情を探るためにやってこられるのだが、斎藤先生が来られる前に、拙者の方で片付けておかなければならぬことがある。忍草村に不穏な動きがあるとはさっき申した通りじゃが、それを煽動しておるのは百姓などではなく、一介の浪人者なのだ」

「……」

「おぬしも存じおるだろうが、今年は昨年と較べて米の収穫は三割減の不作であった。来年はさらにひどくなろうと検見する者もおる。あるいは天明の大飢饉の再来を予測する不届きな輩もおる。人心を不安に陥れ、一揆をたくらんでいる連中はさらにそれを吹聴する。忍草村、内野村ともに幕領だ。一揆が起きてはお代官の名に傷がつく。拙者が帯びた密命というのは、実は、その浪人者を人知れず闇に葬ることにあるのじゃ」

「……」

「その浪人者は忍草村に住んでおるわけではない。廻国しては幕府の失政をなじっておる。非常にやっかいな者なのだが、見張りにつかせておいた九一色衆が昨日、この浪人者が忍草村に戻ってきたことを突きとめたのだ。そこで拙者の出番となった」

「……」

「だが、ここに一つ二つ問題が生じた。まず拙者に手を貸してくれている九一色衆だが、かつては北条に与した反徳川の者どもを蹴ちらし、九一色十七騎と勇名を馳せたものであったが、泰平の世が続くと共に研鑽を忘れ、今ではごくわずかの者どもが本栖湖北の烏帽子岳にこもって修行をしているに過ぎん。しかも、そのわずかの者たちも、忍草村の番犬ともなった浪人者に倒されて土の下に眠ることに相なった。おぬしが斃した三人の内の二人もすでに死に、いま一人も恐らく明日には棺桶が必要な身となるであろう」

「それは鳥海殿が仕掛けたこと。それがしの罪ではござらん」

虎之助はむっとして言い返した。顔立ちは異相で醜悪ともいえる鳥海が、口に油でも

流したように調子よく喋るので居心地が悪くなっていた。それに、鳥海のいう浪人者に対して、「もしや」と思う気持があり、そのことも虎之助を落ちつかないものにさせていた。

「いや、拙者は島田殿を責めているのではござらん。三人掛りで一人の者を倒せないようではどうせ生きていても使い道はない。殺されて当然というものでござる。残された手は、九一色衆に頼まず、近在に住む郷士や長脇差の中から腕っこきの者を募って、全員で浪人者をワッと取り囲んで一気に突き立てることしかないのであるが、なにせ忍草村は名にしおう妖怪の出没する村。血を見ることが平気な連中も相手が妖怪となるとおぞけをふるって誰も寄りつかん。探索に出した小者の報せでは、江戸の町の上を飛んだ火を吹く妖怪は、どうやら忍草村で生まれたものらしいということであったのじゃ」

「鳥海どの――」

虎之助は組んでいた腕を解いて上に伸ばし、ふわっと大きな欠伸をした。鳥海は鼻梁に皺を寄せて虎之助を睨んだ。

「一揆の起きる不穏な動きがあるというのは分り申す。名の知れぬ浪人者が稀代の剣豪であるらしいこともよろしい。だが、妖怪の話と一緒にされてはそれがしはとても――」

「浪人者の名は分っておる」

鳥海は眉尻を上げて毅然と言い放った。

「一心斎と申す五十がらみの男だ。白鳥一心斎」
「白鳥……？　紅葉一心斎とは申しませんでしたか」
「いや、白鳥一心斎と村の者は呼んでいる。白鳥とは似ても似つかぬ烏顔の男だがな」
ははは、と鳥海は乾いた声で笑ったが、虎之助が表情を変えずにいるので気まずそうに咳払いを一つしてみせた。
「拙者が何故待ち伏せなどという武士にはあるまじき姑息な手段を遣ってまで、腕の立つ剣客を捜していたか、これで理由が分ったであろう」
「妖怪を恐れぬ浪人を雇って、白鳥一心斎を斬らせるつもりですな」
「さよう、さすが剣豪、お若いのに察しがよい」
鳥海は口を開いて舌を踊らせた。ヘンな嬉しがり方をするものだと思いながら虎之助は片膝を立てた。
「それがしとて妖怪は苦手でござる。このお役はご免蒙る」
「待たれい」
立ち上った虎之助の前に鳥海は両手を広げた。その顔は芝居がかったように不敵な表情になっている。
「おぬしのことはすでに忍草村に潜めてある密偵に知らせてある。この者の工作で、おぬしは忍草村および内野村の用心棒として、十日間、村に留まる手はずがつけられるはずだ」

「何のための用心棒でござるか」
「今宵、庄屋の娘ら村娘四人がかどわかされる。娘どもは一心斎の命と引き換えに戻される。村では万一のことを思って、新たに用心棒をかかえるはずじゃ」
鳥海の頬肉がゆるやかに蠕動（ぜんどう）した。出世のためには他人の命は虫けら同然と見なす役人の素顔が露呈したようだった。
「なる程、貴殿の狙いがはっきり分った。白鳥一心斎の身内として仲間に入り、安心させておいて一心斎を闇討ちせよということだな」
「昼の内に後からバッサリやってもよい。評定所送りにする手間がはぶける」
「それは代官の下役の仕事ではござるまい。それがしに白鳥一心斎を斬らせておいて、全ては己れの手柄にするご所存でござろう。やりたければ貴殿一人でやるがよい」
虎之助は鳥海の手を膝を送り出して払いのけた。島田殿、と背後から鳥海のカン高い声が響いてきた。
「手柄はみんな島田殿のものだ。拙者は代官様に詳細を書面で知らせる」
「代官様か。それもいいが、それがしの望みは、もう少し高い」
廊下に出るとさらに高い声が虎之助を追って背中にぶつかってきた。
「斎藤弥九郎先生は、江川太郎左衛門様の後楯があって道場を建てることができたのだ。江川様の力は伊豆韮山に留まるものではないぞ」
「……」

虎之助の胸に、小さな花火が上った。それは明るさを灯すと共に、微かに痛みを伴うものでもあった。

チッ、と虎之助は舌を鳴らした。自然に出た舌打ちのようでもあった。返答をせずに狭い階段を降りだした虎之助の耳に、さらに鳥海のきなくさい声が届いてきた。

「飯代を忘れずに頼むぞ」

三

日が暮れると寒さが虎之助の身体にそっと覆い被さってきた。祠（ほこら）の周囲は冬でも葉をつけた低い木が植わっているので風はさほど感じないが、昼に食べた丼飯はもうこなれてしまって、さっきから腹の虫がしきりに鳴いているのが情ない。

忍草村に入ってから、忍野八海と呼ばれる湧水池や浅間神社を見て歩いたが、どこといって変りばえのしない村であることが分っただけだった。ただこの地の湧水は富士の御手洗の霊泉とされていて、冬だというのに衣を一枚まとっただけの修験者が、水を浴びて精進している姿も望見された。その僧たちの姿も、暗くなると墨汁の中に溶け込んでいくように消えていった。

虎之助は祠の傍に置かれた四角い石に腰を下ろし、冬枯れの田んぼで麦作りの準備をする百姓の働く様を眺めていたのだが、その百姓の姿も今は見えない。その向うにあった庄屋の屋敷も立派な長屋門も、闇の中に同化している。

一刻程歩いて虎之助なりに理解したのは、忍草村の村高は三十石余りであるのに、庄屋をはじめ、村人たちの暮しは割合に豊かであり、それは富士山に入って柴草を刈り、あるいは家具用材の木を切り出して銭に換えているからだと知ったことだ。

内野村には湧水池がなく、そのため七十石程の村高は全て畑作であるのだが、こちらの村でも百姓家の造りがしっかりしているのは、忍草村と同じく、山稼ぎのおかげだった。

そのせいか、両村の村民ともどこかおっとりとしていて、役人の姿ならともかく、埃をかむった浪人者など見るのは珍しいはずなのだが、さほど物珍し気に眺める者はおらず、往き違うときには丁寧に笠と手拭いを取って、頭を下げる百姓もいたほどだった。

だが、さすがに虎之助に声をかけてくる村人はいなかった。無論、鳥海三左衛門がいったように、用心棒の口がかかるはずもなく、一心斎の所在も分らないまま、虎之助は忍草村の庄屋の屋敷を、麦畑を隔てて望める祠の陰に身を潜めて見つめていたのである。

鳥海がかどわかすと宣言した庄屋の娘たちのことが気にかかっていた。鳥海は調子のよい男だが、その心の底には己れがのし上る為には、それだけではなくすれ違う全ての者を魔の神に人身御供として捧げようとする異常さを潜めている。

――それ程までに一心斎を殺したいのか。

今では白鳥一心斎は、紅葉一心斎のことであると虎之助の胸の内では決着がついてい

る。だが一つ腑に落ちないのは、あのどこかとぼけた風貌の一心斎が、百姓を煽動して一揆を起こそうと企んでいると鳥海がいったことについてである。

金銭には目のない男なのは分るが、およそ政治向きの背筋の正しさとは無縁の者だと虎之助の目には映っていたのだ。

「ひっ。ひいーっ！」

突然、悲鳴が響いた。それは男が声をひっくり返して叫んだようでもあった。

虎之助は祠の陰を離れると真っ暗な畦道を走った。虎之助の目は、闇の中でも薄い霧を通して見る程に対象をとらえることができる。庄屋の屋敷の土塀にも難なく跳び乗った。

「うわっ！」「ば、ば、ばけ……」

男の声が重なり合い、空樽が落ちて転がる物音が立った。それはシンと静まり返った田舎の冬の夜を、火事場騒ぎに似た不吉なあわただしさに変えた。

「だ、旦那様あ――」

「盗っ人ずらあ」

別の声が起こった。侵入した者は何かに驚いて逃亡しようとして樽にでも蹴つまずいたものらしかった。庭先では庄屋の屋敷に住む者たちが出てきて、侵入した者を手にした棒や鍋などで、てんでに打ちすえようとしている。それらの光景を、屋敷の土塀の上に屈んで、土間から洩れる淡い灯りに透かして虎之助は眺めた。

黒装束で身を固めた賊は二人だけのようであったが、すでに戦う気力をなくしており、ふやけた饅頭のようになって口からは泡を吹いている。女たちは剝き出しにされた賊の顔を恐る恐る覗き込んでは、互いに何やら相槌を打っている。それから南の方の夜空に顔を向けて、くすくすと水音のような笑い声を洩らした。

虎之助は女たちにならって、頭を回して南の空に目を向けた。身構えず、気を少し抜いた感じで眺めたため、虎之助はどす黒く渦を巻いた強烈な闇の拳を頭に食らった程の衝撃を受けた。

夜空が燃えて走っていた。いや、火で燃えたぎった竜と朱雀（すざく）が、互いにもつれ合いながら飛んでいた。その二つの怪物の背中に人の姿があるのを目にとめて、覚えず虎之助は、げっ、と声を放った。

――妖怪を操る人がおったとは！

目を丸くして息を呑んだ虎之助は、その人の姿に見えた物が、次に青い炎に包まれざま、頭から生えた柔らかい二つの角を振り回し、耳許まで裂けた口を開いて大笑いするのを目にとめて、ほとんど気が遠くなりかけた。頭の芯が痺れ、五感が消失してしまったのである。

しかし、虎之助は気絶して土塀から転げ落ちるような醜態を、庄屋の屋敷の庭先に集まってきた村人たちに見せずに済んだ。茫然としている虎之助の目に、島田殿、と呼びかける声が暗いたまりから聞こえてきたからである。

「そんなところで何をしておる。早く降りてこんか、うまい酒があるぞ」

「……」

白濁した虎之助の頭の中が次第にはっきりしてくると、目に映る浪人者の姿も鮮明に見えてきた。紅葉殿、と虎之助が声をあげそうになったとき、虎之助の感極まった思いとは裏腹に、一心斎は遠い山寺でつかれる鐘の音の響きに似た屈託のない声でこういった。

「虎ちゃん、早くおいでよ」

その夜、虎之助はしたたかに酒を飲んだ。もともとそれ程飲める方ではない。だが土間から囲炉裏端に一心斎と共に上げられた虎之助は、女たちから酒を湯呑みに注がれるままに、喉に流し込んだ。中津では、料亭でもない限り、女が酒の席につくことはなかった。ましてや、侍の家で、妻や娘が男たちと一緒になって酒を飲むなどということは決してない。ところが忍草村の庄屋の屋敷では、妻や娘ばかりでなく、下女や飯炊きの婆さんまでが板の間に這い上ってきて、一緒になって飲み食いをしている。まだ十五、六歳の娘などは、一心斎と盃を交して頬をまっ赤に染めていた。

なんだ。一体、この馬鹿騒ぎは何だ、鳥海や娘かどわかしの賊どもはどうなったのだ、あの妖怪の背に乗っていたのは人間なのか、魔物なのか。えーい、なんだか全て分らなくなってきたぞう。

虎之助はぐるぐる回る頭を振って一心斎にもたれかかった。そうしながら昼間、山中で待ち伏せに遭ったことや、一心斎をつけ狙っている役人のいることを喋ったあとで、一体あんたはここに何をしにやってきたのか、妖怪はこの村で生まれたと噂されているがまことのことなのか、ともつれた舌で色々と質問をした。

一心斎はそのいちいちに相槌を打ち、疑問にも答えていたようだが、朝になって思い返してみると、虎之助は何にも覚えていないことに気がついた。

こんなことではとても剣客としては生きてゆけぬ。昨夜、寝込みを襲われたら一突きでやられていた、とぶつぶつと呟きながら、痛む頭をそっと持ち上げて起き上り、立ち泳ぎをするような仕種で井戸端までいった。

ようやく顔を洗い終えて荒い息をつき、さっとあたりを見回すと、納屋のある裏庭に一心斎の姿が見えた。虎之助は水を呑み、吐く息に酒の臭いが混っていないか確かめて、一心斎のところまでそっと歩いていった。

「一心斎殿。昨夜はまことに面目ない次第でござった。ご容赦の程を」

そう挨拶をすると、振り返った一心斎は朝の光の中に妙に艶やかな頬をさらして、やあ、といった。それから顔を盛り上った土の面に戻した。

「島田殿、これは何かご存知か」

一心斎は上体を屈めると、青い草をひょいと抜いた。一尺足らずの根の先は二股に分れてひげを生やしていた。

「さあて、人参のようにも見えますが」
「朝鮮人参だ。清国から種を仕入れ、ここで育てたのだ。村が豊かなのはこのせいだ。江戸の人参座に持っていけば、これ一本で百両になる」
「ひゃく両！」
虎之助の宿酔はいっぺんに飛んだ。
「大明見山では何百本と栽培をしておる。根を枯らしてしまうものも多いが、こうして太ったものは霊薬として珍重され、衆人の命を助くることになる」
一心斎はなごんだ眼差しで朝鮮人参を見つめ、土を軽く払って懐に入れた。
「この朝鮮人参を我が物にせんと、各地から魑魅魍魎どもが蝟集してきおる。おぬしが昨夜しきりにいっておったこっぱ役人も、これが目当てで九一色衆をそそのかして何度となく、襲撃をかけてきたのだ」
「鳥海三左衛門は一揆を企む不穏な動きがあるためだといっておりましたが」
「それはおぬしのように、剣術のことばかり考えておるうつけ者を騙して味方につける方便じゃ。この村に一揆の必要はない。もっとも近くの村ではいずれ起こるだろうがな」
一心斎は後に手を組み、裏の門から出て畑の中に入っていく。うつけ者といわれた虎之助はさすがに気分を害した。
「侍が剣術のことばかり考えてはいけませぬか」

「いかん」
「何故です。武勇を誇り、国を守るのが侍の務めではありませぬか」
一心斎の痩せた背中に向ってそう吠えるようにいった。立ち止った一心斎は鷹のような鋭い目を向けてきた。
「おぬし、まことにそう信じておるのか」
「当然です。一心斎殿は何の目的があって金ばかりにこだわるのですか」
「わしか。わしはいずれこの国を買い取ろうと思っておる。異国に乗っ取られたらいったんは身を引くことがあっても、異国の者と交渉して、この国を買い戻す所存だ」
「……」
虎之助はあんぐりと口を開いた。少しおかしいところがあると一心斎のことを思っていたものだが、この人は風変りなのではなく、とてつもない大ボラ吹きなのではないかと思い直した。一心斎は表情を崩さずにいった。
「おぬしは頭が悪いがいい奴そうなので教えて進ぜよう。この国で一番不必要な奴は将軍だ。その次にいらぬのは各藩主だ。大奥は将軍のうらなり陰茎を磨くためだけに存在する。しかしその費用は年間二十万両。米に換えれば二十万人の民百姓が食っていける勘定になる」
「そんなに……」
いったんは血が逆流しかけた虎之助だったが、一心斎の言葉につい引き込まれて怒り

を忘れてしまっていた。頷いた一心斎は畑を抜け、小高く盛り上った林の方に足を向けた。

「五百四十余藩の藩主が女に遣う金は合わせて四十万両。途方もない無駄遣いじゃ。そのため、百姓は牛馬のごとく働き、やがては厳しい年貢の取り立てにあって潰れ百姓となっていくのだ」

「……」

「その次にいらぬのが旗本、御家人、そして陪臣、つまり侍じゃ」

「侍がいなくても国が保てるといわれるのですか」

「いない方が保てる。どだい刀を差してふんぞり返っている者が政事を司るのがおかしい。ほほう、ここに落ちていたか」

しかし、そういう貴殿も侍ではありませんか、と虎之助は反論する準備をしていたのだが、一心斎が屈み込んでしまったので空虚な思いだけが腹に残された。

一心斎は枯れ木に引っかかっている黒く焼けた布を手にして虎之助を振り返った。

「これが昨夜の妖怪の正体じゃ」

「ま、まことでございますか？」

虎之助は夜空を飛ぶ燃えた竜を思い出して身震いをした。あれが妖怪でなくて何であろう。

「これは何でござるか？」

長い布のようなものに顔を近づけて虎之助は訊いた。焦げついた臭いがまだ残っている。

「平たくいえば鯉のぼりにつける吹き流しだ。形を色々と変え、調合した薬草の汁を滲み込ませれば火をつけても四半刻は燃えておるのだ。これを妖怪七変化という」

「し、しかし、昨夜は背中に人が乗っておりましたぞ」

「あれは鉋屑で人の形を造って乗せただけだ」

「で、では、空を飛んでいたのはいかようなる仕掛けのせいでござるか」

「物好きな烏が十羽、紐を咥えて夜空を飛んだのじゃ」

そういうと一心斎はすべるように林の奥に入っていった。虎之助があわてて後を追うと、一心斎の姿は林を抜けた荒地にあって、いつ現われたのか、五人の侍が一心斎を取り囲んで白刃を抜いていた。

「島田殿、我らに加勢なされ。剣名を上げるのは今をおいてありませんぞ」

鳥海三左衛門は白眼を剝いてそう叫んだ。その鳥海が女のような悲鳴をあげたのは、一心斎が右手の人差指を鳥海の刀の切っ先にあててゆっくり拳を回すように動かし始めたときだった。

「うぎゃあ！」

鳥海の身体は風車のように回って荒地に頭を突っ込んだ。そのときになって、宙に浮いて静止していた鳥海の刀が思い出したように地面に落ちた。

「！」

見ていた虎之助には何が起きたのか分らなかった。ただただ驚愕した。

「おぬしらも手を引け。昨夜のように夜襲をかけてきても、妖怪の餌食になるだけだぞ」

一心斎はそう静かにいって四人を見回した。向い合うようにして構えていた二人の侍は怖気づいて後ずさりをしたが、斜め後にいた二人は互いに呼吸を合わせ、蛮勇をふるい起こして掛け声もろとも打ち込んでいった。

――これは……何としたことだ。

静寂があたりを包んでいた。冬の朝の光は一心斎と侍たちの影を荒地に長く伸ばしていた。虎之助は、自分が胸の内で呟いた言葉が、外にまで洩れ聞こえたのではないかとさえ疑った。それ程の驚きだった。

それは一瞬のことだった。だが決して目にもとまらぬ早技というのではなかった。二人の侍が同時に一心斎の背後から打ち込んだとき、一心斎はひどくゆったりとした仕種で身体を開き、片腕を軽く横に振った。それは虚空を叩いたかのようにも見えた。一心斎と二人の侍の間には一間以上の開きがあったのだが、二人とも振り上げた刀を下ろすことができないまま、無言の内に前のめりになり、もつれた足で踊るように地面を叩くと、背骨を抜かれた烏賊のようになって倒れていったのだった。

「……」

気がつくと一心斎の姿は畑の畔道にあって、虎之助は残された二人の侍と見合いをする形で、荒地に茫然と佇んでいた。妖怪、という言葉が口をついて出たのは、余程後になってからのことである。

秘め事

一

その日、中村一心斎は更科峠に程近い山中を散策していた。前夜は湯田中という村に湧き出た温泉につかって身体をほぐしたのだが、垢を落しすぎたせいか、野宿慣れした浪人らしからぬ風情で、たえず大きなくしゃみを山中に響かせていた。

そのあたりはまだ飯山藩三万五千石、本多助賢の領内であったが、南の須坂藩堀直格の領地とは、更科峠より半里ばかり山道を南にいった小池峠で接していて、里では桜の便りがちらほらと聞こえだしていたが、二つの峠の間の山林には、まだ所々に雪が残っていた。

飯山城下から千曲川沿いの飯山街道を五里程南下し、川を渡って半里東へ進めば、陣屋のある須坂の町に出られるが、一心斎は飯山の城下を出るとすぐに千曲川にかかった吊り橋を渡り、夜間瀬川沿いの間道を南東に下る道を選んだ。

その行先にはこれといった名所もなく、名のある神社もある訳ではない。温泉郷の先には、まだ厚い雪に閉ざされた険しい山脈が、空へ続く氷壁のように立ち塞がっている。

一心斎は樹木の間から覗く峻険な山並みを、時折眩し気に目を細めて眺めた。そして

足下の雪を枝で掻き分けては、その下でけなげに芽をふき出した草を摘んで口に含んだ。

更科峠には茶屋が一軒だけあった。老爺が住み、夏から秋にかけては三十歳を過ぎた女が手伝いに来ていたが、旅人がほとんど通ることのないこの時期には、固く戸を閉ざしていた。

峠を挟んだ二つの村では、一方が薪や炭をこの茶屋の前に置いて積んでおき、里から上ってきたもう一方の村人がそれを背中に担ぎ、代りに大根やときには川魚を置いて戻っていく。領主が誰であろうと、それは昔から続いていた、村人達の物々交換の習慣であった。

一心斎の膝が崩れ落ちたのは、その峠の茶屋を見上げる、比較的なだらかな斜面に作られた畑地にさしかかったときである。額から白濁した汗を噴き出した一心斎は、それを拭おうとして笠をはずした。懐中から手拭いを取り出し、額に当てたが汗は拭われることなく、一心斎の尖った頬骨に滴り落ちた。

一心斎は片膝を、春の日差しに当てられて緩み始めた土の中に埋め、二度、大きく喘いだ。そして、遥か彼方を望むように、懐かし気な眼差しを峠の茶屋に向けると、ゆっくりと前に倒れていった。

茶屋の脇から旅姿の女が小さな悲鳴をあげて走り出てくるのを、一心斎の目はとらえたはずであったが、一心斎は起き上る気力もないようで、笠に埋めた顔を数回、左右に振っただけだった。

女を追ってこれも旅姿の町の者らしい若い男が街道から駆け込んできて、茶屋より一間程低い裏地に建てられた納屋の陰に姿を消した。若い男が女を捕えて、納屋の中に連れ込んだのは明らかだったが、一心斎は顔を上げることもできず、低い声で呻吟を続けていた。

納屋の中からは一度だけ、竹竿が弾ける音が響いてきただけで、あとは薄気味の悪い程静かになった。

その静けさの下で、一心斎は激しく咳込み、口から青汁を吐いた。顔は土気色で、生きている者のようには見えなかった。

二

男にとどめを刺し、息絶えたのを確かめてから、ツルは藁に尻をつき、大きく息を吐いた。人を殺したのは四人目だったが、やはりいいものではなかった。自分がそのように育てられ、仕込まれたのは分っていたが、それが運命なのだと思い込み、女としての生き方をあきらめる気にはまだなれなかった。ツルは二十三になったばかりだった。

——またいずれ見えるときがあろう。

浪人はそういってツルの髪にべっ甲の櫛を差してくれた。十一年前のことだった。

——これはとある女のために買ったものだが、その女は旅の坊主と駆け落ちをしてしまってな。あげる相手がいなくなってしまったので、おぬしにやろう。

浪人はそんなふうにとぼけたことをいってツルの気持をほぐしてくれた。男から物をもらったのは初めてのことだった。その浪人の目が、空の一番きれいなところを切り取ったようにすずし気に輝いているのでツルは胸が苦しくなった。

——あい、あむ、はっぴい。これは、あーめりかという異国の言葉だ。あたしの胸の内に恵みあり、という意味でな、それを毎日経の替りに口ずさんでおれば、おぬしはきっと美しい女子に育つぞ。そのとき会うのが楽しみだ。

浪人はいったん背中を向けかけたが、上体を戻すとふいに顔を寄せてきて、ツルの頬に唇を付けた。

それがどういうことなのか十二歳のツルには分らなかったが、浪人が広い背中を見せて立ち去ってしまうと、身体中が火がついたように熱くなった。それから湯あたりしたときのように茹ってしまい、草の上に腰を下ろして永い間ぼんやりしていた。

浪人が自らの手で洗ってくれた秘所は、もうすっかり乾いていて、痛みもそれほど感じなくなっていた。

浪人の後姿が夕方の風の中に溶け込んでしまったように消えてしまうと、ツルは急に恥しくなった。

博打うちのおっかないおじさんに担ぎ上げられ、頭と呼ばれていた大きな百姓家の納屋に連れていかれたことや、そのおじさんが裸にしたツルの上にのしかかってきたこと、

そして納屋に入ってきた浪人が、おいこら、と怒鳴りざま、おっかないおじさんを殴りつけてツルを助けてくれたことなどがそのときになって次から次へと思い出されてきた。だが、一番恥しいと思ったのは、浪人が裸のツルを抱き上げて納屋の裏を流れる小川まで運び、秘所を水をすくって洗ってくれたことだった。

——洗えばすべてがきれいになる。何も案ずることはないぞ。おまえの身体はきれいなままだ。

浪人はそういって、水を掌の中で転がすようにしてからツルの股の間にそっとかけてくれた。夢を見ているようなふわふわとした気分でされるがままになっていたものだったが、一連の出来事を思い出してみると、おっかないおじさんに裸にされたことより、きれいな目をしたおさむらいさんに秘所を洗ってもらったことの方がずっと恥しいことだと気がついたのだ。

そのときのことを思い浮かべると、ツルは今でも気恥しくなる。すると、自分の浪人に対する気持が、十二歳のときから少しずつ変化し、知らない内に胸の中では熟した柿のように重く色づいてしまっていることに気付いて、頬が赤らむのを覚えるのだった。

——このままではいずれ誰かに殺されてしまう。その前に、もう一度あのご浪人にお会いしたい。

美しくなったと、認めてくれるかもしれない。ツルはそう思い、ほっと溜息をついた。今の状態では、たとえ出会えたとしても、浪人にくっついてこの地を去る訳にはいかないことが分っていた。普段は料理屋の仲居でも、いったん密命が下されると、刺客としての仕事を全うしなければならないからだ。

今度の仕事は二年ぶりだった。秘かに鍛錬を積んではいたが、うまくやり遂げられるかどうか、ずっと不安だった。

しかし、うまくいった。男はツルの方で故意に隙を見せたことも知らず、納屋の中では得意になってツルの下肢を開き、自分の下帯を大あわてで解いた。

男の首に針を突き刺したとき、男は信じられないという顔でツルを見つめ、言葉にならない喘ぎ声を上げた。

その男が何者か、ツルは知らされていなかった。江戸から本多領を探りに来た者だという察しはついたが、それが役人に雇われている小者か、目付の支配下にある者なのかも分らなかった。あるいは、さらに上の方の密命によって動いた者かもしれなかった。

ツルは藁から腰を上げ、男の懐中に手を入れた。財布と短刀が出てきたが、他には何もなかった。書状らしきものを所持しておれば、ただちに届けるようにと、徒目付の山内五平に命じられていたが、男は矢立すら懐に入れていない。

ツルは男を跨いで納屋の戸に手をかけた。死体を始末する必要があったが、先に身体を拭いておきたかった。男は荒々しくツルを突きたてたが、それが入らぬ内に体液をツルの下腹にとばした。殺したあと、下腹に付着したねばった液体を紙で拭ったが、不快な感じは貼りついたように残っている。

納屋から出ると、冷気がすっと肌を刺してきた。ツルは納屋の横から、日陰になった腐葉土を踏んで低地に下り、畑の傍を流れているせせらぎの縁に蹲った。

水は手を切るように冷たかった。手拭いをせせらぎに浸し、水を絞った。あたりに人の姿はまったくなかったが、ツルは立ち上って納屋の裏手まで戻り、周囲からは見えにくい戸板の陰に蹲って着物の裾を開いた。

紺の脚絆はつけたままだった。女を犯す目的だけの男にとっては、脚絆をつけていようがいまいが、どうでもよいことだったのだろう。風情のない男は、ツルにとっては敵に等しかった。その意味では、徒目付の山内をはじめ、ツルがこれまでに会い、接してきた男たちは、みな敵だった。一人の浪人を除いては——。

下腹を冷たい手拭いで拭いながら、ツルは秘所を洗ってくれた浪人の手触りを思い出していた。

——おぬしが難儀しているのは見ておったのだが、なにせ小用の最中でな、すぐには駆けつけることができなかったのだ。許せ。

博打うちを打ちのめした後で、浪人はそういって白い歯を見せた。まだ子供だったツルには、浪人の持つ奥行きの深さが分らず、ただこわくて震えていたのだが、年を経るたびに思い出すそのときの浪人の様子は、年々渋みが加わって、どうかするとツルは、脹らみ出した胸に手を当てて、うっとりとしてしまうことがあった。

十二歳のあのときから数日を経ずして、ツルの運命は大きく変ることになったが、胸の中で広がっていく乙女の想いだけは、誰にも邪魔されず、ひとりで楽しむことを覚えていった。

刺客として育つために、無想願立流の服部六蔵からいくつかの秘術を授けられたが、その厳しい修行のあい間にも、ツルはこっそり浪人の顔と言葉を思い出しては、含み笑いを洩らすことがあった。

納屋の陰に蹲りながら、ツルは小用をしていたという浪人の十一年前の面影を想い出してほくそ笑んだ。使命を無事果したことで、気持に緩みが生じていた。それで浪人の剽軽な口調が、まるで耳元で響いているかのように聞こえたものかもしれなかった。

ツルは背後に迫った殺気に気付かず、無防備な体勢で下腹を拭っていた。鯉口を切る音を耳にとめたとき、ツルの首には刃が伸びてきていた。

「女、そのままこちらを向け」

切先が顎の柔らかい肉に当っていた。着物の裾を大きく開いてツルは、振り向くことができず、じっと身体を縮めていた。殺した男には仲間がいたのだ。自分の愚かさに気付き、死を覚悟した。

「こちらを向けといっているのじゃ」

男の口調には訛りがあった。越中か加賀かとツルは思った。

そろそろと横を向くと、虚無僧笠が目に入った。尺八を左手に持った虚無僧は、右手に二尺二寸の抜身をかかげてツルの顔を覗き込んでいた。

「身体ごとこちらに向けるのじゃ」

男の言葉の語尾にはぎこちなさが感じられた。方言を気取られまいとしているのだろう。ツルは観念して身体を男に向けた。手拭いを下腹から抜き、着物の裾を閉じたが、男はツルの動きを見逃さなかった。

「よい眺めだ」

男は切先で着物の裾を払った。強く締めたわけではないので、裾はたわいなく開いた。肩まで届こうという深編笠の中で、ギラリと光るものがあった。虚無僧笠は目にあたる部分が粗く編んである。笠を取らずとも、男の目にはツルの股の奥まで映っているのだろう。火のような怒りがツルの身体を貫いた。

ツルは上体を捻り、地面を半転した。

そうしながら手にした手拭いを鞭のように使って男の持つ刀に巻きつけた。男の口から怒声が上った。ツルは起き上りざま、右手に握った手拭いをぐいと引いた。泥を摑んだ左の掌からは、男の目を狙って泥が放たれた。

「つ！」

しかし、ツルの抵抗もそこまでだった。身を翻した男の手にした尺八がツルの首を打ち、ついで白刃が肩口を突いてきた。その痛みにツルは悲鳴をあげた。

「本多領には女忍者がいると聞いたことがある。じゃが、おぬしのような美形であるとは思わなかった。これは大変な拾い物をしたようだな」

笠の縁が心持ち上り、男の歪んだ口許が横向きに倒れたツルの目に映った。唇の端には一寸程の斬り傷が縦に走っていた。

「身の軽さを誉めてやりたいところだが、腰についた豊かな肉が邪魔をしたな。じゃが納屋に転がっている屍を見ておらなんだら、儂とて手傷を負わされていたやもしれぬ」

男は尺八を懐にしまい、虚無僧笠をはずした。その隙を見逃さず、ツルは地面を転がって一段低い畦道に逃れようとした。だが一回転したツルの腰に重い刀が打ちつけられ、その痛みは火花となって脳天にまで走ってきた。

「まだ殺しはせぬ。しかし、逃がす訳にもいかぬ」

笠を取った男は四十がらみで、鼻は潰れ、右目は白濁していた。あまりの悪相に、ツルは息を呑んだ。

「儂はもう四月も女と接しておらぬ。笠を取ると女が怯える。それに九両二分の給金では白首さえ満足に買うことができぬ。今日はよいご馳走にありついたようだ」

男はにっと笑った。黄ばんだ乱ぐい歯が覗き、さらに凄みのある顔になった。

「女忍者であれば、かような覚悟はできているはずじゃな。まずは裸身を拝ませてもらおう」

男はツルの着物の帯の結び目に刀の切先を差し込み、むっと唸ってねじった。帯の切れる音が大きく響いた。ツルはとっさに起き上った。そのツルの股の裏側を狙って、男は刀の峰を存分に打ちつけてきた。たまらずツルは横転した。

「骨は折れてはおらぬ。じゃが、駆けて逃げることはできぬ。立ち上って納屋まで歩け」

男は切先でツルの背中を突いた。ツルは着物の前を押さえ、のろのろと立ち上った。観念したように男の目には映ったのだろう。低く笑う声がツルの耳に忍び込んできた。

「下肢を鍛えた女子の女陰は、さぞかし美味であろうな。早う歩け。儂のいうことに従っておれば、命を落すこともないぞ。命あっての物種じゃからな」

ツルは振り返って男の顔を直視した。潰れた鼻は大きな石にでも打たれたのか、鼻の骨が折れたせいだと分った。攻めると強いが、存分受けに回ると脆いのではないかとツルは思った。

「見れば見る程美形じゃ。あの小者がおぬしの策略に気付かず、一人旅の若後家を手籠めにせんと襲いかかったのも無理からぬことじゃ。しかし、あやつは本懐をとげずに死におった。哀れなやつじゃ」

男の目的がツルを凌辱することにあるのであれば、勝機は訪れる。何者かは分らなかったが、絵師姿の小者を殺したときのようにやれば必ずうまくいく。ツルは自分の胸にそう言いきかせた。

「それにしてもおぬし、見事な腕だな。あやつの頸骨の間に針を差し込んだ技は、なまなかの修行では得られんものだ。血も流れておらん。いったいどのようにして殺ったのか、あとでじっくり教えてもらおう」

男は刀の切先をツルの背中に当てたままそういった。

「だが、儂は油断はせんぞ。まずおぬしを素裸にする。髪の中を調べ小者を殺った得物を隠していないか調べる。畳針のようなものであろうから、まさか女陰の中には隠せまい。じゃが、儂は用心深い性質でな、膣の襞を掻き分けて、じっくりと調べるつもりじゃ」

「あの者は何者でござりますか？」

ツルは立ち止ってそう訊いた。それからゆっくりと男に振り向いた。下卑た笑みを口許に浮かべていた男の顔に、不可解と思う色が漂った。

ツルが落ちついて声を放ったことも男を戸惑わせたのだろうが、それ以上に、ツルの質問が意外だったのだろう。

「おぬし、誰とも知らずにあやつをほふったのか」

見えている方の左目をぐりっと回してツルを眺めた。白濁した右目は何の変化もなく、薄気味の悪いままにツルの方を向いている。

「おぬし、誰の命を受けて動いておるのじゃ」

男はそう訊いたがツルが黙っているのを見て、微かに頷いた。

「それは後ほどじっくり聞くことにしよう。なに、おぬしのおかげで儂の仕事は済んだ。いくらでもゆっくりできる」

男は刀の切先をツルの着物の胸許に差し込み、左右に開く仕種をみせた。ツルはじっ

としていた。

「あの小者は我が領内を昨年の秋口からうろついておった。絵が巧みなので、離れに住まわせて屏風に白梅などを描かせる商家もあったが、儂らは江戸から領内を探りに来た隠密であろうと看破していた。昨年は不作であり、あちこちで百姓どもが不穏な動きをしておったからな。じゃが、今年の正月が過ぎると、あやつはふいに姿を消し、今度は本多領内をうろつきだした。里や山野に出没しては絵を描いていたが、いずれは何かを探って江戸表へ知らせるつもりでいたのじゃろう。大目付の配下の者だと見ていたのだが、ある筋からお上の直命を受けた者であることが分った」

「……」

「お庭番じゃ」

「ではお上というのは……」

ツルはそういって息を呑んだ。男は口の端を引きつらせたように歪めて頷いた。

「将軍家斉公じゃ。小藩潰しを楽しむいじわるな性分が出たらしいな。あるいは死に華を咲かせるつもりでおるのかもしれぬ。旗本であったらとうに隠居してよい歳じゃからな。さて……」

男はツルの胸許に目を向けると、たまりかねたように唇を拭い、顎をしゃくった。

「この次、探索の目が向けられるのは、我が領ではなく、本多領ということになる。おぬしのおかげで儂らは命拾いをしたものじゃ、あはは」

男の笑い声を背中に受けて、ツルは納屋の角を曲った。そのとき、目の隅に動くものが映った。顔を上げると、峠の茶屋の脇から一人の浪人が現われてくるところだった。

「女、この茶屋の者か」

浪人はまだ若く、二十前のようにも見えた。たくましい胸と発達した下肢の筋肉が、袴の上からも窺え、浪人の剣術が並のものではないことが一目で分った。

「なにをしておるのだ」

一段高い所から見下ろした浪人は、ツルの、後から続いて現われた男を見て異常を感じとったものらしい。男の返事を待たずに段を下りてきた。

「女、いかがいたした？　無体に遭うておるのか？」

浪人はそう言いながら柄袋を取った。ツルの背後でいきなりすさまじい殺気が舞い上った。とっさにツルは納屋の壁に身を寄せ蹲った。

「どりゃー」

男の怒声が起こり、浪人に向って跳躍していく後姿がツルの目に映った。次いで鈍い音がして骨の砕ける音が冷気の中で響いた。

血しぶきが男の背中から吹き上った。男が前のめりに倒れると、抜刀している若い浪人の蒼ざめた顔が現われた。

「女、こいつは何者だ」

浪人は肩で息をしていた。ツルは浪人の刀を抜く瞬間すら見えない早技に、ただおそ

れ驚いていた。服部六蔵から技を仕込まれたとはいえ、所詮は女子で、男のような腕力もなければ機敏さも身につけられなかった。ツルの武器は白い裸身と、五寸の長さの針だけだったのだ。本当の斬り合いを見たのも初めてのことで、その血の臭いに吐き気を催した。

「とっさのことで、峰を返すことが叶わず、斬ってしまった。拙者は中津藩士、島田虎之助と申す者。廻国修行の旅で当地に参ったのだが、いささか面倒に巻き込まれたようだ。すぐに役人に知らせねばなるまい」

人を斬ったばかりだというのに、島田と名乗った侍は落ちついていた。刀を納めると改めてツルを眺めた。黒い大きな瞳で見つめられると、ツルは自分が打ち捨てられた子猫のように思えてきて、思わず身震いが出た。

「こやつから脅されたのだな」

ツルは頷いた。

「こいつは何者だ？」

ツルは頭を横に振った。島田という侍はツルの着物をじっと見つめていたが、やがて声を落して、帯はどうした、と訊いた。

「切られました」

裏で、と続けようとしたが、声が出なかった。納屋の中にあるもう一つの死体が気がかりだった。

「案ずるな。役人には拙者が知らせる。見れば旅の途中で難儀に遭うたようじゃ。ここでしばらく休んでおれ」

侍はそういうと無造作に納屋の戸を開いた。一瞬侍の上体が凍結したようになった。そして、振り返った侍の目が、銀色に光っていた。

三

豊かな乳房が目の前で揺らいでいた。女は小さな喘ぎ声をあげ、苦し気に顔を左右に振った。

止血した肩口に近い胸許に当てた布に、血が滲んできていた。着物の上から虚無僧に刀で突かれたと女はいっていたが、女の柔肌は弱く、虎之助が女に乞われるままに着物を開くと、そこは穴が開き、血がどくどくと流れ出ていた。

とりあえず間に合わせの布を当てたがそれではとても収まりそうにない。

「女、着物を切るが、よいか？」

虎之助は藁の上に横たわっている女を中腰になって見下ろして、声をかけた。頷いた女が着物の前を開こうとした。

「も、申し訳ございませぬ……」

掠れた声でいって、女は目をかろうじて開いて虎之助を見ようとした。女の顔と首筋

に汗が浮き出していた。納屋の中とはいえ、手足をすり合わせたくなる程寒かったが、女の熱は異常に高まってきたようで、頬も炭火のように赤くなってきている。

「こ、これを、はずして……」

女は湯文字の紐に手をかけた。

「あ、それはならん」

虎之助はあわてて押しとどめようとした。その拍子に、先程納屋の隅に転がしたはずの絵師姿の男の屍につまずき、危うく女の身体の上に倒れ込みそうになった。

かろうじて藁に両手をつき、女との衝突を避けたが、腕の方はずぶずぶと藁の中に潜っていき、上体が勝手に沈み、ついには女の身体に密着する形となった。

「これはしたり、粗相を致した」

虎之助はあわてて起き上ろうとした。だが掌はますます藁の深い所に落ち込んでいく。

「いいんですのよ」

女はそういうと両目をぱっちりと開いた。閉じていた蓮の花がまばたきをしたような鮮やかな感じがした。

「お武家様はわたしの命を救って下さいました。わたしには、これくらいのお礼しかできません」

女の腕が腰骨に当てられてきたが、虎之助はそれに気付く余裕はなかった。

「女、それはいかん。いかんのじゃ」

「どうぞ、お願い」

女の口から熱っぽい息が吐き出された。その芳(かんば)しい香りに虎之助は胸を詰まらせた。

「女、拙者は島田虎之助と申して、ただ今は剣術修行の身なのじゃ」

「先程お聞きしました」

女はやさしい目を向けていった。それ程女を間近で見たのは初めてのことだった。艶(あでや)かな色の白さに虎之助は、ただただびっくりしていた。

「わたしは生娘ではありません。操を立てるべき夫もございません。どうぞお好きなようにして下さいまし」

女の腕が虎之助の首に巻きついてきた。虎之助の心臓は破裂せんばかりになった。

「女、何をいたす！」

必死で藁に埋った腕を抜こうとしたが、武道の稽古のときとは勝手が全く違って、どうしたはずみかもがいているうちに、虎之助の顔は、女のふくよかな白い胸の上に落ちてしまった。

「あ」

女は奇妙な声をあげた。

「違う、これは違うのじゃ」

そう叫んだが首に巻きついた女の力は存外に強く、虎之助は上体を持ち上げることができない。

「傷、傷の手当をせねばならぬ」
「そんなこと、あとでよいのです」
「そうは参らん。そ、それに、ここにも一つ、外にも一つ屍が転がっておる。早く役人に知らせなくてはならん」
「お武家様、初めてですのね」
「なに？」
女の唇と虎之助の鼻が接するところまで近づいていた。傷を負っているというのに、女の瞳には生気が漲っていて、熱く柔らかい乳房が大男の虎之助を下から転がすように持ち上げてくる。
「ぶ、無礼なことを申すな」
「でしたら、わたしの思いを遂げさせて下さいませ。さっきは本当に殺されると観念していたのでございますから」
女の腹がのたうったようになり、両足を女の身体の上で踏んばっていた虎之助の腰がすとんと落ちた。
女は両足を開き、虎之助の腰を挟んだ。そのとき、紐の解かれた湯文字の下から、雪よりも白い肌が露呈してきて眩しく輝き、虎之助の狼狽した目を射抜いた。
「お願いです、お武家様、どうぞ……」
耳元で女が囁いた。虎之助の背中が痒くなり、その痒みは胸の中にまで忍び込んできた。修行中の身に女は無用と自らに言いきかせ、二十歳のこれまで女に近づくことを厳しく律してきたのである。白粉の匂いを嗅ぐと不快にさえなった。

ところが、今の虎之助は雲の上に漂っているようなよい気持になりつつあった。どうしてこんなふうになってしまったのか、頭の中に色とりどりの花弁が吹き込んできて、考えがまとまらない。
「島田様、脇差をはずして下さいまし」
そういいながら、女は虎之助の脇差を腰から抜き、虎之助の腰に右手を回してきた。
「女……名は何という」
「ツル、と申します」
「ツルか。よい名じゃ」
女の名など尋ねるつもりもなかったが、しらずに口をついていた。小さいがしなやかな女体が虎之助の下で若竹のようにしなり、揺れた。
虎之助はまるで自分が一寸法師のようになり、笹の舟にゆられてせせらぎを下っているような錯覚にとらわれていた。
下帯の中に納まっていた陰茎に変化が起きてくると、煩悩の二文字を思い浮かべて耐えた。だが、虎之助の気持は断崖絶壁につかまっていて、あとは全ての意地を捨てて、揺らめく谷底に落ちていけばよいだけとなっていた。

この若い侍を、このまま納屋から生きて帰してはならない。

お庭番の死体を島田に見られたとき、ツルはとっさにそう決断した。藩のためにしている務めとはいえ、それは表沙汰にできない仕事だった。

務めの命令を内密に下され、その方法の指示によってツルは動くだけだった。失敗すれば、それは死につながる。

島田の口から、どのようなことが他国に洩れてしまうか分らない。露見すれば頭である徒目付の山内五平にも累が及ぶ。ここはなんとしても仕込まれた技で、島田の息の根を止めなくてはならない。

ツルは納屋に転がり込むと、この死体はどうしたことだ、といぶかる男の下に身体を投げ出し、肩口の傷を開いて呻吟してみせた。

島田は腕は立つようだが、見越した通り初心だった。それはツルの芝居を気どらせずにはすんだが、想像した以上に堅物だったため、女の扱いにも慣れておらず、ことを手順通り進ませるのに苦労をした。

島田は袴はどうにか脱いだが、まだ下帯を解くことにためらいを見せていた。しかし、これ以上芝居を続けるのは苦痛になってきていた。肩口の傷と、股の裏側の痛みがひどく、ともすればツルは気が遠くなっていくようにも感じはじめていた。

——どのような男でも、一瞬、気を抜くときがある。それは、女子の女陰に、陰茎を突き込む間際だ。

六蔵はそういって、ツルの身体を開いて押し入ってきた。やくざから浪人に身を救ってもらってから半年と経っていなかった。ツルは身体を貫く激痛に悲鳴をあげた。

六蔵は何日間もツルの身体を苛んだ。涙も涸れ、痛みもそれ程感じなくなった頃に、五寸の針をツルに与えた。

——これを足の指に挟み、男が気をそらした瞬間、足を振って相手の頸骨の間、ほれ、この溝に打ち込むのじゃ。

六蔵はそういって自分の首の後を指さし、溝の一点を教えた。

ツルが初めて殺した男は、六蔵だった。村の組頭の家で下働きをしていたツルを六蔵が拾い、刺客として育てたのだ。六蔵はツルに身寄りがないことを確かめると、いくばくかの金を家の主に与え、自分の許で育て、やがては嫁にも出すといったのだという。

六蔵の屋敷には、もう一人、三つ年上の男がいたが、そいつはツルが住むようになって間もなく消えてしまった。殺されたのだと下男はいっていたが、その当時は、本当のことだとは信じられずにいた。

おめえは、顔がよいからお頭に拾われたのだ、と三つ年上の男は姿を消す前にいっていたものだが、その言葉は、後年、ツルの心に深く残ることになった。

最初の刺客は、十六のときだった。客の部屋に酒を運ぶと、痩せた蝙蝠のような薄気味の悪い男が、猫の鳴き声に似た声で、酌をしろ、と命じてきた。

その男は、ツルにも盃を与え、一口飲んだツルが盃を返すと、やにわにツルの腕を引

き、畳に押し倒すと、愛い奴じゃ、といってのしかかってきた。

ツルは髪の中に潜ませた針を抜き、足の指の間に挟み、首の一点を狙って股を振り上げた。

針を打ち込まれた男は目をカッと見開き、後を振り向きかけてそのままツルの上に倒れてきた。その表情も、仕種も、何の不審も抱かずにツルの寝所に忍んできた六蔵を仕掛けたときと、全く同じだった。

その夜、ツルは山内五平から褒美の一両をもらった。その金でツルは古着屋で紫紋縮緬地の小袖を買い、鏡を手に入れた。

その鏡に、顔を映して今朝は出てきたのに、今は顔も着物も泥だらけになっていた。こんな顔でも、武者修行の若者には、若い女と映るものらしい。島田はしきりにツルの肌を美しいといって誉めた。その声は上ずり気味で、目尻は狐のように吊り上っていた。

ツルは五寸針を足の指に挟んだ。よがり声をあげているのは、絵師に扮したお庭番のときと同じであったが、下帯を解いていない島田が、その声を気に入ってくれているのかどうか分らなかった。

しかし、最早猶予はならなかった。身体が急速に冷えきってきた上に、目がよく見えなくなっていたからだ。

ツルは右足の指先に力を入れた。島田は上体を立ててツルの裸身に目を奪われている。呼吸を計って、ツルは太股を振り上げた。針の先端は違わず島田の頸骨の間の窪みに向って一閃した。

「！」

何かがツルの胸を貫いた。それは風のようでもあったし、白光のようでもあった。だが、実際には何も当たってきたものはない、なのにツルの息が乱れ、視界がまるで谷底に落ちていくときのように縦に流れた。

右足は島田の首に達する直前で何か固い目に見えない棒のようなもので打たれ、目標を見失った。

「うわっ！」

若い侍の悲鳴が納屋に響いた。針は侍の首の付け根に刺さっていた。島田はツルの上で身体を二度弾ませると、背中から土間に落ちた。

「女、戯れはそこまでにせい」

渋みのある声が戸口とは反対側の板壁の方から響いてきて、ツルは驚いてはね起きた。猫がやっと這い出せるような隙間から、男の顔が覗いていた。

ツルは着物の前を合わせ、身構えた。若い侍は土間に転がってわあわあと喚いていたが、新たに出現した男はさしてあわてた様子もなく、板壁をさらに大きく破って頭を差し込んできた。

「女、水を汲んできてくれ。どうやら毒草に当たったらしい。このままではわしはお陀仏になる。至急薬を調合せねばならぬ。頼む」

苦し気にそういって、男は肩のあたりまで身体を納屋に入れてきた。
背後からの光が男の顔を暗くしていたので最初は分らなかったのだが、その声に、もしやと思わせる懐かしい響きがあった。
ツルはしっかりと目を見開いて這いずっている男を見つめた。男の目に冷水がとび散ったような光が走った。
「きゃっ」
ツルは年がいもなく少女じみた叫び声をあげて、着物の袖で顔を覆った。その瞬間、ツルは十二歳に戻った。

四

茶屋の戸を開き、火を熾し、三人は囲炉裏端の板敷の居間で横になった。近在の百姓は芋と大根と味噌を持ってきたものの、三人の様子を目の当たりにして、苔むした地蔵のようになって立ち竦んでしまった。
一番年嵩の浪人は、死んだような青い顔で寝ており、若い女は肩口に白いさらしを巻き、顔に凄味のある若侍は首に、女が腰に巻く湯文字に似た布を巻きつけ、座禅を組んでいた。
おまけに、納屋の前に転がっている二つの屍を、無縁仏として葬るようにと若侍にいわれて、早々に退散していった。
朝になると、ツルの熱がまず引いた。傷口の血も止り、朝粥を口に運ぶ頃になると顔色も戻ってきた。一心斎が所持していた塗り薬が効いたのだった。
その一心斎は朝粥もすすまないようで、腹を押さえては絶えず苦し気に呻いていた。
一心斎を追って甲斐から信濃にやってきたという島田虎之助は、首筋を押さえては絶えず浮かない顔で溜息をついていた。
三人はその晩も茶屋で夜明かしをした。一心斎の気分もいく分よくなってきたものとみえて、虎之助の問いかけに、ぽつぽつと答えるようになった。ツルはその言葉に注意深く耳を傾けた。十一年前、自分が一心斎に危ないところを助けられたという話をする機会を窺っていたのだが、刺客となった今は、なかなか言いだせるものではなかった。
何をしに飯山藩にやってきたのですか、という虎之助の問いに、一心斎はやや小皺の増した目許を上げて答えた。
「郷方の役人が不当に年貢を取り立て、そのため農民の間で不満がたまっている。藩の重役どもも民から御用金を取り立てようなどと画策をしておる。わしは頃合いを見計って領内二万の百姓が一せいに蜂起するよう、西原久兵衛という藩御用達商人を煽動してきたのじゃ」
一心斎は驚くべきことを平然と言い放った。そんなことを城下で口にすれば、すぐに役人に捕えられる。このお方は、十一年前と少しも変っていないとツルは思った。

その次の日の朝、一心斎が山野の散策に出ているときに、島田虎之助が思い詰めた様子で、ツルの素姓を問い質してきた。

「首を刺されたのは己れの不覚でござる。おまえを怨みに思うものではない。じゃが、何故拙者を殺そうとしたのだ」

「それは、わたしが裏の務めをしているからでございます」

ツルは十二歳で服部六蔵という藩の隠密頭というべき者に拾われてから、今日までのことを包み隠さずに話した。そうすることで、この地獄から抜け出せるのではないか、と一縷の望みを抱いたからだった。

話し終っても虎之助は腕を組んだまま黙っていた。一心斎が戻ってくると虎之助は土間に降りていき、ツルの方を時折見ながら何事か耳打ちした。一心斎は頷くと、ツルの前まで来て、しげしげと顔を眺めた。ツルは恥しくなって顔を伏せた。

「このまま城下に戻れば、おぬしは頭に殺されてしまうと島田がいっておる。おぬしは島田に一切を告白したそうじゃな」

はい、とツルは頷いた。本当は一番大事なことは胸の奥深くに秘めているのだ。その思いをそっと取り出し、温めることで、ツルは二十三の歳まで生きてくることができたのだった。

だが、一心斎と名の判明したあの時の浪人が、ツルのことをすっかり忘れてしまっているのも今は分っていた。

「わしらと一緒にここを出るか？」

「ほ、ほんとうでございますか」

「無論だ。わしはすぐには江戸には戻れんが、それまではこの島田と旅を続けるがよい」

「せ、拙者は修行中です。女子と一緒の旅はできませぬ」

虎之助はあわてて異議を申したてた。一心斎は虎之助の言葉には取り合わずに、ツルに向って白い歯を見せた。

「わしとておぬしのおかげで助かったのだ。おぬしを逃がすことなど何でもない」

「一心斎さま、これを――」

ツルは懐中から半欠になったべっ甲の櫛を取り出して一心斎に見せた。

「十一年前、一心斎さまに命を救われました。わたしは旅芸人の子で、この土地で捨てられたのです。もしあのとき、一心斎さまに助けていただけなかったら、とっくに自害しておりました。これは――」

ツルは両膝を板の間に立て、櫛をさらに高く差し上げた。

「その折、一心斎さまがわたしに下さったものです。あれからわたしはずっと……」

ツルはそこまでいったがもう後が続かなくなった。涙がとめどもなく流れ出して止らなくなったのだ。

「覚えておるぞ」

「ま、まことでござりますか」
「美しい女子になったな。そうじゃ、あい、あむ、はっぴいという言葉を唱えておるか」
「はい、毎日口ずさんでおります」
「ツル、すぐに屋敷に戻れ。事の次第を頭に伝えたら荷物をまとめてそっとここに戻ってくるのじゃ。おぬしが来るまでわしらはずっと待っておるぞ」
「はい」
荒縄で着物を縛ったにもかかわらず、ツルは喜色満面で土間に降り立ち、礼もそこそこに茶屋をとび出していった。一心斎は板の間の端に腰を下ろし、野草を湯に浸して湯呑みに移して飲んだ。
「戻ってくるのでしょうか。いや、無事戻ってこられるのでしょうか」
「分らん」
虎之助は一心斎の隣に坐って、痛む首筋に手を当てた。ツルの仕掛けがツボをはずしたのは、一心斎が声にならない気合いを発したからだろうと察しはついたが、そのことで礼をいう気にはなれずにいた。
「十一年前といえば、あの女はまだ子供だったはずですが、一心斎殿はよく覚えておられましたな」
ふーふーと声をたてて野草茶を飲んでいる一心斎を横目に見て、虎之助はそういった。

「いや、忘れておった」
「しかし、先程は、あの女に何やら経のような言葉を授けたと……」
「不幸な女子は皆、同じような境遇にある。わしはどの女子に会っても、同じ言葉を呟いておるのだ」
一心斎はそういうと、湯呑みから顔を上げ、土間に吹き込んできた枯れ葉に目をとめた。続けて何かいうのかと虎之助は耳を澄ましていたのだが、一心斎はふーふーと茶を吹いただけであった。

異国の空

一

館を出ると、市村半助は組屋敷にある三笠町には向わず、北西にある山下門を潜って、新緑の濃さを増しだした雑木林に足を向けた。

四半刻程、丘の中腹を走る小路を行くと古い祠のある平地に出る。祠の傍には直径五間、高さが六尺程の岩が剝き出しになっていて、その荒々しい顔を空に向けていた。

そのあたりは丁度城の裏手になっていて、振り仰ぐと、藩主の内藤頼清でさえ年に一、二度しか上ることのない天守閣が、鷲の頭さながらに聳えているのが目に入る。

しかし、半助はめったに城を仰ぎ見ることはなかった。半助が好きなのは、巨石に佇んで眺める田園風景で、その向うに蛇行する竜北川のたてる白い波頭と、我儘いっぱいに暴れ回る川を、その切り立った絶壁で抑え込む天神岳の雄姿は、何度見ても飽きることがなかった。それどころか込み上げてくるもので胸が詰まることの方が多かった。

その感情のうねりはその時々の半助の心の持ち様によって色々に変化するが、底流にある感傷は、少年時代からずっと持ち続けているもので、それが淡い形となって胸の中に立ち現われてくるときなど、半助は識らずに目頭を熱くしてしまっていることがある。

冬は断崖が凍りつき、川原も畑も白銀の下に埋まる。

少年時代の半助は、素読塾をさぼっては山中を樫の木刀を携えてさ迷い、枯木を相手に打ち込みを繰り返した。

そうして祠脇の岩に登って天神岳を望見し、白い息を吐きながら、いつの日か、あの崖の向うに行きたいものだと願った。

供頭を務めていた父中村元右衛門の給禄は八十石であったが、息子が三人、娘が二人、それに病気がちの姑をかかえての生活は楽ではなく、母は台所で炊事をする傍ら、内職に精を出し、父を助けて狭い裏庭に菜っ葉を植えて食べ盛りの子供達を育てた。

三男坊であった半助は、十歳になった頃から、自分の行く末が決して明るくはないことに気付いていた。

家督は長男の惣市郎が相続することが決っていた。四つ歳上の次男の新次郎は聡明で、十五のときにはすでに四書五経を終え、史記の会読から詩文作成へと進んでいた。しかも算術にも非凡な能力を示し、早い内から入り婿の要請があちこちから母の許に持ち込まれていたようだった。

半助は二人の兄と違って、能力もいたって平凡で、しかも、母が患っているときに懐妊したせいか、生まれつき身体が弱く、固い食物を口にしたあとなどは胃が痛み、夏にはよく吐いた。

そのため骨が細く、組屋敷の庭で教授される剣術でも、同じ年頃の子の中で、一番の

遅れを取っていた。

父はいつでも蒼い顔をして喘ぐように息をしている半助を眺めては、苦虫を噛み潰した顔で舌打ちし、いずれどこぞの寺に小坊主として放り込むしかあるまい、と無慈悲なことを口にした。

母もあえて反論を唱えなかった。そうするしかないと思っていたのか、あるいは母なりに思い詰めていたものがあったのか、今となっては知りようがない。

次男の新次郎が、小姓頭を務める大宮弥左衛門の娘泰江の婿として大宮家に入り、やがて九十石の家督を相続することが明白になると、それで安心したのか、あっさりとこの世を去ってしまった。

その後数年経って、半助にも婿入りの口が見つかり、やっかい叔父となって兄惣市郎の世話にならずとも済むようになった。

しかし、その祝言の席で、半助が顔を合わせたのは白粉を塗りたくった山くじらのような女で、しかも二十二歳の半助より五つも年上だった。

半助はほとんど絶望に似た感情で祝いの唄を聞き、二十八石に目がくらんで婿入りした己れの軟弱さと、この縁組をしきりに勧めた母方の叔母を怨んだ。

それからの十一年間は、あっという間に過ぎた。楽しくて過ぎ去った歳月ではなかった。鉛色の空の下で、目付支配下の徒組頭（かちぐみがしら）としての職務を忠実に務め、組屋敷に戻ると草鞋作り（わらじ）の内職を続けただけの、冬の空を映したような、陰鬱な生活であった。

もう一人の徒組頭の沢松九十郎は、内職で得た小遣いで、小料理屋の連なる浅間町あたりにこっそり出すことが月に二度程あるようなのだが、婿養子の半助には、赤提灯の縄のれんをくぐることさえためったに許されなかった。

まして、女が傍にはべって酌をしてくれるという料理茶屋などには、ただの一度も上ったことがなかった。三味線の音が響いてくる浅間町界隈は、半助にとってはまったくの別世界であった。

妻のスエは、祝言をあげた四月後に子を孕（はら）み、それまで月々半助に与えてくれていた小遣いを、貯蓄に回すといって一切出さなくなった。

徒組頭の半助の下には三人の徒士と十二人の足軽がいる。館の南東半里のところにある赤瀬川の河原で隊列を組んで走ったり、徒士と共に、足軽に棒術などの技を教え込むのが半助の仕事なのだが、きつい調練をこなしたあとでは、足軽たちは疲労と共に一様に空腹を訴えてくる。

ときには彼等は自らが持ち寄った魚や玄米を鍋にぶち込み、雑炊を作って食うこともあるが、大方は沢松九十郎がそうするように、徒組頭の半助が、食物を用意してくることを期待している。

しかし、懐中に一文の銭すら持たせてもらえない半助にとって、川魚はおろか、芋を工面することさえ容易なことではない。

沢松組と合同で調練の予定が組まれている日は、半助にとってはほとんど死にたくな

る程気が滅入る。沢松は煮込みうどんなど、足軽たちが喜びそうなものをちゃんと用意してくるのだ。さらには酒をふるまうこともあり、それを横目で眺める市村組の足軽達は、やがてうらめし気に半助を見返す。

仕方なく半助は早朝、スエの起きぬ内に台所に忍び込み、雑炊の材料になるようなものを捜すのだが、そのあたりはスエはしっかりしていて、野菜の切れ端すら残さない。半助は数日がかりで集めた五合程の米と燕の糠漬けを持って赤瀬川の調練場に向うのであるが、何故か己れが盗っ人にでも成り下ったような哀れを感じ、いっそのことこんな漬け物など溝にでも捨ててしまおうか、と自暴自棄にも似た気持にかられることがある。

といって、そのような行為が気の弱い半助にできるはずもなく、非番の日に増産した草鞋を、スエに内緒で売って得たヘソクリでなにがしかの食料を仕入れ、足軽達に分けることになるのである。

足軽達も市村半助がどのような境遇に置かれているかくらいは想像がついている。それでも年間三両二分の給禄しか受けていない卒身分の自分達より、余程ましな生活をしていると思い込んでいる。

藩では役職によって等級を決めていて、老中は一等級、用人は二等級、番頭、側用人は三等級とだんだん下っていって、十四等級までが士分という区別ができている。沢松九十郎、市村半助の徒組頭というのは、役職名だけを聞けばえらそうに聞こえるが、実は、徒目付、蔵方、そして郡奉行支配の面谷奉行などと共に、士分としては最下級の十四等級に位置づけられているのである。徒士は十六等級、足軽は十八等級で、一番低い中間は二十二等級で給金はなく、年に米五俵と一人扶持が与えられるだけであった。

それでも彼等には色々と稼ぎ口があり、その気になれば城下の商店の手伝いや造り酒屋の荷運びなどで、田舎とはいえ一日八十文程の日当が手に入る。

しかし、士分ともなれば何をするにも制約があり、堅苦しく、忍耐ばかりを強いられ、おまけに代々の借金が重なって、下帯一本新調するのも容易ではない。半助の兄の惣市郎は父の家督をそのまま継ぎ、七等級の徒頭で藩内では中くらいの家格を保っているはずなのであるが、隠居の父には晩酌は五日に一度、それも一合のみと倹約を迫り、自らはついに今年から酒を断つ、という一大決心をするに到ったのである。

それもこれも一昨年、昨年と不作続きで、今年はさらにひどく、ひと頃の四割減の収穫しか見込まれていないという郡方からの報告が入っているからである。

もともとが二万九千石の小藩であり、険しい山に囲まれた領地には良田といえる田が非常に少ない。代官は翌年の種籾まで徴発せんばかりの勢いで百姓から年貢を絞り取っていたが、逃散したり潰れて小作人となったりする百姓が出始めたため、藩では公儀の目を憚る意味もあって、領内に大倹約のふれを出すのみに止めた。

一説には、江戸の藩邸にいる内藤頼清が、良民を苦しめるのは本意にあらず、と呟い

て嘆かれたという話が国元に伝わったため、三人の家老が殿の心中を斟酌して、百姓がこれ以上苦しむことのないギリギリの線で妥協する政策をとったのだという者もいる。

その代り、藩士には過酷な通達が待っていた。過去二年間、知行取の藩士八十六名は、一割を借上米として藩に貸していたが、今年からはさらに一割増の合計二割を藩に借り上げられてしまうことになったのである。

藩が借りるのであるから、いずれ返してくれるのだろうと思うのは知行取になったばかりの新参者だけで、藩士の誰もそんなことは信じていない。藩にとっては借りっ放しのぶったくりであることは自明の理なのである。

そういう通達を出す上層部は、表向きは辛抱倹約を標榜していても、その実、藩御用達の商人達とはしっかり結託していて、暮し向きは少しも困らないようにできている。

そういったうまみにありつけるのは四等級の取次役、近習頭あたりまでであって、その下の旗奉行であるとか、町奉行、郡奉行には賄賂の誘いなどはなく、付け届け程度しか入ってこない。六等級の勘定奉行にはさらに実直さが要求される。

——さて、どうしたものか。

半助は天神岳の頂きに目を凝らし、そっと嘆息した。

あの崖の向うには、きっと何かいいことがあるに違いない、と思い、目を輝かせて眺めていた少年時代の切ない程に清純な気持は、今日の半助には微塵も窺うことができなかった。

さっきまで、崖の彼方の空には、日が没したあとの淡い紅が物悲しく滲んでいたが、四月の声を聞いたというのに、天神岳の頂きには雪が残っていて、樹木の間を縫って吹き上ってくる風が羽織の脇から入ってくると、すでに黒ずみ出した空と相まって、冬に舞い戻ったかのような寒々とした印象を半助に押しつけてくる。

——スエには、何と伝えたものだろうか。紅葉御殿の主に仕えるよう御家老様から仰せつかった、とありのままを伝えたら、恐らく市村家の家禄が召し上げになったと勘違いをして、巨体を揺るがせて叫び出すであろうな。

そう胸の内で思ったとき、腹が、ぐうと鳴った。

本日携えてきた弁当は、調練のあとで足軽達が作る味噌煮込み雑炊の鍋の中にみんなぶち込んできた。そして、半助自身は味見と称して椀に半分程の雑炊をよそって口に含んだだけで、館に戻ったのだった。

腹が再び鳴るのを情なく聞きながら、半助はつい一刻前に起こった出来事を思い返していた。

井戸で汗を拭い、衣服を改めてから目付部屋の前の縁側に片膝をついて、半助は上司である上田七郎平に退出の挨拶をするつもりで蹲った。するとすっと障子が開き、四十を半ば過ぎた上田の土瓶のような丸くて色黒の顔が現われたのである。

「半助、御家老がおぬしに火急の話があるそうじゃ。最前より待ちかねておられる。こ

れからすぐに御家老の許へ参る。ついて参れ」

上田は半助を見下ろして早口でそういうなり障子を閉めて背を向け、廊下の奥に向って歩き出そうとした。

「お、お待ち下さい」

半助はあわてて叫んだ。

「ご、御家老様が何故それがしに……」

あとは震えて声にならなかった。家老は三人いるが、その誰ともほとんど口をきいたことはなかった。それどころか、向うが市村半助の名前を知っているかどうか怪しかった。

「何の用があるかは知らぬ。だが、御家老から今日限り、おぬしを儂の支配からはずせといわれ、仰せの通りに従うと申し上げた。後任には牧重助があたる」

牧は卒分で供方の徒士の一人である。だがもう年寄りで充分な働きはできなかった。

「そ、それはどのようなことなのでござりますか？　何故それがしがお目付の支配下からはずされるのですか」

「知らぬ。さあ、さっさと立ち上ってついて参れ」

思わず上田の袴の裾を摑んだ半助を、上田は汚いものでも見るように額に皺を寄せて見下ろし、袴を手で払った。目付部屋の手前の料理間から賄方の者が出てきて、二人の様子を茫然と眺めていた。

大柄で肩の張った上田の足許に蹲って何やら哀願している小柄で痩せた半助は、大木にとまる蟬のように賄方の者の目には映ったのだろう。上田にひき立てられて半助がおろおろといった態で後について歩き出すと、にやりとした笑みが彼の口の端に浮いた。

黒書院、御納戸、そして御用部屋の前を通って、廊下の突き当たりにある家老部屋の重そうな襖戸を目にした半助は、足が震えるどころか気が遠くなって倒れてしまいそうになった。

二

家老部屋に入ったのは、勿論初めてのことであった。奥に長細い部屋は二つの襖で仕切られていて、半助が上田七郎平に引かれるようにして招じ入れられたのは、一番奥まった部屋で、そこでは中村庄左衛門が番頭の磯貝左馬助に小声で何事かを含むように言いきかせていた。

中村庄左衛門は三白眼の目を上目遣いに上げて上田を見つめ、その後にかしこまった半助を青光りする目で睨んだ。密談めいた二人の雰囲気に、半助は肚まで縮み上った。藩政の奥深くで蠢いているおどろおどろしい生きた臓物の一部に、触れた思いがしたからである。

畳敷きの廊下に控えながら、何故御家老は、密談中だというのに目付の訪いに応えて

襖を開けさせたのだろうと半助は疑問に思っていたが、退出した磯貝に替って、上田と共に中に招き入れられてそれとなく察するものがあった。家老は開口一番こういった。

「市村半助か。供頭を務めておった中村元右衛門の倅だな」

家老は六十歳を過ぎているはずであったが血色はよく、頬肉には脂を弾き返す程の艶があった。それは、固くなるな、面を上げろ、といわれて恐る恐る頭をもたげた半助が初めて間近に接した家老の素顔であった。

「元右衛門の倅となれば、儂の親族ということになる。そちもそのつもりで儂の話を聞け」

家老は親しみを込めていったつもりだろうが、その双眸は冷徹に半助をとらえていた。半助にしても、親族といわれても心に響いてくるものはなかった。

中村庄左衛門の祖父と半助の曾祖父は兄弟であったという。だが、曾祖父は妾の子であり、嫡男の兄が二十一歳で大小姓に召し出され、五百石の家督を相続してからは先手物頭、用人を経て四十半ばで家老職に登用され、二百石の加増を受けるに到ったのにひきかえ、弟であった半助の曾祖父は、二十四歳で卒身分の徒士に召し出され、十年の歳月を経てようやく士分である供小姓に昇格することができたのだという。

その家格の差は歴然として今も続いている。家老の倅は図体こそ大きいもののいつも鼻提灯をふくらませていると評判のボンクラで、年齢は半助よりいくつか上なだけなのに、昨年までの小姓頭から今年は取次格にまで昇格している。それは百石高の勘定奉行よりさらに上の等級になる。

その人事は当然藩士の注目するところとなったが、誰も表立って批難することはない。かえって三人いる家老のうちで、中村庄左衛門の権力が抜きん出ていることを証明することになり、これまで派閥というものに興味を示さなかった者まで、庄左衛門の顔色を窺うようにもなったという。

そうはいってもそれは将来藩政に加わることのできそうな上士の家柄の者だけで、下っ端の半助にとっては、まるで無関心の出来事であった。

それだけに、いきなり家老の前に呼び出された半助は気後れだけが先に立ち、家老の話を聞いたあとも、しばらくは胸の内が泡立ったままだった。

「紅葉御殿の主がおぬしを欲しがっている。是非に家来にしたいと正面きって所望してきた」

家老はまずそう切り出したあとで半助の気持を少しも斟酌せずに、矢継ぎ早に言葉をだしてきた。

「紅葉御殿の主、いや、志摩守様はお上のお兄上であられる。お断りする理由はない。明日からそちは志摩守様にお仕えするのだ」

「……」

「といって藩籍は解くものではない。一応は出向という形にしておこう。じゃが藩の所帯は苦しい。お上の為に働いておらぬものに禄を与える訳にはいかぬ。給金は志摩守様

の所よりもらえ」

「……」

「心配するな。志摩守様はお上より四千三百石の分与を受けておられる。屋敷には能舞台もあり書庫には数千冊の書籍が詰まり、金蔵は金銀でうなっておる。しかも年貢を取りたてるのはこちらの役目であるから民百姓の怨みを買うこともない。まったくもって悠々自適、羨ましい限りの極楽暮しじゃ」

「……」

「じゃが、この人物は油断がならぬ。稀代のすね者でもある。お上のお兄上と申しても所詮は妾腹、女の筋をたどればどこの馬の骨とも分らぬ輩にたどりつく。この志摩守の動静が近頃怪しい。幕閣とつながる江戸の重鎮と連絡をとり、たびたび家士を江戸に派遣しておる。上田が捕えて吟味した者の一人は、懐中に八百両もの金子を所持しておった。志摩守忠勝が何事かを画策しておるのは確かなことじゃ」

家老は、志摩守を呼び捨てにしたが半助は顔を伏せたままでいた。何かとほうもないことが、家老の口から飛び出してきそうな気がした。

「志摩守が名指しで家臣に取り立てたいと申してきたのはおぬしだけではない。他に二名いる。じゃが奴はそれを表向きのこととして、裏ではしきりに浪人を集めておる。昨日も諏訪の日根野領より浪人が三名、志摩守の手の者に連れられて紅葉御殿に入っていったということだ。そうじゃな、上田」

「さようでございます」

廊下側の襖を背にかしこまっていた上田七郎平が両手をついて頷いた。その黒い顔には赤味が滲み出し、なにやら凄味のある表情に変ってきたのが半助にも感じられた。

「その浪人どもはなかなかの剣客であるらしいと上田は見ている。志摩守が取り立てたいと申し出てきたわが藩の木村と権藤も、城下の道場ではそれぞれ師範代を務める程の腕達者だ。無論この二人を志摩守に差し出すのは断った」

「……」

「どうだ市村半助、志摩守が何を企んでおるかおぬしに分るか？」

片方の目をでんぐり返すように開いてそう半助に問うた家老は、半助の答えを待つことなく、即座に言葉を放ってきた。

「謀反じゃ。やつは謀反を企んでおるのじゃ」

――謀反などと、まさか。

半助は家老の白濁した片目から目をそらしてそう胸の内で呟いた。喉は何かねばっこいものに塞がれているようで、声が出せずにいた。

「やつも齢五十を過ぎた。この頃では胸の病いを患っているとも聞く。気鬱は昔からじゃが年齢とあいまってときには常軌を逸した行為に及ぶことがある。反逆じゃ。お上を亡きものにして、己れが藩主にとって代って藩政をわがものにせんと企んでおるのじゃ」

「ま、まさか、そのような」

半助はやっと声を出すことができた。だが何故そのような不審な主の許に自分は仕えなくてはならないのかという疑問までは、口にすることはできなかった。

家老は懐紙を取り出して、口の端をぬぐうと、苦々し気に痰を吐いた。

「まことじゃ。今を去る十一年前、文政五年の夏に、お上に仕えていた近習の一人が吐血して死んだことがあった。志摩守がお上を鮒釣りに誘った折、志摩守が用意した弁当を近習が前もって毒見したのじゃ」

「……」

「毒じゃ。志摩守が一服盛ったのじゃ。だがお上は知っての通り兄想いのお方でな、暑さで腐ったものを食したのだろうといってことを荒立てずに丸く納めた。そのことがあって志摩守もしばらく鳴りを潜めておったのだが、またぞろ妖怪が姿を現わしおったというわけじゃ」

文政五年夏といえば、半助が初出仕して間もない頃である。藩主内藤頼清が釣りに出掛けたことは確かに半助の記憶にある。だが、近習が吐血して死んだという噂までは耳に入ってこなかった。

半助は初めて自らの意志で顔を上げて、藩士、家士、卒分合わせて三百有余人の頂点にいる家老を見つめた。

「ただ今の御用命の向き、市村半助、御辞退申し上げます」

「ならぬ、ならぬぞ半助」

家老は気色ばんで声を荒げた。半助は畳に額をこすりつけた。

「何故、謀反を企んでいるような人物の許に出向せよと申されるのですか。それがしには得心がいきませぬ」

「うろたえるな市村、ご家老のお話を静かに承るのだ」

傍から上田七郎平の鋭い叱責が飛んできた。しかし、といいかけた半助を、家老は年に似合わぬ野太い声で抑えつけた。

「これは藩命なのじゃ、半助」

藩命、と半助は胸の中でくり返した。

「お上は来月の末、江戸を発って国元に向われる。戻られるのは六月の半ば、暑い盛りじゃ。そこで志摩守はお上を涼に誘い出す腹づもりでいる。今度は有無をいわせずお上に刃を向ける気でおる。浪人者を集めているのもそのためじゃ。だが、どのような算段をたてているのか、詳しいところが分らぬ。幸い、志摩守の方からおぬしを指名してきた。やつの懐に入り込み、きゃつの企みを探るのが半助、おぬしの役目じゃ。藩命と申したのはそのためじゃ」

「……」

「お上の危難を未然に防ぐことこそ藩士の務めであるぞ。これでもきけぬと申すか」

「いえ、決してそのような……」

おそれいって半助は頭を垂れた。眉間に縦皺を寄せて仁王立ちになって半助をののしるスエと、母親そっくりの小太りの身体を鈍重に動かして飯を食らう長男の忠四郎の姿が脳裡に浮かんだ。たかが二十八石でも、ここで逆らっては全てがご破算になってしまうのだ。

「ことが済めば、今一度、元の役目にお戻し下されますか」

「おお、戻してやろうとも。それだけではない。手柄を立てた暁には、お上に加増も頼んでやろうて」

「ははっ」

観念して身を固くした半助の顔を、横から覗き込むようにして家老は見つめた。それでよい、と二度唄うように上機嫌で呟いてから、ふと、腑に落ちないといった表情になって首を傾げた。

「それにしても、志摩守は何故そちを家来に欲しいなどといってきたのであろうか。市村半助の武勇伝など聞いたことがないがの……半助、そちには何か思い当たることがないか？」

「いえ、一向に……」

肩を竦めて身を低くしてみせたが、実は半助には思い当たる節があった。しかし、ここで話せば誤解を招く懸念があった。

「ご家老、こう見えても半助は、足軽どもの間では槍の名手として通っております」

「ほう」

上田の思いがけない言葉に、家老の顔に初めて興味深げな色合いが浮いた。五尺三寸の華奢な身体をしげしげと眺めた。

「貫流の中には『円月槍法』と呼ばれる槍術がござります。東西南北四維上下に槍を繰り出し、攻め寄る十人の敵をただの一人にて防ぐ高度な技でござる。半助はこの槍術にさらに工夫を加えて独特の技を創り上げたと聞き及んでおります。あるいは志摩守様の耳に、半助のかような評判が入ったのかもしれませぬ」

「ほほう、『円月槍法』か。それは是非見てみたいものじゃな」

「め、滅相もござりませぬ。名手などとはとんでもない」

狼狽して畳に頭をこすりつける半助を、二人は愉快そうに眺めた。口にした上田などは声に出して笑っていたのだから、半助の評判など、まったく信じていないことは明らかだった。

冷汗をたっぷりとかいた半助は、とにも角にも家老の前から姿を消したかった。その言葉を待っていると、そうそう、と上田が古ぼけた土瓶のような面に似合わない明るい声で、とんでもないことを言い出した。

「おぬしの家に浪人者が転がり込んできたそうではないか。女房のスエ殿が大めし食らいで困るとこぼしていたそうだぞ。いっそのことその浪人もろとも志摩守様の屋敷に雇われてみたらどうじゃ」

「しかし、あのお方は……」
命の恩人、といおうとして、それはいささか大袈裟すぎると思い直し、半助は口をつぐんだ。家老の目が異様な光り方を見せた。
「組屋敷に他国の浪人者を、それも目付に無断で泊めるというのは感心せぬな」
「恐れ入ります」
「何者じゃ、その浪人は」
「は、中村一心斎と申される剣客で、それがしが先年、江戸に四月程いる間に知己を得ましたもので……」
「江戸の剣客が何故かような草深い田舎にいるのじゃ」
「されば、甲斐、信濃と通って越前に抜ける途中に立ち寄ったと申されておりました。剣術の廻国修行に出ておられるとか……」
半助は平伏したまま一生懸命にそう説明した。だが、懸命になればなる程中村一心斎のことが分らなくなった。実際、半助は一心斎のことなど、何も分っていないのだった。
「どのようにして知己を得たのだ。まさかそやつ、隠密ではあるまいな」
「決してそのようなことは……」
力を込めて否定したが、改めて考えてみれば怪しい点はいくつも出てきそうな気がした。旅の絵師や薬売りに化けるだけでなく、幕府の密偵の中には山伏姿の修験者になって、城下はおろか山や郡にまで分け入って、不正を探り出す者もいると聞いたことがあった。その密告によってお取り潰しになった藩もあるという。
半助は、中村一心斎の細面の端正ともいえる風貌を思い起こしながら、まさか、あの方がと胸の内で呟いていた。
「どうした半助、何を考えておる。その浪人者といかにして知りおうたか聞いておるのだ」
家老の催促で半助はハッとして顔を上げた。薄暗い部屋の中で、家老の目が、獣じみた光を放って半助を射してきていた。実は中村殿に危難を救われたことがございます、と半助は観念して話しだした。
「一昨年の二月、それがしは梶野定八殿のお供で江戸に参りました。その折、江戸におられますご家老様より、殿のお暇に合わせて帰国するよう命じられ、下屋敷に六月まで留っておりました」
梶野定八は勘定方元締で、二千両の御用金を携えて江戸に上った。当時、幕府が計画していた西ノ丸の普請工事から逃れようと、江戸藩邸では苦心惨憺して幕閣の実力者と掛け合っていた。二千両はそのための賄賂金だと聞かされていたが下っ端の半助には勿論関係のない話で、江戸滞在を幸いに、かねてより耳にしていた名の高い剣道場を片っぱしから見学に歩いていた。
その日は下谷練塀小路にある一刀流の中西道場を覗いたあとで、今評判の千葉周作の「玄武館」での稽古ぶりを見学するつもりで神田川にかかった和泉橋を渡り、柳原通り

をぶらぶらと歩いていった。そのとき女の悲鳴と共に男たちのたてる怒声が響き、何事かと声の聞こえる稲荷神社の方に向って半助は駆け出した。

「喧嘩かと思いましたがそうではなく、野犬が子供を襲っておるのでございました」

「なんじゃ、犬か」

中村庄左衛門は露骨につまらんという顔をした。

「それが並の野犬ではござりませんでした」

野犬の数は十数匹でいずれも歯を剝き出して人々に襲いかかっていく。一番ひどくやられていたのはまだ十歳に満たない男の子で、その子が熊のような犬に股を噛みつかれたまま、二間も振り飛ばされたのを目の当たりにして、半助は夢中で刀を抜いて飛び出していった。

「町の者も天秤棒や竹竿を持ち出して加勢してくれたのですが……」

野犬は天秤棒の下をかいくぐると、町の者に噛みついていく。町人が悲鳴をあげてひっくり返ると、勢いを得た他の野犬が数匹かたまってその者に襲いかかる。近くの辻番からも人が出てきたが、野生の獣と化した野犬の群れを前にどうすることもできないでいた。

半助は二、三匹の野犬の背を刀の峰で叩きつけ、血だらけになって息も絶え絶えになっている侍の子に近づき、なんとか抱き上げたとき、首筋に鈍痛が走った。

「不覚にも犬に首を噛みつかれ申した。ここにまだ犬の歯形が残っております」

半助は首を前に落して、噛み跡が家老の目によく見えるようにした。

「とどのつまり、不覚をとったおぬしを救ってくれたのがその浪人者というわけじゃな」

家老は目脂を指先でほじくり出していった。

「さようでござります。熊のような野犬を一刀の下に斬り捨てたのでござります。すると不思議なことに……」

「ええい、もうよい。たかが野犬相手の武勇伝など聞きたくもないわ。いいからもう退がれ。あとは上田と密に連絡をとり合うことじゃ」

家老は手の甲を半助に向けて、去ね、というように二度、軽く振った。半助が恐れ入って後ずさりをすると、あくびをしながらおい半助と家老は半助を呼んだ。

「上田が申したように、ことのついでにその居候を志摩守に推挙しろ。そしてな、そやつに隙を見て志摩守を暗殺させるのじゃ。浪人者のしたこととなれば、あとの始末は何とでもなる。事がうまく運べば、全ての手柄は半助、おぬしのものになるぞ」

家老の目にはあくびで生じた濁り水が浮いていたが、笑ってはいなかった。半助は額を畳に押しつけてから、家老部屋を辞した。

三

三笠町に入ると、急にあたりが暗くなった。月が出ていないだけでなく、商人町には灯がところどころに提げられていたのに、下級藩士の住む組屋敷が建ち並ぶ三笠町では、油を吝んでどの家でも余分な灯を使わずにいるからでもあった。

――スエだけでなく、一心斎殿にもくだらん頼みごとをしなくてはならなくなった。はて、どう話を切り出したものか。

そう思いながら、話の腰を折った家老の退屈そうな面構えを思い出して、あれからが面白いのだ、と半助は一人ごちた。

野犬の頭目は浪人者に首を落されて即死した。牙を剝いた顎から涎を垂らして身構えている他の野犬も、当然浪人者は始末してしまうのだろうと半助も町の者も思って眺めていた。両腕には重傷の子供を抱えていて、すぐにも医者の手当てを受けさせなくてはいけなかったが、何故だかその場では、時が停止してしまったかのような錯覚に陥って、浪人者のすることを、ぼんやりと眺めてしまっていた。

ところが浪人者は刀を鞘に納めると、指を二本口に入れて、びっという音をたてた。するとあちこちで身構えていた野犬たちが、急に肩を落して、すごすごという様子で浪人者の周りに集まってきた。浪人者は野犬たちに向って何事かを呟いたようだった。野犬たちは哀願するような目で浪人者を見つめていた。見上げる野犬の中には、目に涙を浮かべる犬さえいた。

浪人が町に背を向けて、柳の木の連なる土手の方に歩いていくと、その後を十数匹の野犬どもが、首を落し、尾を下げて悄然と、ついていった。神田川に向うその十数匹の野犬の後姿は、葬式に参列した身内のような悲しみをたたえているようにも見えたし、自決に向う赤穂浪士の重い苦しみを映しているようにも見えた。

野犬の姿が土手の向うに消えてしまうと、あたりは急に活気を取り戻した。死んだ野犬の始末をする者が飛んできたり、どこそこの桜はもう三分咲きだという話をしだす者がいたり、大八車の音が響いたり、物売りの声がうるさく飛び交ったりしだした。

半助は犬に噛まれた子供を近くの浅井という旗本の屋敷に運び込んだ。町の者に連れられて医者もすぐにやってきたが、男の子は意識がなく、すでに虫の息だった。ことにひどかったのは睾丸で、皮を噛み切られて中の血塊が覗き出ているのを見て医者は茫然としていた。

実は半助も相当な傷を負っていた。家老にはいわなかったが、首を噛まれたあとで仰向けにひっくり返り、そこを数匹の野犬に襲われたのである。ふくら脛や脇腹にも出血があり、旗本の家士が用意した酒で、おろおろとしている医者に代って男の子の傷口を消毒しだしたのであるが、どうかするとふっと目の前が暗くなり、今にも昏倒しそうになった。

「麟太郎！　麟太郎はどこじゃ！　おお、ここにおったか！　麟太郎、大丈夫けえ、しっかりしろ、犬に噛まれたくれえなんだ、それでも勝小吉の倅か」

声高にそう叫びながら部屋にとび込んできた侍がいて、それで半助の目が覚めた。やはり、熱に浮かされて眠ってしまっていたようだった。

「やい医者、倅の具合はどうなんだ。助かるのか？　おい、はっきりしろい！」

着流しに木刀を一本差しただけの侍は、まるで破落戸（ごろつき）のような口調で医者に詰めよった。のろのろと薬を調合していた消し炭のような印象の医者は、浮かない顔で、はあ、といった。侍はぽかりと医者を殴った。

「こんにゃろ、倅を殺しやがったらてめえも殺すぞ。さっさと治療をしろ。おい、麟太郎！　目を覚ませ！　犬に噛まれたくれえでおっちにやがったらただじゃ済まさねえぞ。おい麟太郎、目ェ覚ませ」

医者を殴った手で今度は意識を失っている倅の頬をビシビシと侍は叩いた。なんとも乱暴な奴だと半助があきれていると、痩せた色白の男の子は、うっすらと頬を桜色に染め、細目を開けて侍を見た。

「ちちうえ……」

男の子は今にも消え入りそうな声でそういった。

「おう気がついたか、頑張れ！　こんな傷なんか気力で治すんだ、分ったか！」

侍はそう叫んで華奢な倅の肩を揺すった。

「たわけ。気力で傷が治るのであれば、人は気力で鳥より高く空を羽撃（はばた）くことができるわい」

そういって部屋に入ってきたのは、先程野犬を斬り捨てた浪人者だった。

「い、一心斎か！」

侍はそう叫んだまま絶句した。妙なことに額から一気に汗が噴き出したように半助の目には映った。

「うむ、これはひどい。縫わなくては助からんな」

睾丸の傷口を一目見て一心斎はそう呟くと、傍の箱から針を取り出した。

「何をする。おめえにそんなことが……」

そう突っかかってきた侍の額を、一心斎と呼ばれた浪人者は軽く肘で打ちつけた。すると侍はシュンとおとなしくなった。

「麟太郎、ちと痛いが我慢するのだ」

浪人は男の子にそういうと、さっさと針を動かし始めた。見事な縫合術で、囲んで見ていた者たちは皆一様に感心していた。ただし、屋敷の主の浅井という旗本は、気分を悪くして奥に引っ込んでしまった。

それが終ると浪人者は半助の手当にかかってくれた。といっても自ら製造したという塗り薬を傷口に塗り込んでくれただけなのだが、これが驚く程よく効いた。四半刻もしない内に痛みも熱も治まってしまったのだ。

「ほほう。そんなによく効いたか」

半助の言葉を聞くと、浪人は心外そうに手許の薬を眺めていた。勝小吉と名乗る侍が、倅の手を握りしめて、死ぬんじゃねえ、と念仏のように呟いているのに気付くと、おぬしさえ騒がなければひと月で治る、と冷たいことをいって立ち上った。

半助が起き上って、浪人者の後を追ったのはそのときである。礼をいうつもりでいたのだが、振り返った浪人者の身体から、何やらおだやかな暖気、それもかげろうのようにたわいないものが漂い出ているのを感じて、ふと、甘えたい気分になった。

「わたしのような者が、剣客と立ち合って、相手をひるませることができるでしょうか」

国元の道場にも、廻国修行の浪人が姿を現わすことがある。どの男たちも、竹刀を合わせる前に、女のような身体つきをした半助を見て冷笑を頬に浮かべた。その時点で、半助はすでに相手に呑まれてしまっているのだった。

柳原通りの真ん中で佇んだ浪人者は、黙って半助の身体を見下ろしていたが、やがて、目尻に細かい皺を走らせて「敵討ちでもするのか」と訊いた。

「そうではありません。そうではないのですが、わたしのような小さな者では、とても侍としてやっていけません」

半助がそういうと、浪人者は声をたてて笑った。そして、小脇にかかえていた木箱を開けると、銀色に輝く紙のようなものを取り出して半助の鼻先に突きつけた。

「大事に及んだときは、これをおぬしの前歯に貼りつけるのじゃ。野試合に臨んだ者は、必ず陽を背中に受けて立とうとはやる。それで優位に立ったと満足することであろう。だが、おぬしはあわてず騒がず、剣先を合わせたら、相手の顔を見て、にっ、と笑ってやることじゃ。それだけでよい。相手はひるむ」

「？」

「そこをのんびり近づいていってぽかりと打ってやればよいのじゃ。よいか『にっ』じゃぞ。それが極意じゃ」

四

「あっははは、とんだ極意であったのう」

一心斎は首筋を叩いて心地良げに笑った。傍に坐ったツルという名の女子も頬をうっすらと赤く染めて俯いた。口許に手をあてたのは、はしたない歯茎を男の前にさらしてはならないという恥じらいからでたものであろう、と半助は思った。

「ですが、あの作戦が功を奏したのです。忠勝様が私の名を覚えていたのもそのせいでしょう」

半助はスエの方にそっと視線を向けてから、城下の南西にあるなだらかな紅葉山の麓に建てられた、広大な屋敷の庭で行なわれた試合の模様を説明した。それは半助が江戸

から戻って間もなくのことで、藩主頼清から預った進物を、近習頭が忠勝殿に届けるにあたって半助も同行したことから実現することになったのだ。

庭では忠勝の家臣が実戦さながらの稽古をしており、たまたま顔を出した半助が、徒組頭を務めていると知っている者がいて木刀をとらされたのだ。相手は神道無念流の遣い手で、野州一帯に名を知られた、秋山要助の直弟子であるというふれこみだった。

「あの男は、私の歯に己れの顔が映ったのを見て、まるで幽霊を目のあたりにしたかのように驚いておりました。なにせ、出来損いの鍾馗様のような面構えでおりましたからな」

そういうと一心斎もツルも、暗くなった庭に笑い声を響かせた。そのあとで一心斎はツルの酌を受けて酒を呑んだ。一心斎の横顔を見つめるツルの瞳が小さく美しくまたたいた。夜空の星がそこに引越してきたようだった。

羨しい、と半助は思った。ツルのような美しい女子を見たのは生まれて初めてのことだった。そんな女子を傍に置いて、あわてることなく盃を口に運んでいる一心斎の余裕のある姿勢が心底羨しかった。

「一心斎殿、やはり、私と共に、紅葉御殿に潜入して頂くことは叶いませんか。無論ツル様もご一緒に来て頂きたいのですが」

組屋敷に戻ってすぐに頼んだことをもう一度半助は口にした。その折、話が中途で跡絶えてしまったのは、座敷に目の覚めるような美女がいたからであった。一心斎が半助

の組屋敷に逗留していたのもその女を待っていたからで、女には城下の旅籠には泊れぬ理由があると聞いて、二人の道行に不安なものを感じたものの、自分とはまったく異なるなまめいた人生を過ごしている目の前の武芸者が、とほうもなく眩しく輝いて見えたものであった。

「狂人の用心棒か。試みは面白いがわしはこの女子を越前まで連れていかねばならぬ。途中まで送ってきた武者修行の若僧が、こやつの色香に惑わされることを恐れて、逃げ出してしまったのでな」

一心斎は静かに笑った。ツル様は何故越前へ、と訊きたい気持を半助はこらえた。

「狂犬に従う犬も、狂人に従う善良な人間も、頭を失ってしまえば死ぬしかあるまい。狂気に触れると、人は過酷な暮しの行く末を忘れて、神に近づくと錯覚することができるからな。哀れだがそれは運命だ」

一心斎は心なし虚ろな目を夜空に向けてそう呟いた。その意味するところを、改めて問い質そうとすると、一心斎は半助の顔を正面からとらえて、やめろ、といった。

「やめろ、といわれましたか？」

「いった。侍などやめてしまえといったのだ。家老が口にしたことは冗談ではないぞ。そやつは本気で藩主の兄を暗殺するつもりでおるのだ。四千三百石を藩に取り戻そうというのだ」

「藩士の窮乏を少しでも救おうと苦慮されておるからです」

「人が好いのう。だが、それは違う。苦慮しておるのならまず自ら禄を半減するはずだ」

半助は、あ、と唸ったが一心斎は続けて語り出していた。

「内藤忠勝というのも危険な男だ。そやつは貯め込んだ金で甲州道十六宿で米を買占めておるわ。地主や商人と結託してな。天保の米不足はますますひどくなる。いずれ甲斐には大規模な一揆が起こる。この国に将軍がおり、侍が刀をさしておる限り、一揆はやむことはない」

「ひとつお聞かせ下さい。一心斎殿は何を目的として生きておいでなのですか？」

「いずれこの国を買い取ろうと思うておるのだ。はは、本気でいうておる。じゃが、わしの代では無理であろうな。しかし、人は歴史の中の旅人、志さえ失わなければ、目的は果せずとも快い生き方ができるというものだ」

一心斎はあくびをすると、ゆらりと立ち上った。

「明日は早い。暗い内に出ていく。見送らなくてもよいぞ。そうだ、おぬしにこれをやろう」

そういうと懐から一冊の固い本を取り出して半助の前に差し出した。蘭語で書かれた本のようだった。

「これは、あーめりかという国の、ばうでいいち、という学者が書いた航海指南書だ。えんぐりっしゅ、という言語で書かれてある。読めばこの大地が平らでないことも、キ

ラキラ光るお星様が何故大事であるのかも分る」

「しかし、このような大切なもの、私には……」

半助は二年前の天保二年に、生まれて初めて江戸湾の向うに続く海を見たばかりだった。航海とはおよそ無縁だった。

――それに、えんぐりっしゅていったい何だ？

「侍をやめれば、異国の海を船で巡ることもあろう。そのとき、きっと役に立つ」

「何故これを私に？」

思いがけない程大きな声になった。一心斎の傍に佇んだツルの潤いのある瞳が、半助を正面からとらえてきた。身体の奥底の方で、ぶるん、と震え出すものがあった。

「今日、おぬしは天神岳を眺めておったな」

半助の問いかけには答えずに、一心斎は狭い廊下に佇んだまま半助をそっと見下ろしてきた。

見られていたのか、と思いながら半助は頷いた。不思議に腹は立たなかった。

「何を思って天神岳を見ておったのだ」

「いつかきっと、あの絶壁をよじ登って向うにいってみせると、そう思っておりました」

少し恥しかったが、思いきって正直に答えた。一心斎の表情がさらになごんだ。

「武道家はみな、弟子には厳しい修行を要求する。たとえば、絶壁を素手で登れとな」

「……」

「だが、それは刀を差している者だけの価値観なのだ。本当のことを教えてやろう。実はな、天神岳の向うには梯子がかかっておってな、わずか十間登るだけで頂上に出ることができるのだ」

「！」

「それが武道の種明しじゃ。無駄な修行は、心底無駄なことだ。では、お休み」

一心斎が白い歯を闇の中に一瞬漂わせて去っていくと、そのあたりにあまり嗅いだことのないような匂いが残った。山に咲く花の香りのようでもあり、薬草の匂いのようでもあった。しばらくの間、半助は首を傾げてその場に立ち尽していた。

翌朝、まだ暗い内に半助は組屋敷を出て、丘の中腹にある祠脇の大岩を目ざした。一心斎とツルの二人は、まだ眠っているはずだった。

岩の上に立つと、自分の吐く息が白く映った。半助はそのまま半刻近く佇んでいた。竜北川の遥か彼方に、人の影らしいものが微かに望見できた。それが黒い霧の中に埋まっていくと、出口のない洞窟の中に入っていく巡礼の姿を見てしまったように半助には思えた。重く棘のある失意が半助の傍を通っていったようだった。

さらに四半刻したが麓の街道がいく分明るくなっただけで、依然として旅人らしい者の人影は見えなかった。

――間道を通ったのだ。

あきらめて踵を返しかけたとき、目の隅に青光りするものが冷たい粒と共に飛び込んできた。なんだろう、と思って顔を上げると、まるで半助と天神岳の間にかかっていた黒い幕がはね上ったかのように、荒々しい絶壁が天に向って伸び上っていた。

「あ！」

半助は思わず声を出した。半助の目に、天神岳の頂きに寄り添って佇む二つの小さな人影がくっきりと映ってきたのだ。二人は腕を振ったようだった。あわてて半助も腕を上げた。すると、二つの影は向う側に飛び降りでもしてしまったかのように、不意に消えた。

あとには淡い水色の空が残っていた。その空を、半助はいつの間にか、まるで異国の海の色のようだと思って眺めていた。

夕映えを斬る

一

「あとのことは任せろ、追手がかかる前に、おぬしはとにかく逃げろ」

山崎長吉郎の、低く抑えたつもりでも、自然に甲高くなる鼻にかかった声が、一夜明けた今でも耳の中を転げ回っている。

驚いて狭い部屋の中を右往左往する市太郎の母と妹に、長吉郎は手際よく旅仕度の指示を与えた。そうしながら、市太郎の手を両手で覆い包み、すまぬ、と呟いてひたと見つめてきた。

猫の額程の裏庭に、月の光が落ちていた。夏にしては涼気の混った風が、組屋敷の東側を流れる大聖寺川の方から吹き上ってきて、広い葉を持つ庭木を揺るがして隣家の裏庭へと抜けていった。

「ここに一両三分程ある。母上に無心するわけにもいかず、掻き集められるだけ掻き集めてきた。充分とはいえぬが、これで逃げのびられるとこまで逃げてくれ」

長吉郎の目に、月の光が反射してほの白く光った。そのとき、気が動転していながらも、市太郎は長吉郎のその目を、まるで腐った鶏卵が割れたようだな、と思ったのを覚

えている。

「しかし、逃げるといってもどこへ……」

何故逃げなくてはならないのか、という思いがまず市太郎の胸に貼りついていたのだが、口を衝いて出た言葉は、心の動揺をそのまま表わしたものだった。

粗食ともいえる夜食を終えて、さて、書見にかかろうかというときに、突然、「おぬしに重大な嫌疑がかかっている」と口の端から泡をとばして駆け込んできた長吉郎の、常軌を逸した狼狽ぶりに、市太郎もまたよく考えることができないままに、逃げよう、としてしまったのである。

「まずは国境を越えるのが先決だ。さすれば追手の追及も緩む」

「だが、何処へ……」

市太郎は茫然として呟いた。今日のような事態に陥ることを、全然想像しなかったわけではない。だが、あまりに突然過ぎた。

「そうさな」

長吉郎は一分銀、二朱銀の混った銭を市太郎の掌中に落して手を離すと、意外とも思える落ちつきで袖に腕を入れた。

「塩屋に行くのはまずい。今宵は北前船の入港で賑っておる。橋立も同様だ。瀬越となると、あの異人を拾って匿ったところでもあるし、改めて近づくこともならぬ。なにせよ、浜に出るのは危険だ。それに……」

長吉郎は袖から腕を抜いて、蔑むような目付きで市太郎を窺った。
「おぬし、櫓は漕げるのか」
「いや……」
市太郎は即座に頭を振った。夜の海に、小船で漕ぎ出すことの恐怖が胸を覆った。
「それでは海はまずい、おれなら……」
長吉郎は雲間に隠れようとしている月を左の目尻を吊り上げるようにして眺めた。市太郎よりわずか二歳年上の二十二歳の長吉郎が、そのとき、老成した年寄のように見えた。
「串茶屋を抜けて本藩に入る」
「えっ？」
市太郎は小さく声を上げた。焦燥感に苛まれてはいたが、長吉郎の提案があまりに唐突だったので、思わず我を忘れた。
「街道を南西にとって細呂木から福井藩に抜ける手もあるが、細呂木宿の関所はやっかいだ。ならばいっそのこと加賀百万石に潜入してしまった方がよい。うまく千石船に乗り込むことができれば、大坂まで逃げのびられる」
「しかし……」
といったが、市太郎には反論する余裕はなかった。母と妹が大急ぎで用意してくれた旅仕度がととのい、ひとかたまりの重たい荷物が両腕に置かれたのだった。妹ツタの目には涙が滲んでいたが、何故兄が身を隠さなくてはならないのか、何があったのか、ということなど、一切訊こうとはしなかった。父が死んで一年経ち、幼いだけだった十六の妹にも、藩に仕える武士の窮屈さというものが分りかけてきたようであった。
「何があったかは存じませぬが、早う出立なされ。生きておれば、いずれ汚名が晴らされるときもあろうて」
母はそういって財布を市太郎に押しつけてきた。母の口にした「汚名」という言葉が気になったが、市太郎は何もいわずに財布を母に押し返し、長吉郎にあとを頼んで組屋敷を出てきた。
「首尾よく大坂に出ることができたならば天羽道場を訪ねろ。疋田道場に一時寄宿していた小泉平七郎という者がいるはずだ。頃合いを見計って、おれの方からこちらの情勢を小泉あての文にしたためて送る。安心しろ、おぬしのことは父に頼み、なんとしてでも重役どもを説得してやる。しばらくの辛抱だ」
最後に長吉郎は、早口でそうまくし立ててきた。月が雲間に隠れるのを見計って駆け出してきた市太郎には、その言葉が唯一の救いになった。
組屋敷のある耳聞山町を東に向い、さらに上士の住む屋敷町である亀町の北側に抜けた。
商店の並んだ京町も、この時刻になると雨戸を閉ざしてひっそりと静まり返っている。人気のないのを見すまして、北国街道へと出ると東に足を向けた。少し行くと、暗かっ

た空にわずかに灯りが射した。

月が雲から顔を出したのかと思ったが、そうではなかった。灯りは今出町の茶屋街から出た軒行灯の賑いが、空に映ったものらしい。雲は雨を含んでいるらしく、墨汁を吸い込んだように黒くなっていた。

市太郎は被っていた笠の紐を結び直して街道に足を向けた。長吉郎が口にした串茶屋には関所はなく、番所があるだけであった。たとえ夜でも、大聖寺藩の藩士となれば、通り抜けるのはさほど困難なことではない。

——だが、もし、それまでに追手に追いつかれてしまったら……。

どうしよう、という思いがあった。長吉郎が北東の道を選べといったのには、罪が露見して逃げる者が、まさか本藩へ潜入するような大胆な企みは持つまいという考慮があったからに相違ない。大聖寺藩は加賀藩の支藩として、三代前田利常の時代に生まれたものだからである。

——もし仮に、追手が二手に分れて追ってくるようなことがあれば……。

そう思ったとき、不意にあたりが明るくなった。昼間のような明るさだった。二日前に満月を迎えたばかりの月光は、見上げた市太郎の両目を射抜いた。その周囲に重く垂れ込める黒い雲がさらに市太郎の不安を増加させた。

市太郎は民家と蔵との間の路地に駆け込むと、大聖寺川の堤まで背を屈めて進み、堤に突き当たると川沿いの道を南に向って一気に走った。

温泉宿を四、五十軒かかえる山中村までは四里。夜明け前までには村を通過することができると踏んでいた。長吉郎の慮りに逆らうつもりはなかった。市太郎の臆病さが、南への道を取らせたのである。

そのまま大聖寺川を逆上ると、近頃再び栄えだした九谷窯のある九谷村まで出ることができる。相当な奥地だが、もし許されるのであれば、その地で、九谷焼などを焼いて、武士道とは無縁の、ひっそりとした生活を送りたいものだ、と市太郎は雑草の生い茂った小路を急ぎながら考えたりもした。そこに許婚者のキクの面影も浮いた。

だが、町を上流に向って進み出したときから、市太郎の胸の内には、逃亡の道すじが描かれていた。山中村、栢野村、菅谷村と丁度刈安山の山麓を半周するように通過し、風谷峠を越えて有馬家領の丸岡藩へ到達する道のりである。十歳の頃、父に連れられてその道を通ったことがあった。失意と絶望が交互に頭をもたげてくる中で、そのときの懐かしい思い出だけが、市太郎の胸の内を明るくさせていた。

だが、上原村を過ぎ、山中村にさしかかった市太郎は、薄明りの射した村の入口を遠くから望んで、大量の汗と共に重い溜息を洩らすことになった。

小鳥が鳴き、静まり返った旅籠の藁屋根に漂った靄がゆっくりと上昇し、湯元から立ち上る煙が眠気を誘ってくるのどかな情景の中に、一点、黒く大きく聳えるものがあった。

それは、閉ざされた木戸だった。城下の関町に置かれた関所の木戸は、もっと大きく

堅牢な丸太で組まれていたが、そのときの市太郎には、村の木戸が城壁のように巨大な姿で立ちはだかって見えたのだった。

顎から胸に流れた汗を拭い、竹筒に残っていた水を飲み干した。そのとき、道端にある地蔵が目に入った。村人が思いつきで乗せたらしい菅笠が地蔵の頭に被せてあって、そこに「一心」の文字が書かれてあった。

市太郎は地蔵の後に広がる竹藪と雑木林の混った奥を透かして眺めた。恐る恐る入っていくと、樹木の切れたところに堂が建っていた。時折手入れをする者があるらしく、堂の壁は落ちてもいず、周囲の縁も腐ってはいなかった。

市太郎は石に足を置き、堂の戸を左右に開いた。むっとする湿気とこもった熱を予想していたのだが、中から流れ出てきた空気は思いのほか涼しかった。

「ごめん」

人の気配はなく、中も暗かったが、市太郎はそう呟いて堂に足を踏み入れた。身体の下に敷くものを期待していたわけではないが、入ったところに丸めた藁が転がっており、市太郎は深く考えもせず、それを広げて横になった。

戸の節穴から、夜明けを知らせる白い光が射し込んできていた。山崎長吉郎の「とにかく逃げろ」という言葉が胸に浮いたのはそのときである。

――ここで捕まっては、逃げることは到底不可能だ。そのときは、何故行き倒れになった異国人を助けるようになったか、そのいきさつを目付の前で述べるしかあるまい。

あの者が切支丹でなかったことは、長吉郎も証明してくれるはずだ。

荷を頭の下に置き、目を閉じると、すぐに意識が遠のいた。恐れも、不安も、睡魔に呑み込まれ、たわいなく溶けていった。

二

目が覚めたとき、戸の節穴から射し込んでくる光に、夏の熱を感じた。

市太郎はとっさにとび起きた。昨夜から今朝までの出来事が、急流のように頭の中を巡った。

だが、次に市太郎がとった行動は、自分でも思いがけないものだった。

板戸を開くと強い光が溢れていた。樹木の濃い緑が眩しく、生あるもののたくましさを感じた。

市太郎は堂を出ると、思いきり伸びをした。身体の節々が痛み、肩を回すとコキコキと乾いた音がした。

――追手はこなかった。長吉郎の説得が利いたのだ。そうなのだ。おれはもともと無実なのだ。何も逃げることはなかったのだ。

そう思うと心も軽くなった。

市太郎は堂の横に回り、袴をまくって小用をした。それから竹筒を手にして雑木林を

出た。百姓家の納屋の横に井戸があり、水を汲んで口に含んだ。

少し生ぬるかったが、水質はよいようだった。楊子で歯を磨き、顔を洗ってから小袖を脱いで水に手拭いを浸し、それでもって汗臭い身体をごしごしと拭った。

村の木戸はすでに開かれ、湯治客や荷馬車の往き来する姿も稲の向うに垣間見えた。菅谷村までは領内で、山中村は湯銭運上として毎年金二枚を納めているはずで、郡奉行が支配をしていた。

――いちおう、奉行配下の足軽にでも、何か変ったことがなかったか、様子を窺ってみるとするか。

手拭いを肩に置いた市太郎は、若者らしい無邪気さでそう考え、足を村にいったんは向けかけたが、堂に置きっ放しにしてある荷物を思い出し、竹筒に水を満たして堂に戻った。

堂の戸は開かれたままになっていた。その光の届くところに、脛毛を剝き出しにした二本の足が投げ出されている。市太郎は驚いて駆け出した。

「な、何奴(なにやつ)だ」

市太郎の声が響いた。近付いて見るとさらにびっくりしたことに、むさくるしい浪人者が市太郎の荷を広げ、中から竹皮に包まれた握り飯を取り出してむしゃむしゃと食っている。

「ぶ、無礼者」

市太郎は脇差に手をかけた。昨夜、母が恐慌状態の中で握ってくれた大切なものだった。それをどこの馬の骨とも分らぬこの痩せ浪人に盗み食いされてしまっては、母に申し訳が立たない。

「冷や飯を握ったな」

浪人は口をもぐもぐと動かしながら、ひどくのんびりとした口調でいった。

「なに！」

「冷えた飯を握って握り飯にしたのだなといっておるのだ。こういうやり方はよくない。そちの妻が握ったのか」

「母上だ」

「だめな母だの。料理の心得がなくては、夫を早死にさせる。やはり握り飯は熱いご飯を、あつ、あつ、と言いながら握ってこそうまいのじゃ。これでは強飯(こわめし)と同じじゃな」

浪人者はそういって手についた飯を払った。日光が直接顔に当たるのを避けて、陰になったところに引っ込んでいるので、その表情までは読みとれない。だが、目の白い部分は闇夜の山犬のように輝いている。

「おのれ、無礼を申すとただではすまんぞ」

市太郎は腰を低くしてにじり寄った。太刀は荷と一緒に堂に置いておいたが、このような浪人者ならば、脇差で充分だという自覚があった。学問は不得手だが、城下の疋田道場では上から六番目に市太郎の名札が掲げられてある。

「握り飯はまだ一つ残っておる。食べるとよい」
浪人者は下腹のあたりに置いていた握り飯を、竹皮ごと縁先にほうって寄こした。白い飯が、眩しく光った。
「それは拙者の握り飯だ。よくも人の荷を開けて盗み食いをしおったな」
「一宿一飯の仁義というやつだ。わしはおぬしに宿を与えた。今度はおぬしがわしに飯を出す番だ。ただ、断りもせずに先に食ってしまったのは悪かったがな。ま、そう怒るな」
浪人者はごろりと横になり、片肘をついた。顎から鼻にかけて日が当たった。髭はうっすらと生えていたが、思った程見苦しい顔ではなさそうだった。
「おぬしが拙者に宿を与えたと申すのか」
「さよう」
「この堂はおぬしのものだというのか」
「わしのものではないが、わしが二日前より借りうけている」
「誰から借りているのだ」
「松尾芭蕉翁からじゃ」
「ばかな」
市太郎は吐き捨てるようにいった。
「その俳人なら百年も昔に死んでおる」

「ところが芭蕉が来遊した折に建てられたのがこの庵なのじゃ。泉屋桃妖親子が、城下の豪商吉田屋伝兵衛に無心して建てさせたのだ。一昨日、わしは成仏している芭蕉さんに、しばらくここで仮住まいしたいのだがと頼んだところ、大喜びで了承してくれた。ついでに床下に金銀が眠っていることも教えてくれた」
「じじい、さっさと立ち去れ。気がふれておるようだから殺生はせぬ。さあ、行け」
市太郎は脇差の柄から手を離して身体を斜めに傾けた。その足許に銀色に輝くものが突き立てられた。
「なにをする」
肩を再び怒らせた市太郎は、浪人者の「よく見ろ」という言葉に促されて足許に目を据えた。
「こ、これは！」
「ほれ、まだこんなにあるぞ」
浪人者は軽く手首をひねった。その手から数枚の豆板銀が放たれてきて、市太郎の右の足の親指から二寸のところに並んで突き刺さった。
「それはな、朝倉義景が隠しておいた軍費の一部じゃ」
「ま、まことか！」
市太郎は背を丸めて五枚の豆板銀を地中から抜き、手にとってしげしげと眺めた。それぞれ形も重さも少しずつ異なるようだった。

「まことに朝倉が隠した軍費なのか？」
「小僧、顔付きが卑しくなったぞ。先程の握り飯の一件といい、相当貧にあえいでいるようだの」
「こ、小僧とは何たる言い草だ。浪人風情にそのように侮蔑される覚えはない。無礼者めが」
市太郎の顔が熱くなった。紅潮しているのが自分でも分った。とにかく一度叩きのめしておかなくては気が済まない。
「無礼者とはこのような者のことをいうのかな」
浪人者は横になって頬杖をついたまま、片方の足で床を掻いた。その足の親指が、市太郎の刀の柄を挟んでいた。
「武士の魂に何をするか！」
市太郎は脇差に手をかけて一気に抜き放った。そうしたつもりであった。だが、その刹那、目に見えない縄で身体が縛られたようになり、周囲の光景が斜めに揺らいだ。気が付くと、市太郎は地面に膝を広げて坐っていた。腰が抜けたような感じだった。
「お、おぬし、何をした？」
「何でもよい。どうせ小僧には分らん。ほれ、武士の魂を返すぞ」
浪人者はそう言いながら堂から裸足で出てきた。右手に市太郎の太刀を持ち、左手に竹皮に乗せた母手作りの握り飯を持っていた。

「まず、食え。腹が減って気が立っているのであろう。そのあと、チト、おぬしに尋ねたいことがある」
浪人者はそういって平たい石に腰を下ろすと、両手をぬっと市太郎の顔の前に突き出してきた。
何が何だか訳が分らなくなり、市太郎はえーいままよとばかり握り飯を手にして食い出した。気が付くと水の入った竹筒も、五枚の豆板銀と共に袴の間に置かれてある。竹筒はともかく、豆板銀は、脇差の柄に手をかける前に、しっかり懐に放り込んだはずであったのに、と市太郎はいぶかしんだ。
「この小粒が朝倉家の隠し金だというのは嘘だな」
飯を頬張りながら、まず最初に確めたかったことを訊いた。浪人は鼻先で嗤った。
「そんなことは見れば分るはずじゃ。こいつは元禄銀でな、享保七年までおよそ三十年の間使われたものだ。こいつは宝永に造られた新銀で、ほれここに、宝の字の極印が三つ刻んである。こっちのものはずっと下って安永南鐐二朱銀じゃな。これは文政年間のしまい頃まで通用しておったものだ」
「ふむふむ」
市太郎は頷き、竹筒を取って水を飲んだ。浪人者のいう通り、ごわごわとしたひどい味だった。ふと、苦渋に満ちた父の顔が思い起こされた。
「わしが手に入れた朝倉家軍費の埋蔵地図は、このあたりの地形を描いておると睨んで

いたのだが、どうやら見当違いのようであった。朝倉が信長軍に尻を突つかれている頃は、まだかような銭は造られておらなんだからな」

「地図？　そのような埋蔵地図があるのか」

「ある。だが、おぬしに見せるわけにはいかん」

浪人者は急にはにかんだような笑みを見せた。

「だが、朝倉の軍費は見つけられなかったが、壺に入った粒銀がザクザクと出てきた」

「そ、それでは、こ、これらの小粒はまことにこの堂の床下に埋められていたものなのか？」

「そうだ。たぶん吉田屋あたりの豪商が、年月をかけてヘソくったものであろう。元禄の頃から天保四年の今日まで、いや、ご苦労なことだ」

浪人者は手にした豆板銀を無造作に懐中に入れた。市太郎はあわてて水を呑んだ。

「それはならぬぞ。それは藩のお宝だ。届けなくてはならん。着服することは許さん」

「ではおぬしにやろう」

浪人者は懐に入れた五枚の豆板銀を、市太郎の袴の上に投げ出した。市太郎はとたんにむせた。

「ところでおぬしの行動を、今朝方から逐一見ておったが、少し腑に落ちぬことがある」

浪人者は首を伸ばして市太郎を見つめた。濃い眉毛の下の双眸は、天の穴を覗いたように暗くて深いものがあった。一瞬、市太郎の背中が痺れたようになった。その感じは、不快なものではなかった。

「ここに入ってくるとき、おぬしは何者かに追われているような怯え方をしておったが、違うか？」

「それは、ま、確かに……ま、待て、拙者のことを逐一見ておったと今いったが、貴殿は一体どこにおったのだ」

「その中で寝ていた」

浪人者は後を向いて顎を振った。

「まさか。そのようなことは断じてない。人の気配などはまったくしなかったぞ」

「あたり前じゃ。わしが気配を消しておったのだからな」

市太郎は何か言い返そうとしたが、浪人者の目に吸い寄せられている内に、喉を通りかけた言葉が消えてしまったようだった。

「だが、昼近くなって起き出した時には、いまのように気楽な面持ちになって、そこでションベンなどをしておったな」

「そ、それも見ていたのか」

「うむ。若い割に質素なナリをしておったな。なかなかよろしい」

市太郎は腹の中がまっ赤になった。水と一緒に流し込んだ握り飯が、胃の中で粥になった思いがした。

「さて、わしが腑に落ちぬのはそこじゃ。追手が村に来たというのに、おぬしは何故、ひと寝入りしたら何事も心配ないという心境になれたのじゃ？　切支丹がどうのと寝言をいっておったが、それはどういうことなのだ？」

市太郎はきょとんとしてしまった。浪人者が口にしたことをもう一度胸の内で反芻して、うっ、といった。

「追手が来たというのか？」

「来たな。ところでおぬしは切支丹を匿ったのか。いや、わしは耶蘇教などくだらんものだと思っておるが、切支丹を密告しようなどというものではない。安心せえ」

浪人者の間の抜けた言い方にいらだち、市太郎は危うく舌を噛みそうになった。

「待て。拙者を追ってくる者があったというのか？」

「あった」

「い、いつのことだ？」

「おぬしが寝込んで間もなくのことだ。侍が三人、形相を変えて木戸番の者を叩き起こしておった。上意討ちであると申しておったな」

「上意討ち！」

市太郎は悲鳴をあげた。それでは逆臣の汚名を着せられたことになる。

「先程村にいったら、旅籠を虱つぶしに調べておった。おぬしは小野市太郎と申すのではないかな」

「さ、さようです」

市太郎の両膝が急に震え出した。母と妹の顔が浮かび、二人が縄で縛られている姿を想像すると胸が苦しくさえなった。

浪人者の手が肩に置かれた。見上げると夏空を背景に、仙人のような気高い表情をした浪人者の顔が、おだやかな笑みを浮かべて市太郎を見つめていた。

「今まで寝惚けておったのだな。どれ、詳しく話を聞こう。事と次第によっては力になるぞ――」

市太郎はこっくりと頷いた。この見知らぬ浪人者に急に魅かれるものを感じたからだった。何故、急にそんな心境になったのか、自分でも分らなかった。ただ、全てを話せば、自分が救われ、その上でいつか、袴をつけた侍ではない、本当の自分に立ち戻れるのではないかという気がしていた。

三

促されるままに堂に戻った市太郎は、これまでのいきさつを話しだした。

半月前のことであった。市太郎は疋田道場の仲間である山崎長吉郎と共に、瀬越の港に出向いた。北前船の船主が運び込む荷とは別に、ある水夫が蝦夷地から持ってきた特産品を受け取りに、大聖寺川の河口に近い漁師小屋に出向いたのである。

「鷹、鷲の羽根、珍しい石、コンブ、アワビなどです。冬であれば熊の毛皮、らっこと呼ばれる動物の皮もありました」

それを近江商人に売る。その出店は表向き質屋をしていて、商人達は、元方、質方、見世方の組織をうまく組み合わせて国内を動き回り、儲けているのだという。

「長吉郎に誘われたのはそれが二度目のことで、やつの話だと二年も前から、三月、あるいは四月に一度の割合でそういう取引きをしていたようです。勿論、藩には伏せてのことで、特別の者でないとそういううまい話にはありつけません。いわば、私は秘密の仲間として認められ、引き込まれたわけです」

山崎長吉郎は部屋住みであったので、所定の学習塾に通えば、あとは好きなように行動できる。一年前まで市太郎も部屋住みで準給人である供小姓を務めていた。給金は六両三人扶持であった。昨年四月、父が亡くなり、家督を継いだ。父は給人格の七十石であった。

「ですが、同じ部屋住みでも、山崎長吉郎は取付役の役目を仰せつかっています。銀三十枚ですから小遣いに不如意することはまずありません」

「取付役といえば、いわば重役見習だの。すると何か、山崎の親父は藩の重鎮なのか」

「はい。御家老様です」

「城代は前田主計、その下に佐分儀兵衛、すると長吉郎の親父は山崎権三衛門と申すやつじゃな」

「よくご存知で、ご貴殿は一体どなた様で」

「わしか。わしは天下の素浪人。この世から武士が消滅したあと、国の乗っ取りを企んでおるものだよ。そのためにはまず金を貯え、同時に諸国を巡って武士を啓蒙し、侍から足を洗うように説得しなくてはならん。これでなかなか忙しいのだ」

「……武士がいなくなる、というのですか」

「いなくなる。もともと公家どもの畑を守るために生まれたのが武士だ。今では公家は死んだも同然。つまり、武士などいらんのじゃ」

「武士がいなくては、国は成り立ちませぬが」

「おるから駄目になってきたのじゃ。今年は冷夏だ。あちこちで飢饉が起こる。だが、武士では飢えた者を救えんのだ。いや、天災に対して、人がなすべきことは、命からがら逃げのびることだけじゃ。生きておればいずれ復興もありえるからな」

「……」

「しかしながら、将軍も、藩主も、藩士も、空を仰がず、寿命が迫っていることも知らず、己れだけが姑息な手段で生き延びようと画策しておる。目を部屋の隅ばかりに向けていては、いずれ、異国人にこの国は乗っ取られる。打ち払い令などと、とんでもない法令を発しおって、まったく馬鹿につける薬はない。国を開こうとしないから相手は武力でもって押し開こうとしてくるのだ」

「ですが、こちらが無防備でいれば、敵側はいいように攻め入ってくるのではないですか」

「さよう。その兼ね合いがことにむつかしい。いってみれば、この国はあまり男を知らぬ女子と同じなのだ」

「？」

「そうヘンな顔をするな。おぬしも金玉を取り払ってチト女の気分になって考えてみれば分る」

「いや、それは……」

「男が力ずくで手込めにしようとしてくるから、膝を閉ざす。胸を開こうとすれば懐刀を抜いてこれを拒む。だが、美しい、といって寄ってくる男がいれば、悪い気がしない。それが、見栄えのよい男であれば、ぐっとよい気持になる。有頂天になる。『そなたのためならこの命、いつでも捨てる覚悟よ。この狂おしい思い、分ってくれい』、なーんていわれると、ヨヨヨと身体を崩してしまう。その男が本懐を遂げたあとで、腹に一物も二物も悪企みを抱えていると分っても、もう遅いのだ」

「では、寄ってくる男たちを、女子はどのように選別すればよいのですか」

「経験だ。こういう女のことを、あーめりかという国では、きゃりあうーまんというな」

「……」

「さあ、続きを話せ」

「……実は、その漁師小屋のなかに、傷ついた異国人が潜んでいるのを発見したのです」

「面白くなってきたな」

異国人は六尺以上もある大男だった。赤毛で目の色は氷のようだった。長吉郎はたちどころに斬ろうとしたが、市太郎が押しとどめた。異国人に敵意はなく、大きな身体を震わせて怯えていたからである。

「着ていたものは破れ、身体は岩に当たってできた切り傷で腫れ上っておりました。どうやら、おろしや国の船の水夫が、小船で浜に上ろうとして難破したものだと思われました」

長吉郎は、とにかくこのままでは捨ておけん、といって血相変えて小屋を出ていった。奉行所に人を呼びに行ったことは明らかだった。市太郎は危険を承知でおろしや人を、北前船の水夫に手伝ってもらって、近くの漁師の家にまで運んだ。放っておけば出血多量で死んでしまう人間を、異国人だからといって見捨てるわけにはいかなかった。

漁師は親切だった。その漁師の女房が、半分おろしや人の血が混っていると噂されていた。市太郎がその家に異国人を運び込んだのもそんな理由からだった。漁師の女房は手拭いで顔を隠してはいたが、背丈は五尺八寸もあり、白魚のようなきれいな肌をしていた。

「匿ったと知って長吉郎は激怒しました。私は足軽を帰し、長吉郎におろしや人が所持していた短筒を見せました。それはこの国では見ることのできない、精密な短筒でした。長吉郎は目を見張りました。あやつは、そういうものに目がないのです。その短筒を長吉郎に手渡すことと引き換えに、ゆーりいの一件は内密にしてくれるように頼みました」

「ゆーりい？」

「ゆーりい・すけぼろわすきい、という名でした。実はこの男は水夫ではなく、いわば密偵のような役目をしていたことが分りました。履物の底が二重になっていて、そこにわが藩の絵図面らしきものを所持していたのです」

「らしきもの？」

「発見したときは海水で汚れ、絵図面が乱れておりました」

長吉郎にはひた隠しにした。市太郎が敵ではないと悟ったゆーりいは、傷が癒えると、紙に船の絵を描いて差し出してきた。

「和船とは明らかに違う、このような船でした」

市太郎は浪人者から受け取った懐紙に、ゆーりいが描いてくれた船の絵を思い出しながら描いた。それは柱を二本持った洋船だった。浪人者は市太郎が描いたものを、手にとってじっと見つめた。

「舷側を銅板で守っておるのだな。それで、原図はどこにやった？」

「それが、山崎長吉郎に発見され、ゆーりいはその場で首を打たれ、船の図はあやつに持ち去られました」

内密にするはずであったゆーりいの一件も藩に露見し、市太郎は追いつめられた。

「それでおぬしに逃げるようにすすめたわけか。腹黒い若僧だ。しかも、生かしておけば色々と役に立つであろうおろしや人をむざむざと殺してしまうとは、愚かなやつだ。おい、次郎吉」

ふいに浪人者は外に向って声を掛けた。すると堂の陰から商人姿の目尻の下った小柄な男が現われてきた。堂の戸は開けておいたので、人が来れば察知できるはずだったのだが、市太郎は全く気づかず、ただ、ただ唖然とするばかりだった。

「どうだ、図面のありかは分ったか？」

「それはまだ見つかりません。ですが、今お話に出ていたおろしやの船の絵は、この目で確かめてきましたぜ」

そう言いながら、次郎吉と呼ばれた男は手にした笠を浪人者に差し出してきた。そこには「一心」と書かれてあり、地蔵が被っていたものだと市太郎は気がついた。

「それから、その山崎長吉郎のことで、とんでもないことを目にしましたぜ。いや、見てしまったといった方がいいんでしょうか」

次郎吉は遠慮がちに市太郎の方を見つめてから、浪人者の耳許に口を寄せて、何事か耳打ちしだした。

頷いた浪人者は顔を上げると、市太郎を黙って見つめた。鷹のように鋭い目付きだった。

「山崎長吉郎が討手を引き連れてじきにここにやってくる。逃げるか、迎え撃つか、即座に決めねばならぬぞ」

「しかし、どちらといわれても……」

逃げれば母と妹に難儀がかかる。勘定方の木村誠七の妹キクには未練があったが、今ならキクの身に傷がつくことはない。

「山崎と共に城に戻って、大目付様に全てを有り態に申し上げます」

「それだけはならぬ。分らんのか、山崎長吉郎は罪をおぬしに被せ、手柄のみ己れのものにするつもりじゃ」

「まさか」

「では、あの出立ちは何とする」

浪人者は鋭く頭を回し、腕を伸ばした。その指の先に、三人の侍の姿があった。背後から大きな日が射してきて、三人の黒い影を、二本足で立ち上った熊のように大きなものにさせた。

「山崎！　何とした！」

市太郎は叫んだ。雑木林にこもっていた熱気に、その叫び声はからめとられ、たわいなく溶けた。現われた長吉郎は股立ちを取り襷掛けにしていた。汗を顔面に浮かべ眼尻を吊り上げて長吉郎は口を開いた。笑ったようにも見えた。

「密貿易が露見し、ついに脱藩するとは、見下げ果てた奴だ」

「脱藩？　脱藩とは何のことだ！」

「上意討ちだ、市太郎。おれに討ち取られることを、せめて有り難く思え」

「待て、長吉郎。逃げるようにすすめたのはおぬしではないか、待て」

三人が抜刀するのを見て、市太郎は堂の中であわてて後ずさった。そのとき、腰が前にぐらりと突き出た。背後から浪人者が市太郎を突き飛ばしたのだ。堂の縁から転げ落ちた市太郎の目の前に、三つの刃がぎらりと光った。

「上意！」

右手にいた侍が、大上段に振りかぶった刃をまっすぐに振り下ろしてきた。身をかわす余裕がなく、とっさに脇差で一太刀を受けた。だが、二太刀目の攻撃で右肩に重い衝撃を受けた。

「市太郎、覚悟！」

長吉郎の赤鬼のように脹れ上った顔が真上に迫ってきた。最早、これまで、と市太郎は覚悟した。一瞬だが、目を閉じたようでもあった。

「待つのだ」

その声は、討ち合いの場にはおよそふさわしくない、ひどく間延びしたものであった。市太郎が上体を起こしてあたりを見回すのに充分の余裕があった。

「せめて、刀を取らせてやれ」
浪人者の手が市太郎の腋の下に差し込まれた。背丈が伸びた気がしたと思ったら、市太郎はしっかりと大地を踏みしめて佇んでいた。
浪人者は抜刀している三人に向き直った。大上段に構えたはずの長吉郎は、顔を皺だらけにして何事かいおうとしている。だが、怒りが空回りして声にならないようであった。
「刀を抜いて斬り合いをしている時代ではない。時代ではないが、おまえらのようなバカ者どもは死んだ方がいい。いなくなればそれだけ百姓の負担が減る。わしは人を斬るのは疲れるから普段はあまりしないのだが、ま、閑つぶしということもある。そっちの二人には、口封じの意味もあるので死んでもらおう」
浪人者はそう言いながら市太郎に刀を手渡し、自分は山崎長吉郎を左右から支えるように身構えている二人の討手に向って、両手をふわりと差し出すようにした。
初めに市太郎に一太刀を浴びせた右手の侍が突っかけてきた。ひと呼吸置いて左手にいた肩幅の広い、蟹のような侍が突きを繰り出してきた。
浪人者は何もいわずに両手を交差させた。右手にいた侍は、それだけで石につまずいたように前にのめった。その侍の首を、遅れて突いてきた蟹侍の切先が貫いた。血しぶきが上り、山崎長吉郎はわっと喚いて後ずさった。見ると、首を突かれた侍の大刀は、蟹侍の下腹を突き刺したまま、身を斜めにして佇み、絶命していた。

「何をしておる。山崎長吉郎を斬れ」
「はっ……」
抜刀をしたが、市太郎の腕はそれ以上は動かなかった。
「臆するな。こやつはおぬしの許婚者を横取りしたのだぞ。そうだな次郎吉」
「さようで」
地面に片膝をついていた商人姿の男が、物悲しい目を市太郎に向けていた。
「キク殿を！」
市太郎の頭の中がまっ赤になった。それは血の海と化して洪水のように暴れ回り押し寄せてきた。
「市太郎、遥か彼方の陽光に向って太刀を振るのだ」
浪人者の声が耳にすっと入ってきた。長吉郎の醜く歪んだ顔をとび越して、市太郎は刀を振り下ろした。そのとき、確かな手応えと共に、自分が神になったような感じを持った。
足許に横たわる、かつての同朋の姿を認めたのは、どれほどの時がたってからだろうか。悲しみが一気に胸に押し寄せてきた。陽光が歪んで渦巻き、目の中になだれ込んできた。なぜ、と市太郎はそれだけを呟いていた。

魂を風に泳がせ

一

面を着け終えた師範代が、両手に籠手をはめて立ち上ると、正面に坐していた道場主から待てという声がかかった。

虎之助は防具をつけず、竹刀だけを左手にして佇んでいた。重田平兵衛は弟子に向って竹刀を引くように命じると、今度は虎之助に向って大きく頷いて見せた。

「？」

重田平兵衛は、四十過ぎの痩せこけた男で、体格も大きい方ではない。まずは五尺五寸といったところで、その軽い感じは身体全体から滲み出ている。

威厳を保つため鼻の下に立派な口髭をたくわえているが、胃を患って修練も満足にいたしていないようで、色黒の顔は粉を吹いたように乾いている。

その重田平兵衛は、薄暗い道場の床にただ一人、取り残されて佇んでいる虎之助に向って、もう一度頭を上下に振ってみせた。

馬のように大きな目が今にも飛び出さんばかりに虎之助を睨んでいる。

「なにか？」

虎之助は腑に落ちない思いでそう訊いた。重田平兵衛の合図めいた仕種がよく分らないし、何故、三番手の相手である師範代の竹刀を引かせたのか、理解できずにいた。

師範代を討ち破れば道場主の重田平兵衛が立ち合うことになっている。重田は天真独明流という珍しい流派の看板を掲げていた。

「お？」

虎之助が思わずそう口に出してしまったのは、重田平兵衛がつと立ち上って、廊下に出て行ってしまったからである。あとには破目板を背に正坐して、この道場破りめ、とでも言いたげに、憎しみを湛えた顔で虎之助を睨みつけている二十幾つかの目玉があるばかりである。

そのうちの二人は虎之助に喉を破られてまだ呻き声をたてている。立ち合いを逃れた師範代だけが、妙にさっぱりとした表情で虎之助を見上げている。

――どうなっているのだ、これは。

厠へでもいったのか。それにしても断りもなく中座するとはけしからん。

そう思って口をへの字に曲げて天井を睨んでいると、平兵衛の消えた壁から小さな白いものが現われて、島田さま、と虎之助の名を呼んだ。

「どうぞこちらへおいで下さいまし」

白いものは女の顔で、廊下に手をつきもせず、立ったままでそういった。虎之助は竹刀を戻し、預けておいた刀を手にして日の差さない廊下に足を踏み出した。

女は小柄で虎之助の肩位までしか背丈がない。それでもすべるように歩いていく。不意討ちでも食らわせるのではないかと、虎之助は左右の部屋に気を配って女のあとをつ いていったが、そのような無粋な目に遭うこともなく、女の指し示す奥の部屋までたどり着いた。

女は重そうな戸を開いて中に声をかけた。狎れた物言いで平兵衛らしい者と喋っているので、こいつは妾か、と虎之助は勘ぐった。だが、いかに何でも道場に妾を囲う者はおるまい、と邪推を打ち消して招じられるままに部屋に入ると、果して重田平兵衛が、道場にいたときとは打って変って、目尻を下げて笑っている。

その視線が女にではなく、自分に向けられていると知って、とたんに虎之助は落ちつかなくなった。

「いやあ、お強い。お見事な腕前、重田平兵衛感服致した」

平兵衛は右腕を差し出し、虎之助に坐るように促しながら頬を丸めて頷いている。

「いや、まだあれしきのことでは……」

拙者の力の片鱗すら見せてはいない、と虎之助は腹の中で呟いていた。立ち合った二人は一刀流でいう切紙程度で、赤子の手をひねる程にたわいなかった。あんな者達相手に勝ったところで自慢にもならず、誉められるにしても居心地が悪かった。

「して、申し合いの方はいかがなされた？」

虎之助は、商人のような笑みを浮かべている平兵衛に向って、吠えるように訊いた。

「もうやめた」

「やめた？」

「こんな田舎道場の主ではとても太刀打ちできぬ。怪我をするだけ損じゃ」

「……だ、だが、それがしとしては、天真独明流の太刀筋をたとえ一振りなりとも目に入れたいと願い、まかり越したものでござる」

「なんの、天真独明流などとうの昔に滅んでおる。根来八九郎という百五十年も前に死んだ男の技を、先代が江戸に遊学しておった頃に、根来の弟子と称する輩から教わっただけじゃ」

「……」

虎之助は唖然として目の前に鎮座した獺のような男を眺めていた。これでも剣術道場の看板を掲げる剣客なのか、とあきれていた。勿論、物もいえなかった。

「お若いのにあれだけの剣を身につけられるとは、さぞや苛酷な修行を積まれたのでござろうな」

「……」

虎之助はじっとして相手の目の奥を注視していた。おだてるだけおだてておいて、涙銭ほどの草鞋銭を与えて追い返す腹づもりなのだろうと勘ぐっていた。

「一刀流とお見受けしたが、剣はどなたについて修練されたのかな」

平兵衛は鉄扇を左手に取って、トン、と自らの内股を叩いてみせた。

「初めに手ほどきを受けましたのは、藩の剣術師範を務めておられた堀次郎太夫というお方です。しかし、十六のときより、師の許しを得て、廻国修行の旅に出申した」
「十六で廻国修行……それはすごい。つまり、免許皆伝を得られて、さらなる研鑽を積まれたという訳ですな。儂の弟子どもに貴殿の爪の垢でも煎じて飲ませたいものじゃ。なにせ、太平の世に慣れきって、あのように海鼠のようになって暮しておる」
平兵衛は嬉しそうに髭を撫でた。虎之助は憮然としたままでいる。
「豊前中津の出身と取り次ぎの者から聞き及んだのだが、さすれば廻国修行の折、柳川に立ち寄られることはなかったのかな」
「行き申した」
「では、大石神影流の大石進と立ち合いをされたのか」
「いかにも」
「で、首尾はいかがであった」
平兵衛は首をにゅっと伸ばしてきて、すぼめた唇を突き出した。そうすると余計にずる賢い獺の顔に似てきた。
「初めの立ち合いでは完膚なきまでに打ちのめされ申した。その後、大石殿は江戸に向われ……」
「さよう、五尺二寸の長竹刀で千葉周作の北辰一刀流玄武館を始め、江戸の名だたる道場を片っぱしから破り、その名を天下に知らしめたのでござったな。その剣名はこの越

前の地まで聞こえ及びましたわ。して、大石進とは、いま一度立ち合われたのじゃな？」
「昨年、大石殿が江戸より戻られた折に」
「で、試合はどうであったか」
「勝ちを譲って頂き申した」
「なに、勝った！　大石進に勝った！」
平兵衛は腰をはね上げた。そのとき、勢いよく鉄扇を膝頭に打ちつけ、少しの間顔をしかめた。
「綾、おい、綾」
気を取り直した平兵衛は手を叩いて廊下に向って怒鳴った。戸が横に開いて、先程の女が顔を出した。
「酒の仕度をせよ。肴は仲善に頼んで至急に作らせろ」
「いや、それがしは修行中の身、酒はお断り申す」
虎之助は右手を伸ばして辞退した。
「そう固いことを申されるな」
そういって平兵衛は片膝を立て、上体を伸ばしてくると、ひょいと虎之助の右手を摑んだ。
「！」

虎之助はびっくりした。そんなふうに男から手を握られたのは初めてのことで、腹の中で、げっと呻いた。

「島田虎之助殿、おぬしを剣客と見込んで頼みがあるのじゃ」

「な、なんでござるか」

「その腕を買いたい。いや、大聖寺藩のために役立ててほしいのじゃ」

平兵衛は小さいが奇妙によく輝く目を向けてさらに顔を近づけてきた。

「それがしは一介の剣士。よその藩のために働くいわれはござらん」

虎之助は右手を摑んでいる平兵衛の手を振り払った。しかし、平兵衛はひるまずに、今度は息がかかる程、口髭を寄せてきた。

「おぬしでなくてはならんのだ。うちの弟子どもではご家老の命を守りきることはできん。たとえそうしたくても、大っぴらにできぬ事情があるのだ」

「……」

「十日で十両出そう。一日一両。修行の身には大金であろう」

「刺客をせよ、ということなのか」

虎之助は平兵衛の気迫に負けまいとして胸を張り出した。驚いたことに、平兵衛は人差指を虎之助の稽古着の中に入れてきて、汗ばんだ胸の筋肉を突っついた。

「刺客ではない。今も申した通り、ご家老様を守ってほしいのじゃ。刺客を雇っているのは、敵の方じゃ」

平兵衛の臭い息が鼻にかかった。水が腐ったような臭いが漂った。それを不快だと思いながらも平気でいられたのは、幼い頃、養子に出された草深い人吉の地で嗅いだ、沼地の臭いと似ていたせいかもしれなかった。

膳に徳利を置いて戸を開いた綾が、二人の様子を目にとめて、あら、と可愛い声を出した。その頬が、薄暗い部屋の中でも、みるみる紅潮してくるのが分った。虎之助は居ずまいを正した。そして、威厳を持っていった。

「当道場を訪ねたのもなにかの縁。今一度、お話を詳しく伺いましょう」

「おお」

平兵衛は大口を開いて頷いた。それから先程まで坐っていたところに戻っていき、悠然と髭を撫でだした。

二

「ご城代の前田主計様はお上の叔父上にあたられる方でな。温厚で実直、人望もあるのじゃが、なにせ七十の高齢で病気がちでな、とても苦しい藩財政を立て直すような激務には耐えられぬ」

重田平兵衛は左手に握った扇子で胸に風を送りながら、湯呑みに注いだ酒を呑んだ。夕方になって少し風が出てきたようだが、重田道場は大聖寺川に背中を向けるようにし

て建てられているので、風は庭先の草花を揺るがせるだけで、部屋の中までは入ってこない。

虎之助の頼みで障子は開けてくれたが平兵衛の気遣いはそこで終ってしまって、汗ばんだ身体を冷たい井戸水で洗いたい、という虎之助の思いまでは斟酌してくれない。

ただし、平兵衛自身はことのほか上機嫌で、味気ない顔で茶を飲んでいる虎之助に構うことなく、一人で喋り続けている。

「ご城代を支えているのが二人の家老でな。今しがた儂が貴殿を臨時の供にと推挙した文をしたためた相手のお方が、佐分儀兵衛殿でな、この佐分殿を煙たがっているのがもう一人の家老の山崎権三衛門と申す悪党だ」

「悪党といわれますと」

「知れたことじゃ。北前船の船主とよろしくやって私腹をこやしておるのよ。お上は江戸在府だし、ご城代は臥っておられる。佐分殿さえおらなんだら藩は我がものも同様じゃ。しかも、勘定方の奉行をはじめ、力のある者はぞろぞろと山崎の軍門に降りつつある。みな、小判には弱いのじゃ」

平兵衛はほんのりと赤らんだ顔を振り上げて、天井を仰いだ。

「だが、佐分殿は立派な方だ。藩をなんとか持ち直そうと心を砕いておられる。領民のことも大変に気にかけておられるしな。この方がいなくなっては、大聖寺藩は終りだ」

平兵衛は箸を取って鱸の切り身を口の中に放り込んだ。先程まで聞こえていた道場からの竹刀の音も、今はやんで静まり返っている。

虎之助は手拭いで胸の汗を拭った。十日で十両は魅力ある報酬だったが、やはり、佐分という家老の護衛は退屈だと考えていた。

「儂は実はこの藩の者ではない。元々は隣の百万石の大藩で旗奉行を務めておったのだがこれでしくじってな、こちらに流れてきたのじゃ」

平兵衛は小指を立ててにやりとしてみせた。虎之助は笑わなかった。不埒な奴だと思って平兵衛を睨みつけた。

「手を付けてはいけない女に手を付けてしまってな。そして生まれたのが綾じゃ」

「……」

平兵衛は虎之助の強い視線をさらりとかわして笑っている。

「儂は佐分殿の後楯を得てここに道場を開くことができた。剣術など到底教えられる腕ではないと辞退したのだが、佐分殿は、剣術そのものより、気風を高める訓練をしてもらいたいと申されてな、それでまあなんとか今日までやってこられたのだ」

平兵衛は人なつこそうな笑いを見せたが細い頬には固いむくみが出来ていて、相当酒毒に冒されているのが虎之助にも分った。

「佐分殿がたいした人物であろうことは察せられましたが、だからといって、もう一方の家老がいきなり刺客を放つとは考えられませぬ。それでは藩の正義はなくなってしまう」

ぬるくなった茶を飲んで虎之助はいった。

「その通りじゃ。もはや正義はない。山崎権三衛門は、ついに、露骨に佐分殿を排除しようと様々に仕掛けをしてきおったのだ。当道場の三羽烏といわれた者たちのうち二名を、佐分殿の屋敷に家士として住まわせたのだが、一名は一昨夜、一名は昨夜、山崎の放った刺客に討たれた」

「死んだのですか」

「いや、一名は両腕を肘から失い、いま一名は足の腱を切られて立って歩くことができぬようになった。その上……」

充血しているが、平兵衛の目は厳しかった。その目の表面に微に哀れを催す色が浮いた。

「尻を汚された」

「……」

「犯されたのじゃ。腱を切られては四ツン這いになって逃げるしかないからの。そこをズブリとやられたのじゃ。まったく、ひどい奴だ。しかし、腕の違いはどうにもならん」

「その刺客がどういう素姓の者か分っておるのですか」

「分っておる。五日前、山崎が大坂より呼び寄せたのじゃ。小泉平七郎と申してな、かつては疋田道場に寄宿していた男じゃ。怖しいまでに凄い剣を遣う。妖剣じゃ」

平兵衛は口に持っていきかけた湯呑みを止めて、虎之助をじっと見つめた。

「二十日ばかし前に、山崎権三衛門の嫡男であった長吉郎が斬られて死んだ。当藩に潜入した異国人を匿ったとみなされる小野市太郎を上意討ちにせんとしたところ、反対に斬られたものだ。だが、小野某を討ち取りに向ったのは長吉郎の他に二名、いずれも免許皆伝の手練の者だ。小野一人で返り討ちを浴びせられる相手ではない。だれか加担した者がいるとして、山崎はやっきになって探索をしたのだが、その者らしき武芸者の姿は杳として知ることができなかった。狂乱した山崎は、大坂の天羽道場でくすぶっていた小泉平七郎を刺客として呼び寄せる一方、倅を殺された上に証人まで取られては自らの命が危ういと察知し、正面きって佐分殿を潰しにかかってきたのじゃよ」

話を聞いている内に、虎之助はだんだん身体が熱くなってくるのを感じていた。用心棒じみた務めには興味がなかったが、妖剣を遣うという浪人者には心を掻き立てられるものがあった。

妖剣、という言葉を耳にしたことがあっても、それを遣う者の剣筋がどの様なものなのか、自分の目で確かめたことは一度もなかったからである。

しかし、虎之助は小泉の名を出す前に、話の筋を確かめてみることにした。

「証人というのは、異国人を匿ったという小野某のことでございますか」

「さようじゃ」

「その者が、一体何の証人になるのでござるか？」

「異国人を匿ったのは事実にしても、その者は山崎長吉郎とは親しい仲にあった。つまり、家老の山崎が親子で不正を働いていたという証拠を故意か偶然か見つけ出した可能性は高い。それ故、連中は口封じのために、上意討ちなどという姑息な手段で小野市太郎を殺そうとしたのだ。ま、そう見るのが当然じゃろう」

「それで、小野を救ったのは佐分様の手の者の方なのですか」

「違う。ご家老はこの件に関しては、何ら関与しておらんのだ。そもそも、小野市太郎と申す若者が、罪に問われて命を狙われたということもご存知なかったのだ。だが、山崎の方ではそうは思っておらぬ。降りかかる火の粉は振り払わねばならぬ。しかしだ、山崎の方では、相当なる手練が佐分殿についていると勘違いしているから余計に始末が悪い。そこで、武者修行中のおぬしなら、臆せずに妖剣と立ち向ってくれるであろう、と、まあ、最前、突然ながら閃いた訳じゃ」

平兵衛は総髪に手をやって髪を撫でたが、その目は笑ってはいなかった。

「旅の者であれば、たとえ無残に討ち果されようとも、藩では打ち捨てておけばよいのですからな、全ては何事もなく過ぎる」

調子のよい申し出に対して、虎之助は嫌味の一つも言いたくなってそういった。平兵衛は、いやいや、といってあわてている。虎之助は泡立ちはじめた気持を抑えていった。

「それで、その小泉平七郎という者は何流を遣うのですか」

「それがよく分らない。じゃが、かつて疋田道場に寄宿している折、能登の突端の岩屋で百日の兵法祈願をし、その満願成就の日、荒ぶる空から舞い降りる竜に神技を授けられたと申しておったことがあるそうじゃ。小泉はそれを竜の太刀と呼んでいるというな」

「太刀筋を見た者はいるのですか」

「いるが、見たときには死んでおる」

「……」

「そうそう疋田道場は城下一の道場で、およそ二百人の弟子がいる。そのほとんどの者が山崎派だと思って差しつかえない。疋田豊五郎の流れを汲む、新陰流の道場じゃ」

「疋田豊五郎……」

虎之助は首を傾げた。

「存知おらんのか。新陰流の祖、上泉伊勢守信綱が廻国修行に連れ歩いた男じゃ。伊勢守の甥じゃ」

「おお」

「もっとも、この男は百三十年も前に死んでおる。何が疋田流かとうに分らなくなっておるわい」

平兵衛は湯呑みから酒をぐいと呑むと、懐に手を入れかけて、大きなシャックリをした。そして、三白眼の目を天井に据えたまま、コトリと横に倒れた。

虎之助が覗き込むと、雷鳴のような鼾が放たれてきた。それを聞きつけた娘の綾が、

あらあらといって部屋に飛び込んできた。
虎之助は平兵衛が手にしていた扇を取って、廊下に立った。妖剣、と呟いてみて、腹に鋭い痛みが走るのを感じた。一心斎殿ならば、竜の太刀と聞いて何と答えるのだろうと考えてみた。
何も思いつかなかった。

三

屋敷の裏門から走り出てきた女を見て、虎之助は目を見張った。
「ツル、ツルさんではないか」
俯いてなだらかな坂を上ろうとしていたツルは、振り返って虎之助を仰ぐと、息を呑んで棒立ちになった。
「島田様……」
細面の端整な顔に、さざ波に似た震えが走った。ツルは素早くあたりに視線を走らせると、あちらへ、と小声でいって背中を向けた。
大聖寺藩家老、山崎権三衛門の屋敷は城の堀を挟んだ亀町の北東にある。そのあたりは藩の重鎮の屋敷が並んでいて、昼でも人の通りはなく、墓場のように静まり返っていた。

虎之助がそのあたりにやってきたのは、山崎の屋敷をひと目見てみようと思ったまでで、探りに来たわけではない。
「北前船のあがりをかすめ取って財をなしたという家老の屋敷が、どの程度のものか、見物に参ったのでござる」
屋敷に接して小さな鳥居のある神社があった。その梢の陰に佇んだ虎之助は、妙に上気した思いでツルの問いに答えていた。
「では、前田様の領内に入られたのは、偶然だといわれるのですか」
ツルはきつい眼差しで虎之助を見上げた。微かに白粉の香りが漂ってきて、虎之助の喉元をさらに圧迫してきた。ツルと二人きりになると、どうしてか、虎之助は自分が猫になった気がしてくるのだ。
「偶然というわけではない。以前、そなたを越前に連れて参ると一心斎殿が……いや、つまり、越前から越後にかけて、それがしも廻国修行に出てみようと願っておったものですからな」
「さようでございますか。でも、よいときに来られたのかもしれませぬ」
ツルは虎之助の眉間にひたと視線を据えたままいった。四月前、裸のツルの下肢に、剝き出しの己れの尻を挟まれたという弱味があるせいか、虎之助はツルの顔をまともに見ていられない。それで、つい、あらぬ方に目を向けると、島田様、という叱責にも似たツルの声が放たれてきた。

「はい」
「一心斎様も当地に参っておいでです」
「おお」
複雑な思いで相槌を打った。
「お察しのことと存じますが、わたくしは一心斎様の密命によって、山崎の屋敷に奉公に入りました」
「どのような密命じゃ？」
「わたくしの口からは申せません。ですが、島田様が前田の城下にこられていることを知れば、一心斎様は大喜びされることでしょう。一心斎様は島田様のことをとても好いておられます」
「さようか」
では、何故、真面目に、自分と立ち合ってはくれぬのか、と虎之助は不満に思ったが、ツルの瞳がぐいぐいと自分の胸の奥深くに喰い込んでくるので、そちらの方への抵抗が忙しくなって、一心斎への不満はひとまず胸の内におさめることにした。
「この藩は今、色々と揺れ動いておるようじゃな。ツル殿が家老の屋敷に奉公に入ったのも、そのことと関係があるのか」
「藩の権力争いとは関係がありません。ですが、巻き込まれてしまったようだと一心斎様は申しておりました」

「一心斎殿はどこにおられるのだ」
「これから参るところでございました。ご案内致しましょう」
ツルは細い肩を回すようにした。夕暮の陽の中で、その項がヘンに白く光った。
「……」
ツルは神社の敷石に佇んで虎之助が歩き出すのを待っている。案内するといっても、女子が先に立って行く訳ではないのだな、と分って虎之助はツルの前を行き過ぎようとした。
そのとき、表の道に人影が立った。虎之助より一回り大柄な浪人で、背後から白い陽を受けた姿は、大木が揺れ動いたようにも見えた。
「一心斎とは誰のことじゃ」
浪人はぬっと鳥居をくぐって二人の前に現われた。濃い眉の下に刃で斜めに切り上げられたような細い目があった。その目の底が銀色に輝いている。
「おぬしは何者だ」
「尋ねているのはおれの方だ。一心斎とは誰のことじゃ」
ツルをかばって佇んだ虎之助の目前に、浪人は無造作に踏み込んできた。すでに、間合いの中に入っている。一太刀の居合いで浪人を斬り倒せる、と虎之助は思った。自然に左足を下げていた。
浪人は薄い唇をしていたが、笑うと残忍で血生臭いものがその口のあたりに漂った。

こやつは人を斬ったことがある。それも尋常の勝負ではない。

虎之助はそう直感して身構えた。

「今年になって家老の屋敷に二人の女が雇われた。飯炊きの婆さんと若後家だ。若後家の方は、地味な着物を着ておっても身体の内側から抑えきれぬ色香を漂わせるという。それで、この数日見張っていたのじゃよ。なるほど、くノ一であったというわけか」

浪人は虎之助の肩の上から背後にいるツルを見据えた。蛇のような目だった。

虎之助は刀の鯉口を切った。

じろり、と浪人は虎之助を見つめた。

「若僧、武者修行の旅だそうだな。有難い経験をさせてやろうか」

「おぬしは小泉平七郎だな」

「ほう、おれを知っているのか。はてさて、おれも有名になったものよ」

小泉平七郎は懐から手を抜いて自らの左目にそっとあてた。

「！」

それは金色の目の玉だった。鶏卵を半分に切ったような形をしたものを左目に被せたのだが、それだけで小泉平七郎の形相が一変し、竜の顔になった。

「小僧、刀を抜いてみろ」

砂利を踏む音が鳴った。虎之助は刀の柄に手をかけたまま後ずさった。その虎之助の背中に、そっと触れるものがあった。ひどく熱いものが背中のその一点から体内に広がった。ツル殿だ、と虎之助は思った。

この人を守らなければならない。

「どうした、抜かんのか。抜かなくては女を守りきることは叶わぬぞ。それ、これでも抜かぬというのか」

小泉平七郎は刀を鞘ごと抜いて、その鞘尻を虎之助の眉間にぴたりと付けた。

「……」

動こうとしたが、両足は地中に埋められてしまったように微動だにしない。両肩も左右から岩に挟まれ圧迫されているみたいになった。喉が渇き、それでいて、口の中はねばねばとしたもので溢れだした。これは！　と虎之助は胸の内で呻いた。

小泉平七郎はもう何もいわなかった。金色の目が虎之助の双眸を射抜き、それは眩ゆいばかりの光の洪水となって頭の中を回転しだした。

――吸い込まれる！

虎之助は叫んだ。だが、その声は虚しく胸の内側に落ちていった。

「島田さま……」

ツルの悲痛な声が耳に入ってきたが、虎之助にはもうどうすることもできなくなっていた。頭が首から離れていく……そう感じたとき、意識が跡絶えた。

寺町は城下の南東を守護する形で造られていた。およそ五十の寺があると聞いたが、

一心斎の滞在している「安立寺」という真宗の寺がどこに位置しているのか、暗い中を泳ぐようにして歩いてきた虎之助には皆目分らなかった。ただ、ツルの足は飛脚のように速いと思っただけである。

「なるほど、妖術といえば、妖術であるのかもしれんな」

話を聞き終った一心斎は、組んでいた腕を解いて、傍にある湯呑みを取って茶を飲んだ。板の間に置かれた行灯の火が、暗い庭から流れ込んでくる湿った熱風に煽られて、ゆらゆらと揺れる。

そのたびに、一心斎の表情が変化する。鬼になったり、馬のように見えたりするのではなく、若くなったり老爺になったりするのである。

「面目次第もござらん」

虎之助は悪びれずに頭を下げた。首筋から胸にかけて、じっとりと汗ばんでいるのは、暑さのせいではなく、恥辱に嘖まれているせいだった。その汗の臭いを嗅ぎつけた藪蚊が虎之助の身体にまとわりついてくる。

「小泉平七郎がツル殿に危害を加えなかったのが、せめてもの救いでござる」

「うむ。救いといえばそうなのだが、ちょっと妙だな」

一心斎は首を傾げて思案気に茶を飲んだ。虎之助は首筋にたかった蚊を叩いてから、膝をすすめた。

「一心斎殿、奴の妖術を打ち破る秘術をお教え下さい」

「だめだ」

「だめ……」

一心斎の答えはにべもなかった。予測していなかった訳ではないが、その態度は冷たいと虎之助は思った。

「な、何故でござるか」

「剣術にばかり目を向けているおぬしには理解できぬ領域だからじゃ。馬鹿は馬鹿なりに、剣を磨くことに専心しておればよいのじゃ」

「……」

「むくれた顔はふくろうに似てなかなかかわいいぞ」

「ご、ご冗談を」

昼間、重田平兵衛に手を握られたことを思い出して、虎之助はいささか狼狽した。

「虎之助は松山主水大吉という剣術遣いの名を存じておるか」

「聞いたことがございます。おお、たしか、熊本の細川家に武術師範として仕えていたという……二階堂流兵法の……」

「さよう、大吉は闇討ちにあってあっけない最期を遂げてしまったが、生存中は『すくみの術』に長けていたと聞いている。本人は『心の一方』と名付けていたようだが、こやつと立ち合った者は、目に見えない縄で身体中を縛られたようになったという。すなわち、蛇に睨まれた蛙のごとく、身がすくんでしまうというわけじゃ」

「一心斎殿は、小泉平七郎が、その『すくみの術』を会得していると思われているのですな」
「そうは思わん」
一心斎はあっさりと否定した。緊張しはじめていた虎之助の気持がぽっきりと折れた。
「ひとつお尋ねしたいのですが、ツル殿を何故山崎権三衛門の屋敷に奉公させたのですか。もう一人の家老、佐分儀兵衛に加担しての行動だとも思えませんが」
「無論、この藩がどうなろうと、わしの知ったことではない。実は、山崎の屋敷の奥に、朝倉義景が秘かに埋めた軍費四十万両のありかを印した絵図が隠されている。それをうまいこと盗み出そうと思っておったのだ」
「そのためにツル殿を……ツル殿を盗みの手先に使おうとなされていたのでござるな」
「どうした？　顔色が悪いぞ」
「い、一心斎殿は、初めてお目にかかった折も、武田の財宝を己れのものにした穴山梅雪の、えーと、その軍費を横取りした諸澄なにがしという者の子孫が、えーと、秘匿しているというお宝を、盗み出そうとされておられましたな」
「人聞きの悪いことをいうな。盗賊どもが奪った金をネコババしただけじゃ」
「……」
「ところで、虎之助が神社で意識を戻したとき、すでに小泉の姿はなく、ツルのみがおぬしの傍でぼんやり佇んでいたと申しておったな」

「さよう。何か、亡霊のように心ここにあらずといった様子でおられました」
「本当に幽霊であったかもしれんぞ」
「ま、まさか……」
「ためしに呼んでみよう。おい、市太郎」
一心斎は暗い廊下に向って呼びかけた。現われたのは黒装束に身を包んだ若者だった。
「おう、もう仕度を整えておったか。母上と妹御はどうしておる」
は、といった若者は、室内にいる虎之助に不審気な一瞥を投げかけた。
「この者なら心配ない。今宵共に討ち込むことになっておる島田虎之助という同志だ」
「さようでしたか。小野市太郎と申します」
若者は虎之助に向って丁寧に礼をしてから、片膝を立てた姿勢で一心斎に向き直った。
「母と妹は港近くの漁師の小屋にて待機しております。明朝、人目につかない内に北前船に乗り込みます」
「うむ。いずれ江戸で会うことになろうが、母上には達者であれと伝えてくれ」
「はい」
「よいか、フリーダムじゃ。それを忘れるな。それからツルを呼んでくれ。今何をしておる？」
「一心斎様の小袖の綻びを繕っておいでです」
若者が下がると、一心斎は矢立を取り出し、懐紙に何やら書き出した。

「今宵、共に討ち込む同志だといわれておりましたが、どういうことですか」
「わしとおぬしと小野市太郎の三人で、山崎権三衛門が屋敷を襲うのさ」
「そ、それは、レイの絵図を奪うためですか」
口調が乱れたのは、一心斎の手許を覗き込んだからである。
「いや、捜したがそれはなかった。代りにいいものを見つけた」
一心斎は何喰わぬ顔で応じた。
「何でござるか？」
「おろしやの船の設計図と清国の金銀財宝じゃ。地下室の金蔵に、ごっそり溜めてあるそうじゃ」
一心斎は嬉しそうに笑った。童女のような笑顔だった。お呼びですか、といってツルが廊下にひざまずいたときも、その明るさに満ちた笑顔は変らなかった。
「この書状を佐分儀兵衛の屋敷まで届けてくれ。山崎の動静と今後のわしらの計略が書いてある」
はい、といってツルは封をしてある書状を受け取った。立ち上って静かに去っていったツルを見送ったあとで、虎之助は怒りで脹れ上った目を一心斎に向けた。
「い、いったいどういうおつもりで……」
一心斎が書いたのは「狸の金玉ぶーらぶら、狐の金玉ちょーぼちょぼ」というふざけたものであった。

「鼠」
虎之助に答える代りに、一心斎はそう庭に向って呼びかけた。どこに鼠が、と思ったとき、黒いものが屋根からふわりと庭先に降りてきた。蝙蝠かと思った。
「次郎吉、首尾はどうじゃ」
「上々でございます。あと半刻もすれば、山崎の屋敷の者は、皆、白河夜船にござりましょう」
一心斎は満足気に頷いた。鼠？　次郎吉？　と茫然と考えていると、顔に妙に愛嬌のあるその男は、虎之助に向って目礼をしてすうっと闇の中に溶け込んでいった。
「いまの者は？」
「知らんのか。鼠小僧次郎吉だ」
「！」
「昨年夏、三尺高いところで磔になるところを、わしが助けてやったのじゃ。驚いたか」
「驚きました」
「よし、参ろう」
素早く草鞋をつけて一心斎は立ち上り、市太郎の名を呼んだ。
「山崎の屋敷にはツルの他にもう一人婆さんを潜ませておいたのだ。この婆さんは、鼠から渡された眠り薬を、朝鮮人参の粉末だと信じ込んで大量に汁に入れたのじゃ。あは

は、しかし、その前に、退治しなくてはならん古狐がおる。さっそくツルを追うぞ」
「ツル殿を、何故？」
「狐憑きじゃ。虎之助の話を聞いてふと悟るものがあった。竜の太刀などと小泉はいっておったそうじゃが、死にかけた古狐が、洞窟で目を回していた小泉の身にとり憑いたのであろうとな。竜ならぬ狐の舞いじゃ」
「しかし、何故ツル殿を追うのですか」
「分らんのか。奴はツルを手先にしたのだ。奴に操られている以上、ツルは奴のところに書状を持っていく」
一心斎は庭に跳び下りた。すると小野市太郎が煙のように現われ、虎之助にぴったり寄り添う形で、一心斎のあとについて走り出した。月もない闇夜であったが、一心斎は迷うことなく、確かな足取りで町の中に入っていく。
「よし、追いついた。これからはゆっくりいくぞ」
一心斎は二人を制して足を止めた。だが虎之助にはツルの姿など見えずにいた。
「フリーダム」
横にいる小野市太郎がそっと呟いた。数間行ったところで、それはどういう意味かと虎之助は訊いた。
「人は、人に束縛をされてはならない。家臣は藩主の為に生きるにあらず、己れの生命にまず活を入れよ。すなわち、己が魂を風に泳がせよ」

うたうように小野市太郎は呟いた。
「中村様からそのようにいわれ、藩を捨てて、人として生きる決心がつきました」
暗い中で市太郎は低いが自信に満ちた声でいった。そのとき、市太郎が、一心斎そっくりの、童女のような笑みを見せたように虎之助には思えた。

虎之助は廊下に坐って、庭に咲いている花を見ていた。奇妙に派手な色づきをしているその花は、見る度に虎之助を魅きつけた。自分の胸の内にも、このような花が咲くのであろうか、と思うこともあった。
「どうしたんですか、またぼんやりなすって。お客さんですよ」
綾が裏の方から現われて、白い歯を覗かせた。行水のあとらしく、浴衣姿でいる。虎之助はその胸元に目をやって、あわてて花の方に視線を戻した。
「父上が心配しておりましたよ。小泉平七郎を討ち破った疲れがどっと出たのではないかって」
「いや、あれは……」
中村一心斎という剣聖とも呼ぶべき人が、一刀のもとに斬り捨てたのだ、といおうとして、虎之助は口をつぐんだ。実際に斬ったのは一心斎に違いないのだが、その瞬間、虎之助は小泉平七郎から放たれた「狐の太刀」を受けて、気絶してしまっていたのだ。それはまさしく、狐の太い尾で後頭部を叩かれたような衝撃であったのだが、あの暗い

中で、小泉が何をどのようにして術を仕掛けることができたのか、当の虎之助には皆目見当がつかなかった。

それだけでも剣士としては大失態であるのだが、意識を取り戻したときに、虎之助の目にとび込んできた光景に動揺して、思わず一心斎にとびかかり、五間もはねとばされてしまったことは、切腹並みの恥辱であったと今も深い懊悩の中にある。

一心斎は、ツルの着物の裾を腰までまくり上げ、剝き出しにしたまっ白なお尻を、ばちんばちんと容赦なく叩いていたのだった。それはツルに憑いた狐を落すためだとあとで分って納得もしたが、では何故自分は尻を丸出しにされずに済んだのだろうと考え直すと、複雑な思いが虎之助の心に生じた。

「聞こえなかったの、お客さんよ」

「客？」

「ツルさんという女の人。とってもきれいな人ね」

綾はそういうと、浴衣の裾を蹴りつけるように歩いて裏に戻っていった。替って現われたツルは、控えめな笑みを口許に浮かべて虎之助を黒く大きな瞳で見つめた。

「あれきり姿をお見せにならないので、一心斎様がさみしがっておいでですわ」

ツルの言葉の語尾が虎之助の心を波立たせた。ツルは静かに虎之助の脇に寄ってきた。

「山崎権三衛門の抜け荷の罪は露顕することはありません」

「何故だ？」

「一心斎様が全ての証拠を隠してしまいましたから。山崎が汚れたお金を溜めるのを待って、再び襲うおつもりなのです」

ばかな、と呟いたが、それは声にはならなかった。小泉の術にかけられていた間は、何も覚えていなかったというツルの言葉とは裏腹に、下腹に生えたツルの柔らかい恥毛が、夏の花のように色づいて虎之助の脳裡に蘇ってきたからである。

鳥の如く、フライ

一

勝小吉が江戸を発って加賀に向ったのは、天保四年（一八三三）八月、中秋の名月を息子の麟太郎と共に、団子を食いながら眺めた三日後のことであった。

初めは船大工二人だけを伴って旅立つはずであったが、あちこちへ挨拶回りをしている内に連れの数が増えた。

加賀に滞在しているという中村一心斎から書状を受け取ったのが八月一日、この日は八朔（はっさく）といって、武家社会では主（あるじ）にあたる人へそれ相応の贈答品を持って伺い、日頃の恩顧への礼をするということになっている。

貧乏所帯の勝家では何も用意できない。やむなく目黒川で釣った鯰を下げて組頭の屋敷まで出向いた。

小普請の旗本は、毎月一日と十五日、組頭のところに裃（かみしも）姿で出向いて御機嫌伺いをするのがしきたりとなっている。それ以外にやることがないのだから、それだけが仕事のようなものだ。

まして八月一日は特別の日である。御番入りを望む者は内職で得た金を反物に替えて

うやうやしく組頭の屋敷の門をくぐる。向うでもその腹づもりで待ち構えている。当然しかるべき品物を持参してくるものと期待している。

そこへ小吉が生臭い鯰を下げてやってきたものだから、出てきた世話役はとたんに渋い顔をした。

お手前は精進が足らぬ、そんな心掛けでは生涯無役のままで終ってしまうぞ、と犬の糞のような顔付きをした世話役はさんざん嫌味をいって、さっさと奥へ引っ込んでしまった。

組頭は四百石の旗本だが世話役はたかだか五十俵三人扶持である。そんな奴から虚仮（こけ）にされる覚えはないと小吉は腹を立て、玄関先に鯰を叩きつけ、帳面に署名もせずに家に帰ってきた。

これで御番入りは永久になくなったと観念したが、倅の麟太郎の将来のことを考えると、あそこまでせずともよかったのではないかと悔いる気持が湧き起こる。十一歳になった麟太郎は頭がよいだけでなく、小柄なのに負けん気が強く、従兄の男谷精一郎の道場ではすでに「霊剣」の免状をもらい、二、三年後には「目録」に達する程の才能を発揮している。

しかし、今さら戻って詫びをいれるのも癪（しゃく）にさわると、裃を脱いでひっくり返っていると、一通の書状が届いた。それが一心斎からだと知ってとたんに胸焼けがした。

かつて精一郎と共に一心斎から相州足柄まで呼び出された小吉は、そこで鍬（くわ）を持たさ

れ、荒地と格闘させられたばかりか、盗賊の真似事までさせられたことがある。

実は真剣をとって人を斬ったのもそのときが初めてであったのだが、盗賊の一味であったために武勇伝として吹聴するわけにはいかず、内心じくじたる思いで数年を過ごすことになった。

またぞろ碌でもない用件だろうと思って読み出すと案の定で、海辺大工町に住む船大工の茂助と嘉吉の二人を加賀の宮腰まで連れてこいとある。

いつもながら一方的な内容で、二人にはそれぞれ仕度金として八十両渡してくれとも書いてあった。当地で新しい船を建造するので、腕のよい船大工が必要なのだという。

建造までには一年余りかかるのでと断り書きがしてあったが、それにしてもべらぼうな賃金だと目を剝いていると、小吉にも世話料として五十両「申し付ける」としたためてあった。

金は上野凌雲院に預けてある、万事連絡済みであるからこの書状を受け取り次第日典という僧正を訪ねてみるようにとぼけたことが書かれてあり、別に二十両やるからそれで衣服を新調し、組頭のところへ賄賂を持って長旅の挨拶に出向いてこい、と余計なことまでつけ加えてあった。

馬鹿馬鹿しくなって書状を打ち棄て、ごろりと横になって眠った。すると夢の中に一心斎の姿が現われ、この横着者めが、と一喝してきた。

驚いて跳び起き、脛毛を掻いてなんのこっちゃと呟いていると、裏庭を耕した畑から

菜っ葉を摘んできた妻が、台所に入ってきてことことやりだした。

辛気くさくなって小吉は外にとび出した。だが浅草奥山の水茶屋で娘をからかう程の金もない。仕方なく上野東叡山に足を向け、黒門をくぐって凌雲院に訪いを入れた。

名を名乗り、日典という坊主に会いに来たというと、すぐに奥に通された。もう日暮時分になっていて、森の上方に見える空は清流のように美しく澄み渡り、その中を小鳥たちが八の字に編隊を組んで西の方に飛んでいった。

なんとも感傷的な気分になって空を眺めていると、白綾の小袖に緋の法衣をまとった僧正がにこやかな顔で現われてきて、勝様ですね、お待ち申しておりました、と丁寧に坊主頭を下げた。

このときまで、小吉は一心斎の書状に書かれてあったことなど信じてはいなかった。凌雲院は執当御救済の名目で大名、旗本に金を貸していることで有名であったが、まさか一介の素浪人にまで金子を用立てるとは思ってもみなかったからだ。それが可能であると知っていれば、小吉などは脇差までも質草にする必要はなかったはずである。四十一石の知行取りなど相手にするわけがないとハナから分っているから、これまで上野黒門をくぐろうとしなかっただけなのだ。

それが、

「いささかかさ張りますが、中村様からお申し付けのあった五百両でございます」

と日典から大包みを五つ、目の前に置かれたときは沈みかけた太陽が、中天に舞い戻

ってきた程に驚いた。

思わず小吉は、

「おい、おめえのとこでは、一心斎から強請にでも遭っているんじゃねえのか」

と声高に叫んでいた。日典は落ちついて受け流し、「これは当院が、中村様にお返しすべき金子でございます」と返事をしたのみであった。

凌雲院が大名貸しをする金は、越後屋などの大商人から出ている。商人は千両につき年五十両の利息を得ているのであるが、もしや中村一心斎も凌雲院に金を預けていて、この五百両はその利子ではないのか、と小吉は食い下って尋ねてみたが、日典はにこにこしているばかりでそれ以上は何を訊いても答えなかった。

小吉はずっしりと重い懐中を、両手で抱きかかえて家まで戻ってきた。妻に見つかっては、きっと悪いことをしてきたのだと思われるに決っているので、五百両は葛籠の奥にしまい込み、その晩は何喰わぬ顔で晩飯を食った。

翌朝早く質屋に出向き、預けてあった質草を請け出し、ついでに妻が夫に内緒で質入れした着物の分の始末もつけた。それから方々の店や知人を訪ね、借金を返して回った。袴を着て、組頭の屋敷を訪ねたのはさらにその翌日のことである。

世話役の佐藤某は小吉がうやうやしく差し出した贈答品を見て目を丸くし、これはどうしたことじゃ、とどもっていたが、小吉は先日の非礼を詫び、用事があって加賀に出向くことになり、なにとぞよしなに取り計って頂きたいとだけいって、佐藤某に二両の

心付けを手渡して戻った。茫然と小吉を見送る佐藤某の姿は、益々犬の糞に似ていた。

それから海辺大工町に行き、茂助と嘉吉を探し出して長屋を訪ねた。二人は江戸でも聞こえた腕のいい船大工で、茂助は隠居していたが小吉が加賀で新しい船を建造するという一件で参ったのだが、と話をしだすと、目を狼のように輝かせて、いやあ、本当にきなすったか、と喜びの声をあげた。

嘉吉は御船蔵に詰めていたこともあるという四十くらいの無口な男で、中村一心斎という者からこんな話がきているのだが、と伝えたときも、ただヘエヘエと頷くばかりで、いつ一心斎からそのような話があったのか、一心斎と面識はあったのかどうか、まったく要領を得なかった。

だが仕度金として八十両持参したというと、亀の甲のような暗い顔をあげて、怨めしそうに小吉を見つめた。すぐに目は伏せたが小判を見ると身体がおこりにでもかかったように震え出した。

「おい、でえじょうぶか」

小吉が思わずいつもの調子で訊くと、嘉吉は頷いて洟を啜り上げ、閉ざされている障子に向ってヨネ、ヨネと女房の名を呼んだ。すると障子が開かれ、乳呑み児をかかえた貧相な女が二人の幼児と共に転がり出てきて、破れ畳に積まれた小判の山を恐る恐る眺めだした。

「こ、これを、みんな、いただけるんですか」

女房はそういって小吉を見上げた。男の幼児が小判を一枚取って口にくわえると、こらと怒鳴ってその手をはたいた。年上らしい女の子は目がよく見えないようで、匂いを嗅ぐように小判に鼻を近づけている。

その女の子の仕種が不憫で小吉はすぐには返答ができなかった。

「みな、嘉吉に渡してくれと預かってきたものだ。一年分の賃金の前払いというものらしい」

やっとの思いでそういうと、女房はありがとうございます、と畳に額をこすりつけて礼をいった。それからそっと一枚の小判を手にとってしげしげと眺め、「生まれて初めて小判を手にしました」と呟いた。

「これで、この子の目も治せます」

女房は女の子の頭を取って、自分の胸に押さえつけた。娘は母親の胸にすがって泣きじゃくり出した。

船大工の賃金は民家専門の大工よりいく分高めだとはいっても、一日銀六匁が相場だ。江戸では銀一匁は百八文と決っていて、銭に直すと六百五十文程になるが、正月、節句、風雨の日など、年間およそ六十日は休みになるので、一年間で十六両も稼げればいい方だ。

長屋の家賃が年間一両二分二朱。米代に四両、塩、味噌や薪炭に七両一分、道具や衣服に二両三分、その他祝いごとや仏事の信施に一両は出る。どのようにきりつめても一

杯で、とても病人に回せる銭はない。女房の喜びようも分ろうというものだ。

「けっ！」

鶏が首を締められたような声がした。なんだと思って嘉吉を見ると、ひび割れた顔に大粒の涙を流して泣いている。親が泣いているのを見て、男の子までも泣き出した。

「おい、なにもおめえ、そんなに泣かなくたって……」

と小吉は二人に声をかけたがあとが続かない。一心斎が貯め込んでいた銭なのだから、どんなに不浄なものか分ったものではない。それでも、みんなの泣く姿を見ている内に小吉の胸の底からじわじわと熱いものが湧き上ってきて、しまいに目頭に火がついたようになった。

「色々と仕度があるだろうから、出立は十日程あとにする。また、使いを寄こす」

小吉は鼻にかかった声でそれだけをいって長屋を出てきた。歩き出しながら、あんなやつが寄こした銭でも、救える命があるものなのだな、と思ってそっと目尻を拭ったものだった。

二

「ほう、一心斎殿の頼みに呼応しておぬしが加賀まで参るのか」

精一郎の顔に「意外」の思いが浮かび上ったのだろう。まあ、恩義もあってな、と小

吉は照れ臭そうに呟いて鬢を掻いた。

精一郎が一心斎と会うときはいつも小吉が一緒にいて、一心斎の不思議な魅力と底知れぬ剣技を目の当たりにして精一郎は秘かに心酔しているのだが、小吉の方では一心斎が苦手らしく、いざコトを起こす段になると、小吉はなにかと因縁をつけて反対する。

その小吉が珍しく一心斎の指示に従ったものだから、これは何かある、と精一郎は勘ぐった。

「多大な謝礼金でも得たのか」

「多大？　とんでもねえ、たったの五十両よ」

四歳年下の小吉はえらそうに胸を張ったが、その目が落ちつきなくあたりを探るようにさ迷うので、その目玉に釘を打ちつける思いで見つめ続けた。

「その他に小遣い銭が二十両」

小吉は額に小粒の汗を浮かべてつけ加えた。

「それだけか？　まだなんかありそうな気がするが」

「分るか？」

「分る」

「実は……」

小吉は精一郎の耳元に顔を寄せてきた。道場からは離れた奥の居室なので、誰も盗み聞きをする気遣いはないのだが、小吉は上体を伸ばした体勢でごにょごにょと囁いた。

「ふむ……東叡山から五百両か。面妖なことがあるものだな」

小吉の耳打ちを聞いた精一郎はそういって腕を組んだ。ただし、あの方の周囲では、何が起こっても不思議ではないという思いは根強く精一郎の内部で息づいている。

「あの五百両が利息だとしたら、あいつは一万両の大金を寺に預けていることになるぞ」

「一万両か。とほうもない金だな」

「それもあいつの持ち金の一部かもしれんのだ」

「というと？」

「あいつは昔より武田軍の遺した埋蔵金を捜しておった。武芸者というより金山奉行の手先というか盗掘専門の盗賊のようなところがあった」

それはひどい言い方だと精一郎はとっさに思ったが、小吉の見方にも正しいところがあると思い直して、ただ黙って聞いていた。

「おれは、あいつは埋蔵金の一部を発見したのではないかと疑っておるのだ。商人相手のコソ泥専門では一万両も貯められるわけがない。それに今度は千石船じゃ。まともに建造するとなると千両以上はかかる。精一郎、あのバケモノはきっと何かとほうもないことを企んでおるぞ」

小吉は扇子をしきりに煽いで精一郎の目許を覗き込んでくる。金銭の話になると小吉は異常に高揚してくる。この熱情がもちっと別の方に向けられれば上からの覚えもめで

たくなるのだが、と精一郎は小吉の置かれている悲惨な状況を慮りながら顔を上げた。
「つまり、おぬしは一心斎殿の魂胆を探りに加賀に行くことにしたというのだな」
「さよう。その他全ても探ってくるつもりだ。あいつはどうも油断がならねえ」
「先程は恩義があるからと申しておったぞ」
「それはつまり、麟太郎が野犬に嚙みつかれたとき、あいつが調合してくれた薬が思わぬ効能を示したのでな」
小吉は急に歯切れが悪くなって口許を歪めた。二年前、麟太郎は野犬の群れに町中で突然襲われ、その内の一匹から睾丸を嚙みちぎられた。中味が露呈してくる程の重傷だった。駆けつけた小吉はおろおろする医者を叱りとばし、高熱を発して呻吟する倅を勇気づけた。その時忽然と現われたのが中村一心斎で、彼は針と糸を使って傷口を縫い、そのあとで自ら調合したという薬を麟太郎の局部に塗って、またすうっと立ち去っていったという。そのおかげで小吉の一人息子は生き返り、それ以来、小吉は一心斎に頭が上らなくなった。いや、そのはずなのだが、根っから負けん気の強い小吉には、一心斎に屈伏する気はどうやらないらしい。
「小吉よ、あのお方は我々の物差しでは計りきれない大きなものを持っておられる。それに気付かずにいると、おぬしはいつまで経っても釈迦の掌中で騒ぐ猿でいることになるぞ」
精一郎は静かにいったつもりだったが、小吉には気に入らなかったらしく、フン、と

鼻の先で嗤った。
「そりゃおめえの買いかぶりだよ新太郎。あいつは妖術遣いみたいなところはあるが、根はちっぽけな盗賊だ」
「妖術では大岩を割れぬし、触れずに人を虚空に投げ返すことはできぬ。なぜなら、妖術とは他者の目を幻惑させることだからだ」
いくつかの光景が精一郎の脳裡に浮いた。真剣を抜いた黒装束の者たちが、一心斎に打ち込むや否や、まるで透明な力に弾き返されたように、闇の中にもんどり打っていった様は、一日たりとも忘れたことのない情景であった。
「新太郎、おめえは一心斎にたぶらかされているんだよ。柳川藩の怪物、大石進を打ち倒したのは一心斎でなくて紛れもなくおまえ自身なんだぜ」
違う、と精一郎は胸の内で叫んだ。大石進の眼前に佇んでいたのは、男谷精一郎ではなく、中村一心斎だったのだ。大石は一心斎の幻影に怯えて立ち竦んでいたのだ。
それを知っているのは、当の大石進と、精一郎だけだろう。一心斎はたぶん、二人の試合のことなど、その後思い起こすこともなかっただろう。あの方は、剣のみに生きる者を軽蔑しきっているのだ。
「……」
「どうした？　何を考えている」
小吉は精一郎の胸の中に無造作に踏み込んできた。精一郎は扇子を開いて扇いだ。

「うむ。いやな、一心斎殿に会いにいけるという小吉が羨しく思えてな。できれば、私も同行したい」

「来たければ来ればいい。御書院御番役なんて、いてもいなくても世の人が困るわけではないだろう。たかが二百俵。弟子を一千人もかかえているおぬしなら、捨ててしまってもおしくはあるまい」

小吉は真顔でそういった。覚えず精一郎は笑った。どうした、何がおかしいと小吉が訊いてきた。いや、なに、と精一郎はためらった末に口を開いた。

「小吉のいったことが、まるで一心斎殿の言葉のように聞こえたのだよ」

精一郎は照れ隠しに笑ってみせた。小吉は蛙に尾を噛まれた蛇のように間の抜けた顔で天井を睨み上げた。

「そうか、そうであった。あやつからの書状に新太郎への伝言が書かれてあった。たぶん、おれが今いったようなことの他にもう一つあった」

「なんだ？」

「人を斬りたくなったら加賀に来い、いらだちや不安を取り除くことができる、とそういうことだ」

いわれて精一郎は思わず身を乗り出した。

「加賀藩に、一騒動あるというのか？」

「さあな。百二万石の大藩だ。お家騒動があってもおかしくはないが、あの国の中には

老中や大目付からの隠密どもがウヨウヨしているからな。めったなことではシッポを出すまいよ」

小吉はそういって扇子を閉じ、自分の胸に向ってぴしゃりと打ちつけた。その時、戸の外から訪いを入れる者があった。なんだ、と精一郎が応えると、横に開かれた戸の向うに現われたのは、まだ少年といってもよい年格好の男の子だった。

「先生、私も加賀に行きとうございます。是非とも暗闇無二斎様にお会いしとうございます。お願いです。勝様にお頼みして下さいませんか」

少年は蒼白い顔を精一郎に向けてそういってから、小吉に向き直って一礼した。

「暗闇？　暗闇無二斎たあ、誰のことだ」

小吉は脳天から抜けたようなカン高い声を出した。精一郎は笑いをこらえていった。

「それは一心斎殿の別称だ」

「なんだと？　あいつはいってえ……」

「待て、大声を出すな小吉。この者は一心斎殿の弟子でな、名を仙太郎という。わけあって私が預っているのだ。痩せてはいるがなかなか鋭い剣を遣う。一心斎殿のところで手が足りぬのなら、充分に役に立つ者だ。一緒に連れていってやってくれぬか」

「しかし」

「是非、お願い致します」

仙太郎に必死に哀願されて小吉は返答に詰まった。その黒く強い瞳の中に、数年後の

麟太郎の姿を見たように思ったからだった。

仙太郎を連れていくことに同意した二日後に、茂助爺さんから聞いたといって若い船大工が一人、小吉の家にやってきた。賃金なんかいらないから、茂助の弟子として加賀に連れていってくれという。やる気のありそうな男だったので、道中手形さえ大家からもらえるのなら連れていってやると小吉は請けあった。

ここまではよかった。連れが四人でも茂助を除けばあとは若い男で皆健脚そうであったからだ。ところが、八月十日になって組頭から呼び出しがあり、かしこまって参上すると、頭上にいきなり雷が落された。

たとえ無役であろうと、知行米をお上より頂いているれっきとした幕臣が、むやみに家を空けることは罷りならん。しかも他国に行くなどもってのほか。四月経っても戻らぬときはお家断絶となるがそれでもよいか、と組頭は小吉を叱りとばした。

そうならない為の贈物であったのだが、たとえその効果がなかったとはいえ文句をいうわけにはいかない。組頭のいうことはいちいちもっともで、小吉は恐れ入って廊下に平伏していた。

「そこで相談じゃが、ひとつだけ、この度の旅を慈悲を以って許すことのできる方法があるのじゃ」

組頭はそこで急に甘ったるい口調になった。

「わしの母者人が善光寺に詣でてみたいと、かねてより申しておったのだ。侍女も一緒

についていく故、そちに迷惑をかけるようなことはない。わしとしては、道中無事であってくれればよいと願っておるだけじゃ。連れていってくれるであろうな」

否、といえるわけもなく、小吉はかしこまってございます、と応じた。

「ついでに、わしの妻女も頼む」

世話役が調子よく話に割り込んできた。小吉は呻き声をあげながら、こちらの方も仕方なく了解した。

女達はいずれも老婆といってもよい年齢で、組頭の母堂についてくる侍女でさえ耳が遠くなっている。こんな女達の世話を一人で任されてはたまらんと、小吉は造り酒屋「清水谷」の次男の清吉を連れていくことにした。この頃では清吉は、小吉のやっとうの弟子ということになっている。

十六日発つ予定だったが、女達の用意が遅れて十八日に発った。

船大工三人、少年剣士一人、酒屋の次男坊一人、婆あ三人を引き率れて江戸を出た小吉は、自分がなんだか鬼退治に向う桃太郎になったみたいな心境になっていた。

一行は浦和、熊谷、高崎、板鼻、追分と旅を続け、中山道から北国街道に入り、上田、鼠宿ときて善光寺で女三人と別れを告げ、あとは清々とした思いで坂城、牟礼、高田、糸魚川、泊、魚津、高岡、今石動と宿泊を重ね、百五十余里の道程を、わずか十三日で金沢に入った。

宮腰は加賀藩の外港として有名であり、一行は犀川沿いの道を、一心斎の待つ「銭屋

五兵衛」の別宅へと急いだ。迫り来る紅葉の美しさが一行の目を楽しませてくれた。

これで五十両なら泥棒したようなものだ。小吉はそう呟いて一人ほくそ笑んでいた。宮腰に長居するつもりはなく、一心斎の魂胆さえ探ったら、すぐに江戸に戻るつもりであった。全ては、それからのことである、とばかにのどかに高を括っていた。

三

宮腰の町には、海運業の問屋や店が軒を連ねている。多くは船主も兼ねていて、長沖屋、鶴屋、菓子屋、根布屋など四、五十軒の家が看板に屋号を書いて掲げている。彼等の持っている北前船は、ここらあたりではバイ船と呼ばれていて、宮越の港の沖に停船している。上方から来る下り船、蝦夷から鰊、〆粕、昆布、鮭などの海産物を運んでくる上り船は、皆、沖に停って、船頭や水夫は伝馬船で上陸し、半日間ぶらぶらと遊んで体を休めるのである。

木綿、紙、竹、砂糖などを積んできた大坂からの下り船の水夫で、宮腰に家のある者は、家族にみやげを渡してまた船に戻っていく。

そのため港には船乗り相手の料理屋や遊女を置く店が多くあった。この日、次郎吉が入って焼き魚で一杯やっていた店は、宮腰と大野町の中間にある所で、女こそ置いていなかったが陸に上って熱い飯を腹いっぱい食おうとする若衆や炊の連中には、なかなか

人気があった。それにときには、酒をたかりに中年の女がふらりと店に入ってくることもあった。

店は次郎吉が裏口からそっと出てきたばかりの「銭屋五兵衛」の隠居所が見えるところにあって、監視の役目を一心斎から仰せつかっている次郎吉としては何かと便利で気のおけない休み処であった。

――やべ。

三人の男が店に入ってきたのを見て、次郎吉はとっさに顔を横に向けた。向うでは次郎吉のことなど知ってはいないが、ここで会ったことを覚えられても困るのである。連中は昨年秋、沼津宿の海産物問屋「駿河屋」に盗みに入って、千両箱を一つかっさらってきた十人組の盗賊の内の三人に間違いなかった。

次郎吉は三人に背中を向けながら、ジワジワと近づいて三人の話を盗み聞きすることにした。

――あの浪人に間違えねえ。あの晩たしかに千両箱を肩に担いで闇の中に消えちまった奴だ。

――やっと見つけたぞ。ふてえやろうだ。

――やつがいるのは銭五の隠居所だ。やろう、うめえ所に目ェつけやがった。銭五はもう六十過ぎの爺だし、襲うのに手間もかからねえ。

――そうか。やろうそのつもりでもぐり込んでいやがったのか。二本差しのくせに盗

っ人の所場を荒すとはとんでもねえ料簡だ。
——やつは脇差か差してなかったぞ。
——隠居所とはいえ、銭五ともなれば千両箱の一つや二つどっかに隠してあるだろうな。こいつはうまくすればおいしい仕事になるぜ。
——ん？　女が入っていくぞ。こいつはめっぽういい女じゃねえか。女中かな。
——おい、松、おめえあの女とねんごろになって女に引き込み役をやらせるんだ。
——留兄ィ、そいつはムリでさ。カタギの女を口説くなんて、おれにはとてもできゃしねえ。
——馬鹿野郎。あんときトンビにアブラゲでせっかくのお宝をあの浪人にかっさらわれてしまったのは、みんなおめえのせいなんだぞ。できねえですむことか。
——そうだ。頭が中風になって一人歩きできねえ身体になったのも、あんとき頭に血が昇ったのが原因だ。口説けねえんなら、女を暗闇に連れ込んで犯しちまえばいいんだ。分ったか、松。
——へエ。

隠居所の奥の間では、勝小吉の連れてきた江戸の船大工三人と宮腰の船大工二人、それに大野町に居を構えている大野弁吉というちょっと正体不明の男が、一心斎の広げた船の設計図を前に、相変らず、驚きの色を隠せないで騒ぎたてていた。

「帆柱を三本も立てては、積荷を置く場所に難儀するな」
「弥帆柱がこれでは折れるんじゃねえか」
「こんな細い水押では船がもたねえ」
船大工が口々に喋るのを一心斎はのどかな表情で眺めている。やがて、まあ、待て、といって大工を制した。
「おぬしらが驚くのも無理はない。しかしだ、わしはこの船を明日中に作れといっておるのではない。最前も申したように、この設計図はおろしやの船と、ベザイ船と、それからかつてわしが乗っていたことのあるあーめりかの捕鯨船をごっちゃにして、そののちほどよく形にしたもので、完成品というわけではないのだ」
「それではどこから手をつけていけばいいんだね」
茂助がそう尋ねると、よく訊いてくれたとばかりに一心斎は大きく頷いた。
「まず、船模型を作る。そして、二十分の一、十分の一、五分の一と徐々に大きくしていき、やがて航海可能な船を作るのだ」
「そんなことしておったら、何年かかるか分らんがやね」
「何年かかってもよい。この船こそが、わしらの国となるのじゃからな」
一心斎のその言葉に、部屋にいる者は、大野弁吉を除いて、一様に口をあんぐりと開いた。
「おい、船が国になるのか」

小吉が薄ら笑いを浮かべて訊いた。一心斎は頷いた。

「海に国境はない。この向うに広がる海も、太古は、清国までの河に過ぎなかった。人間どもが、戦旗を立てた船を走らせ、勝手に国境を作ってしまったのじゃ。だから、わしは、どんな軍艦も追いつけぬ速くて大きな船を作りたいのだ」

「ぐんかんて、なんね？」

「今に分る。それらがのさばりだす前に、わしはこの船を鳥のように作り変えたい」

そういったとき、一心斎の目がそれまでになかったような深い森の色に変った。紅潮した顔面に少年のような艶が漲った。盆に人数分の茶を持って入ってきたツルは、そんな一心斎の姿を目にとめて棒立ちになった。ツルの頬にも血のような色が滲み上ってきた。

「鳥のようにだと？　それじゃあ何かい、船に翼をつけて空を飛ばそうというのか」

「その通りだ。よく分ったな小吉。でかしたぞ」

両眼を爛々と輝かせて一心斎は小吉を誉めたたえた。茶化したつもりの小吉は、あてがはずれて渋柿を食ったときのような顔付きになっている。

「ここにおる大野弁吉は、今まさに、水面を飛び立つ手製の鶴を研究中だ。来年には完成するはずだ。わしの申しておることは、決して夢物語などではない。千石船のように大きく、風のように速く、鳥のように空を舞う船がいつか必ずできる。さすれば、国境などどうでもよいことになる。戦さもなくなる。これこそ、わしの求めている船であり、

国なのじゃ」

一心斎はいつの間にか立ち上って両手を広げていた。船大工たちは互いの顔を見合わせ、どうしていいか分らないといった様子でもじもじとしだした。口を開いたのは小吉だった。

「一心斎の爺さん、大丈夫か？」

「大丈夫だ」

一心斎は上げていた手を下ろし、部屋にいる者をゆっくりと見渡した。

「この船が完成したら、わしは、ふらいんぐ、しっぷ、と名付けるつもりだ」

「？」

「分るか？」

そう訊いたが五人の船大工は無反応だった。一心斎はちょっとがっかりしたように肩を落した。それから立ち竦んでいるツルに目を止め、さらに庭の隅に蹲っている次郎吉に悲しそうな目を向けてきた。次郎吉は同情心を殺して、話がある、と一心斎に目で合図を送った。

「さようか。近頃隠密どもがウロついておると思っておったが、盗賊どもにもこの場所を嗅ぎつけられたか。世も末じゃな」

一心斎は縁側に腰を下ろし、ツルの運んできた茶を啜った。そこにいるのはツルと次

郎吉と一心斎の三人だけで、そうして冷たさの混り出した風を受けていると、ずっと以前に、どこか別の国で、こんなふうに三人で時を過ごしていたことがあったような錯覚に次郎吉はとらわれてきた。

「隠密がここらを探っているのですか」

急に現実に戻ってそう訊いてみたが、ひどく味気ない思いが突き上げてくる。

「奴等の目当はわしであろう。そうでなければ銭屋五兵衛か。なにせ、あの爺さんの財産は二百万両を下らんというからな」

「ご警戒を怠ってはなりませんな」

「うむ。まずは盗賊が狙っておるというからには、ツルを守ってやらねばならぬ」

そういって一心斎はツルを見た。縁側にきちんと坐ったツルは、わたしなど、といって頬を赤らめた。それから少しだけ上目遣いに一心斎の横顔を見ようとしてあわてて目を伏せた。一心斎の視線はずっとツルに注がれていたのだった。

「ツル、わしのそばにいては、危ない目にばかり遭うことになるぞ」

「構いませぬ」

次郎吉が驚いたことに、ツルはすっと顔を上げて一心斎の視線に合わせると、臆した様子もなく、きっぱりと言いきった。

「わたしの命は一心斎様に捧げてございます」

「たわけ。命など他人に捧げるものではないわ」

一心斎は怒ったようにそう呟いてから次郎吉に向き直った。

「先程の盗賊どもの件じゃがな、いっそのこと小吉を奴等の仲間にしてしまえ」

唐突にいわれて次郎吉は面喰らった。ど、どういうことで、と思わずどもった。

「小吉によい情報を与え、盗っ人どもにどこかの館か屋敷を襲わせるのだ。加賀には三州盗賊改めという役人がおる。そいつらに盗賊どもを捕えさせるのだ。盗んだ金だけはこちらにもらえばよい。うんそれがよい。おい、小吉、小吉」

いきなり一心斎は大声で小吉を呼んだ。そんなことしたら、勝様はどうなるので、という言葉を次郎吉はすっと呑み込むことができた。そのとき、なんだ、何か用か、といって小吉が不貞腐れてやってくるのを、ツルが慈母観音のようにおだやかな笑みを口許に浮かべて見つめているのを目にとめたからだった。

なんだか、とても安心した心持ちになった。

四

串茶屋は、北陸道では聞こえた遊里だった。

男谷精一郎が町に入ったのは八ツ（午後二時）前で、まだ陽は高いところにあった。それでも廓の格子戸に額を寄せて、暗い奥を冷やかし気分で覗いている羽織姿の町人や旅の商人もいて、顔を真っすぐに向けて歩いている精一郎の耳にも、起き抜けらしい楼

主のだみ声や遣り手婆あの喧しい声と共に、遊女の切な気な溜息が届いてくる。

町を抜けて松木立の中の道に入ると、草の香りが涼気に混って吹き上ってきた。精一郎は背中に薄っすらと汗をかいているのを感じた。遊里は苦手だったが、通り抜けるだけで気後れするとは、まだまだ修行が足りないと忸怩たる思いをもった。

しばらく行くと番屋があり、大聖寺藩の役人が寝惚けた顔で出てきて精一郎の示した手形をぞんざいに眺めた。番屋を出ると、そこは加賀藩前田領である。水田には一面に稲穂が垂れていて、心地よげに風にそよいでいる。

高い空の下に、延々と続く豊かな実りを眺めていると、今年は雨が少なく不作で、例年の六、七割方の収穫しか見込めないという郷方からの報らせが嘘のようにも思えてくる。

精一郎はためしに畦道に入り、黄金色に膨らんでいる稲穂に腕を伸ばし、その実を指で挟んだ。

「？」

稲穂の頭からは何の感触も伝わってこなかった。中は空になっている。その隣も、その奥の稲穂も、実をつけてはいなかった。

——天明のときのような大飢饉にならねばよいが。

精一郎は青く澄み渡った秋空を見上げた。光は強く、渡ってくる風には冷気が含まれていて、瞳を切るようにすべっていく軽快さが心地よい。だが、その目に映るのどかな光景が、これから永く続く、旱魃の前兆のような不吉な思いを喚起してくる。

江戸を発ったのは九日前で、出来うる限り速足で歩き、泊った宿も日の昇る前に出立してきたものだったが、そのあい間にも、米の不作と役人の無慈悲を嘆く百姓達の怨嗟の声を精一郎は幾度となく聞いた。

——いずれ各地で強訴や一揆が頻発するかもしれぬ。

秋の陽を受けて燦々と輝く実のない稲穂のおだやかな美しさが、精一郎の目に虚しく映った。

——加賀百万石といえども藩財政は厳しく、内情は楽ではないはずだ。

御書院番という政務の中枢からは遠く離れた職務についている精一郎にも、十万石以上の大藩がおしなべて借金に苦しんでいることが分っている。

商人から七百万両の借金をかかえている薩摩藩は、すでに藩財政が破綻しているし、幕府にひそかに、藩そのものを返上したいと申し出た大名もあると聞いている。

前田領では下層民がたびたび商家を襲っている。これは藩政府が非人小屋に住む者達に対して、医療行為を禁ずるなど差別を強行したことへの反発もあるが、先代の藩主、十二代前田斉広が切迫した藩財政を無視して竹沢御殿を建てるなど、極楽政治を過ごしたツケが、領民への度重なる御用金の割当てとなり、さらにそれが一番弱い下層民への皺寄せとなってしまったことの表われであるのだろう。

十三代斉泰になってさらに財政は悪化し、三年前の天保が始った年末に、藩士の餅代

にも事欠く、と前田家の江戸家老が老中に泣きついてきて、一万両を借りていったという話も伝わっている。幕府へ十五万両を貸した享保の時代の豊かさは、夢幻の彼方に飛びさったというべきなのだろう。

——いったい、何故、この国に住む者は、武士も町人も百姓も、皆、貧しいのであろうか。

畑の中を真っすぐに延びる乾いた道を足速に歩きながら、笠の下で精一郎はそっと吐息をついた。

二百俵取りの男谷家でも粗食に耐えている。妻の鶴との間には、三十五歳の今日まで、六人の子をもうけたが、悲しいことに、その半分の子をすでに失ってしまっていた。死ぬ前に、あの子らに、せめて充分な滋養を含んだ食べ物を与えてやりたかったという悔恨が、飯を口に運ぶ度に湧き上ってくる。

「二本差しがお上の顔色ばかり窺っているこんな国は、いつか滅びる。だからといって、じっと耐えている虫ケラのような連中をも、わしは救おうとは思わない」

かつてそういっていた中村一心斎の声が、不意に頭上へ落ちてきたように思えて、精一郎はあわてて笠の端を指でつかんだ。

道の先には、遠くに刈り終った空の稲を荷車に積んでいる百姓の姿が小さく動いているばかりで、他には人の姿はない。だが、その東方の、小高く盛り上った丘の裾の樹木の茂ったあたりから、人の声が聞こえたようで、精一郎は笠を上げてそちらの方に視線

をあてた。

ぐえっ。

喉から絞り出された声が、木々の間から洩れて、稲の上を飛んできた。ついで、カン高い怒声が真昼の花火のように林の上に響き渡った。

——小吉！

そう胸の内で叫んだ瞬間、精一郎は駆け出していた。船大工やら組頭の母親やらを伴って勝小吉が江戸を発ったのは、ひと月半ばかり前のことである。途中で女達を善光寺に預け、加賀藩に入り、金沢の北西にある宮腰という港町に行き、中村一心斎と合流しているはずなのだ。ここから金沢までは十里程も離れている。男の足でも丸一日はかかる。一心斎が何かを企てていることは察知できたが、その何かが皆目見当がつかない。小吉はそれを探る興味もあって加賀まで行ったのだが、いずれにしろ、こんなところで喧嘩をしているはずはないのである。

走りながら、戸籍上は叔父にあたる四歳年下の小吉と過ごした若き無頼の日々のことが、精一郎の胸の中を駆け巡った。蔵前の八幡様の祭りでは、鳶口を持った五十人程の連中と喧嘩になり、命からがら逃げ出したこともあった。

その後団野道場で少しは剣術の稽古をし、腕を上げた気になって本所界隈では大きな顔をして歩いている小吉だが、団野真帆斎に代って直心影流の看板を背負っている精一郎の目から見れば、まだ子供の棒振り剣術に過ぎない。

――要するに、危っかしくて見ていられないのだ。

精一郎はふやけた畦道の泥土に足をとられながらも、諍いの物音の続く林の中へ、駆け込んでいった。

「小吉、大丈夫か」

精一郎が声を放つのと、足音を聞きつけた小吉が振り向いたのとが同時だった。小吉は目を丸くした。

「新太郎、おめえ、どうしてここへ……」

「小吉のことが気になってやってきた。御支配には届けてある。それより、この者たちは何者だ？」

精一郎は小吉の足元で、背中を丸めて呻いている三人の男を眺め下ろした。三人とも人足のようだったが、その面構えにはふてぶてしい悪相が浮いている。口の端から泡を吹きながらも、小吉を血走った目で睨みつけている男などは、土臭い身体から、血生臭いものが漂ってくる。

「昨日からずっとおれのあとをつけてくるので、面倒になって叩きのめしてやったのだ。何者かはおれにも分らねえ」

小吉は荒い息を吐きながらそういって刀を抜いた。その切先を一番年の若い痩せた男の喉元に突きつけ、腹には右足を置いて逃れられないようにしている。

「おい、何故おれのあとをつけた。素直に白状すれば逃がしてやらねえこともねえ。だ

が、シラを切ると手前の金玉を斬りとばしてやるぞ」

小吉は切先を男の股間に移して、ぐいと押し込むようにした。男は悲鳴をあげた。

「や、やめてくれ、白状するからやめてくれ」

両膝を持ち上げ、身を縮めて男は哀願した。そのとき、傍で蝦のように背中を丸めていた年嵩の太った男が、小吉の隙をついて逃げ出そうとした。

「おい、こら」

小吉が叫んだとき、すでに精一郎はそいつの後頭部に手刀を叩き込んでいた。前のめりに倒れた仲間を見て、うんうん唸っていたはずの残った一人は急に起き上り、両手を前に合わせて頭を下げだした。

「殺さねえでくれ。お侍さまには到底かなわねえ。何でも喋るから殺さねえでくれ」

泥のついた手をこすり合わせ、殊勝なところを見せた。

「どうする？」

精一郎は小吉に顔を向けた。

「油断できねえ奴等だからな。とにかく、縛り上げておこう」

そういうと、小吉は足許に仰向けに横たわっている男の脇腹を蹴とばした。

「おい、褌をはずせ」

「へっ？」

「褌をはずして二つに裂き、仲間の二人をふん縛るんだ。いいか、少しでも緩めたら尻

を刺すぞ」
「へいへい」
男は蛙のようにはねてせっせと褌をはずし、縦に二つに裂くと、気絶している年嵩の男と、精一郎の前で膝をそろえて坐っている男を後手にして、小吉に命じられた通りきつく縛った。それから野狐のようにおどおどとして前を両手で隠し、中腰になって小吉と精一郎の様子を窺った。
「いいだろう。では、ここへ来て、正直に全てを白状しろ」
「へい」
男はうな垂れて膝をついた。
「おめえ様は武者修行の出立ちでいらっしゃるが、そいつは世を忍ぶ仮の姿。実は、江戸では聞こえた大盗賊だとお聞きしやした」
「なんだと」
小吉の顔色が変った。だが、その表情にはどこかあきれた様子も含んでいる。
「そんなえれえお方が北陸道に来られたからには、さぞかしでけえヤマがあると踏みまして、いってえどこの屋敷に目星をつけているのかと、兄ィらと様子を窺っておりましたんで」
「実はあっしらの頭が中風になっちまいまして身体がいうことを利きません。そうなったのも、おめえ様と一緒にいなすった浪人があっしらのお宝、一千両を横盗りしちまったからなんでやんす。この松がしっかり見て覚えていやした」
精一郎の前で縛られていた男が、細い首を伸ばして小吉に頬骨の張った顔を向けていった。
「なんだと？　じゃあ、その浪人というのは……」
小吉は思わず精一郎と顔を見合わせた。精一郎は唇をきつく結んで頷いた。ありえる、と思った。
「沼津宿の駿河屋という大店でお務めしたときのことでがす」
松という男が鼻を垂らしながら喋り出した。
「盗みに入ったときは総勢十人だった仲間が、首尾よくお務めを終えて出ていくときには十一人になっていたんで。その十一人目のやつというのが……」
「分った」
小吉は両手を前に突き出して松の言葉を押し留めた。丸くなった目には、怒りよりも恐怖に近い色が浮いている。
「もういうな。だが、その浪人者はおれの仲間でも何でもねえ。おれも盗賊なんかじゃねえ。分ったか、おれはまっとうな侍だ」
小吉はそういって弁解したが、二人の男は納得した様子もなく、そろって怨めし気な目付で見上げている。代って精一郎が口を開いた。
「それで、おまえたちにこの侍が盗賊だなどと吹き込んだのは、誰だ」

「ツルさんで」
「鶴？」
妻と同じ名が盗っ人の口から飛び出したので精一郎は驚いた。
「どこのツルさんじゃ？」
「銭屋五兵衛の隠居屋敷で働いているツルさんで。いや、そこで転がっている源三兄ィがあの女をやっちまって引き込み役に仕立てろというんでね、なんとなく隙を窺っていたんで。銭屋なら隠居所でも千や二千の小判が隠してあるだろうとこう踏みやしてね。だが、やっちまえといわれてもおれっちにはそんな乱暴なことはできねえ。でも、その内なんとなく話をするようになって、半月ばかり前になってやっとねんごろになりやしてね、銭屋にゃこええ用心棒がいるし、役人が絶えず見張っているから危ねえと教えてもらいやした」
「おい、松、調子よくぺらぺら喋っているが、おめえ、本当にあのツルさんと乳くり合ったのか」
小吉は肩を怒らせて松を覗き込んだ。にっと笑った松は泥のついた下唇を舌で舐めた。それからぺっと唾を吐き、下卑た笑い声をたてた。
「へっへっ、あれだけの上玉はめったにお目にかかれるもんじゃありやせんからね」
「このやろう」
やにわに小吉は松の襟をつかんで引き寄せ、頭をぽかぽかと殴り出した。たまらずに

松は悲鳴をあげた。
「許してくれ。やめてくれ。やっちゃあいねえ。いいとこまでいったが、やっちゃいねえんで。旦那、やめてくだせえ」
松は両手で頭を押さえて哀願した。盗っ人だなどといきがっているが、武道の鍛錬を積んだ訳ではないので、こういうときにはからきしだらしがない。ちょっと間合いを計れば、肩に力の入っている小吉の拳など簡単にかわせるのだが、それもできないでいる。精一郎はその男がなんだか哀れになった。
「もうよい、やめておけ」
精一郎は小吉の腕を摑んだ。その拳が切れて血が噴き出している。小吉が本気で怒ったところをみると、ツルという女中と小吉とは、わけありだったのではないか、という疑問が湧き上ってきた。
「それで、そのツルと申す女が、この侍のあとをつけていけば、押し込み先が分るとおまえたちにいったのだな」
「ま、そんなところで」
後手に縛られている男が、間の抜けた表情で頷いた。精一郎は小吉の袖を引き、傍に寄せて小声で訊いた。
「小吉、これは一体どういうことだ。私には何のことかさっぱり分らんぞ」
「簡単なことだ。一心斎が全てしくんだことなのよ」

「というと？」

精一郎は林のきれるあたりに目を凝らしてから、小吉の顔を眺めた。小吉は唇を尖らせたふくれっ面で精一郎を見返してきた。

「あの連中が盗賊だってことは、あいつはとっくに知っていたのよ。おれはどんな奴等だか知らなかったが、ある日一心斎がおれに、盗賊一味の仲間になれといってきて初めて知ったのよ。仰天したぜ」

「なんだと？　そ、それはまことのことか」

「まことよ」

「何故だ。何故そんなばかげたことを小吉にやらせるのだ」

小吉のおもいがけない返答に、林のはずれに向いていた精一郎の気持が小吉の上に戻ってきた。先程から、叢（くさむら）に潜む者の気配を感じていたのだが、それどころではなくなった。

「一つには盗賊どもに仕事をさせること。もう一つは役人の目を銭屋の隠居屋敷から盗賊に向けさせて、捕えさせることだ」

「そんなことをしたら、小吉まで捕ってしまうではないか」

「一心斎がほざくには、おれ一人だけうまく逃げのびる手段があるというのだ。おまけに、盗んだ千両箱はそっくり頂いてしまおうという寸法だそうだ」

「そんなことが可能なのか」

「できると奴はいうのだ。だが万が一捕まったら勝家は断絶だ。だからこうして逃げてきたのだ」

「そうか、逃げる途中だったのか」

精一郎は顔を上げて遠くを望んだ。林の中に葉の間を縫って秋の陽が、明るい布ぎれのつぎはぎのように差し込んできている。その先の雑草の茂った暗がりに視線をあてて目を細めた。

「ま、そういうことだ。ついでだからこいつらを番屋に預け、今夜は串茶屋で女をあげて騒ごうではないか。な、新太郎、そうせい」

小吉は急にとろけた目付きになって口許をだらしなく緩ませた。待て、といって精一郎は小吉の胸を押し返した。

「どうやらもう遅かったようだな。役人どもの見張りがついておるようだぞ」

「なんじゃと？」

「気が付かなかったのか。最前より、ずっとあの叢に身を潜めておったのだ。小吉、ここにいてこいつらを見張っておれ」

精一郎は笠をはずし、林のはずれに向って歩き出した。近づくにつれ、風の音が大きくなり、草が乾いた音をたてて揺れた。

「何故の詮索かは存ぜぬが、お門違いでござろう」

精一郎はひときわ盛り上って茂っている叢に目を据えて声を放った。

草が二つに割れ、黒い影が二つ、ぬっと現われてきた。頭から手拭いを被り、野良着を着た風体は百姓のようだが、身のこなしは武道の鍛錬をした者の持つ敏捷さを備えている。

「それがしは江戸から武者修行で参った者。あそこにいる者はそれがしの親戚にて、同様の志を抱いている者でござる」

そういったが、二人は色黒の顔の中に浮いた双眸をギラギラと光らせて、じっと精一郎を見つめている。

「ご不審とあらば、我ら両名、このままこの地から退散致す。それでよろしいかな」

「領内から出すわけにはいかぬ」

地中から響いてくるような暗い声がして、左手にいる者が半身になった。その手に握られているのは鎌だったが、その鎌の根本から鎖が伸びていて、男は右手で柄を逆さに握り、左手で鎖と分銅を摑んでいる。その眼光の厳しさは鬼を見るようだった。

精一郎は差している大刀の柄袋をはずしかけたが、半歩下って、その思いを押し留めた。

「待たれい。ここでことを構える所存はござらん。出るなといわれればこの地に留まりましょう。されば、それがしとて当地に伝わる中条流の剣筋を拝見できるというもの、それこそ修行者の本懐でござる」

精一郎はにこやかにそういった。右手にいた者が半身の構えを解き、左手の者に向って手を仰いだ。すると男は小柄な身体を立て、鎖を柄の中に納めると腕を後に回して頷いた。

二人は数歩、精一郎に向って後ずさりをしてから、風の中に溶け込むように背を向け、立ち去っていった。その背の腰に、一尺四寸の鎖鎌の柄が差し込まれているのを精一郎はじっと見つめていた。

五

小鯛をむしってもぐもぐと食ってから、一心斎は盃を口に寄せ、そっと酒を含んだ。舌に酒が浸み込んでいくのを楽しむかのように目を閉じ、うん、と頷いて茶色がかった瞳を開いた。精一郎に向けられた顔には、懐かしい笑みが広がっている。

「鎖の長さは四尺五寸、それ程長くはないな。さすれば風伝流槍術の流れを汲む心鏡流鎖鎌の遣い手であるのかもしれんな。ま、そんなことはどうでもよいが、その者達は奉行配下の小者ではなく、定番頭付の同心足軽か、小姓頭の組の者であろうな」

庭に降り注ぐ陽が庭木を鮮明に際立たせている。障子は開け放たれているが、北の国の秋は江戸の初冬に似て、重くて冷たい風を室内に運んでくる。

精一郎は少し肌寒いものを感じたが、一心斎をはじめ部屋にいる銭屋五兵衛、大野弁吉、精一郎の弟子の仙太郎、小吉の弟子の清吉、といった面々はそれ程不便も感じない

様子で、それぞれ茶を飲んだり、茶菓子を食ったりしている。ここでは、昼の時刻がゆっくり過ぎていく、と精一郎は思っていた。

「私が存じております鎖鎌は、鎌の根本からではなく、柄の端から鎖が出ておるもので、その鎖も昨日目にしたものよりずっと長く、一丈二尺もありました。しかも鎌の刃も鋭く長く、双刃になっておりました。たしか、一心流と申したと記憶しておりますが」

精一郎はそういって湯呑みを手にした。中は番茶で、銭屋五兵衛から酒をすすめられたが、修行中なので、と断ってある。

「うん、その手の鎖鎌は両手を使ってあれこれするものでな、かなり攻撃的なものだ。だが、おぬしが昨日会ったという連中は右手一本で鎖鎌を操作するはずじゃ。左手は捕えた相手を投げとばすことに使う、いわば攻撃を受けて捕縛するための技ということになるな」

一心斎はつるつると続けて酒を飲み、ほっ、と息をついた。およそ一年ぶりに目見えたのだが、奇妙なことに一心斎は五十を過ぎてから、年毎に若くなっていくように精一郎の目には映る。

「いずれにしろ、刀を抜かんでよかった。相手になっていたら、役人どもに取り囲まれておったやもしれんからな。その二人の者達も、おぬしの伎倆を推し計って、早々に退散したのじゃろ。足軽とはいえ命がおしいからな。だが、これが、闇番配下の忍びの者であったらそうはいかん。忍びは辱しめを受けることには慣れておる。それ故の忍びな

のじゃ。命を捨てることなど、何とも思っておらん。だから、こわい」

「闇番、といわれましたか」

「いった」

「そのような者達が本当におりますので」

「おる。ことに前田領には将軍から直々に派遣されたお庭番やら、老中、大目付配下の隠密どもがうじゃうじゃしておる。なにせ、百二万石じゃからな。アラを探り出して難癖をつければ、取り潰しは無理でも、半分に減らして、残りは天領とすることもできる。手柄をたてた老中は、褒美として数万石の加増を受けられるであろうな」

「それを避けるため、物聞役を放っておるのですな」

大野弁吉と名乗った男が、茶菓子を食いながら口を挟んだ。様々な珍しい物を創り出す男だと紹介されたが、どこか得体の知れない所がある。

「ま、そういうことだが、物聞役は見聞きはするが、江戸から領内に潜入した隠密どもと一戦を交えるようなことはしない。それだけの武術を持っておらんのだ。隠密は皆、腕が立つ。その者達を領外に出さず、ひっそりと始末するには、相当の手練をあちこちに潜ませておく必要がある。それが前田家秘密の闇番侍で、柳生流から伊賀流までこなす。もっとも、千代田城の門番になって、毎日欠伸ばかりしておる元伊賀者もおるがな」

一心斎はそういって手を打った。ツル、と呼んだとき、精一郎の胸に痛みが走った。

江戸にいる妻の顔を思い出したからである。御用の旅で加賀に参る、と伝えたとき、妻は心細気な表情をしたが、余計なことは口にせず、着物を下女に始末させて路銀をせっせと整えた。

だが、加賀に行こうと思いたったのは、小吉の身を案じたのではなく、そこに行けばひと暴れ出来そうだと気持がうずいたせいだった。抑えていた無頼の血が、十五年ぶりに湧き出したのだ。それに、一心斎の持つ、目に見えない力をなんとか会得したいという望みもあった。それが一番大きかったかもしれない。

「お呼びでございますか」

障子の陰から廊下に膝をついた女の声が聞こえてきた。銭屋五兵衛の隠居屋敷に着いたのはわずか四半刻前で、そのときには女は玄関には現われなかった。つい先程、酒と茶を盆に持ってもう一人の下女と現われたが、精一郎が目にしたのは、半身になった女の背中だけだった。

「ツル、また酒を頼む」

「お酒ならお持ち致しました。皆様の分もご用意ができております」

「ほう、それはよく気がきくな」

一心斎は嬉しそうに微笑んだ。すると、精一郎の斜め向い、一心斎の後の襖に寄りかかっていた大野弁吉がむっくりと起き上り、廊下に向って首を伸ばした。

「丁度よい。茶菓子には飽きていたところだ」

「大野様はお酒を飲まれると、余計に頭がよくなるお方でしたわね」

「さようさよう。いや、かたじけない。この一献で、一心斎殿の望まれる、翼をつけた船の妙案が浮かぶやもしれぬ」

障子の陰からツルの姿が現われて、大野弁吉の前に丸盆と盃を置いた。

「おっ、酌はしてくれぬのか」

弁吉は両手をだらりと下げて腑抜けした様子で女を見た。背中を向けていた女は、それには応えず、一心斎の盆に銚子を一本置くと、くるりと身体を回して精一郎の正面に向き直った。

「お武家様もいかがですか」

女の黒い瞳が濡れたようになって精一郎を見つめてきた。そのとき、精一郎の胸を熱風が吹き抜けた。妻も子供の顔も吹きとび、白いが艶のある花に顎の下を撫でられたような切なさを感じた。

「それがしはいたって不調法なもので」

精一郎は脂汗を絞る思いで答えた。間髪を入れずに、嘘ですぜ、と背後からいった者があった。江戸で造り酒屋を営む酒蔵の次男坊の清吉だった。

「男谷先生はやっとうの腕もすごいが、酒の利き方としても相当なもんですぜ。一升なんざつるりと飲んじまいまさあ」

「ば、馬鹿なことを申すな」

顔から火が出る思いだった。まあ、飲め、といったのは一心斎だった。精一郎はほっとして顔を上げた。

「この屋敷には見張りがたくさんついておる。油断させるのも手じゃ。精一郎、遠慮せずに飲め。ツル、酌をしてやれ」

「どうぞ」

すかさずツルが盃を差し出してきた。思わず手にしたその盃に、ツルは上手に酒を注いだ。細い指が精一郎の目の前で白蛇のように泳いだ。一口飲むと勢いづき、たて続けに三杯飲んだ。ツルはずっと微笑んでいた。

「男谷精一郎が来てくれるとは、わしも大助かりじゃ。小吉一人では心もとないからな」

一心斎はほんのりと朱に染った頬を向けてきた。

「といわれますと」

「今も申したであろう。ここは見張られておる上に、いつ襲われるか分らんのだ。つまり極めて危険な状態にある。なにせ、この国にはない巨大で異国船に負けぬ速さを持つ船を建造しようというのだからな、警戒せぬ方がおかしい」

一心斎は屈託ない様子で声を張り上げた。気づかった仙太郎がそっと席を立ち、廊下から庭に出ていった。精一郎も神経を広い庭の四方に向けた。

「越前までは島田虎之助という武者修行の若者が従ってきたのだが、ツルの色香に迷って己れを恥じ、今頃はどこぞの寺で座禅を組んで修行のやり直しをしておるはずなのじゃ」

「一心斎様、お戯れをいってはいけませぬ」

ツルは後に下って一心斎を睨みつけた。

「いかぬか」

「いけませぬ」

ツルは笑わずに一心斎を見つめ続けた。ぴんと張った背筋に女のたしなみが窺えた。精一郎は初めて、ツルが只の女中ではないことを知った。武道のたしなみがあるだけではなく、刀をとって男と戦ったことのある凄味を宿していた。

「島田虎之助はいずれ男谷道場を訪れるはずじゃ。日本一だとわしが吹聴しておいたからな」

「ご冗談を」

「ところで小吉はどうしたのじゃ」

「お部屋でお休みでございます」

ツルがそう答えて精一郎の方に顔を向け、次の言葉を促すように目に強い光を留めた。

「なにせあの盗賊どもを番屋に置くわけにはいかず、仕方なく荷車に三人を転がしてここまで引っぱってきましたからな、疲れているのでしょう」

精一郎はそう言いながら部屋の隅にいる銭屋五兵衛に目を向けていた。目を細め、何

もいわずに茶を啜っている老人が、加賀藩きっての政商で、その蓄財が二百万両と噂される豪商であるとはどうしても思えなかったからである。

——それに、何故中村一心斎などというぶっそうな人物に肩入れしているのであろうか。

かつて、一心斎はお庭番を叩き斬ったことがあるという。それが事実なら、幕府からも目をつけられているはずなのだ。商人にとっては、そんな人物との交わりなど、百害あって一利なしではないのか。

精一郎は今にも眠りこけそうになっている老人を、不思議な思いで見つめていた。

「中村様は、わたしの夢なのです」

五兵衛は背中を丸め、両手で湯呑みを大事そうに包んで小さな声で呟いた。だが、その顔には吹き出すような悦びが溢れている。

精一郎は徳利を引き寄せてこちらは湯呑みに酒を注いだ。すでにみんな寝静まっていて、流れ出る酒の音が、神妙な響きとなって五兵衛の隠居部屋の隅々にまで浸み込んでいく。

「夢か。大商人の銭屋さんからそのような言葉を聞くとは思わなかったな。いやね、町の者は武士は食う心配もなく、気楽でいいと羨んでいるが、これでどうして、なかなかつらいものがあるのだ」

「存じておりますとも、お役人様がいばりちらすのもすきっ腹をかかえて走り回っているからでございましょう。弱い犬ほどよく吠えるのたとえもございます」

「はは、銭屋さん、なかなかいうな」

「なに、老いぼれのひとりごとでございますよ」

「私の扶持米は二百俵。それだけ収穫するのに、百姓がどれだけ苦労しているか、少しは分っているつもりだ。だが、こっちも二百俵いただくのにひどく窮屈な思いをしなければならず、肩の力が抜けるときがない」

「そうでございましょうとも」

「道場主とはいっても各藩からの預り弟子が多く、一銭も出さない藩もあるのだ。従って道場の壁板はいつまでたっても破れたままだ」

五兵衛は精一郎の言葉に、静かに微笑んだ。

「そんな私にとっては、一心斎殿の生き方は夢だ。朝になれば朝日を仰ぎ、夕方になれば西陽を追い、夜になれば月を摑もうとする。いつでも水のように自由に形をなし、それでいて苛酷だ。剣は奥行きがあり、底を見せず、だがそれに何の価値も認めていない。従って、自らの強さにも無頓着だ。しかも、何故か小判を掠め取ることに長けている。その俗っぽさがたまらぬ魅力なのだ。あの方は、私の夢そのものだ」

五兵衛は頷き、丸い小さな目を上に向けた。六十一歳になる老人の目とは思えない程の輝きが溢れ、頬まで艶々としてきたようだった。

「わたしが、夢、と申したのも、そのことでございますよ。かつてあの方はわたしに夢を与えて下さいました。そして、今もまたとほうもない夢をこの老人に見させてくれているのです。この国一番の、大きな船を建造し、異国から異国へ好きなように航海しようと誘ってくれているのですよ。銭屋の買い込んだ品物を、異国で売りさばこうというのです。ね、考えただけでも楽しいじゃございませんか」

「まったくだ。まったく、楽しい……」

「いまから二十二年前の文化八年（一八一一）のことでございます。父の弥吉郎が亡くなり、わたしは途方にくれておりました。質屋の他にやっていた古着屋を閉めたものの先行きが分らず、しかも、ある海商が質入れした百二十石積のボロ船が質流れになり、質業を営む銭も不足しがちな程でした。その頃、あるご浪人様が、店の前で行き倒れになったのでございます。何十日も空腹のまま山をさ迷っていたとかで、大そう弱っておりました」

「それが一心斎殿だったのだな」

「はい。ほうってもおけず、離れにお泊めして回復を待ちました。やがて元気になられた一心斎殿は、わたしの窮状を知ると、あははと笑ってひと言『船を補修して、あちこちの港と交易しろ。船そのものを行商人にするのだ』。いや、目の玉が飛び出す程驚きました。わたしが回船業者になったのは、あれからです。この二十二年間、本当によい夢を見させて頂きました」

五兵衛の目に光るものが浮き上った。そうなのだ、あの人は、そういう滅茶苦茶な人なのだ、と精一郎は胸の中で思っていた。だが、その言葉は意外に正しく、無理だと思われることでも、為せば成るの精神で何事も成就してしまうのだ。

――異人に乗っ取られたあとで、この国を買い戻す。その為の埋蔵金探しなのだ。

耳元で一心斎がそう叫んだような気がして、精一郎は思わず居ずまいを正した。昼から飲み続けた酒は、すでに二升を越えている。

「だがな銭屋さん、一心斎殿はお上からも、もっと危い闇の中で生きている輩からもつけ狙われている。こう大っぴらに肩入れしては、あんたの身代まで危うくなるのではないかな」

精一郎は危惧していることを正直に口にした。五兵衛は小さく何度も頷き、茶を飲み干して顔を両手で撫でた。再び現われた顔は恵比寿様のように血色がよかった。

「分っています。商人は、お武家様にはかないません。あれだけ松前藩を儲けさせた高田屋嘉兵衛さんだって、密貿易を密告されて、全ての財産を没収されたんです。いずれ銭屋も同じ運命をたどることになるでしょう」

「加賀藩に潰されるというのか」

五兵衛は微かに頷いたようだったが、それは達観したあきらめの気持が、頭を下げさせたものかもしれなかった。

「ですから、そうなる前に、わたしは一心斎さまに、できうる限りの援助をして差しあ

げたいのです。因縁をつけられて、藩に全財産を奪われる前に、是非とも、夢を実現させてもらいたいのです」

五兵衛の目は、はっきりと潤んでいた。精一郎は何といったらよいのか分らず、ただうんうんと呻きながら、ツルさんに気取られずに、台所から寝酒を盗み出すにはどうしたらよいのだろう、と考えていた。

六

「寺の名は妙立寺。ここには面白い仕掛けがいっぱいしてあってな、隠れ部屋、隠し階段があり、通路は迷路にもなっている。さらに本堂には物見櫓まである。ま、子供だましみたいな寺だが、ここは代々藩主がお忍びで祈願にやってくる所でな、寺には金がうなっておる。小吉、おぬしは盗賊八人を引き連れて、妙立寺に乗り込むのだ。敵は妙立寺にあり、というわけじゃ」

そう一心斎が朗らかにいって小吉を送り出してから半刻がたった。精一郎は仙太郎と一心斎と共に、犀川にかかる大橋の袂の寺でじっと東の空を見つめていた。星もない暗い夜だったが、それもあと四半刻もすれば、犀川の上流に連なる山の嶺に、青い光が滲み出すはずだった。

「仙太郎、震えているのか」

一心斎が傍で蹲っている仙太郎に声をかけた。仙太郎は腕の中に埋めていた顔をあげて、はい、といった。その素直な答えが、精一郎の胸の中でつかえていた様々な思いや不安を断ち切った。

「それでよい。戦さに向う前に、平気で眠っておるような鈍い神経の者では、敵の細かい動きについていけまい。己れの臆病さを認識してこそ、初めて人が人を斬ることのつらさをも知るのじゃ。すなわち、戦わずして逃げることの勇敢さを知ることになる」

「一心斎様……」

「なんじゃ」

仙太郎は一瞬戸惑ったようだった。暗い中で仙太郎の口から洩れる吐息が乱れるのを精一郎は察知した。

「夜明けと共に、妙立寺へは役人が踏み込むと聞いています。勝様だけが首尾よく逃げおおせることが本当にできるのでしょうか」

「次郎吉が潜んでおる。心配ない」

「でも、勝様が迷路に迷うこともあるのではないのですか」

「仙太郎、おぬしはよい奴じゃな。おぬしが久留米藩主を継いでおったならば、さぞかし領民思いの大名になったであろうな」

「……」

「先程は小吉がなんのかんのと不平を洩らすのでいわなかったが、あの寺は中庭にある

井戸を中心に螺旋状に建てられている、井戸は三丈の深さだが、下りるとそこは広く、上からでは窺えぬがいつでも小船が一艘留めてある」

「ま、まことでございますか」

「祈願に参った前田公が襲われるようなことがあった場合、その小船で逃げ出す手筈になっておる。逃走用の軍資金が隠されているのもそのためじゃ。井戸は地下水路に通じており、この先の犀川まで続いておるのだ」

「その小船で次郎吉さんと勝様は逃げてこられるのですね」

「さよう、財宝を山と積んでな。これでツルをつけ狙う盗賊も獄門となり、役人は手柄をたて、全ては万々歳となるのじゃ」

一心斎の冷やかな声が板の間に流れた。中村殿、と精一郎は東の空に目を据えたまま声をかけた。

「我らがここで潜んでおりますのは、小吉の無事を確かめるためでございますか。それとも……」

「当然『それとも』の方だ」

「……」

「わしらの行動は逐一見張られておる。地下水路を通って犀川に千両箱を積んだ小船が現われれば、闇番衆はこぞって殺到してくるであろう」

「そこを我ら三人だけで救い出すのですか」

「違う。わしは馬鹿を相手の戦さはせん。家臣道を武士道とはき違えておるようなウジ虫どもに剣を振るって何とする」

「では、どうされるのですか。小吉を見殺しにするのですか」

「そうなる場合もある。実はわしは小吉の長兄から小吉を江戸に二度と戻してくれると頼まれておるのじゃ。なんせ柄の抜けた肥柄杓（こえびしゃく）といわれている男だからな、一族の鼻つまみ者だ」

「……」

「ほほう、精一郎、息を止めたな。では、その気合いのままにわしに打ちかかってくるがよい」

「ごめん」

挑発に乗ったわけではない。元より、そのつもりで加賀まで来たのだ。精一郎は一心斎の言葉が終らぬ内に指先を動かしていた。ごめん、といったときには、脇差を抜き放っていたのである。

だが、実際に動いたのは右肘だけで、手は柄さえも摑むことができないまま、右肩から斜めに前のめりに上体が揺らいだ。息ができなくなり、身体が宙に持ち上げられたように軽く、とらえどころがないものになった。

「こ、これは……」

床板に手をついて、精一郎は喘いだ。自分が鯉になって、吹き下ろしてくる強風の中

を、風上に向って泳いでいたような錯覚にとらわれていたのだ。

「剣を取るのも、まず、腕が動き、指先が騒ぐ。そのしくみをとらえておけば、相手の力を容易に逆用することが可能になる。さすればいずれ、身体の芯をとらえて崩すことができるようにもなるのだ」

「……」

「百日剣術をするひまがあったら、一日、森閑として考えるべきなのだ。人の息を盗み、吸い上げれば、触れずして相手の動きを封じることができる。これは自然の摂理というものだ」

精一郎はまるで神の声を聞いたように思ってじっとしていた。滝のように冷汗が流れ、それが凍りついて氷山に閉じ籠められた思いがした。

「一心斎様、あれは……」

仙太郎が腕を伸ばした先に、青く染った霧が渦巻いていた。いつの間にか東の空が白く滲み、縁取られた嶺線に沿って黒い鳥が一羽南西から北東に飛びさっていった。

「来たな」

河面にはまだ夜の衣裳をまとった霞が漂っていた。その密度の濃い粒子を掻き分けて、人影がうごめき、上流の一点を目ざして遡(さかのぼ)っていく。

「小吉」

右手に草の茂った崖が続き、崩れるようにして川に落ちている窪まった間から、不意

に一艘の小船が現われた。そこにかろうじて二人の影が霞をすかして窺うことができた。川を遡っていた一軍が、砂糖を見つけた蟻のように、小船に向って殺到していった。

飛び出そうとした精一郎は一心斎の腕に遮られた。

「何をなさる！」

「あわてるな。見ろ、草の中から幕府のイヌどもが現われてきおったわい。まるで博奕打ちの縄張り争いじゃな。しかし、これで大掃除が捗(はかど)った。あとは加賀百二万石と腑抜けた旗本八万騎の戦さになるかどうかじゃ。そうなれば、他の大名も幕府の屋台骨が案外に脆いことを知り、勇気を得て徳川幕府の幕引きを画策することになるじゃろうて」

「小吉が！」

「安心せい、小吉も次郎吉も、もう川の中に飛び込んでおる。ほら見ろ、あさましいものじゃ。どちらもカラの千両箱をめぐって命の奪い合いをしておる」

「！」

眼下に展開する静かで凄絶な戦いを見つめている一心斎の横顔は、思いの他安らかだった。鎖を斬る刃の音と、骨を絶つ鈍い音が河面に響く。日が昇るとともに、その形勢は明らかに地侍の有利になってきた。

「愚かな主に仕えるあの者達も哀れだの。人を斬る力があるのなら、人が人として生きていくことの、喜びを得んと努力すればいいものをな」

一心斎の目が盛り上り、そこに山の嶺に顔を覗かせた朝日が一筋当たった。目に浮い

た水滴は炎のように燃えていた。不意に精一郎は胸を衝かれ、身体の底から振動してくる激しい震えに襲われ、佇んでいることができなくなった。慈悲、という文字が唐突に頭に浮かび、一心斎の横顔が眩い黄金色に輝いて精一郎の目には映っていた。

目が覚めたとき、屋敷には下女と下男しか残っていなかった。皆、港に出掛けたのだという。精一郎は急いで袴をつけると、港まで走った。晩秋にしては、春のようにやわらかい風が吹いていた。このような大事な日に、何故、寝過ごしたのだろうと精一郎は地団太を踏む思いで駆けていた。道往く人が皆、驚いて振り返った。

犀川が海に注ぐあたりに、銭屋五兵衛をはじめ、船の建造に携わる人々が佇んで海を眺めていた。驚いたことに小吉も混っていた。

「どうして起こしてくれなかったのだ」

「新太郎はとっくに見送りに行ったと思っていたのさ」

「一心斎殿はどこへ行ったのだ」

「知らん、たぶん地獄だろ」

小吉は吐き捨てるように答えた。波間を進んでいく一艘の小船が目に入った。坐っている痩せた浪人者の背中は少しさみし気で心細そうだった。波の上にはね上ると、それは泡と戯れる蝶のように見えた。

「北に向って一日、それから東へ二日漕ぐのだそうです。そこに、船を建造するのに適した無人の島があるといわれていました」

「それを漕ぎ手とたった二人で捜しに行ったというわけか」

「はい」

そんな無謀なことはない、と憤りを露にしかけた精一郎は、一団からそっと離れて、川の方に行く女の姿を目にとめて、口を閉ざした。ツルという名の女だった。

女は海から吹きつけてくる風を気にするふうもなく、ほつれ毛を風に遊ばせて遠くの山に視線を向けた。その口許に愛らしい微笑みが浮いているのを見て、精一郎は女に向って歩み出そうとした。そのとき、女の頬に、一筋の光が走った。涙だ、と思った。その鮮烈な美しさに、気持が溶けてしまうような切なさを抱いた。

精一郎は身体を戻してそっと空を仰いだ。降り注いでくる秋の陽に、目が痛んだ。

（完）

あとがき

最初に読者の方にお礼を言いたい。ありがとう。それから、この文庫を世に出す機会を与えてくれた文春の編集者の方々に感謝したい。

あとがきのノッケからこんな文面に出くわして当惑されることだろうが、作者の胸には、心底、感謝の言葉しか浮かばないのである。

少々内輪めいた話になるがその理由を記したい。「オール讀物」に連作の形で発表した作品が『剣聖一心斎』と題されて単行本として刊行されたのが94年6月のことだった。毎回精魂傾けて書いていた小説だっただけに、本になったときの喜びは格別で、私は数夜、単行本をためつすがめつ眺めながらひとりで酒を呑むという至福のときを過ごしていた。そしてもうこんな小説は書けないだろうと思っていた。

主人公は中村一心斎なのだが、毎回ゲストともいうべき人物が登場し、それも千葉周作に始まって、江川太郎左衛門、勝小吉、北斎、二宮尊徳、水野忠邦、遠山金四郎、鼠小僧、川路聖謨（としあきら）といった骨っぽい個性派が主人公にからんできて、いや、からまれたり利用されたりして、不満を漏らすゲスト陣の対処に作者は毎回命からがらのアドベンチ

ャーを強いられていたのである。終わった時は、よく生きていられたなと感心したほどであった。

だが残念ながら、出版された本は作者の思いの程には読者に受け入れられなくて、再版はならなかった。私は半年程なにもせずにボーッと過ごしていた。

そんなふうに腑抜けていた私に活をいれてくれたのは当時「オール讀物」にいた鈴木文彦氏であった。氏の励ましを受けて、私は95年の新年号から再び「新・剣聖一心斎」を書き出した。その間あらたに担当になった木俣正剛氏が深夜、仕上がらない原稿を待って廊下を徘徊する姿が憐れを誘ったそうである。（その後、木俣氏は「週刊文春」の編集長に転任し、4年の長きにわたって激務を勤めた。現在は局次長の職にある）

あらたな連作は一年後に完成した。だが出版の話はなかなか出なかった。そういう場合、作者は催促することはできず、じっと待っているほかない。単行本になった『剣聖一心斎』が文庫化されたら、あるいは出版してもらえるかもしれないと期待していたが、その文庫化の話もなかった。そしてなにもないまま2002年を迎えた。私はすっかりあきらめ、時代小説を書く気力すら失っていた。

しかし、突然朗報が飛び込んできた。その年の4月のことである。池田幹生と名乗る編集者が『剣聖一心斎』を文庫にしたいと電話してきたのである。なんでも新たに部長になった方が文庫化されていない単行本のリストを見ていて『剣聖一心斎』を発見したというのである。私が狂喜したのはいうまでもない。これこそ嘉永七年（一八五四）に

満七十二歳で木更津で没した中村一心斎の魂が奇跡を呼び起こしてくれたものだと叫んだ。

『剣聖一心斎』は8年ぶりに復活した。そして今年、雑誌に載ったまま埃にまみれていた「新・剣聖一心斎」が『暗闇一心斎』としてあらたに文庫化されることになったのは、それはひとえに前作を購入してくださった読者の方々のおかげなのである。支えてくださった読者の方がいてくださったから、続編ともいうべき本作品が日の目を見ることができたのです。ありがとう。これで締め切りを過ぎても到着しない原稿を待って、コツコツと床に靴音を響かせていた木俣正剛氏にも、励ましてくれた鈴木文彦氏にも申し訳がたった。

読者のみなさんありがとう。この文庫にゲストとして登場した大石進、白井亨、男谷精一郎そして島田虎之助も世に出られたことを感謝しているはずである。この物語が終わった後、島田虎之助は江戸に道場を持ち、勝麟太郎、のちの海舟の手ほどきをすることになる。その様子を描く機会が私に与えられているかどうか分からない。願わくば、十九歳で江戸にやってきた坂本竜馬が、七十二歳の奇妙な老剣士に翻弄されたあげく、老剣士が「グッドラック」という言葉を残して立ち去っていく後姿を、呆然と眺めて立ち尽くす可憐な姿を描きたいものである。もう一度、ありがとう。

二〇〇四年六月

文春文庫

©Michitsuna Takahashi 2004

暗闇一心斎（くらやみいっしんさい）

定価はカバーに表示してあります

2004年7月10日　第1刷

著　者　高橋三千綱（たかはしみちつな）

発行者　庄野音比古

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23　〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫　http://www.bunshunplaza.com

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan
ISBN4-16-756203-0

文春文庫　最新刊

以下、無用のことながら　司馬遼太郎

水郷から来た女　御宿かわせみ3〈新装版〉　平岩弓枝

暗闇一心斎　高橋三千綱

朱なる十字架〈新装版〉　永井路子

新選組風雲録　戊辰篇　広瀬仁紀（よしのり）

悪いうさぎ　若竹七海

龍時（リュウジ）01―02　野沢尚

ヒヨコの猫またぎ　群ようこ

屁タレどもよ！　中村うさぎ

シドニー！　コアラ純情篇　村上春樹

シドニー！　ワラビー熱血篇　村上春樹

遺伝子が解く！男の指のひみつ　「私が答えます」1　竹内久美子

とらちゃん的日常　中島らも

母のキャラメル　'01年版ベスト・エッセイ集　日本エッセイスト・クラブ編

おいしい人間　高峰秀子

蹴球戦争（フットボール・ウォー）　馳星周的W杯観戦記　馳星周

鬼平犯科帳の人生論　里中哲彦

「延長十八回」終わらず　伝説の決勝戦「三沢VS松山商」ナインたちの二十五年　田澤拓也

こんな凄い奴がいた　技あり、スポーツ界の寵児（ちょうじ）たち　長田渚左

万華鏡の迷宮　J・ロバート・ジェインズ　石田善彦訳

ガルボ、笑う　エリザベス・ヘイ　柴田京子訳

ザ・スタンドⅣ　スティーヴン・キング　深町眞理子訳